

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2

森板森阿屋脇丹谷辻遺跡遺城堂跡跡跡跡

平成6年3月

委員会

訂 正

- (1) 128ページ第116図の汚損の位置に誤りがありました。別刷りの図と差し替えをお願いします。
- (2) 202ページ第156図中、竪穴住居跡の一辺にある矢印は、竈の位置を示しています。
- (3) 図版101(上)の右側中段の写真は第92図9の遺物です。
- (4) 竪穴住居跡の遺物出土状態のうち、赤刷りの遺物は本書で実測図を掲載したもので、遺物出土状態図中の番号は遺物実測図の番号と一致します。黒刷りのものは実測できなかった遺物です。
- (5) 遺物実測図の番号と遺物写真の番号は一致します。

跡 跡 跡 跡
遺 城 堂
遺 I 山 辻
森 板 森 阿
屋 脇 丹 谷

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2

平成6年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け昭和63年度（1988年）から志津見ダム建設予定地内にある埋蔵文化財の調査を行っております。

志津見ダムの建設が予定されている神戸川は、奈良時代につくられた出雲国風土記に多くの記載がある幸の多い川で、古くから人々がたくさんの恩恵を享受してきました。人々はこの川の恵みを得ようと、太古からこの周辺に集まってきたことと想像されます。

このたびの発掘調査でも、これを裏付けるように、縄文時代以降の遺物、遺構がたくさん発見されました。とくに古墳時代、奈良時代の集落群は、今まで知られていなかったこの地域の古代を堆弁に物語ってくれます。また出土品から、当時の人々が活発に各地と交流していたことがわかります。

山の幸、川の幸に恵まれ、また河川を利用した交通手段に恵まれたこの地は、当時はたいへん住みやすかったのかもしれません。

本書は平成2年度（1990年）から平成4年度（1992年）に実施した発掘調査のうち、森遺跡をはじめとする4遺跡の調査結果をまとめたものであります。内容について不備な点も多々ありますが、この報告が多少なりとも埋蔵文化財に対する理解に役立つことができれば幸いと存じます。

なお、発掘調査および本書の刊行にあたりましては、建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所や地元のかたがたをはじめ、各方面から多大なるご支援、ご協力をいただきましたことを、心からお礼申し上げる次第であります。

平成6年3月

島根県教育委員会

教育長 今岡 義治

例　　言

1. 本書は、平成2年度～4年度（1990～1992年度）の3カ年にわたって島根県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受けて実施した、志津見ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書では下記の遺跡の調査結果について報告する。

森遺跡	島根県飯石郡頼原町八神
板屋Ⅰ遺跡	島根県飯石郡頼原町志津見
森脇山城跡	島根県飯石郡頼原町志津見
阿丹谷辻堂跡	島根県飯石郡頼原町志津見
3. 採図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。
4. 出土遺物および実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。
5. 掲載図面はおもに柳浦俊一、大野俊治、田中勉亮、山崎順子、木村直人、山崎修が作成した。遺物整理は田中君枝、三浦サツエ、若佐裕子、津森真弓、釘宮和子、正井るみ子、月森和子、畠江五十鈴、水島いずみがあたった。
6. 調査にあたっては、河瀬正利（広島大学講師）、林正久（島根大学教授）、村上勇（広島県立美術館主任芸術員）、泉拓良（奈良大学教授）、林部均（奈良県立橿原考古学研究所）の各先生に調査指導を得た。
- また、千葉豊、菱田哲郎の両氏には有益な教示を受けた。
7. 調査にあたっては、頼原町教育委員会、頼原町、建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、島根県斐伊川・神戸川対策課の諸機関の協力をいただいた。
8. 本書に掲載の地形図のうち、遺跡分布図は建設省国土地理院発行5万分の1、その他は建設省出雲工事事務所が作成した地形図を使用した。また、森遺跡遺構配置図および遺構図の一部は島根県教育委員会が（株）ワールド航測コンサルタントに委託して作成した写真測量図に基づく。
9. 図版写真のうち、航空写真的大部分は島根県教育委員会が（株）ワールド航測コンサルタントに委託して撮影した写真である。その他は柳浦が撮影した。
10. 本書の編集、執筆は柳浦が行った。

本文目次

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 周辺の遺跡	3
3. 森遺跡	7
1. 調査の概要	9
2. 検出遺構	16
(1) 壴穴住居跡	16
(2) 掘立柱建物	114
(3) 土坑	120
(4) 溝状遺構	134
3. 遺構に伴わない遺物	135
(1) 繩文土器	135
(2) 弥生土器	172
(3) 須恵器	185
(4) 石器	186
(5) 装飾品	194
(6) 上製品	195
(7) 中近世陶磁器	195
(8) 石硯	199
(9) 金属器	199
4. 小結	199
4. 板屋Ⅰ遺跡	209
1. 調査の概要	211
2. 検出遺構	217
(1) 掘立柱建物	217
(2) 鉄滓溜	225
(3) 土坑	227
(4) 積石遺構	234
(5) 包含層出土の遺物	238
3. 小結	241
5. 阿丹谷辻堂跡 森脇山城跡	243
1. 森脇山城跡	247
2. 阿丹谷辻堂跡	248

挿 図 目 次

森遺跡

第1図 森遺跡周辺の地形	10
第2図 森遺跡遺構配置図 1:400	11・12
第3図 森遺跡土層堆積状況	13・14
第4図 弥生土器の分類	17
第5図 弥生土器・須恵器・土師器の分類	19
第6図 S I 01実測図	20
第7図 S I 01出土土器	21
第8図 S I 02実測図	22
第9図 S I 02出土土器	23
第10図 S I 03断面図	24
第11図 S I 03実測図	25
第12図 S I 03P 1 遺物出土状態	26
第13図 S I 03出土土器・石器	26
第14図 S I 04実測図	27
第15図 S I 04断面図	28
第16図 S I 04遺物出土状態	29
第17図 S I 04出土土器（1）	35
第18図 S I 04出土土器（2）	36
第19図 S I 04出土土器（3）	37
第20図 S I 04出土土器（4）	38
第21図 S I 04出土土器（5）・石器	39
第22図 S I 07 実測図	40
第23図 S I 05、06実測図	40
第24図 S I 05、07出土土器	41
第25図 S I 08実測図	42
第26図 S I 08遺物出土状態	43
第27図 S I 08庵実測図	44
第28図 S I 08出土土器	45
第29図 S I 09実測図	46
第30図 S I 09庵実測図	47
第31図 S I 09遺物出土状態	48
第32図 S I 09出土土器（1）	49
第33図 S I 09出土土器（2）	50

第34図	S I 10実測図	51
第35図	S I 10竪実測図	52
第36図	S I 10石検出状況	53
第37図	S I 10P 3内の石堆積状況	53
第38図	S I 10遺物出土状態	54
第39図	S I 10遺物出土状態	54
第40図	S I 10遺物出土状態	55
第41図	S I 10床面直上出土の上器（1）	59
第42図	S I 10床面直上出土の土器（2）	60
第43図	S I 10出土土器（3）	61
第44図	S I 10出土土器（4）	62
第45図	S I 10出土土器（5）	63
第46図	S I 10出土土器（6）	64
第47図	S I 10出土土器（7） 砥石 鉄器	65
第48図	S I 11実測図	66
第49図	S I 11遺物出土状態	66
第50図	S I 11竪実測図	67
第51図	S I 11出土土器	68
第52図	S I 12実測図	70
第53図	S I 12遺物出土状態	70
第54図	S I 12出土土器	70
第55図	S I 13実測図	71
第56図	S I 13遺物出土状態	72
第57図	S I 13竪実測図	72
第58図	S I 13出土土器（1）	73
第59図	S I 13出土土器（2）	74
第60図	S I 14実測図	75
第61図	S I 14遺物出土状態	75
第62図	S I 14竪実測図	76
第63図	S I 14出土土器（1）	77
第64図	S I 14出土土器（2）	78
第65図	S I 15実測図	79
第66図	S I 15遺物出土状態	80
第67図	S I 15竪実測図	80
第68図	S I 15出土土器（1）	81
第69図	S I 15出土土器（2）	82

第70図	S I 16実測図	84
第71図	S I 16遺物出土状態	85
第72図	S I 16竪実測図	86
第73図	S I 16出土土器（1）	88
第74図	S I 16出土土器（2）	89
第75図	S I 16出土土器（3）鉄器	90
第76図	S I 17実測図	91
第77図	S I 17遺物出土状態	91
第78図	S I 17出土鉄器	92
第79図	S I 17竪実測図	92
第80図	S I 17出土土器（1）	93
第81図	S I 17出土土器（2）砥石	94
第82図	S I 18実測図	95
第83図	S I 18遺物出土状態	96
第84図	S I 18竪実測図	96
第85図	S I 18出土土器（1）	98
第86図	S I 18出土土器（2）	99
第87図	S I 18出土砥石	100
第88図	S I 19実測図	100
第89図	S I 19遺物出土状態	101
第90図	S I 19出土鉄器	101
第91図	S I 19竪実測図	101
第92図	S I 19出土土器	103
第93図	S I 20実測図	104
第94図	S I 20遺物出土状態	104
第95図	S I 20竪実測図	104
第96図	S I 20出土土器	105
第97図	S I 20出土鉄器	105
第98図	S I 21実測図	107
第99図	S I 21遺物出土状態	107
第100図	S I 21竪実測図	108
第101図	S I 21遺物出土状態	109
第102図	S I 21木製品出土状態	109
第103図	S I 21出土土器（1）	110
第104図	S I 21出土土器（2）	111
第105図	S I 21出土木製品	112

第106図	S B01実測図	114
第107図	S B02実測図	115
第108図	S B03実測図	116
第109図	S B04実測図	117・118
第110図	S B05実測図	120
第111図	土坑墓主軸方位別の配置	121
第112図	S K01～06実測図	122
第113図	S K07～11実測図	123
第114図	S K07出土管玉実測図（1）	124
第115図	S K07出土管玉実測図（2）	125
第116図	S K13～21実測図	128
第117図	S K22～31実測図	129
第118図	S K32～41実測図	130
第119図	S K42～49実測図	131
第120図	土坑出土土器	132
第121図	S D01十層堆積状況	134
第122図	S D01出土土器	134
第123図	縄文土器（1）	141
第124図	縄文土器（2）	142
第125図	縄文土器（3）	143
第126図	縄文土器（4）	144
第127図	縄文土器（5）	145
第128図	縄文土器（6）	146
第129図	縄文土器（7）	147
第130図	縄文土器（8）	148
第131図	縄文土器（9）	149
第132図	縄文土器（10）	150
第133図	縄文土器（11）	151
第134図	縄文土器（12）	152
第135図	縄文土器（13）	153
第136図	縄文土器（14）	154
第137図	弥生土器（1）	174
第138図	弥生土器（2）	175
第139図	弥生土器（3）	176
第140図	弥生土器（4）	177
第141図	弥生土器（5）	178

第142図 弥生土器（6）	179
第143図 弥生土器（7）	180
第144図 須恵器	185
第145図 石器（1）	187
第146図 石器（2）	188
第147図 石器（3）	189
第148図 石器（4）	190
第149図 石器（5）	191
第150図 石器（6）	192
第151図 装身具	194
第152図 土製品	195
第153図 中近世陶磁器・石硯	197
第154図 金属器	198
第155図 弥生時代後期竪穴住居跡の配置	200
第156図 古墳末～奈良時代集落の変遷	202

板屋1遺跡

第1図 板屋1遺跡調査前の地形	211
第2図 板屋1遺跡遺構配置図	213・214
第3図 土層堆積状況（1:120）	215
第4図 S B01、02（1:80）	216
第5図 S B01、02断面図（1:80）	217
第6図 S B03（1:80）	218
第7図 S B04（1:80）	220
第8図 S B05、06（1:80）	221
第9図 S B07～09（1:80）	222
第10図 S B10、11（1:80）	224
第11図 鉄滓溜出土鉄滓（1:4）	225
第12図 鉄滓溜土層堆積状況	226
第13図 S K01（1:30）	227
第14図 S K02、03（1:30）	228
第15図 S K04（1:30）	229
第16図 S K05～08（1:30）	230
第17図 遺構出土遺物	232
第18図 S K09（1:20）	233
第19図 S K09出土土器	234

第20図 積石遺構地形測量図 (1 : 100)	235
第21図 積石遺構 (1 : 40)	236
第22図 積石遺構基底部 (1 : 40)	237
第23図 積石遺構出土宝篋印塔	237
第24図 遺構に伴わない遺物 1 ~ 15 (1 : 3) 16 ~ 22 (1 : 4)	239
第25図 遺構に伴わない遺物 (1 : 3)	240

森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡

第1図 森脇山城跡地形測量図 (1 : 1000)	245 · 246
第2図 阿丹谷辻堂跡地形測量図 (1 : 100)	249
第3図 阿丹谷堂の原辻堂跡石塔 (1 : 20)	250
第4図 阿丹谷森脇辻堂跡石塔 (1 : 20)	251

図 版 目 次

図版 1 森遺跡発掘前の風景	図版11 森遺跡 S I 09 (貼床除去後)
図版 1 森遺跡発掘後の状況 (調査区西部)	図版11 森遺跡 S I 09貼床面の状況
図版 2 森遺跡発掘後の状況 (調査区北部)	図版12 森遺跡 S I 09土層堆積状況
図版 2 森遺跡発掘後の状況 (調査区東南部)	図版12 森遺跡 S I 09土層堆積状況
図版 3 森遺跡発掘後の状況 (進入道路部分)	図版13 森遺跡 S I 09遺物出土状態
図版 3 森遺跡発掘後の状況 (同西から)	図版13 森遺跡 S I 09貼床除去後の遺物出土状態
図版 4 森遺跡調査区東端部のピット群(西から)	図版14 森遺跡 S I 09検出状況
図版 4 森遺跡 S I 01、12、13検出状況	図版14 森遺跡 S I 09竪
図版 5 森遺跡 S I 01	図版15 森遺跡 S I 09竪土層堆積状況
図版 5 森遺跡 S I 02	図版15 森遺跡 S I 10、11検出状況
図版 6 森遺跡 S I 03	図版16 森遺跡 S I 10 (床面上は炭化物)
図版 6 森遺跡 S I 03 P 1 遺物出土状態	図版16 森遺跡 S I 10集石の状況
図版 7 森遺跡 S I 04	図版17 森遺跡 S I 10 P 3 石検出状況
図版 7 森遺跡 S I 04遺物出土状態	図版17 森遺跡 S I 10土層堆積状況
図版 8 森遺跡 S I 05、06	図版18 森遺跡 S I 10竪石組
図版 8 森遺跡 S I 07検出状況	図版18 森遺跡 S I 10竪出状況
図版 9 森遺跡 S I 08貼床面の状況	図版19 森遺跡 S I 10竪土層堆積状況
図版 9 森遺跡 S I 08 (貼床除去後)	図版19 森遺跡 S I 10遺物出土状態
図版10 森遺跡 S I 08遺物出土状態	図版20 森遺跡 S I 10遺物出土状態
図版10 森遺跡 S I 08調査風景	

- 図版20 森遺跡 S I 10遺物出土状況
(第39図1~13)
- 図版21 森遺跡 S I 10遺物出土状況
(第40図14~16)
- 図版21 森遺跡 S I 11
- 図版22 森遺跡 S I 11土層堆積状況
- 図版22 森遺跡 S I 11竪検出状況
- 図版23 森遺跡 S I 11竪上層堆積状況
- 図版23 森遺跡 S I 11遺物出土状況
- 図版24 森遺跡 S I 12
- 図版24 森遺跡 S I 12土層堆積状況
- 図版25 森遺跡 S I 12遺物出土状況
- 図版25 森遺跡 S I 13
- 図版26 森遺跡 S I 13土層堆積状況
- 図版26 森遺跡 S I 13竪石組
- 図版27 森遺跡 S I 13竪検出状況
- 図版27 森遺跡 S I 13竪上層堆積状況
- 図版28 森遺跡 S I 13遺物出土状況
- 図版28 森遺跡 S I 14
- 図版29 森遺跡 S I 14土層堆積状況
- 図版29 森遺跡 S I 14竪石組
- 図版30 森遺跡 S I 14竪検出状況
- 図版30 森遺跡 S I 14竪上層堆積状況
- 図版31 森遺跡 S I 14遺物出土状況
- 図版31 森遺跡 S I 14床面遺物出土状況
- 図版32 森遺跡 S I 14竪付近遺物出土状況
- 図版32 森遺跡 S I 15
- 図版33 森遺跡 S I 15土層堆積状況
- 図版33 森遺跡 S I 15遺物出土状況
- 図版34 森遺跡 S I 15竪検出状況
- 図版34 森遺跡 S I 15竪上層堆積状況
- 図版35 森遺跡 S I 15遺物出土状況
- 図版35 森遺跡 S I 15調査風景
- 図版36 森遺跡 S I 16、17
- 図版36 森遺跡 S I 16
- 図版37 森遺跡 S I 16土層堆積状況
- 図版38 森遺跡 S I 16竪石組
- 図版38 森遺跡 S I 16竪検出状況
- 図版39 森遺跡 S I 16遺物出土状況
- 図版39 森遺跡 S I 17
- 図版40 森遺跡 S I 17土層堆積状況
- 図版40 森遺跡 S I 17竪石組
- 図版41 森遺跡 S I 17竪徑道
- 図版41 森遺跡 S I 17遺物出土状況
- 図版42 森遺跡 S I 17遺物出土状況
- 図版42 森遺跡 S I 18検出状況
- 図版43 森遺跡 S I 18(床面上は炭化物)
- 図版43 森遺跡 S I 18土層堆積状況
- 図版44 森遺跡 S I 18竪石組
- 図版44 森遺跡 S I 18竪検出状況
- 図版45 森遺跡 S I 18竪上層堆積状況
- 図版45 森遺跡 S I 18遺物出土状況
- 図版46 森遺跡 S I 18調査風景
- 図版46 森遺跡 S I 19(貼床面での状況)
- 図版47 森遺跡 S I 19(貼床除去後の状況)
- 図版47 森遺跡 S I 19土層堆積状況
- 図版48 森遺跡 S I 19竪検出状況
- 図版48 森遺跡 S I 19遺物出土状況
- 図版49 森遺跡 S I 20
- 図版49 森遺跡 S I 20土層堆積状況
- 図版50 森遺跡 S I 20竪石組
- 図版50 森遺跡 S I 20竪上層堆積状況
- 図版51 森遺跡 S I 20竪徑道部分
- 図版51 森遺跡 S I 20遺物出土状況
- 図版52 森遺跡 S I 21
- 図版52 森遺跡 S I 21炭化物出土状況
- 図版53 森遺跡 S I 21土層堆積状況
- 図版53 森遺跡 S I 21竪石組
- 図版54 森遺跡 S I 21竪上層堆積状況
- 図版54 森遺跡 S I 21遺物出土状況
- 図版55 森遺跡 S I 21土器出土状況

- 図版55 森遺跡S I 21木製品出土状態
図版56 森遺跡S B01
図版56 森遺跡S B02
図版57 森遺跡S B03
図版57 森遺跡S B04
図版58 森遺跡S B05
図版58 森遺跡S K01、22、23
図版59 森遺跡S K02
図版59 森遺跡S K04
図版60 森遺跡S K06
図版60 森遺跡S K07
図版61 森遺跡S K07土層堆積状況
図版61 森遺跡S K07管玉出土状態
図版62 森遺跡S K08
図版62 森遺跡S K10
図版63 森遺跡S K12
図版63 森遺跡S K13
図版64 森遺跡S D01北西部部分
図版64 森遺跡S D01東部および調査区
東端部のピット群
図版65 神戸川上流から八神盆地を望む
図版65 森遺跡S I 01、02出土土器
図版66 森遺跡S I 04出土土器
図版67 森遺跡S I 03出土上器
図版67 森遺跡S I 04出土土器
図版68 森遺跡S I 04出土土器
図版68 森遺跡S I 04出土上器
図版69 森遺跡S I 04出土土器
図版69 森遺跡S I 04出土土器
図版70 森遺跡S I 04出土土器
図版70 森遺跡S I 04出土土器
図版71 森遺跡S I 04出土上器
図版71 森遺跡S I 04出土土器
図版72 森遺跡S I 04出土土器
図版72 森遺跡S I 04出土石器
図版73 森遺跡S I 04、07出土上器
図版74 森遺跡S I 08出土土器
図版75 森遺跡S I 08、09出土上器
図版76 森遺跡S I 09、20出土土器
図版76 森遺跡S I 09 P 4出土鉄滓
図版77 森遺跡S I 10出土土器
図版78 森遺跡S I 10出土土器
図版79 森遺跡S I 10出土上器
図版80 森遺跡S I 10出土土器
図版81 森遺跡S I 10出土上器
図版82 森遺跡S I 10出土土器
図版83 森遺跡S I 10出土土器
図版84 森遺跡S I 10出土土器
図版85 森遺跡S I 10出土上器 石器
図版85 森遺跡S I 11出土土器
図版86 森遺跡S I 11出土土器
図版87 森遺跡S I 12出土上器
図版88 森遺跡S I 12出土土器
図版88 森遺跡S I 13出土上器
図版89 森遺跡S I 13出土土器
図版90 森遺跡S I 13、14出土土器
図版91 森遺跡S I 14出土上器
図版92 森遺跡S I 15出土土器
図版93 森遺跡S I 15、16山上土器
図版94 森遺跡S I 16出土土器
図版95 森遺跡S I 16出土上器
図版96 森遺跡S I 16出土土器・鉄器・鉄滓
図版96 森遺跡S I 17出土土器
図版97 森遺跡S I 17出土土器・砥石
図版98 森遺跡S I 17、18出土土器
図版99 森遺跡S I 18出土土器
図版100 森遺跡S I 18出土土器
図版100 森遺跡S I 19出土土器
図版101 森遺跡S I 19出土上器
図版102 森遺跡S I 19出土鉄器
図版102 森遺跡S I 20出土鉄器
図版102 森遺跡S I 20出土土器

- 図版103 森遺跡S I 21出土土器、木製品
図版104 森遺跡S I 21出土土器
図版105 森遺跡S I 21出土土器
図版105 森遺跡S D01出土土器
図版106 森遺跡S I 21出土木製品
図版106 森遺跡S K07出土管玉
図版107 森遺跡S K07出土管玉
図版108 森遺跡S K07出土管玉
図版108 森遺跡土坑内出土上器
図版109 森遺跡出土縄文土器
図版110 森遺跡出土縄文土器
図版111 森遺跡出土縄文土器
図版113 森遺跡出土縄文土器
図版114 森遺跡出土縄文土器
図版115 森遺跡出土縄文土器
図版116 森遺跡出土縄文土器
図版117 森遺跡出土縄文土器
図版118 森遺跡出土縄文土器
図版119 森遺跡出土縄文土器
図版120 森遺跡出土縄文土器
図版121 森遺跡出土縄文土器
図版122 森遺跡出土縄文土器
図版123 森遺跡出土縄文土器
図版124 森遺跡出土縄文土器
図版125 森遺跡出土縄文土器
図版126 森遺跡出土弥生土器
図版127 森遺跡出土弥生土器
図版128 森遺跡出土弥生土器
図版129 森遺跡出土弥生土器
図版130 森遺跡出土弥生土器
図版131 森遺跡出土弥生土器
図版132 森遺跡出土石器
図版133 森遺跡出土石器
図版134 森遺跡出土石器
図版135 森遺跡出土袋身具および上製品
図版135 森遺跡出土中世陶磁器
図版136 森遺跡出土中世陶磁器
図版137 森遺跡出土中世陶磁器
図版138 森遺跡出土中世陶磁器
図版139 森遺跡出土陶器
図版140 森遺跡出土近世陶磁器
図版140 森遺跡出土金属器
図版141 板屋 I 遺跡周辺の地形
図版141 板屋 I 遺跡全景
図版141 板屋 I 遺跡発掘後の状況
図版142 板屋 I 遺跡七層堆積状況
図版143 板屋 I 遺跡 S B01～03
図版143 板屋 I 遺跡 S B04～10
図版144 板屋 I 遺跡 S B08、09遺物出土状態
図版144 板屋 I 遺跡鉄滓溜
図版145 板屋 I 遺跡鉄滓溜
図版145 板屋 I 遺跡鉄滓溜調査風景
図版146 板屋 I 遺跡 S K01
図版146 板屋 I 遺跡 S K01土層堆積状況
図版147 板屋 I 遺跡 S K02、03、05
図版147 板屋 I 遺跡 S K02、03上層堆積状況
図版148 板屋 I 遺跡 S K02奥壁の石
図版148 板屋 I 遺跡 S K02アーチ状の粘土
図版149 板屋 I 遺跡 S K04検出状況
図版149 板屋 I 遺跡 S K04
図版150 板屋 I 遺跡 S K04～1土層堆積状況
図版150 板屋 I 遺跡 S K05検出状況
図版151 板屋 I 遺跡 S K05
図版151 板屋 I 遺跡 S K05土層堆積状況
図版152 板屋 I 遺跡 S K05調査風景
図版152 板屋 I 遺跡 S K06検出状況
図版153 板屋 I 遺跡 S K06
図版153 板屋 I 遺跡 S K06土層堆積状況
図版154 板屋 I 遺跡 S K07
図版154 板屋 I 遺跡 S K07土層堆積状況
図版155 板屋 I 遺跡 S K08検出状況
図版155 板屋 I 遺跡 S K08

- | | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 図版156 板屋Ⅰ遺跡S K08土層堆積状況 | 図版164 板屋Ⅰ遺跡鉄滓溜出上鉄滓(固化した場所がわかる) |
| 図版156 板屋Ⅰ遺跡S K09 | 図版165 板屋Ⅰ遺跡同炉内滓 |
| 図版157 板屋Ⅰ遺跡S K09土層堆積状況 | 図版165 板屋Ⅰ遺跡同流動滓 |
| 図版157 板屋Ⅰ遺跡積石遺構(調査前) | 図版166 板屋Ⅰ遺跡S K09出土繩文土器 |
| 図版158 板屋Ⅰ遺跡積石遺構(調査前) | 図版167 板屋Ⅰ遺跡積石遺構出土宝鏡印塔 |
| 図版158 板屋Ⅰ遺跡積石遺構(小石除去後) | 図版168 板屋Ⅰ遺跡遺構に伴わない遺物 |
| 図版159 板屋Ⅰ遺跡積石遺構下部 | 図版169 板屋Ⅰ遺跡遺構に伴わない遺物 |
| 図版160 板屋Ⅰ遺跡積石遺構奥壁の状況 | 図版170 板屋Ⅰ遺跡包含層出土の鉄滓 |
| 図版160 板屋Ⅰ遺跡積石遺構基底部 | 図版171 森脇山城跡 |
| 図版161 板屋Ⅰ遺跡積石遺構地山加工段 | 図版172 森脇山城跡土層堆積状況 |
| 図版161 板屋Ⅰ遺跡遺構内出土遺物 | 図版172 阿丹谷堂の原辻堂跡遠景 |
| 図版162 板屋Ⅰ遺跡遺構内出土遺物 | 図版173 阿丹谷堂の原辻堂跡 |
| 図版162 板屋Ⅰ遺跡S B09出土陶器 | 図版173 阿丹谷堂の原辻堂跡石塔 |
| 図版163 板屋Ⅰ遺跡S B11P 5 出土石鉢 | 図版174 阿丹谷森脇辻堂跡遠景 |
| 図版163 板屋Ⅰ遺跡S B10出土石臼 | |
| 図版164 板屋Ⅰ遺跡鉄滓溜出出土鉄塊系遺物 | 図版174 阿丹谷森脇辻堂跡石塔 |



飯石郡頓原町位置図

1. 調査に至る経緯と調査の経過

神戸川は、島根県と広島県の県境に位置する女亀山（標高830m）に源を発して北流し、島根半島西端の大社湾に注ぐ一級河川である。出雲國風土記によれば古くは下流が「神門川」、上流が「須佐川」と呼ばれ、下流では鮎、鮭、鰐、イグイなどが、上流では鮎がいた、と記載されている。豊富な水量を誇る神戸川は現在でも多くの幸に恵まれ、出雲國風土記よりもさらに古い時代から人類の生活に密着していたことは想像に難くない。

ところが昭和47年（1972）の集中豪雨で、神戸川と出雲市を貫流するもう一つの大河川斐伊川とともに大洪水をおこし、下流の出雲市に大きな被害をもたらした。一方宍道湖に流入した斐伊川の水は宍道湖を増水させ、松江市の市街地が一週間以上にわたって冠水する事態となった。

この災害によって、斐伊川、神戸川の抜本的な治水計画が検討され、両河川を一体とした治水事業が計画された。志津見ダムは、この計画の一環として神戸川の上流に位置する飯石郡頃原町志津見地区に建設が予定されているダムである。

計画によると、志津見ダム建設予定地は湛水面積230haと広大である。このなかには多くの文化財があり、また未発見の埋蔵文化財の存在が推定されたことから、島根県教育委員会では埋蔵文化財の分布調査に迫られた。折しも頃原町教育委員会では町内の遺跡分布調査事業が進められており、県教委ではこれに同調し昭和63年（1988）にダム建設予定地内の分布調査を行った。町教委の調査の結果、遺跡が希少であった志津見、八神、角井地区で、150カ所にのぼる埋蔵文化財が確認され⁽¹⁾、志津見ダム建設予定地内には44カ所の遺跡が存在し6カ所の遺跡推定地があることが判明した。またこれと一緒に、ダム建設によって消えていく民俗文化財について、2カ年にわたって調査が県教委によって行われ、その成果は平成2年度（1990）に公刊されている⁽²⁾。

平成元年度（1989）に至り、施工主である建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所は代替地造成、道路付替工事など、地元生活再建整備事業に着手することになり、地内の埋蔵文化財包蔵地の調査を島根県教育委員会に依頼した。これを受け、島根県教育委員会では阿丹谷地区生活再建事業予定地内の発掘調査を開始した。ここでは、鉄井⁽³⁾追遺跡（製鐵遺跡）、引地城跡（中世）の2カ所が周知の遺跡とされていたが、調査の結果遺構、遺物は確認できなかった。

平成2年度（1990）は岡地区的調査を中心に阿丹谷地区の調査も併せて行った。岡地区は主要地方道山陰三次線（現在の国道184号）のつけ替えにともなう明剣トンネルの建設が予定され、さらにその周辺が生活再建地として造成工事が計画された。ここには板尻⁽⁴⁾遺跡が遺跡として周知されており、調査の結果近世の住居跡などが検出された。また、これに続き阿丹谷地区では阿丹谷辻堂

跡と森脇山城跡の調査に入った。阿丹谷辻堂跡は堂の原、森脇の2カ所の石塔があり、石塔の記録および地下構造の有無を確認するため発掘調査を行った。2カ所とも地下構造がなく、調査は石塔を記録して終了した。森脇山城跡は共同墓地の予定地となっており、郭は工事対象外であるものの関連遺構の存在が予想されたため、工事予定地内の丘陵頂部を中心に発掘を行った。調査の結果、遺構、遺物は確認されず、城跡の範囲はここまで広がらないことがわかった。調査はその後、既存の地形図(200分の1)に郭、堀切などを書き込みして記録を取り終了した。

平成3年度(1991)は谷川南地区生活再建予定地の調査を行った。ここは以前から土器が採集され、地形的にも遺跡の立地条件としては最適の場所であり、多数の遺構、遺物の存在が予想された。そのため、年度当初から発掘調査を開始し遺構の検出に努めた。予想通り、発掘当初から竪穴住居跡をはじめ多くの遺構遺物が検出され、半年度での調査完了は難しいように思われた。ところが、当初計画されていた町営住宅2棟が1棟に縮小されたことから、調査面積は約7,000m²から約5,000m²に減少した。そのため、調査期間は次年度までずれ込んだものの、平成3年4月から平成4年5月までの約11ヵ月間(1~3月は中断)で終了することができた。なお、全体図の作成については、㈱ワールド航測コンサルタントに委託し、20分の1の図を作成した。

調査組織は以下のとおりであった。

・平成2年度(1990年)

事務局 泉恒雄(文化課長) 藤原義光(同課長補佐) 勝部昭(同課長補佐) 野村純一(同文化係長) 坂根繁(同主任) 田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 宮沢明久(文化課理蔵文化財第1係長) 柳浦俊一(同主事)

調査補助員 田中迪亮 山崎順子

調査協力 伊藤厚志(頓原町教育委員会社会教育主事)

・平成3年度(1991年)

事務局 目次理雄(文化課長) 藤原義光(同課長補佐) 勝部昭(同課長補佐) 高橋研(同文化係長) 伊藤宏(同主事) 田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 宮沢明久(文化課理蔵文化財第1係長) 柳浦俊一(同主事) 大野俊治(同兼主事)

調査補助員 田中迪亮 山崎順子

調査協力 伊藤厚志(頓原町教育委員会社会教育主事) 山崎修(同主事)

・平成4年度(1992年)

事務局 目次理雄(文化課長) 山根成二(同課長補佐) 高橋研(同文化係長) 伊藤宏(同主事) 勝部昭(島根県埋蔵文化財調査センター長) 久家儀夫(同課長補佐) 工藤直樹(同企画調整係主事) 田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター調査第4係長） 柳浦俊一（同主事） 木村直人（同兼文化財保護主事） 大野俊治（同兼主事）

調査補助員 田中強亮 山崎順子

注（1）頃原町教育委員会『頃原町の遺跡 志々地区』1989

（2）島根県教育委員会 建設省中国地方建設局『志津見の民俗』1990

2. 周辺の遺跡

島根県飯石郡頃原町大字志津見には、これまで古代にさかのぼる遺跡はあまり知られていないかった。わずかに、天平5年（733）に編述された『出雲國風土記』に記載される「通道」の中に「志都美剣」が見られるだけである。⁽¹⁾しかし、その位置については必ずしも特定されておらず、地元の言い伝えでは明剣神社付近と言わされてきた（島根県遺跡地図T9）。古代遺跡としては八神地区に横穴式石室を主体部とする比丘尼塚古墳（頃原町指定遺跡）や、角井地区の堂の原横穴などが知られるに過ぎなかった。

昭和63年度と平成元年度（1988～89）に頃原町教育委員会が行った埋蔵文化財詳細分布調査によって、遺跡の数は飛躍的に増加し、その数は志津見、八神、角井地区で約150カ所にのぼる。⁽²⁾この時の調査では多くの製鉄遺跡のほか、古墳や遺物散布地が新たに遺跡として知られることになり、これが発掘調査の端緒になった。

飯石郡頃原町志津見、八神地区は一級河川神戸川の上流に位置する山間の土地である。西側には標高1,126mの三瓶山を控え、西は石見との境をなし、南は備後との国境に近い。このような土地柄にあっては住居地となるべき平坦地はあまりなく、この地の遺跡の多くは、頃原町を貫流する神戸川沿いの河岸段丘上に立地している。

この段丘を構成する土層は、地元で「ハイカ」と呼ばれる火山灰層で、地質学的には三瓶大平山降下火山灰とされる。この火山灰は三瓶山の最終噴火時に堆積したものと考えられ、その堆積年代はBP3,600±75年という。⁽³⁾遺跡のほとんどはこの層で確認される。今のところ、この層の上面で発見された遺跡で最も古いものは五明田遺跡の縄文時代中期末（里木Ⅱ式）の土坑である。この地域での三瓶大平山降下火山灰層の堆積層は厚く、この下からはまだ遺跡は発見されていないが、将来これより下の層から縄文時代中期以前の遺跡が発見されることも期待される。

縄文時代の遺物散布地としては、与一原遺跡、松が原遺跡、下山遺跡などがあるが、とくに注目できるのは1991年に頃原町教育委員会が発掘調査を行った五明田遺跡である。ここでは、磨消縄文土器をはじめ縄文時代後期の七器が遺構に伴って大量に出土し、島根県のみならず西日本の縄文土

器研究に新たな展望を期待させた。

また、下山遺跡からは両性具有の特殊な石棒が出土している。⁽⁵⁾この種の石棒は、島根県ではいまのところこれ以外に出土例を知らない。

古墳としては、前述の比丘尼塚古墳、堂の原横穴墓のほか、分布調査により中原古墳、貝谷古墳⁽⁶⁾が新たに発見された。とともに横穴式石室を主体部としているようである。

このほか、この地域で多いのが鉄生産遺跡である。このことは鉄の生産がこの地方の主要産業の一つとして古くより盛行したことをうかがわせるものである。

古文書の中に見られる鉧には⁽⁷⁾下山鉧・堂ノ原鉧（吉田村田部家文書）と恒原鉧（田儀桜井家文書）があるが、これらの記録に現れない製鉄遺跡は10ヶ所を超える。その中には、近世以前にさかのぼる規模の小さい野鉧とみられるものもある。

この地域の中世遺跡に山城跡がある。森脇地区の森脇山城跡は今回の地形測量によって典型的な戦国時代の山城跡であることがわかった。このあたりは出雲・石見の国境線となっており、中世にこの地方を制覇しようとした毛利・尼子氏による雲芸攻防戦が「戦記物」にも登場するところである。

以上のように志津見、八神地区の神戸川流域は出雲・石見の国境、また山陰と山陽を結ぶ交通の要衝として古代から中世にかけて重視されてきた地域であり、それにともなって各時代の様々な遺跡が存在することが考えられる。

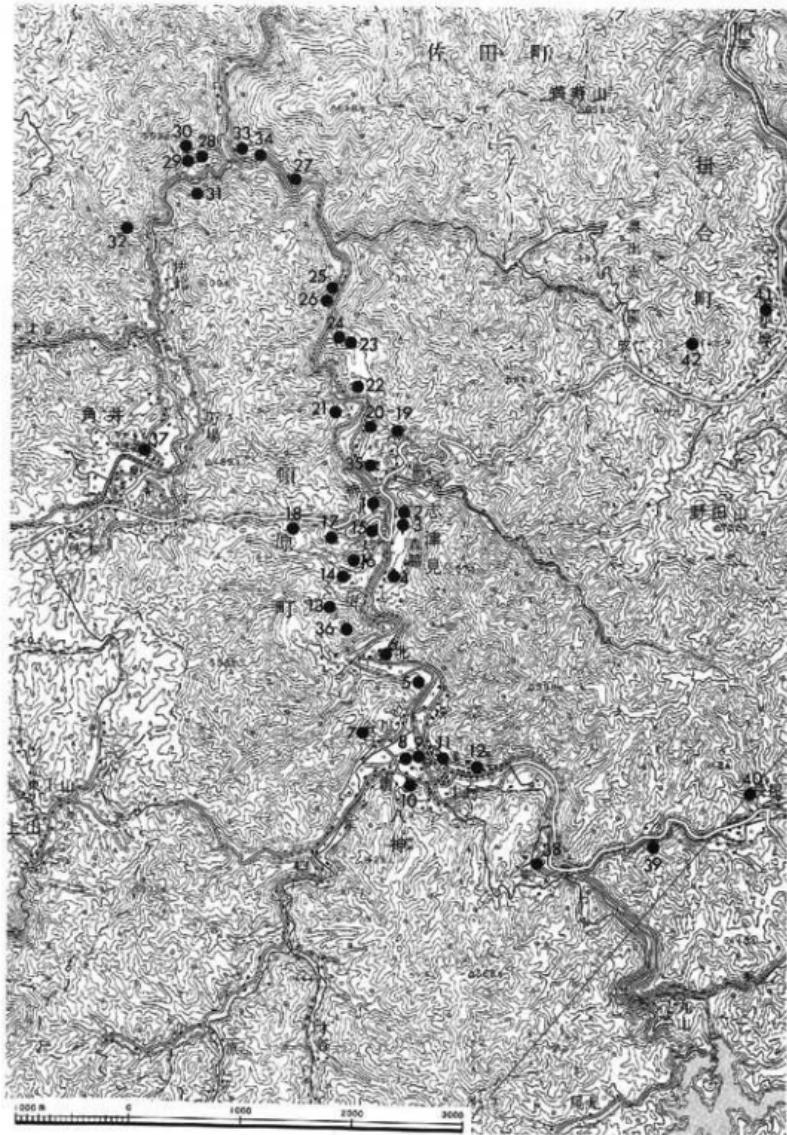
注（1）加藤義成『出雲國風土記参究』1969

（2）頼原町教育委員会『頼原町の遺跡』1989

（3）林正久・三浦清「三瓶火山のテフラの層序とその分布」『山陰地域研究（自然）』1983

（4）頼原町教育委員会『五明田遺跡』1991

（5）山崎修「頼原町下山遺跡出土の石器について」『八雲立つ風土記の丘』N-112 1992



志津見ダム建設予定地内遺跡分布図

	遺跡名	所 在 地	種 類	備 考
1	門 遺 跡	領原町大字志津見門	集落跡	
2	森 脇 金 藏 鍋 跡	領原町大字志津見森脇	製鉄遺跡	
3	鍛 治 屋 鍋 跡	領原町大字志津見森脇	製鉄遺跡	
4	神 原 遺 跡	領原町大字志津見神原	遺物散布地	須恵器 土師器
5	中 原 遺 跡	領原町大字八神中原	古墳	墳丘は消滅
6	小 丸 遺 跡	領原町大字八神北	城跡	
7	谷 川 遺 跡	領原町大字八神谷川	遺物散布地	土師器
8	森 遺 跡	領原町大字八神森	集落跡	土師器 須恵器、住居跡
9	おとみーさん遺跡	領原町大字八神森	祭祀遺跡	
10	五 明 田 遺 跡	領原町大字八神丘明田	遺物散布地	绳文土器
11	明 眼 寺 遺 跡	領原町大字八神中村	城跡	鉄碎散布
12	中 村 上 遺 跡	領原町大字八神中村	城跡	野軒跡
13	森 脇 遺 跡	領原町大字志津見森脇	城跡	
14	阿 丹 谷 遺 跡	領原町大字志津見阿丹谷	城跡	
15	引 地 城 跡	領原町大字志津見引地	城跡	古墓群
16	茶 山 城 跡	領原町大字志津見森脇	城跡	
17	鉄 井 朝 鍋 跡	領原町大字志津見森脇	製鉄遺跡	消滅
18	大 平 城 跡	領原町大字志津見大平	城跡	
19	板 屋 遺 跡	領原町大字志津見岡	遺物散布地	須恵器 土師器
20	慈 原 鍋 跡	領原町大字志津見慈原	製鉄遺跡	
21	後 平 城 跡	領原町大字志津見後平	城跡	宝鏡印塔残欠
22	貝 谷 城 跡	領原町大字志津見貝谷	城跡	
23	貝 谷 遺 跡	領原町大字志津見貝谷	古墳	土師器 須恵器
24	貝 谷 鍋 跡	領原町大字志津見貝谷	製鉄遺跡	一部消失
25	丸 山 二 号 鍋 跡	領原町大字志津見丸山	製鉄遺跡	
26	丸 山 一 号 鍋 跡	領原町大字志津見丸山	鍛冶跡	
27	大 横 鍋 跡	領原町大字志津見掌原	製鉄遺跡	
28	權 現 山 城 跡	領原町大字角井下山	城跡	
29	下 山 遺 跡	領原町大字角井下山	遺物散布地	石器
30	下 山 鍋 跡	領原町大字角井下山	製鉄遺跡	
31	權 現 山 鍋 跡	領原町大字角井下山	製鉄遺跡	
32	獅 子 谷 鍋 跡	領原町大字角井獅子谷	製鉄遺跡	金剛子祭祀跡
33	殿 澄 山 毛 宅 前 鉗 跡	領原町大字角井殿渕	製鉄遺跡	
34	殿 澄 金 ク ソ 煙 鍋 跡	領原町大字角井殿渕	製鉄遺跡	
35	志 郡 美 刺	領原町大字志津見岡	『出雲國風上記』所載	地元伝承
36	森 脇 山 城 跡	領原町大字志津見森脇	城跡	
37	角 井 遺 跡	領原町大字角井中郷	遺物散布地	石器 純文土器
38	比 久 尼 球 古 墳	領原町大字八神東	古墳	町指定史跡
39	獅 子 古 鍋 跡	領原町大字獅子	製鉄遺跡	
40	竹 谷 鍋 跡	領原町大字獅子	製鉄遺跡	
41	波 多 宝 鑄 印 塔	掛合町大字波多	古墳	
42	比 丘 尼 城 跡	掛合町大字波多	城跡	

森 遺 跡

1. 調査の概要

森遺跡は飯石郡領原町大字八神637-1外に所在する。この周辺は神戸川とその支流才谷川によって形成された河岸段丘地形で、山間部にあっては比較的まとまった耕地を有する。近隣には、縄文時代後期の遺跡である五明田遺跡があり、ここが縄文時代以来良好な居住の場所であったことがうかがえる（第1図 図版1）。

この河岸段丘は南側の山際がもっとも高く、北に向かうにしたがって次第に低くなる。今回の調査地点北端でもっとも落差が大きく、本調査区と北側の水田との比高差は約4mである。調査地点は調査前は水田として利用されており、開発等によって地形が大きく改変されることはないかったようである。そのため、遺構の残存状態は非常によく、良好な資料を多量に得ることができた。

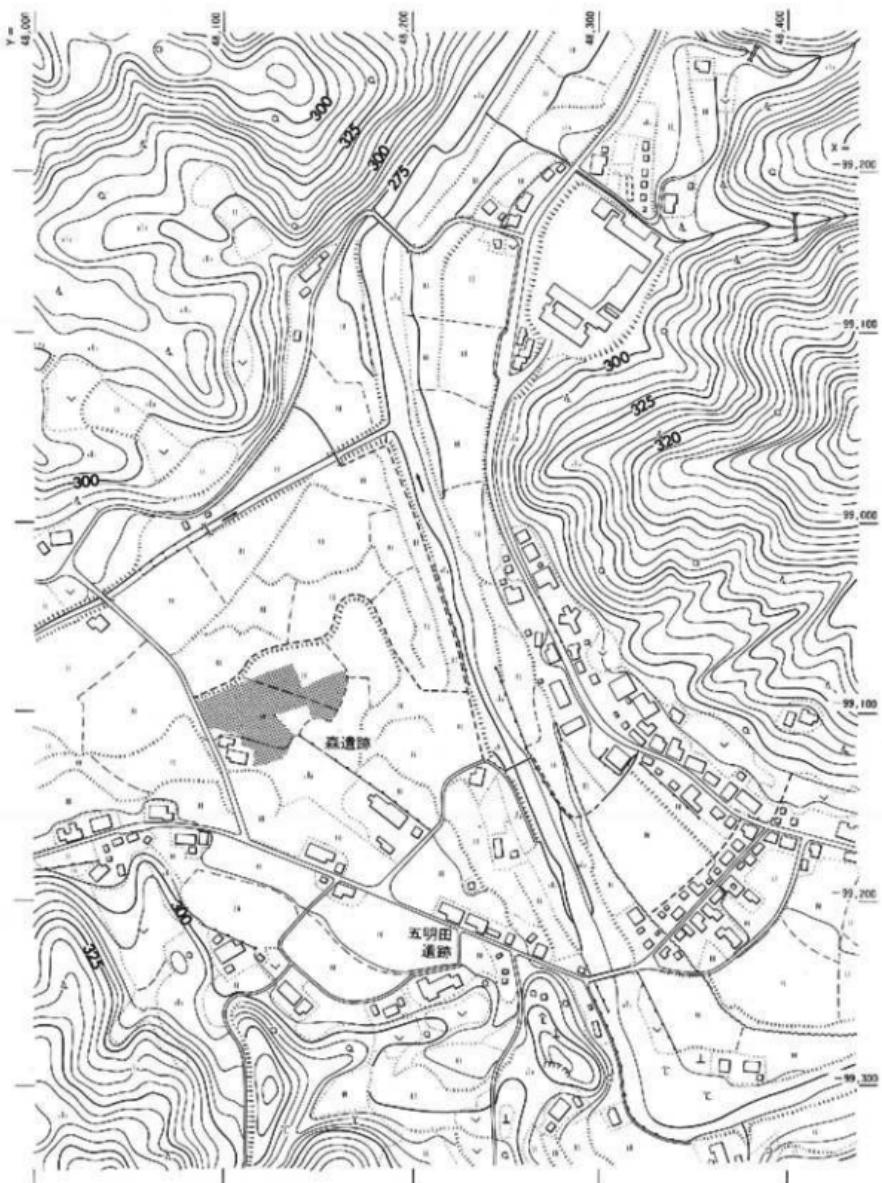
土層は、基本的に上から1. 耕作土 2. 黄褐色土（水田基盤層-客土）3. 黒色土の順で堆積していた（第3図）。1、2層は全面同様の厚さであったが、3層の厚さは、調査区西半部で約10cmと薄く、東半部で約40~50cmと厚かった。地山は、3層の下で検出された。これは地元で通称「ハイカ」と呼ばれる三瓶山の火山灰土で、地質学的には三瓶大平山降下火山灰と呼ばれる砂質火山灰である。

地山面は調査区の西側がもっとも高く、調査区中程で段がつき、それより東側はもっとも低い（第2・3図）。東西の比高差は約1mである。

検出された遺構は、竪穴住居跡21棟、掘立柱建物5棟、土坑墓13、上坑約60、溝状遺構1のほか多数のピットが検出された（第2図）。これらの遺構の多くは調査区の東部で検出されている。遺構はいずれも地山面で検出されたが、S I 10、18の廻上端の高さや、S I 21の土層堆積状況から考えると、遺構の掘り込み面は2層中にあると思われる。

竪穴住居跡は、弥生時代後期7棟、古墳時代末から奈良時代にかけてのもの14棟である。弥生時代後期の竪穴住居跡は平面形が円形で、規模は5mを超える比較的大型のものが多い。柱穴は壁のやや内側に円形に配され、中央にもピットが1個ある。それに対し、古墳時代末から奈良時代の竪穴住居跡は、すべて平面形が方形で壁の一つに造り付けの龜を有しているという特徴がある。規模は5m前後の大型のものと3m程度の小型のものとがあり、前者には4本の柱穴がともない後者にはともなわない。出土遺物をみると、大型のものが古く、小型のものが新しいようである。今回検出した古墳時代から奈良時代の竪穴住居跡14のうち、3棟は焼失住居である。

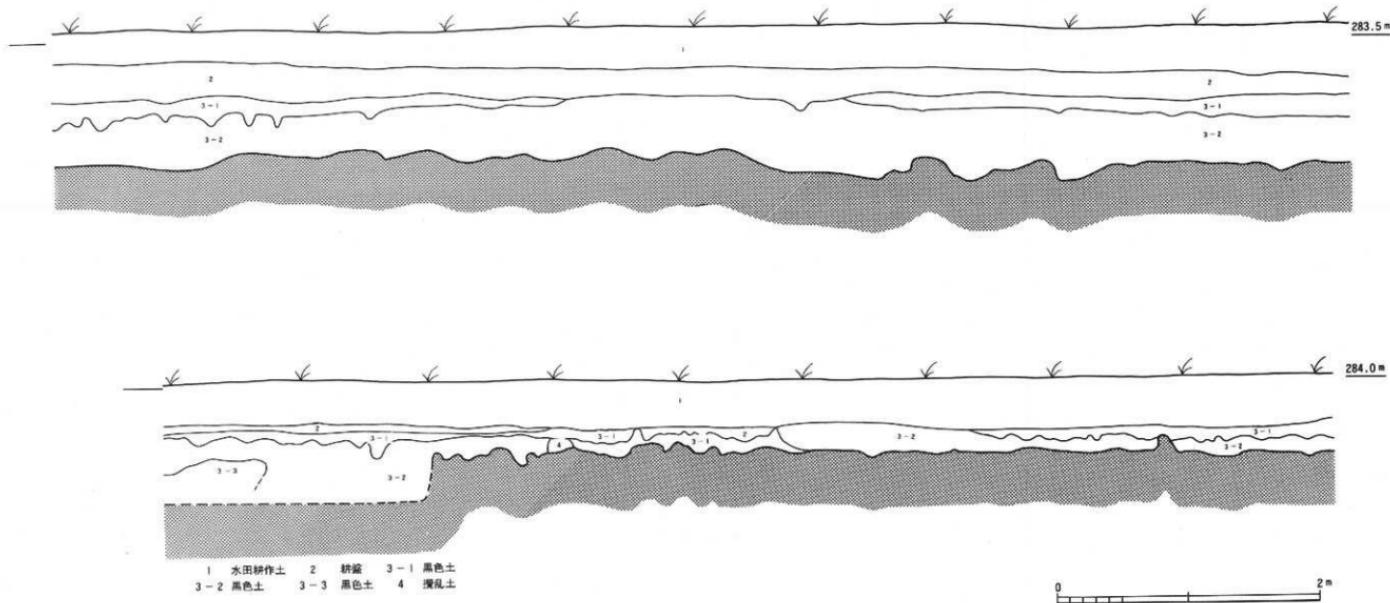
竪穴住居跡内からは多くの上器が出土した。ほとんどは土師器甕であったが、上師器壺、高壺、須恵器壺、高壺などといずれの住居跡からも出土し、時期を知ることができた。焼失住居が多い



第1図 森遺跡周辺の地形 1:5000



第2図 森造跡造構配置図



第3図 森遺跡土層堆積状況 (1:30)

ためか、良好な出土状態の遺物がみられた。とくに、S I 10では土師器高杯、杯、須恵器蓋を入れ物にいれたままの状態で、土師器甕、甕が置かれたままの状態で出土したのは注目される。これらの土器に混じって、大和からの搬入土師器杯が出土したことは、当時の流通を考えるうえで重要である。また、S I 21では木製の横櫛が完全に炭化した状態で出土した。おそらく、横櫛としては島根県では最古、全国的にみても古い時期の横櫛と思われる。7世紀代にこのような櫛が存在した事実は、当時この地がけっして閉鎖的な土地ではなく、他地との活発な交流があった証拠の一つといえよう。

掘立柱建物は5棟組むことができた。しかし、調査区全面で多数のピットが検出されており、これ以外の掘立柱建物が存在した可能性がある。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、古墳時代末から奈良時代にかけての竪穴住居跡にともなう可能性が高いように想像される。また、S B 04、05は大型の掘立柱建物で、特殊な建物のように感じられた。

溝状遺構も古墳時代末から奈良時代にかけての竪穴住居跡にともなう遺構である。これは調査区中央から東南端に斜めに横切るように掘られている。出土遺物から竪穴住居跡と同じ時期であることがわかるが、その性格は不明である。

土坑墓は13個が検出できた。他の土坑の中にも墓的性格をもつものがある可能性はあるが、ほぼまちがいなく土坑墓と判断できたのは13個であった。土器細片は多く出土したが、副葬品といえる遺物はS K 07から多量の管玉が出土したに過ぎない。そのため、時期を決定することはできないが、管玉の形状などから概ね弥生時代後期と考えた。これらは主軸の方向に4つのまとまりがみられた。なお、S K 07から出土した管玉は141個にのぼり、一つの遺構から出土した個数としては非常に多く、この土坑墓の被葬者の地位が推し量られる。

土坑については、遺構であるか否かの判断がつかないものが多くあり、今回図示したのは36個にとどめた。これらは企画性がなく、性格は不明といわざるをえない。時期についても、縄文土器の出土は多いもののわずかながら弥生土器が混入しているものもあり、出土土器がそのまま土坑の時期を示しているとは言いがたい。

出土遺物の内容は、縄文時代後期から江戸時代にかけて多岐にわたる。縄文土器は後期、晩期の土器がまとまって出土した。多くは調査区西半分から出土しており、東側からはほとんど出土していない。遺構にともなわない土器は包含層出土として地点を押さえずに取り上げたが、調査時には確認できなかっただけで、実際には遺構が存在していたかもしれない。克明に記録を取っていたならある程度出土分布のまとまりが検出できた可能性があり、調査方法に問題があったことを認めざるをえない。

縄文土器はこれまで島根県では資料の少なかった、彦崎K 2式、福田K III式が小片ながら多く得

られた。また、海岸部ではほとんど出土していない2条突縁文土器が比較的多く出土し、山陽地方との関連が注目された。

弥生土器は、後期のものがほとんどであったが、前期のいわゆる遠賀川式土器がわずかながら出土した。平成2年の五明田遺跡の調査でも弥生時代前期の土器が出土しており、遺構はまだ検出されていないが、近隣にこの時代の集落が存在することがうかがえる。後期の土器は竪穴住居跡にともなうと考えられるものがほとんどであった。

古墳時代、奈良時代の遺物もほとんどが竪穴住居跡にともなうものであった。若干第2層から出土したものがあり、この近くにさらに当該期の遺構が存在することを予想させる。中世の遺物は、白磁、青磁をはじめ中国製の輸入陶磁器がまとまって出土した。なかには中国製焼締陶、褐釉など珍しいものも含まれている。また、石硯が数点出土している。陶磁器類は17世紀の肥前系のものもあるが、14世紀から16世紀のものが多い。出土した層は、水田の客土である第2層で、これらの遺物が原位置を留めていないことは明らかであるが、周辺に存在した中世城館跡の土をここに客土したものと考えられ、近隣に有力層の本拠地が存在する可能性がある。

2. 検出遺構

(1) 竪穴住居跡

森遺跡では21棟の竪穴住居跡が検出され、そのうち18棟を完掘した。これらはおおまかに弥生時代後期の住居跡と古墳時代末～奈良時代にかけての住居跡の2時期に分けられる。これらの竪穴住居跡内からはいずれも大量の遺物が出土しており、各住居跡の項で遺物の説明を逐一行うこと非常に繁雑となる。そのため特に多く出土した後期弥生土器および土師器、須恵器の分類を最初に行い、住居跡各項の一覧表にその分類を記載することとする。

出土土器の分類（第4、5図）

弥生土器（第4、5図） 全形がわかるものが少ないため、口縁部の形態によって分類した。

甕A 口縁端部が肥厚するもので、端部は内傾する。上方への縦り上がりはない。口縁端部には四線または沈線が施されることが多い。

甕B： 口縁端部が上方に拡張し複合口縁となっているが、その幅が非常に狭いもの。口縁端部は内傾する。

甕B： 口縁端部が肥厚して上下方に拡張するもの。口縁端部は内傾する。擬凹線を入れるものが多い。

甕B： 口縁端部は肥厚し、外傾するもの。擬凹線が入る。

甕B： 頸部から口縁部にかけてやや長いもの。擬凹線を入れるものが多い。

甕B： 口縁端部が複合口縁で、内傾するもの。擬凹線を入れるものが多い。

甕C： 口縁端部が複合口縁で、直立気味にやや長く伸びるもの。櫛描きの沈線が入るものが多い。

甕C： 複合口縁で口縁端部が長く伸び、外反気味になるもの。上端部は肥厚する。櫛描きの沈線が入るものが多い。

甕C： 複合口縁だが口縁端部は短く外反または外傾する。無文。

甕D： 複合口縁で、口縁部の外反は甕Cより強い。器壁は比較的薄く、上端部の肥厚も弱い。櫛描きの沈線が入る。

甕D： 複合口縁で口縁部端部は長く伸び外傾する。全体に器壁が厚く、口縁屈曲部の稜は鈍い。口縁部は無文のものが多い。

甕D： 複合口縁で口縁端部が長く伸びて外反するもの。口縁上端部は肥厚するものは少ない。櫛描きの沈線が入る。

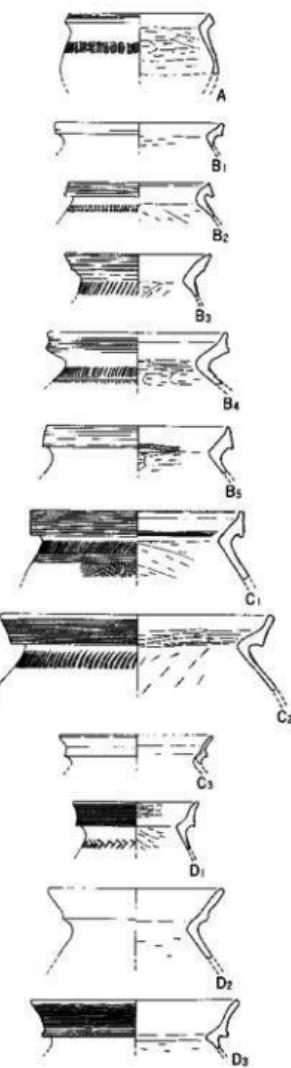
壺A 単純口縁で、口縁部は短く直立またはやや内傾する。口縁端部は肥厚する。

壺B 単純口縁で頸部が「く」の字形に屈曲する。

壺C 口縁部が上下に拡張し内傾または直立するもの。擬凹線が入るものが多い。

壺D 口縁部が複合口縁で、端部は長く外反する。櫛描きの沈線が入るものが多い。

土師器（第5図） 古墳時代末の土師器と奈良時代の土師器とを一括して分類する。とくに甕、壺について分類す



第4図 弥生土器の分類

る。甕は口縁部だけではあまり変化がないことから、全形を知り得るものを中心に形態分類を行う。

甕A： 口縁部が短く、胴部が張るもの。

甕A： 口縁部が短く、胴部が張らないもの。

甕A： 口縁部が短く、長胴のもの。

甕A： 口縁部がA₁～A₂より長く外反するもの。

甕A： 口縁部がA₁～A₂より長く直線的に伸びるもの。

甕A： 口縁部は他の甕Aと同様だが、胴部が強く張り球形のもの。

甕B： 器形は甕Aに似るが、全体に器壁がうすいもの。口縁部、頸部の厚さが胴部とはば同じで、全体の感じが甕Aとかなり違う。

坏A： 体部が内湾してそのまま丸底の底部にいたるもの。器壁が非常に厚い。

坏B： 器高が低く非常に浅身で、皿に近い器形のもの。器壁は坏A同様に厚い。

坏C： 口径に比べ器高の高い、比較的深身のもの。器壁は坏A同様に厚い。

坏D： 大型の土器で、口縁、体部は強く内湾して肩が張る。器壁はA～Cよりもうすく、底部は丸底。

坏E： 平底で口縁部、体部は外反するもの。へら磨きなどでていねいに調整され、赤色塗彩が施されるものがある。器壁は薄手である。

坏F： 大和産のもの。丸底で体部は内湾し口縁端部はわずかに屈曲する。深身で器壁は非常に薄い。へら磨きでていねいに器面調整され、内面には放射状の暗文がみられる。

須恵器（第5図） 須恵器の出土量は土師器に比べ少ない。坏、蓋についておおまかに形態分類を行う。

蓋A： 天井部の丸い、古墳時代の須恵器の系譜を引く蓋。天井部と口縁部の境に稜があるもの。

蓋A： 天井部の丸い、古墳時代の須恵器の系譜を引く蓋。天井部と口縁部の境に稜がないもの。

蓋B： 天井部に輪状つまみがつき、口縁端部が垂直に屈曲するもの。

坏A： たちあがりと受部をもつ、古墳時代の須恵器の系譜を引く坏。

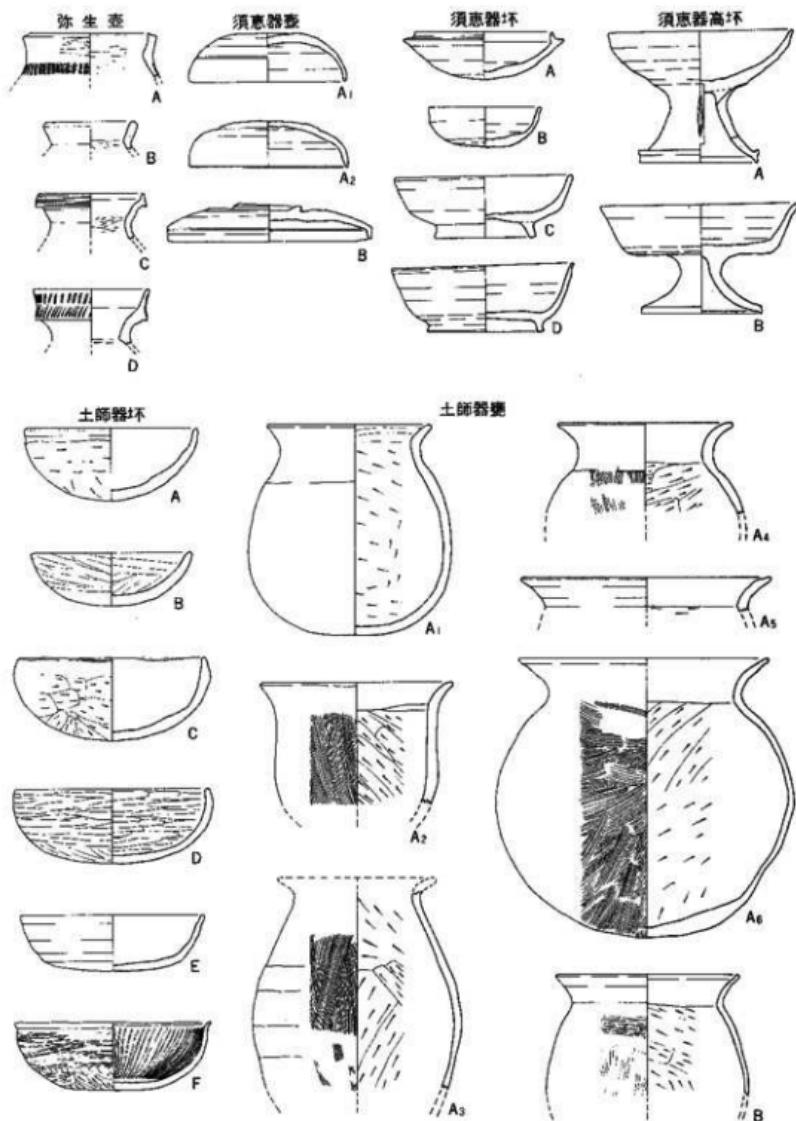
坏B： 非常に小型で、たちあがり、受部、高台をもたないもの。底部は丸底に近く…見蓋A： の小型に見える。

坏C： 体部、口縁部は内湾し高台がつく、出雲地方に多いもの。やや厚手。

坏D： 坏Cに比べ口縁部、体部がやや直線的に伸びるもの。坏Cより薄手。

高坏A： 坏部口縁部は内湾する器形で、脚部には透かしが入るものが多い。

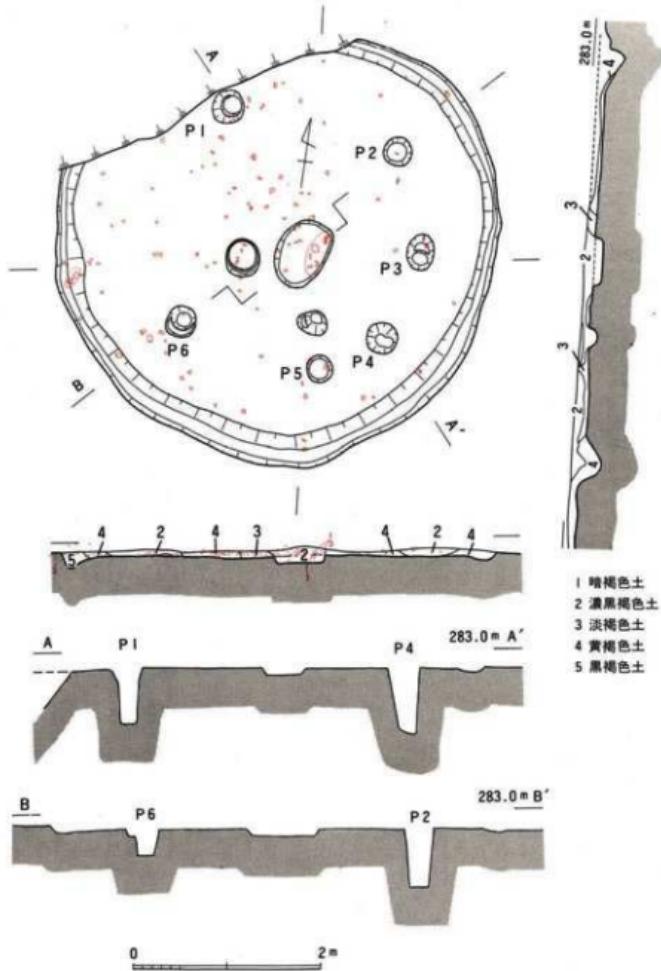
高坏B： 坏部の底部は平底で、口縁部は外反する。坏部底部と口縁部の境は屈曲し明瞭に区別できる。



第5図 弥生土器（壺）、須恵器、土師器の分類

弥生時代後期の竪穴住居跡

SI 01 (第6図 図版5) 平面形がほぼ円形で、径約4.8mの小型の竪穴住居跡である。河岸段丘縁辺に接しており北西の一部は崩落している。これは残存度が非常に悪く、壁はほとんど残っていなかった。壁に接して周溝が掘られ、床面はほぼ水平である。床面には橢円形の中央ピットとビ

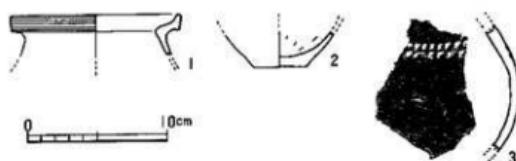


第6図 森遺跡 SI 01実測図 (1:60)

ットが8個穿たれているが、主柱穴は壁に沿って円形に配されたP1～P6と思われる。

出土遺物は少なく、第7図
(図版65)に図示した弥生土器
のほか突帯文土器などが數片出

土したにすぎない。第7図1は甕Bである。



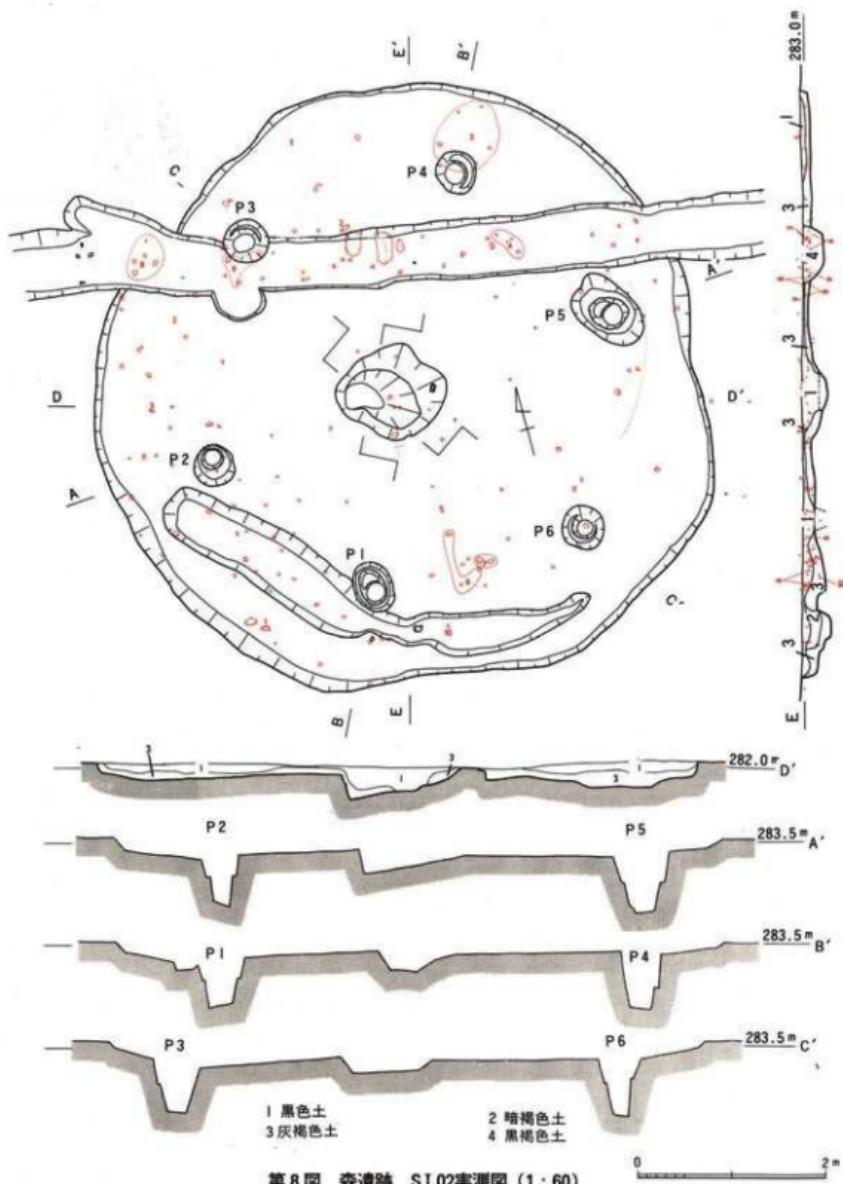
第7図 森遺跡 SI01出土土器 (1:4)

SI01計測表

平面形		円 形									
規 模		上 面		下 面		床 面 積					
		(4.0) × 4.8 m		(3.9) × 4.7 m		約 17.3 m ²					
壁 高		3 ~ 13 cm									
周 溝		幅 15 ~ 35 cm				深さ 2 ~ 4 cm					
柱 穴	番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7			
	上面径	35 × 35	30 × 30	40 × 30	35 × 35	30 × 30	35 × 35				
	深 さ	81	65	26	69	15	30				
	中 央	上 面 径				深 さ					
	ビ ッ ト	75 × 55 cm				7 cm					

SI01出土遺物一覧表 ()は現存値

掲図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量 (cm)		形 態	文様・手法	備 考
				口 径	器 高			
第7図 —1	65	甕	B ₁	12.2	(2.9)	口縁直立	腰凹線3条	
—2	65	底部			(2.3)	4.2	平底	外面ミガキまたは ナデ 内面削り
—3	65	脚部						外面ヘラ状工具に よる刺突2段 ナ デ内面削り



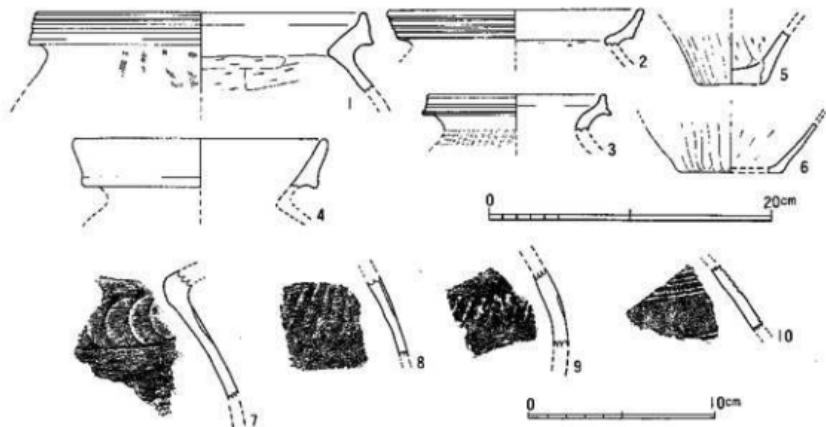
第8図 森遺跡 SI 02実測図 (1:60)

SI 02 (第8図 図版5) 平面形がほぼ円形で径約6mの大型の堅穴住居跡である。北側の一部はSD01と重複しており、平面の観察によると新旧関係はSI 03(古)→SD01(新)である。周溝は認められなかったが、南側に幅40~60cmの浅い溝が壁のやや内側に3分の1周巡っている。床面中央には不整梢円形の中央ピットが、壁沿いには主柱穴と思われるピットが6個円形に配されている。これらのピットはほぼ等間隔にあり、その間隔は約2.4mである。床面は凹凸が著しいが、貼り床などは確認できなかった。

出土遺物は住居跡内全面から出土したが、その量は少なく図示できたのは第9図(図版65)に示しただけである。第9図1、3が甕B₂、2が甕C₂、4が甕D₂である。

SI 02計測表

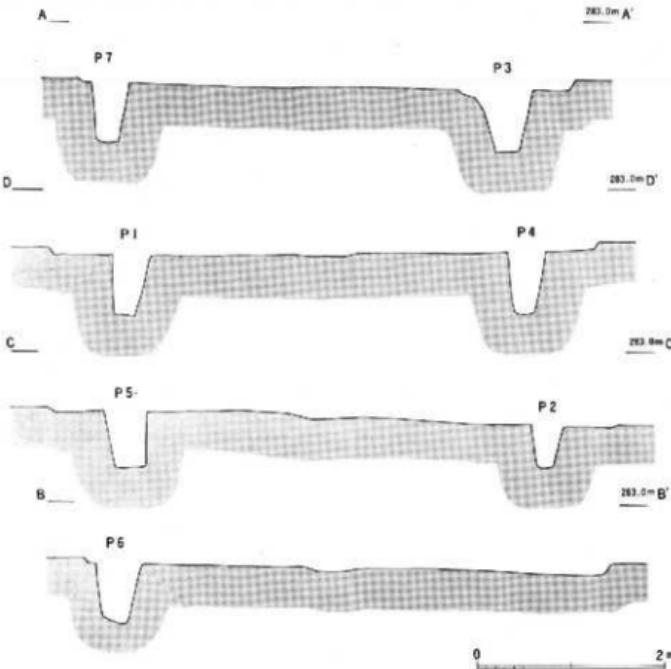
平 面 形		円 形					
規 模		上 面		下 面		床 面 積	
		6. 0 × 5. 4 m		5. 9 × 5. 3 m		約 24. 6 m ²	
壁 高		2 ~ 18 cm					
柱 穴	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
	上面径	40×40	35×35	80×40	40×35	45×40	50×40
	深 さ	64	45	69	64	66	67
(cm)	柱 穴 径			20	20	24	17
	中 央 ピット	上 面 径				深 さ	
		65 × 70 cm				3 cm	



第9図 森遺跡 SI 02出土土器 1~6 (1:4) 7~10 (1:3)

SI 02出土遺物一覧表 ()は現存値

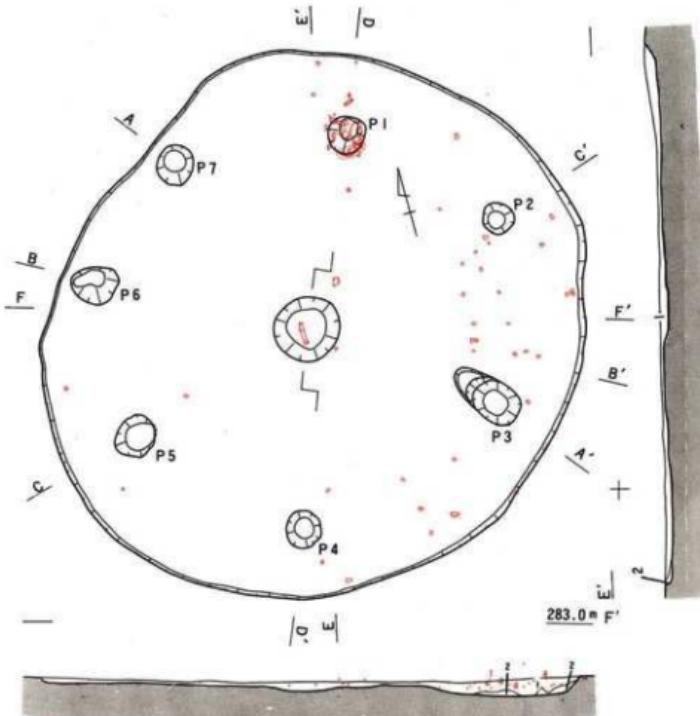
挿図番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口径	器高	底径			
第9図 -1	65	壺	B ₁	23.5	(5.3)		口縁内傾	擬凹線3条 外面 ハケ目+ヨコナデ 内面削り	
-2	65	同上	C ₁	18.2	(2.6)		口縁外傾	擬凹線4条 内面削り	
-3	65	同上	B ₂	12.7	(2.6)		口縁内傾	擬凹線2条 肩部に刺突文 ヨコナデ 無文	
-4	65	同上	D ₂	18.2	(3.45)		内面段なし	外面ミガキ 内面削り	
-5	65	底部			(3.6)	4.9		外面ミガキ 内面削り	
-6	65	底部			(3.35)	7.6		外面ミガキ 内面削り	
-7	65	壺						2枚貝による連続 刺突文 外ナデ 内削り	
-8	65							クシによる刺突文 外ナデ 内削り	
-9	65							ヘラによる刺突文 外ナデ 内削り	
-10	65	壺?						クシ搔沈線 外ハ ケ目 内削り	



第10図 森遺跡 SI 03断面図 (1:60)

SI 03計測表

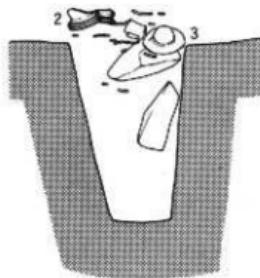
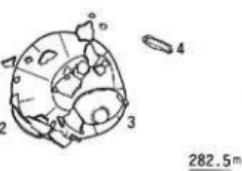
		円形						
規 模		上 面		下 面		床 面 積		
壁 高		6.3 × 6.4 m			6.2 × 6.2 m		約 30.2 m ²	
柱 高 (cm)		8 ~ 17 cm						
柱穴	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
	上面径	55 × 40	40 × 45	45 × 45	40 × 45	55 × 85	45 × 45	45 × 40
	深 さ	56	57	59	63	65	62	65
	柱痕径	22			20		35	25
	中 央	上 面 径			深 さ			
	ピット	100 × 120 cm			23 cm			



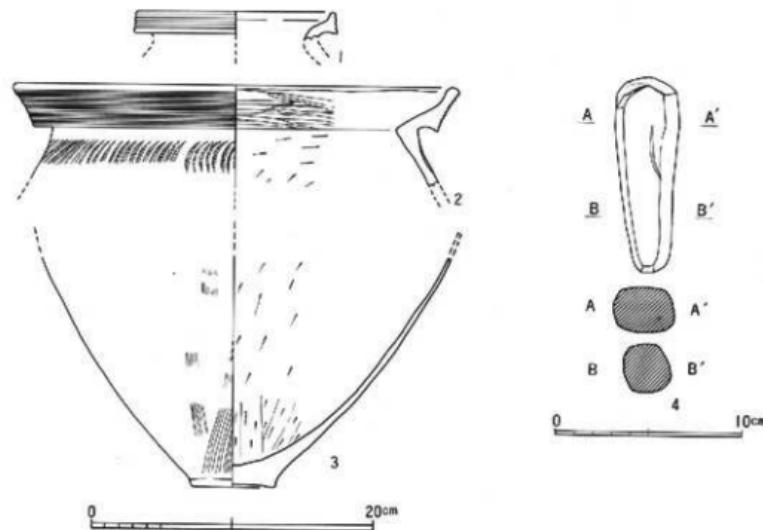
1 喰褐色土
2 灰褐色土

第11図 森遺跡 SI 03実測図 (1:60)

0 2m



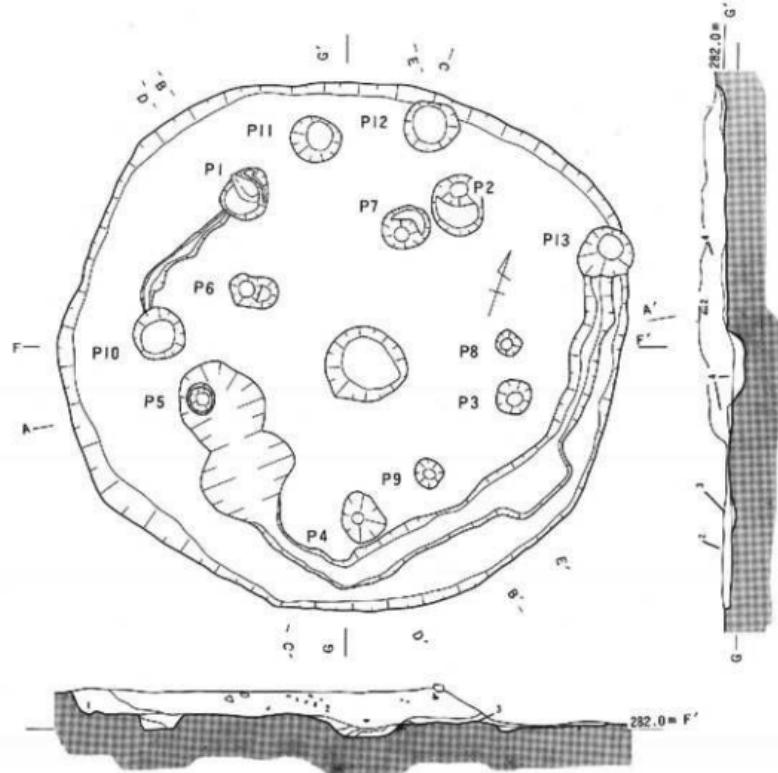
第12図 森遺跡 SI 03遺跡出土状態
(1 : 20)



第13図 森遺跡 SI 03出土土器 1～3 (1:4) 石器4 (1:3)

SI 03出土遺物一覧表 ()は現存値

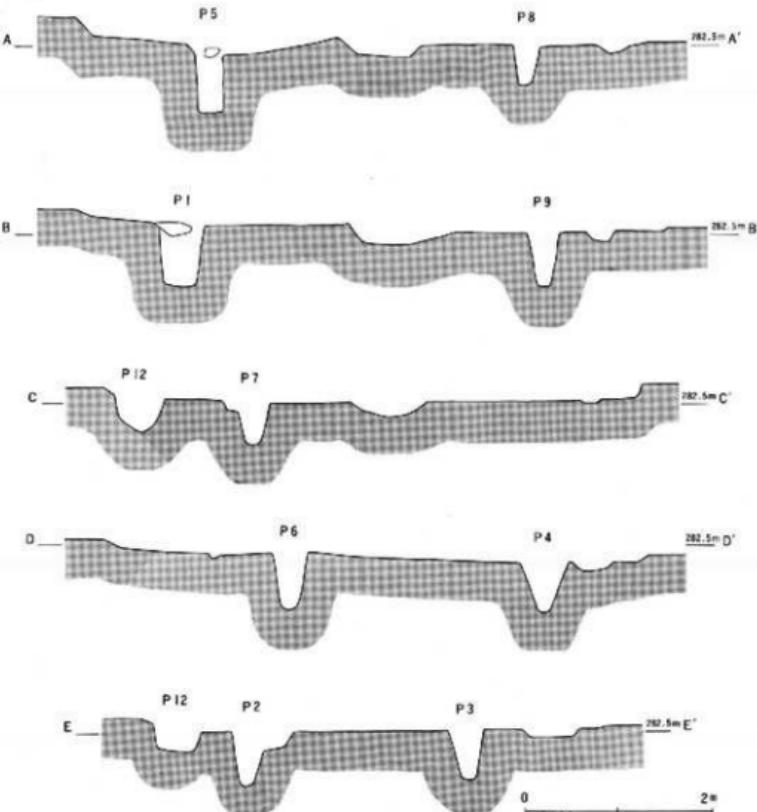
掲出 番号	図版 番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口 径	器 高	底 径			
第13回 —1	67	甕	B ₁	14.2	(1.8)		口縁やや内傾	縦凹線3条 ヨコナデ	
—2	67	同上	C ₁	31.8	(6.8)		口縁外傾	クシ彫沈線11条 2枚貝による刺突 内面ミガキ削り	P1上面出土
—3	66	底部			(16.2)	6.0		外ハケ目+ナデ 内削り	P1上面出土
—4	67	叩石?		長 10.55	幅 3.45	厚 25~26			自然石の可能性あり P1上面出土



第14図 森遺跡 SI 04実測図 (1:60)

SI 04 (第14~16図 図版7) 平面形がほぼ円形で径約6mの大型の竪穴住居跡である。壁際には周溝はみられず、底面は凹凸がある。調査時に底面直上にやや固い層が認められたことから貼り床をしていたと思われる。

底面には計13個のピットが検出され、2棟が重複したものと推定される。P 1~P 5は各柱間が約2.2m、P 6~9は各柱間が約1.7m (P 6~P 9間のピットは落溝と推定) で、ともに円形に並ぶことから2棟の重複と考えた。調査で検出された壁に伴う主柱穴はP 1~P 5と考えられる。床面にはこのほかに幅約10~40cmの浅い溝が壁の内側で検出されたが、これがP 6~P 9を主柱穴とする竪穴住居跡の周溝と推定される。この溝状遺構が竪穴住居跡の周溝とするなら、この竪穴住居

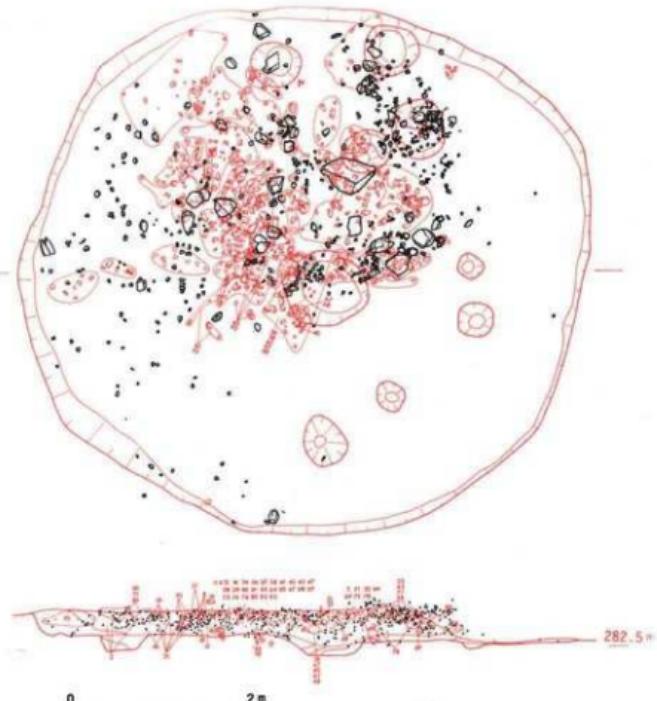


第15図 森遺跡 SI 04断面図 (1:60)

跡は径約5mの円形と思われる。調査時には、この2つの竪穴住居跡の新旧関係を明らかにすることことができなかった。

出土遺物は、住居跡内の上部から下部まで大小の破片がぎっしりと詰まった状態で出土した（第16図 図版7）。また、遺構確認面より高い位置からもかなりの量の遺物が出土しており、遺構の掘り込み面は検出面よりさらに高い位置だったかもしれない。包含層出土土器として後に掲載する赤生土器も大半はこの位置から出土しているが、これらの土器もSI04に伴う可能性は高いと思われる。

住居跡内からは壺A、B₁～B₂、C₁～B₃、D₁、D₂、壺B、碗、磨石または叩き石、砥石などさまざまな種類が出土しているが、どちらの住居跡に伴うかは不明である（第17～21図 図版66～73）。



第16図 森遺跡 SI 04遺物出土状態 (1:60)

SI04計測表

平面形		円形								
規模		上面		下面		床面積				
		5.7 × 6.2 m		5.4 × 6.0 m		約 25.5 m ²				
壁高		2 ~ 24 cm								
周溝		幅 20 ~ 35 cm				深さ 6 ~ 9 cm				
	番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7		
柱穴	上面径	6.0 × 5.0	6.5 × 6.0	4.0 × 4.0	5.5 × 4.0	3.5 × 3.0	5.5 × 3.0	6.0 × 4.5		
	深さ	6.4	6.0	5.4	5.5	6.5	6.4	5.0		
	番号	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14		
(cm)	上面径	3.0 × 3.0	3.5 × 3.0	5.5 × 5.5	5.5 × 5.0	6.0 × 5.0	6.0 × 5.5			
	深さ	4.3	6.2	1.4	1.2	4.0	2.0			
	中央	上面径				深さ				
	ピット	9.0 × 8.0 cm				2.0 cm				

SI04出土遺物一覧表 ()は現存値

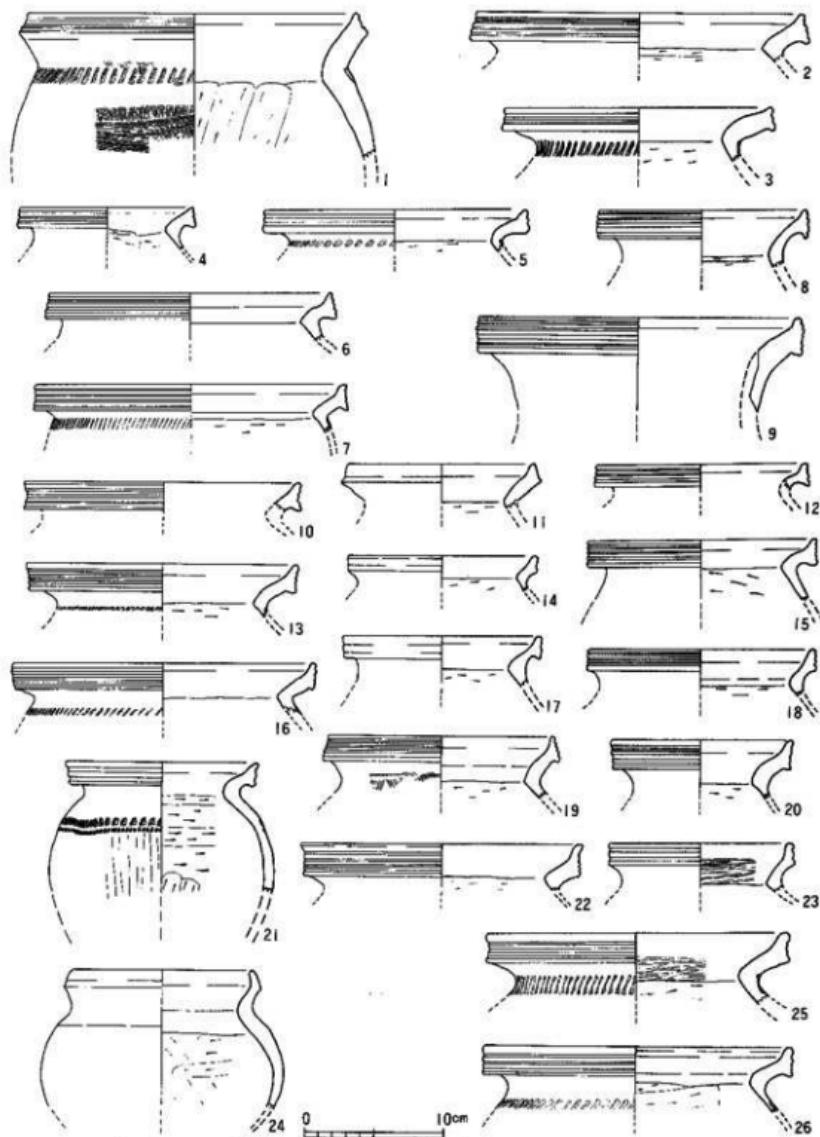
捕獲番号	図版番号	器種	分類	法定量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口徑	縁	高底			
第17回 -1	6.7	甕	A	23.6	(9.85)		頸部外傾	浅い擬凹線3条 クシによる刺突 ハケ目 ケズリ	
-2	6.7	同上	B ₁	23.3	(3.0)		口縁内傾	クシ沈線4条 ケズリ	
-3	6.7	同上	A	19.1	(3.4)		口縁内傾	擬凹線2条 ヘラ刺突 ケズリ	
-4	6.7	同上	B ₁	12.5	(2.85)		口縁内傾	擬凹線3条 ケズリ	
-5	6.7	同上	B ₁	19.0	(2.5)		口縁内傾	擬凹線2条 棒による刺突 ケズリ	
-6	6.7	同上	B ₁	20.2	(3.15)		II縁内傾	擬凹線4条 ケズリ	
-7	6.7	同上	B ₁	22.35	(3.2)		口縁内傾	擬凹線4条 ヘラ 刺突 ケズリ	
-8	6.7	壺	C	14.85	(3.85)		口縁内傾	擬凹線4条 頸内 面ミガキ ケズリ ?	
-9	6.7	壺	C	23.0	(6.7)		口縁直立	擬凹線5条	
-10	6.7	甕	B ₁	19.7	(2.15)			擬凹線4条	
-11	6.7	同上	B ₁	13.45	(2.65)		頸部長い?	無文 ケズリ	

擇区番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)			形 態	文様・手法	備 考
				L径	器高	底径			
-12	6 7	甕	B ₁	15.2	(2.0)		口縁内傾	擬円線3条	
-13	6 7	同上	C ₁	19.4	(3.3)		口縁端短い 外反	クシ沈線4条 ヘラ刺突 ケズリ	
-14	6 8	同上	B ₁	13.45	(2.25)		口縁直立	無文 ケズリ	
-15	6 8	同上	B ₁	16.4	(4.25)		口縁直立	擬円線4条	
-16	6 8	同上	B ₁	21.7	(3.7)		口縁内湾気味に直立	擬凹線4条 2枚貝刺突	
-17	6 8	同上	B ₁	14.2	(3.3)		口縁直立	無文 ケズリ	
-18	6 8	同上	B ₁	16.3	(3.05)		口縁直立	擬凹線3条 ケズリ	
-19	6 8	同上	B ₁	16.2	(4.1)		頭部やや長い 口縁内傾	擬凹線4条 ハケ目 ケズリ	
-20	6 8	同上	B ₁	12.95	(4.0)		頭部やや長い 口縁直立	擬凹線3条	
-21	6 8	同上	B ₁	10.5	(7.0)		口縁外傾	擬凹線2条 クシ刺突2段 ミガキケズリ	
-22	6 8	同上	B ₁	20.15	(3.2)		口縁端外反	擬凹線4条 ケズリ	
-23	6 8	同上	B ₁	13.2	(3.2)		口縁直立	擬凹線2条 ミガキ	
-24	6 8	同上	B ₁	12.9	(9.8)		口縁内傾 脊部 張る	無文 ミガキ ケズリ	鉢の可能性あり
-25	6 8	同上	B ₁	21.75	(4.5)		口縁外反気味に直立	擬凹線3条 ヘラ刺突 ケズリ	
-26	6 8	同上	B ₁	22.35	(4.5)		口縁直立	擬凹線3条 ヘラ刺突 ケズリ	
第18図 -27	6 8	同上	B ₁	21.8	(2.45)		口縁外反気味に直立	擬凹線4条 ケズリ	
-28	6 8	同上	B ₁	17.4	(4.15)		口縁直立	クシ沈線3条 ハケ目 ケズリ	
-29	6 8	同上	B ₁	15.0	(4.1)		口縁直立	擬凹線3条 ケズリ	
-30	6 8	同上	B ₁	23.1	(3.3)		口縁わずかに外傾	擬凹線3条	
-31	6 8	同上	B ₁	12.55	(2.8)		内面段不明瞭	無文 ケズリ	
-32	6 8	同上	B ₁	20.5	(3.7)		内面段不明瞭	擬凹線5条 ヘラ刺突 ケズリ	
-33	6 8	同上	C ₁	11.2	(2.9)			無文 ケズリ	
-34	6 6	同上	C ₁	11.6	(9.05)		口縁短い	クシ沈線? 2枚貝刺突 ナデ カミガキ ケズリ	
-35	6 8	同上	C ₁	16.2	(3.1)		口縁外傾	クシ沈線上をヨコ ナデ	
-36	6 8	同上	C ₁	27.6	(4.5)		口縁直立	擬凹線4条	
-37	6 8	同上	C ₁	17.15	(5.7)		口縁やや外傾 頭部やや長い	擬凹線4条 ケズリ	
-38	6 8	同上	C ₁	17.4	(3.8)		口縁外傾	無文 ケズリ	

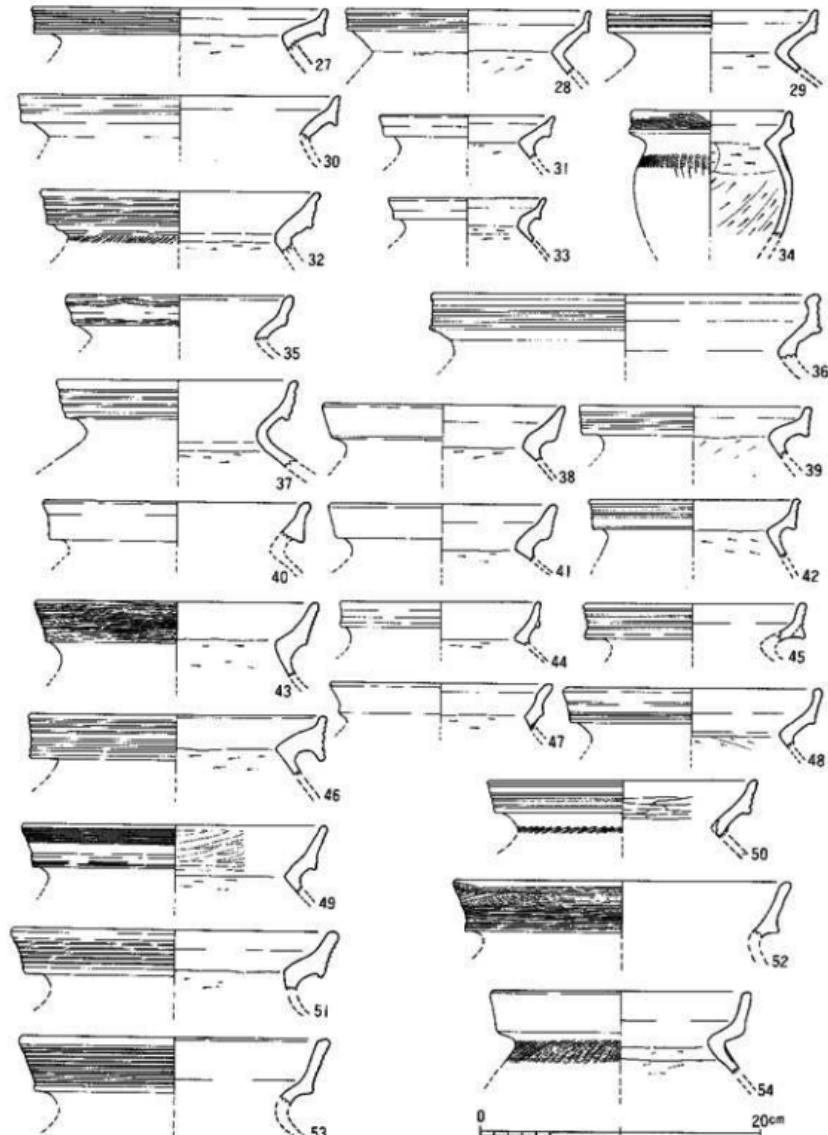
擇図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)		形 態	文様・手 法	備 考
				口 径	器 高			
-39	6 8	甕	B:	16.55	(3.3)	口縁や外傾	擬四線3条	
-40	6 8	同上	C:	19.1	(2.8)	口縁や外反	無文	
-41	6 8	同上	C:	16.4	(3.8)	口縁短く外傾	無文 ケズリ	
-42	6 9	同上	D:	15.1	(3.9)	口縁外反気味に外 傾	擬四線3条 ケズリ	
-43	6 9	同上	C:	20.3	(5.1)	口縁外傾	クシ沈線13条 ケズリ ミガキ?	
-44	6 9	同上	C:	14.3	(3.0)		無文 ケズリ	
-45	6 9	同上	C:	15.95	(2.8)	口縁短い	擬四線4条	
-46	6 9	同上	C:	21.35	(4.1)	口縁直立	クシ沈線6条 ケズリ	
-47	6 9	同上	C:	15.85	(2.9)	口縁外反	無文 ケズリ	
-48	6 9	同上	C:	18.5	(4.0)	口縁外傾	クシ沈線3条+ヨ コナデ ケズリ	
-49	6 9	同上	C:	21.9	(4.4)	口縁外傾	クシ沈線 ミガキ ケズリ	
-50	6 9	同上	C:	19.2	(3.7)	口縁外傾	擬四線4条 ヘラ 刺突 ミガキ	
-51	6 9	同上	C:	23.6	(4.2)	口縁や外反	クシ沈線6条 ケズリ	
-52	6 9	同上	C:	24.15	(5.0)	口縁や外反	クシ沈線22条 ナデ	
-53	6 9	同上	C:	22.3	(4.8)	口縁端平坦面	クシ沈線10条 ヨコナデ	
-54	6 9	同上	C:	18.8	(5.5)	口縁直立	2枚貝連続刺突 ケズリ ヨコナデ	
第19図	6 9	同上	C:	24.6	(4.75)	口縁外傾	頸部ミガキ ケズリ 無文	
							無文 ケズリ	
							ヘラ刺突 ケズリ	
							無文 ケズリ ヨコナデ	
							無文 ヨコナデ ケズリ	
							無文 ヨコナデ ケズリ	
							ヨコナデ	
							クシ刺突 ケズリ ミガキ ヨコナデ	
							ヨコナデ ケズリ	
-63	7 0	同上	D:	21.15	(5.05)	器壁うすい	ヨコナデ ケズリ	
-64	7 0	同上	D:	23.55	(4.5)		ヨコナデ	
-65	7 0	同上	D:	22.85	(6.3)	口縁やや強く外反	ヨコナデ ケズリ	
-66	7 0	同上	D:	18.7	(7.4)	内面段つかない	ヨコナデ ケズリ	
-67	7 0	同上	D:	14.5	(6.7)	口縁外反	ヨコナデ ケズリ	
-68	7 0	同上	D:	15.4	(10.4)	口縁外反	ヨコナデ ケズリ	
-69	6 6	同上	D:	16.1	(8.1)	内面段つかない	ミガキ+ナデ ケズリ	

捕獲番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)		形態	文様・手法	備考
				径	器高			
—70	7 0	甕	D ₂	14.8	(4.9)	内面段つかない	ヨコナデ ケズリ	
第20回 —71	7 0	同上	D ₂	18.0	(4.3)	口縁外反	クシ沈線10条	
—72	7 0	同上	D ₂	22.1	(4.2)	口縁外反	クシ沈線15条 ヨコナデ	
—73	7 0	同上	D ₂	26.0	(9.0)	口縁外反	クシ沈線13条 ヨコナデ ケズリ	
—74	7 0	同上	D ₂	21.4	(3.9)		クシ沈線 8条 ミガキ	
—75	6 6	同上	D ₂	14.0	(7.5)		クシ波状文 直線文 ヨコナデ ケズリ	
—76	6 6	同上	D ₂	17.8	(5.9)	穢純い	無文 ヨコナデ ケズリ	
—77	7 3	同上	D ₂	17.5	(17.5)		クシ直線文 波状文 ヨコナデ ハケ目 下半ミガキ	
—78	6 6	壺	D ₂	13.35	(10.1)		クシ直線文 波状文 ケズリ	
—79	7 0	甕	D ₂	19.4	(4.2)		無文 ヨコナデ	
—80	7 0	胴部		13.5	(9.0)		クシ刺突 ヘラ沈線 ナデ ケズリ	
—81	7 0	底部		(2.5)	7.0	やや凹み底	ハケ目 ケズリ	
—82	7 1	同上		(2.4)	4.65	やや凹み底	ミガキ ケズリ	
—83	7 1	同上		(1.4)	6.2	平底	ナデ ケズリ	
—84	7 1	同上		(2.5)	8.2	平底	ナデ ミガキ	
—85	7 1	同上		(2.75)	6.75	やや凹み底	ミガキ ケズリ	
—86	7 1	同上		(5.0)	3.8	平底	ミガキ+ナデ ケズリ	
—87	7 0	同上		(2.4)	6.1	平底	ナデ ケズリ	
—88	7 1	同上		(2.3)	40.5	平底	ハケ目+ナデ ケズリ	
—89	7 1	同上	最大径 22.6	(13.1)	3.9	やや凹み底	ミガキ ケズリ	底部穿孔(焼成後)
—90	7 1	同上		(3.1)	5.8	平底	ナデ ケズリ	
—91	7 1	同上		(6.5)	5.2	平底	ハケ目 ミガキ ケズリ	
第21回 —92	7 1	壺	B	11.8	(4.3)		ケズリ	
—93	7 1	碗?		11.05	(1.9)	外頬	ヨコナデ ケズリ	
—94	7 1	壺?					ヘラ沈線 ヨコナデ ケズリ	赤色塗彩
—95	7 1	壺?					太い沈線 ヨコナデ	
—96	7 1						2枚貝による有輪 羽状文 ナデ ケズリ	

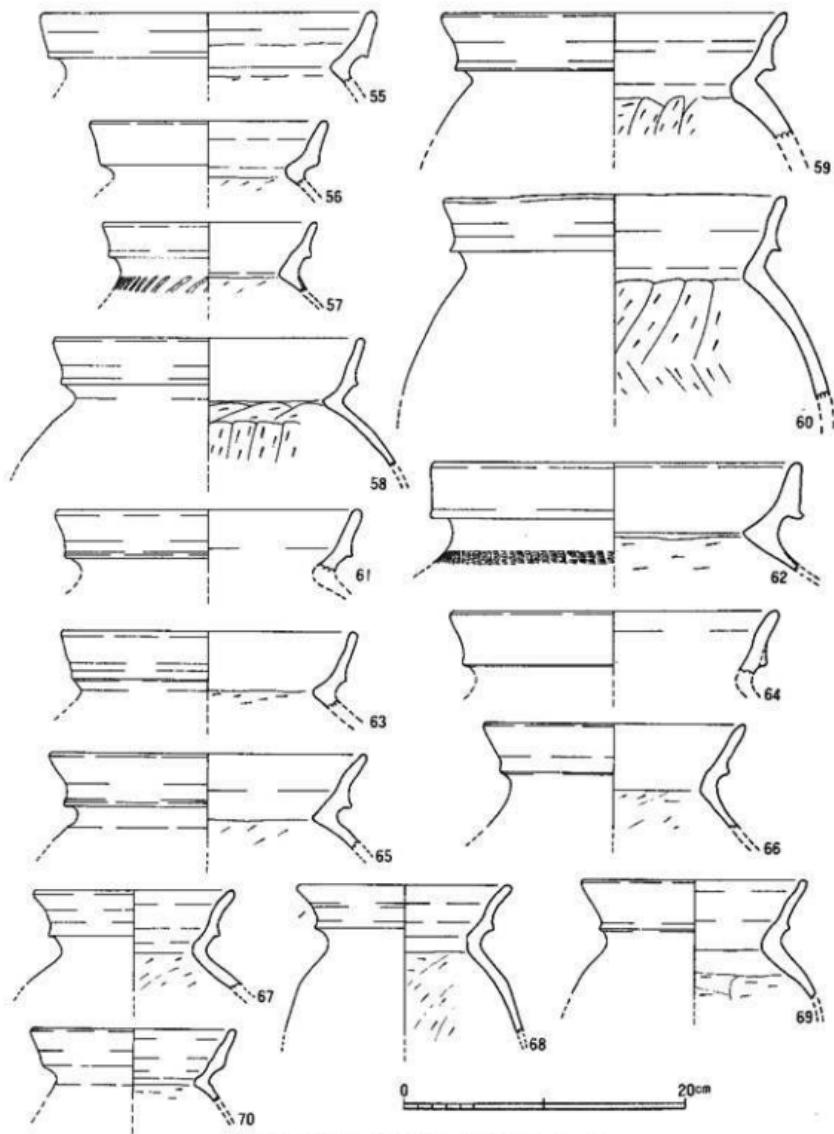
標印番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)				形態	文様・手法	備考
				口	径	器高	底径			
-97	71								2枚貝による刺突 ヨコナデ ケズリ	
-98	71								2枚貝による有輪 羽状文 ハケ目 ケズリ	
-99	71								直線文 刺突文 (ヘラ?) ケズリ	
-100	71								羽状文 (ヘラ) ケズリ	
-101	71								爪形の刺突文 2段 ナデ	
-102	71								クシ刺突 ナデ ケズリ	
-103	71								刺突 2段 ケズリ	
-104	71								刺突 2段 (貝?) ケズリ	
-105	71								刺突 2段 (棒) ナデ ケズリ	
-106	72								2枚貝刺突 ナデ ケズリ	
-107	72								2枚貝押引き状の 刺突 ミガキ ケズリ	
-108	72								ヘラ刺突 2段 ケズリ	
-109	72								2枚貝刺突 波状 文 ケズリ	
-110	72								2枚貝刺突 ナデ ケズリ	
-111	72								2枚貝押引き状刺 突 ケズリ	
-112	72								2枚貝? 押引き状 の刺突 ナデ ケズリ	
-113	72	磨石	長 8.4	幅 8.1	厚 4.5					下端と両面中央に 打痕
-114		磨石	長 15.4	幅 11.1	厚 4.7					表面にスス状の黒 色物
-115	72	磨石	長 8.2	幅 6.8	厚 4.2					周縁に打痕
-116	72	磨石	長 (7.8)	幅 8.3	厚 2.5					下端に打痕 他の 面は平滑
-117	72	砥石	長 (8.5)	幅 2.9	厚 14~49		両面に凹面			全面擦痕多い



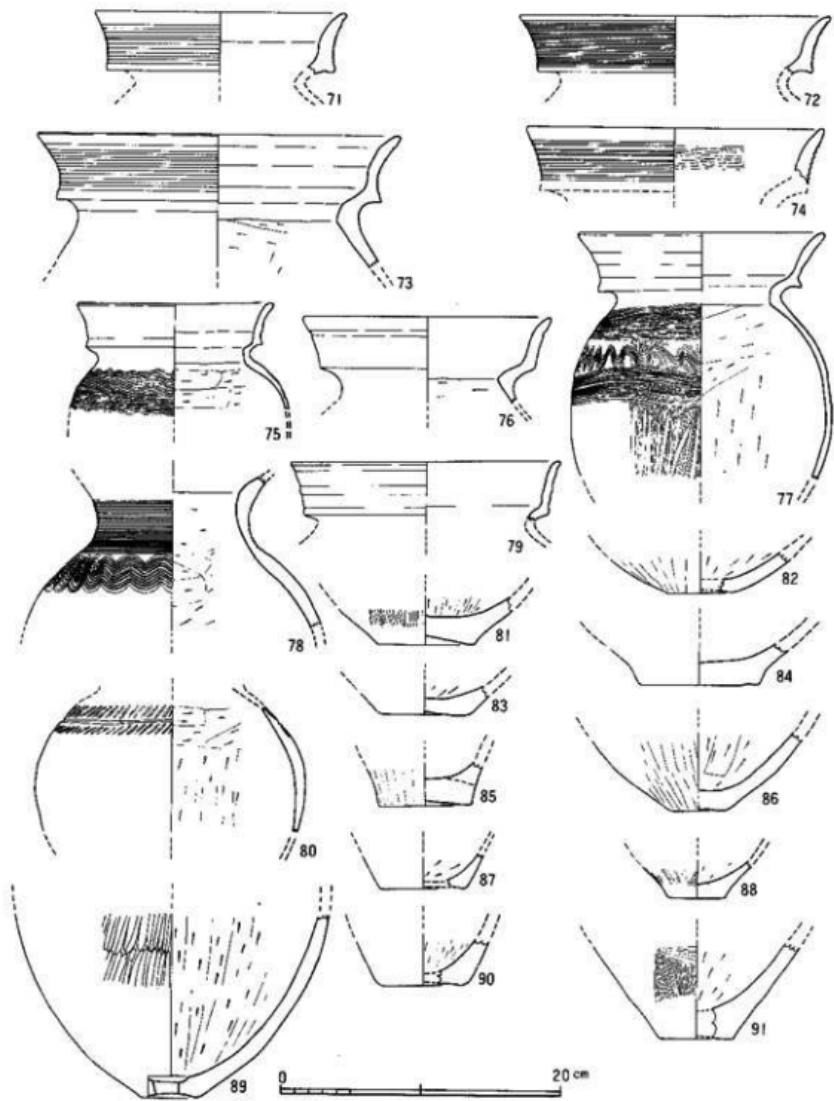
第17図 森遺跡 SI 04出土土器 (1) (1:4)



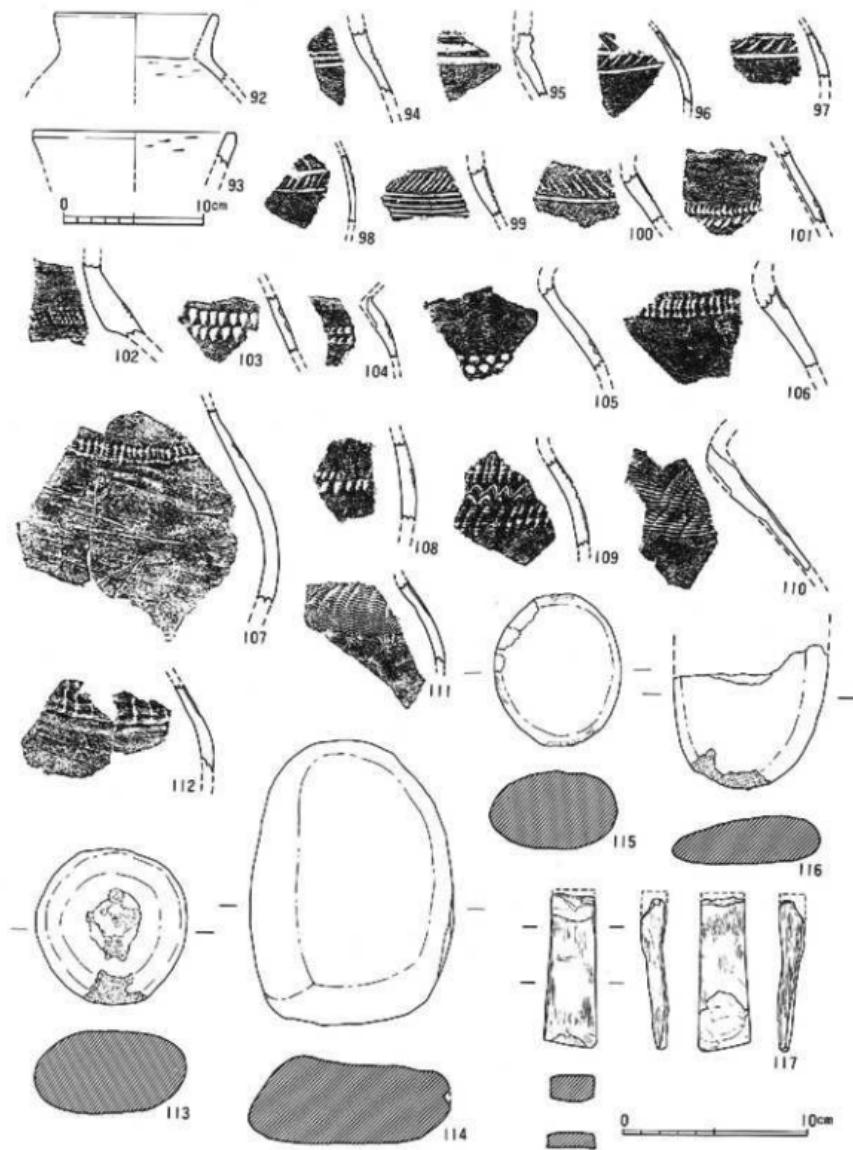
第18図 森遺跡 SI04出土土器 (2) (1 : 4)



第19図 森遺跡 SI 04出土土器 (3) (1 : 4)

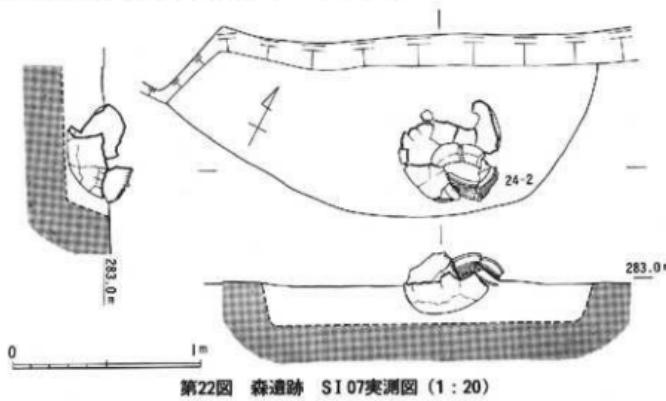


第20図 森遺跡 SI 04出土器 (4) (1:4)

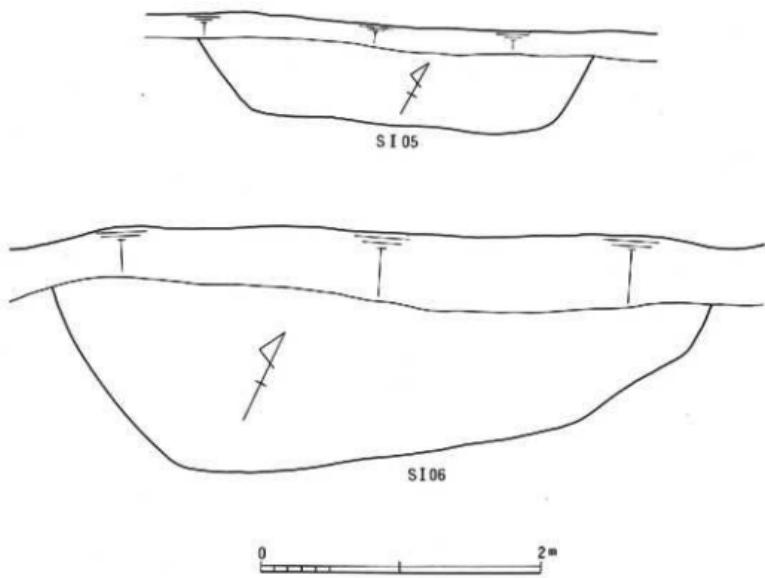


第21図 森遺跡 SI 04出土土器 (5)・石器 92・93 (1:4) 94~117 (1:3)

SI 05~07(第22、23図 図版8) 調査区の北端で一部を確認した。平面形は円形と思われ、SI 07の検出面からの深さは30cm以上であった。いずれの住居跡も工事対象外であったため、平面プランを確認し上面に出土した遺物を取り上げるだけの調査にとどめた。

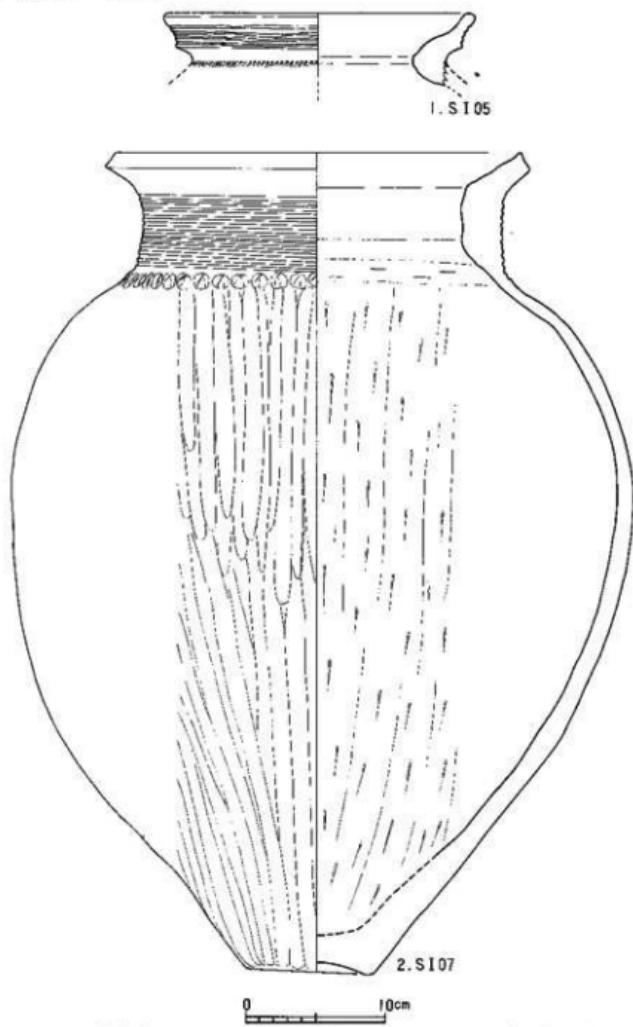


第22図 森遺跡 SI 07実測図 (1:20)

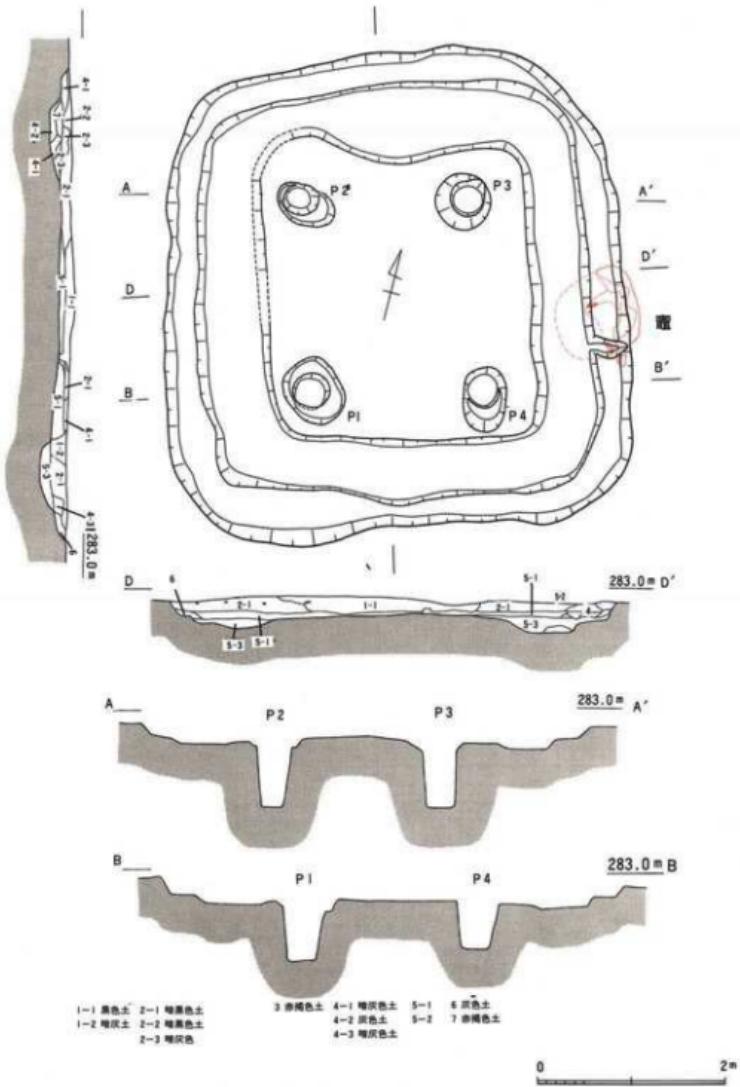


第23図 森遺跡 SI 05、06実測図 (1:20)

出土遺物はSI07が甕A、SI05が甕Cである（第24図 図版73）。ともに口縁部には擬凹線（1が4条、2が11条）が、肩部には刺突文が施される。第24図1が口径22.5cm、2が口径29cm、底径9.1cm、器高58.1cmを測る。



第24図 森遺跡 SI05、07出土土器（1 SI05、2 SI07）（1:4）



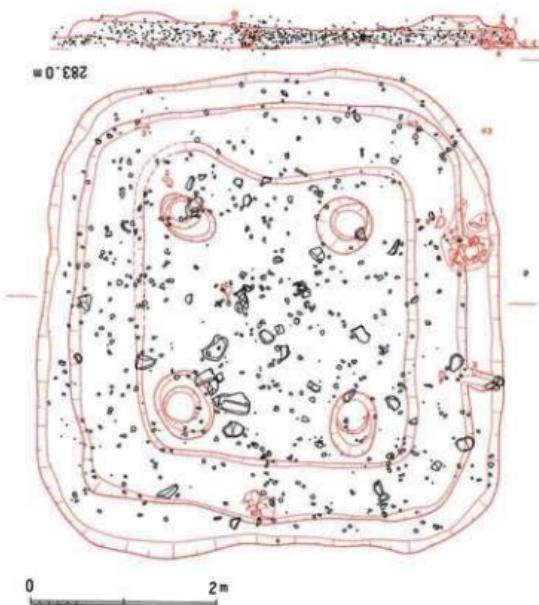
第25図 森遺跡 SI 08実測図 (1:60)

古墳時代末から奈良時代
の竪穴住居跡

SI 08 (第25~27図 図版9、
10) 平面形隅丸方形で一片約
5mを測る竪穴住居跡である。
底面には凹凸があるが、地山よ
り5cmほど高い位置で覆土がや
や固く締まっていたことから貼
り床をして床面としていたと思
われる。

東側の壁にはやや南に寄って
竈が造り付けられていた (第27
図 図版9)。竈の部分には粘
土塊があつただけで、石組みな
どは検出できなかった。

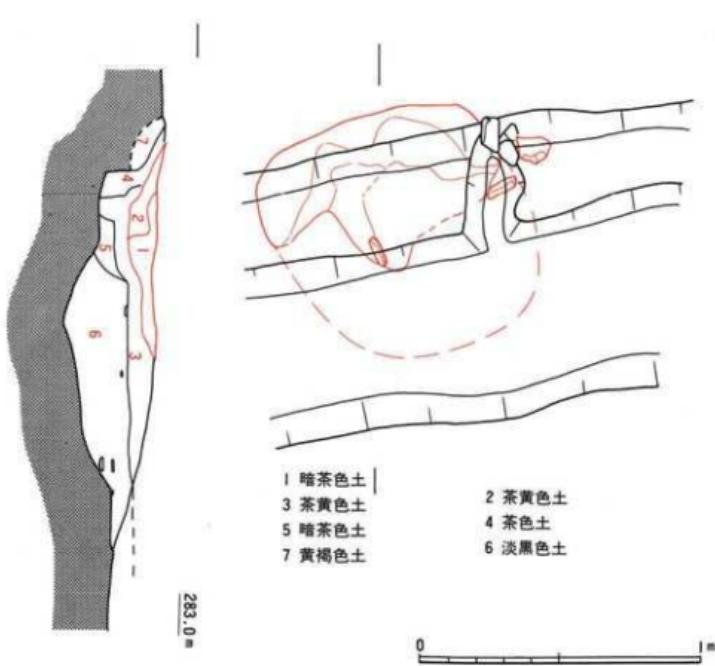
周溝および柱穴は貼り床を除
去した段階で確認された。周溝
は壁の内側で検出され、壁と周



第26図 森遺跡 SI 08遺物出土状態 (1:60)

SI 08出土遺物一覧表

捕図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量 (cm)			形 態	文様・手 法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第28図 -1	74	須恵器 蓋	A ₁	12.3	4.5		器高い	縦上部に沈線 ヘラ切り後回転ヘ ラ削り	
-2	74	須恵器 杯	A	11.2	4.0	6.7		ヘラ切り後ナデ	
-3	74	土師器 杯	A	13.6	(4.3)			ケズリ+ナデ	
-4	74	同上	A	14.4	(5.5)			ハケ目+ナデ	
-5	74	土師器 把手	長 幅 厚	8	5.2	4.3		接合痕明瞭	
-6	74	土師器 甕	A	15.2	(2.3)		口縁うすい	ヨコナデ	
-7	74	同上	A ₁	21.3	(6.0)			口縁内外ハケ目+ ナデ 脇部ハケ目	
-8	74	同上	A ₁	16.4	(11.0)			脇部ナデ	
-9	75	同上	A ₁	18.8	28.0			脇部ハケ目	
-10	75	同上	A ₁	16.7	(29.7)		口縁端玉縁状	脇部ハケ目	



第27図 森遺跡 SI 08竪実測図 (1:20) 赤は粘土

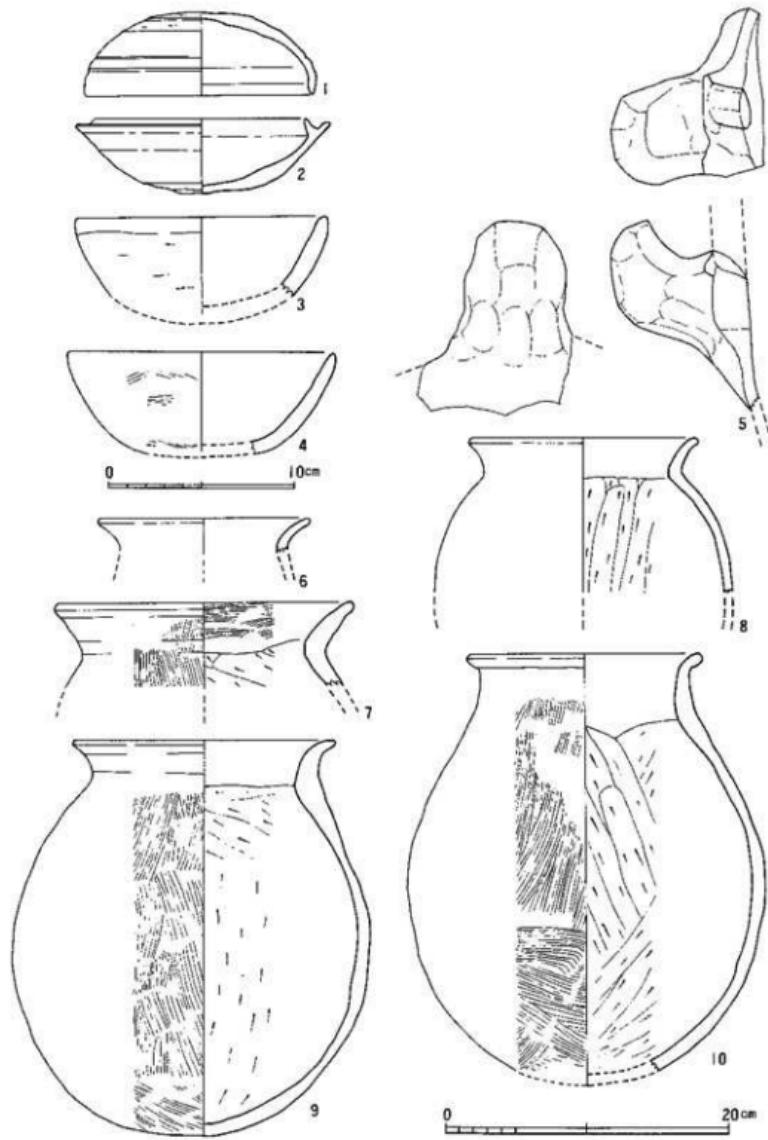
溝の間には幅約20cmのテラスができている。周溝の幅は60~80cmとかなり広い。主柱穴は4本で周溝の内側で検出された。柱間はP 2 - 3、P 1 - 4間が約1.8m、P 1 - 2、P 3 - 4間が約2.2mと平面形が長方形になるように配されている。

出土遺物は住居跡内全面から出土したが、貼り床より高い位置での出土が多く貼り床の下からはSI 08計測表

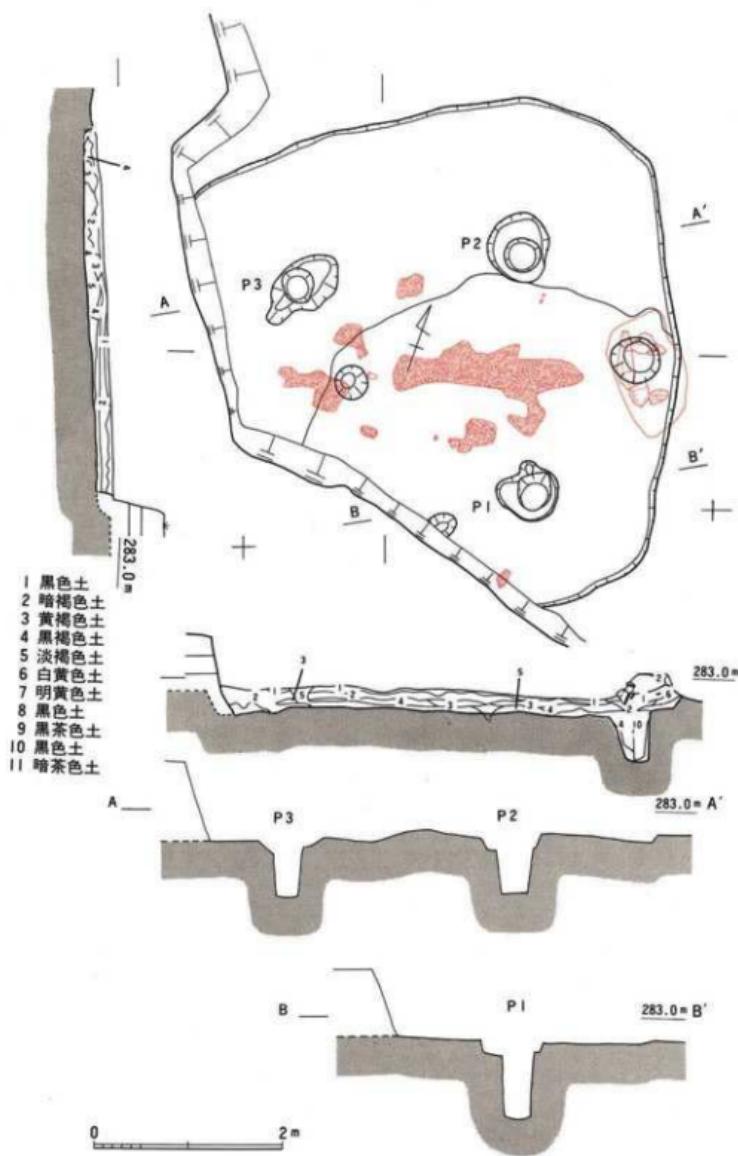
平 面 形		構 丸 方 形			
規 模		上 面	下 面	床面積	
		5.0×5.1m	4.7×4.8m	約 9 m ²	
主 軸		N-72°-E			
壁 高		3 ~ 1 3 cm			
竪 の 位 置	東壁南寄り				
周 溝 幅	60~70cm				深さ 6~21cm
柱 穴	番 号	P 1	P 2	P 3	P 4
(cm)	上 面 径	70×60	70×35	60×60	50×70
	深 さ	64	75	72	51
	柱 痕 径			25	10?
柱 間 距 離	(m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-1
		2.1	1.8	2.0	1.8

あまり出土していない(第26図 図版10)。須恵器蓋A₁、坏A₁、土師器坏A、甕A₁、A₃、A₄、把手が出土している。(第28図 図版74~75)。

出土遺物のうち、第28図1、2の蓋坏から、SI 08は6世紀末~7世紀初頭の時期と考えられる。



第28図 森遺跡 SI 08出土土器 1~5 (1:3) 6~10 (1:4)



第29図 森遺跡 SI 09実測図 (1:60) 網目は炭化物

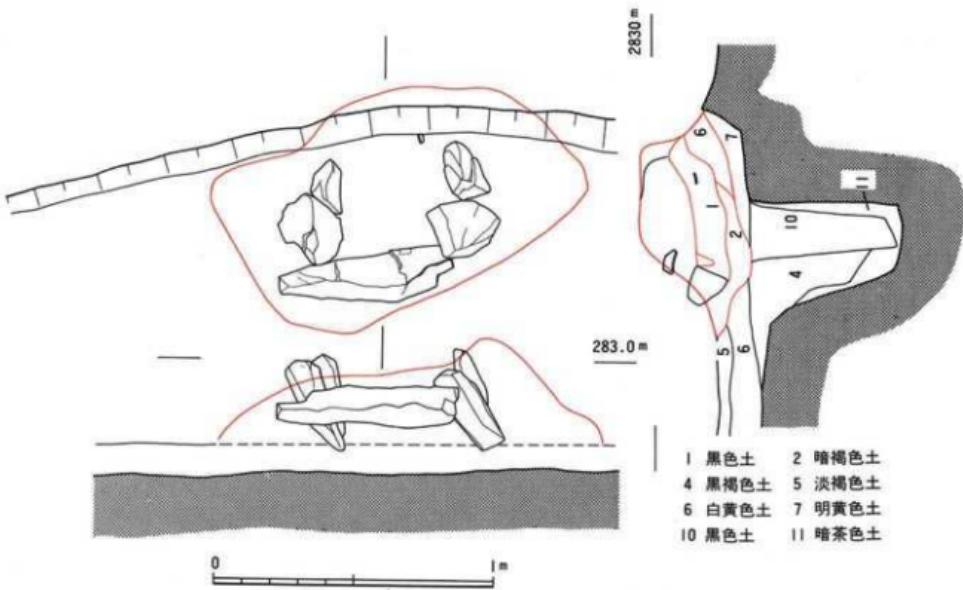
SI 09 (第29~31図 図版11~15) 平面形隅丸方形で一片約5mを測る竪穴住居跡である。西壁および南壁の一部は調査区域外のため未発掘である。残存度は悪く、壁高は5cm~10cm残る程度である。床は南半分を中心に貼り床をしているようで、地山から5cmほど高い位置で覆土がやや固くなっていた。

東壁のほぼ中央には竈が造り付けられていた (第30図 図版14、15)。竈の構造は焚き口に柱状の石を片側に2個ずつ立てて側壁とし、細長い石をその上に架けていたと思われる (上部の石は住居跡内側に転落した状態で出土)。焚き口の幅は約35cmである。これらの石組を骨格とし、その周囲を粘土で覆っていたと思われ、竈部分からは全面に粘土が出土した。

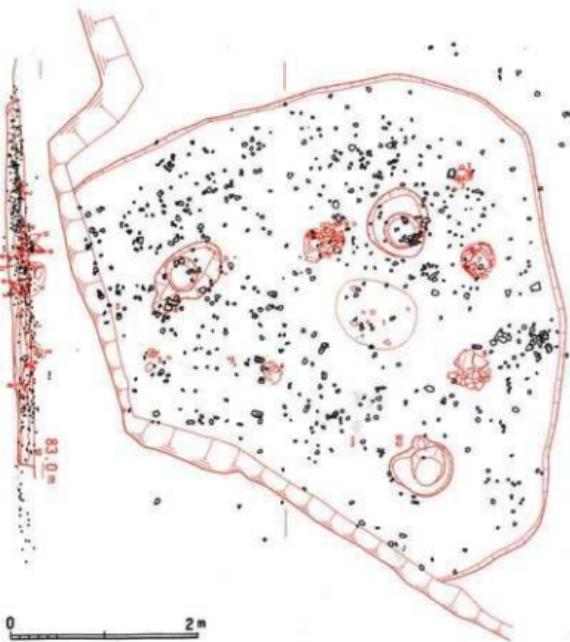
周溝は地山面では検出できなかった。

柱穴は貼り床を除去し、地山面に達した時点で確認された。主柱穴はP 1~3で、未発掘の部分にさらにもう1個柱穴の存在が予想され、SI 09は4本柱の竪穴住居跡と考えられる。P 1~P 3は柱間が約2.5mで等間隔である。いずれの柱穴も深くしっかりしたものである。

竈の直下ではさらに1個のピットが検出された (P 4)。土層の観察では柱痕と考えられる層があることから、これも柱穴であると思われる。しかし、層位的にはP 4を埋めて貼り床を貼った後



第30図 森遺跡 SI 09竈実測図 (1:20) 赤は粘土

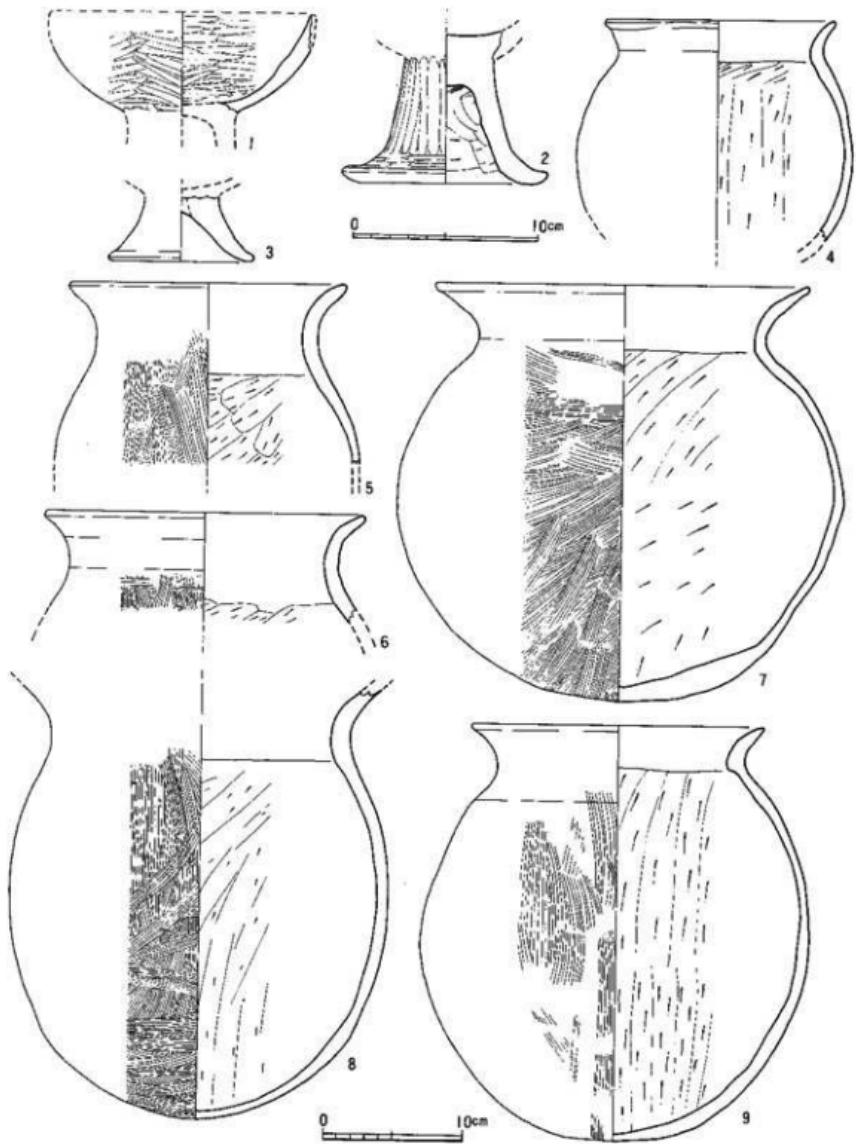


第31図 森遺跡 SI 09遺物出土状態 (1 : 60)

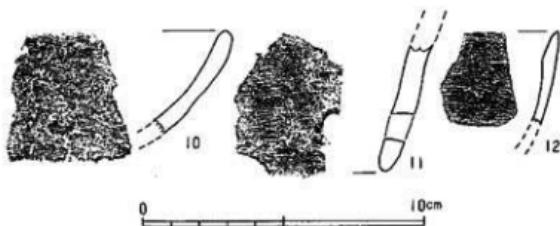
に窓が作られているのは明らかで、このピットがSI 09のなかでどのように機能していたのか不明である。P 4がSI 09と全く関係がない可能性もあるが、この周囲に同規模のピットがないことから、他の竪穴住居跡または掘立柱建物と重複しているとは考えにくく、P 4はSI 09に伴うものと考えたい。

遺物はほとんどが貼り床より高い位置から出土し、貼り床以下からの出土は少ない(図版13)。出土遺物は土師器高坏、土師器甕A₁、A₄、A₆、土師器坏、土師器甕などがある(第32、33図 図版75、76)。また、P 4からは鉄滓が1個出土した(図版76)。

出土遺物のうち、第32図1、2の高坏から、SI 09はつぎのSI 10とほぼ同じ時期と考えられる。



第32図 森遺跡 SI 09出土土器 (1) 1~3 (1:3) 4~9 (1:4)



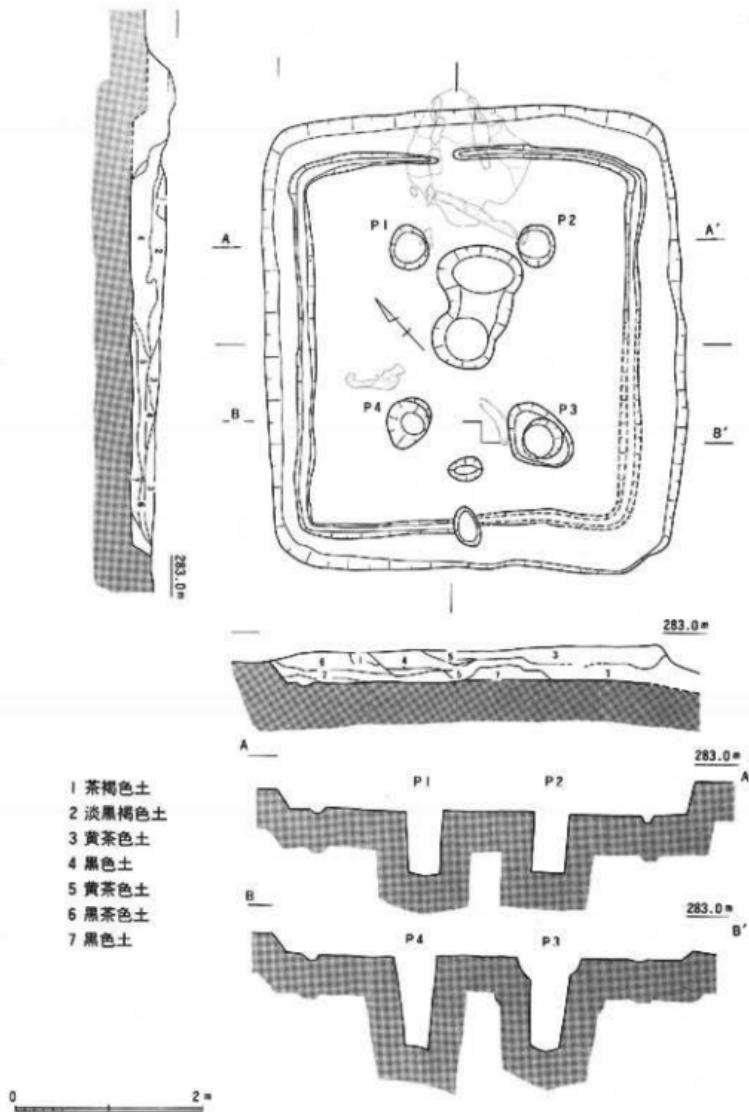
第33図 森遺跡 SI 09出土器 (2) (1:2)

SI 09計測表

規 模	両 丸 方 形				
	上 面	下 面	床 面 溝		
	5.4 × 4.8 + α m	5.3 × 4.7 + α m	約 11.3 + α m ²		
主 軸	N-63°-E				
壁 高	3 ~ 24 cm				
座 の 位 置	東 墓 中 央				
	P 1	P 2	P 3	P 4	
柱穴 (cm)	上面径 深さ	7.0 × 6.0 8.5	7.0 × 8.0 6.7	9.5 × 5.5 6.3	7.0 × 13.0 1.5
	柱底径	1.7	1.6	1.6	3.0
柱 間 距 離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-1	
	2.5	2.4	3.8	1.9	

SI 09出土遺物一覧表

捕獲番号	図版番号	器種	分類	法 量 (cm)			形 態	文様・手法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第32図 -1	7 6	土師器 高 环		14.0	(3.5)			雜なミガキ	
-2	7 5	同上			(8.2)	11.1		ミガキ	底部上端は塞がる
-3	7 6	土師器 低 环			3.5	8.0	拵広がりに大きく 開く	ヨコナデ	
-4	7 5	土師器 壺	A+	16.4	(15.7)		口縁短い	胴部ナデ	
-5	7 6	同上	A+	20.0	12.8			胴部ハケ目	
-6	7 6	同上	A+	23.1	(7.8)			胴部ハケ目	
-7	7 5	同上	A+	26.7	29.6			胴部ハケ目	
-8	7 5	同上	A+	(25.8)	(31.0)			胴部ハケ目	
-9	7 5	同上	A+	21.0	29.5		口縁短い	胴部ハケ目 下半 ハケ目+ナデ	
第33図 -10	7 6	土師器 高环?						ナデ?	全面風化
-11	7 6	土師器 壺						外面ナデ 内面ケ ズリ	円孔
-12	7 6	土師器 环						ヨコナデ 粗いミ ガキ	

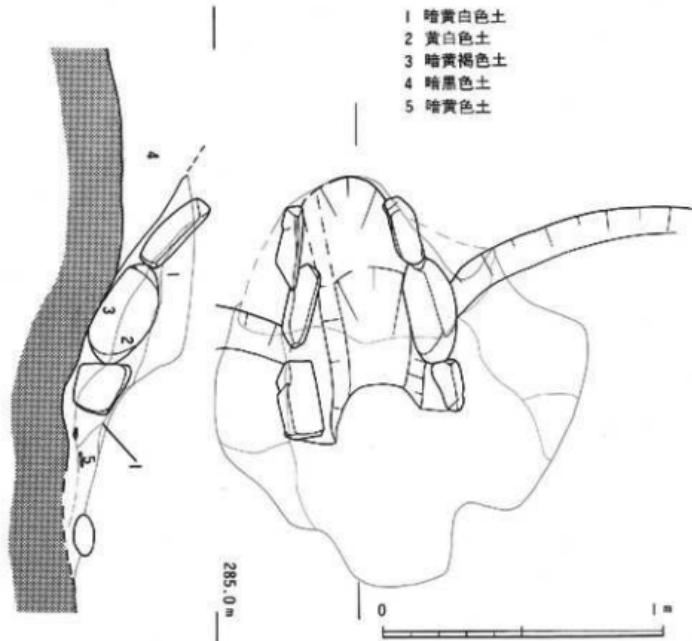


第34図 森遺跡 SI 10実測図 (1:60) 赤は粘土、炭化物

SI 10 (第34~40図 図版15~21) 平面形がほぼ方形の竪穴住居跡で、一片約4.5mを測る。底面はほぼ水平で、貼り床は確認できなかった。この住居跡は非常に残りがよく、最も残りがよいところで壁高35cmを測る。北東壁の中央には竈が造り付けられているが、それに続く煙道が検出面より高い位置までのびることから、本遺跡で検出された住居跡は検出面である地山よりもっと高い位置（黒色土層中 - 調査時は遺物包含層として除去）から掘りこまれたことが判明した(図版18)。

この住居跡の覆土中には小さなもので拳大、大きいものでは50cmを超える石が多く混入していた(第36図 図版16)。これらの石は北の隅にもっとも集中し、南西および北西に向かって次第に減少していた。P 3の中にも同様な石が入っていたことから(第37図 図版17)考へると、これらの石はSI 10廃絶直後(さほど住居跡内に覆土が堆積しない時期)に北東隅から投げ込まれたように思われた。また、石および覆土除去後の床面には建築部材と考えられる板状、柱状の炭化物が残っており(図版16)、この住居跡は焼失したものと推定された。

竈は北東壁のほぼ中央に造り付けられていた。焚き口には板状の石を両側に立て、それに連ねるように細長い石を横位に置き、上外方に向けて煙道が作られている(第35図 図版18、19)。これ



第35図 森遺跡 SI 10竈実測図 (1:20) 赤は粘土

らの石を骨格とし、さらに周囲を粘土で覆っていたようだ。石の周囲には粘土が多く検出された。SI 17、20などの竈をみると本来は焚き口の石の上には細長い石を架けていたと思われる。焚き口の幅は45cmである。

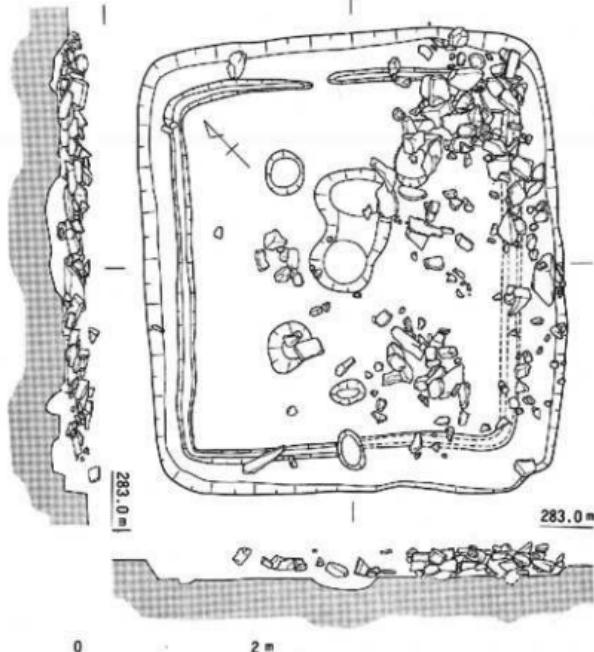
床面では周溝、主柱穴、中央ピットなどが検出された。周溝は壁の内側で検出され、壁と周溝の間には幅約30～40cmのテラスができる。周溝の幅は10～15cmと狭い。この周溝は一周せず、竈付近で途切れている。

主柱穴は4本で周溝の内側で検出された。いずれも深くしっかりしたもので、P1-P2、P3-P4間がP2-P3、P1-P4間よりやや狭く平面形が長方形である。

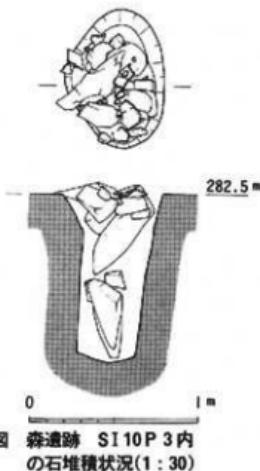
中央ピットは、平面形が不整橢円形で、深さ約15cmと柱穴に比べ非常に浅い。

出土遺物は住居跡内全面から大量に出土したが、とくに第39、40図(図版20、21)に示した床面直上の土器の出土状態が注目できる。第41図の土器はSI 10の西隅から集積した状態で出土した(第40図 図版20)。この集積は須恵器蓋A、土師器壺A、D、F、土師器高杯の計13個で、いずれも伏せられた状態であった。

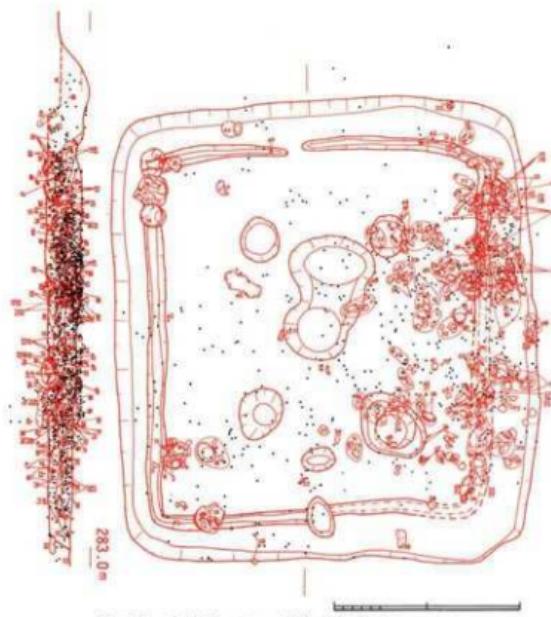
支えがなしにこの状態に土器を置くのはほとんど不可能で、本来



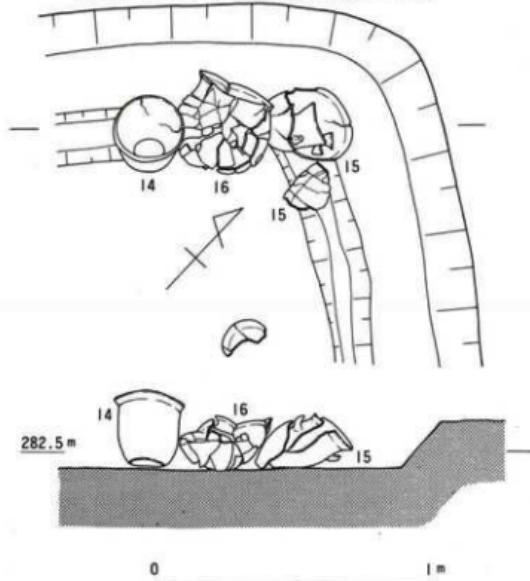
第36図 森遺跡 SI 10石検出状況 (1:60)



第37図 森遺跡 SI 10 P 3内の石堆積状況(1:30)



第38図 森遺跡 SI 10遺物出土状態 (1 : 60)



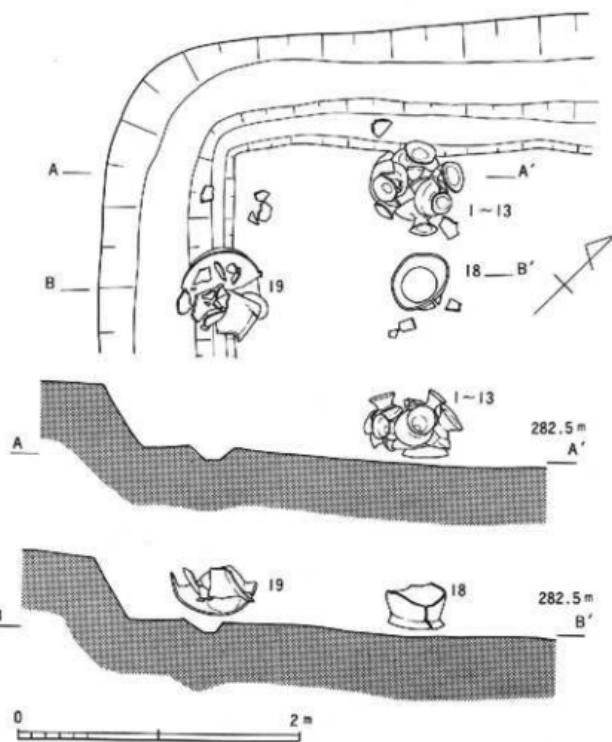
第39図 森遺跡 SI 10遺物出土状態 (1 : 20)

はかごまたは網など有機質の入れ物に入れられていたものが、入れ物の腐食によってこのような出土状態になったと思われる。

第42図14～16は北の隅から、16が14と15に挟まれて一列に並んだ状態で出土した（第39図 図版21）。これらは15と16が土圧によって潰れていたものの、いずれも完形に復元することができ、本来は正位に置かれていたものと思われる。

また、第42図17～19は原位置とはいえないが、床面直上での出土であった。出土遺物は須恵器蓋A、須恵器坏A、須恵器高环A、須恵器壺、土師器坏A、B、C、D、F、土師器壺A、～6、土師器把手付き壺、土師器高环、土師器壺、砥石、鉄器（小刀か）などがある（第41～47図 図版77～85）。このうち特に注目できるのは、大和からの搬入土器と考えられる第41図3の土師器坏Fである（図版77）。

この土師器坏が飛鳥Ⅱ式



第40図 森遺跡 SI 10遺物出土状態 (1 : 20)

SI 10計測表

平 面 形		隅 丸 方 形			
規 模		上 面	下 面	床 面 積	
		4.9 × 4.5 m	4.6 × 4.2 m	約 12.4 m ²	
主 軸		N-44°-E			
壁 高		7 ~ 24 cm			
電 の 位 置		北 東 壁 中 央			
周 溝		幅 10 ~ 20 cm 深さ 2 ~ 7 cm			
柱 穴		P 1	P 2	P 3	P 4
上 面 径 (cm)	40 × 50	40 × 45	80 × 60	45 × 60	
深 さ	73	70	100	101	
柱 痕 像	25				25
柱 間 距 離 (m)		P1-2	P2-3	P3-4	P4-1
		1.35	2.1	1.4	1.9

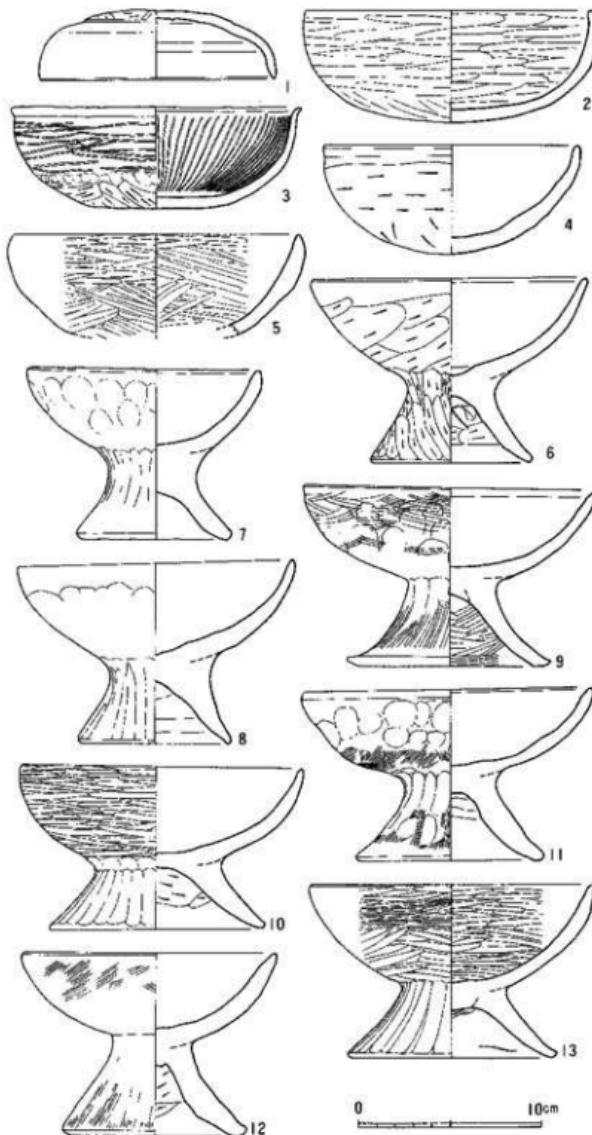
とされることや須恵器から、S I 10は7世紀初頭頃と思われる。

S I 10出土遺物一覧表 () は現存値

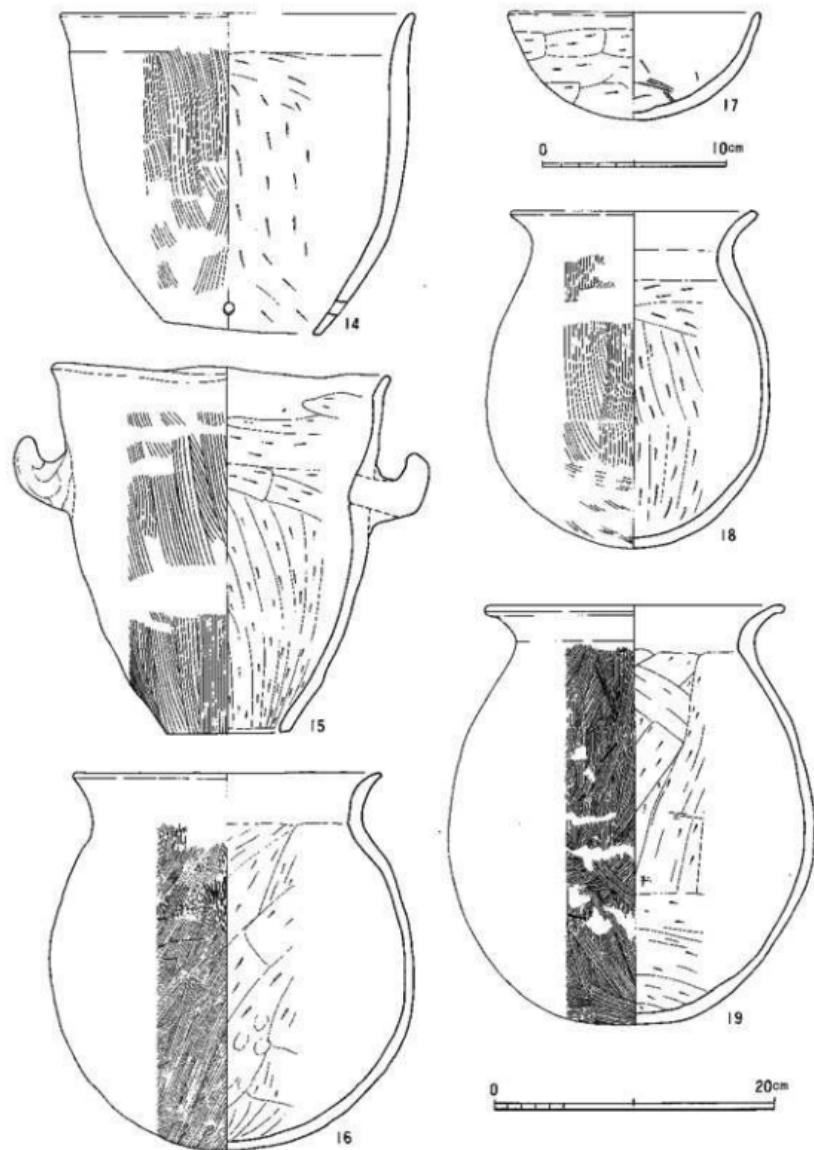
拂図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)			形 態	文 様・手 法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第41図 -1	7 7	須恵器 蓋	A ₁	12.8	3.8			ヘラ切り後静止 ヘラ削り	床面上器集積内で 出土(第40図)
-2	7 7	土師器 环	D	15.7	6.0			ミガキ	同上 赤色塗彩
-3	7 7	同上	F	15.7	5.5		口縁部わずかに外 反	ミガキ ケズリ 放射状略文	同上 大和産(飛 鳥Ⅱ)
-4	7 7	同上	A	14.0	5.9			外面ケズリ	床面上直上で集積 (第40図)
-5	7 9	土師器 高 坏		16.1	(5.4)			ミガキ	同上 赤色塗彩
-6	7 7	同上		15.0	10.0	8.8	脚やや低い	外面ケズリ	床面上直上で集積 (第40図)
-7	7 7	同上		12.8	9.2	8.5	同 上	脚ケズリ	同上 赤色塗彩?
-8	7 7	同上		15.1	9.8	8.4	同上 脚端部うす い	外面雜なミガキ	床面上直上で集積 (第40図)
-9	7 7	同上		16.0	9.7	11.1	同 上	ハケ目 雜なミガ キ	同上 赤色塗彩
-10	7 8	同上		15.4	8.8	11.8	脚低く大きく広が る	ミガキ 脚内ケズ リ	同 上
-11		同上		15.8	9.2	10.3		ハケ目 ミガキ	同上 赤色塗彩
-12	7 8	同上		13.9	9.9	10.1		ハケ目 ナデ	同上 赤色塗彩
-13	7 8	同上		15.6	9.4	11.4		ミガキ	同上 赤色塗彩
第42図 -14	7 8	土師器 瓶		25.4	22.5	11.2	把手なし	脚部ハケ目	二方に円孔 床面 直上(第39図)
-15	7 8	同上		24.1	26.1	8.9	把手付 底部端面 取	脚部ハケ目	床面上直上 (第39図)
-16	7 8	土師器 壺	A ₁	22.2	26.9		口縁やや長い	脚部ハケ目	床面上直上 (第39図)
-17	7 9	土師器 环	A	13.7	5.8		ややうすい	外面ケズリ	床面上直上
-18	7 9	土師器 壺	A ₁	17.6	24.0		口縁やや長い	脚部ハケ目 + ナデ	床面上直上
-19	7 8	同上	A ₁	21.5	29.7		やや長脚	脚部ハケ目	床面上直上
第43図 -20	7 9	須恵器 蓋	A ₁	12.5	3.9		鉢は沈線	ヘラ切り後ナデ	
-21	7 9	須恵器 环	A	10.6	(2.6)				
-22		同上	A	10.4	(2.4)				

掲図番号	図版番号	器種	分類	量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口径	器高	底径			
-23	7 9	須恵器 环	A	11.4	(2.8)				
-24	7 9	同上	A	11.2	3.5		たちあがり非常に 低い		外面にうすく自然 釉
-25	7 9	同上	A	10.9	3.9			ヘラ切り後ナデ	
-26	7 9	同上	A	12.0	(1.9)				外面にうすく自然 釉
-27	7 9	同上	A		(2.7)			ヘラ切り後ナデ	
-28	7 9	同上	A		(2.0)			ヘラ切り後ナデ	
-29	7 9	同上	C?		(14.0)				
-30	7 9	須恵器 童		11.2	(1.8)		口縁肥厚し外面に 段		
-31	7 9	須恵器 童?		最大径	(6.1)		肩部あまり張らない い	カキ目 回転ナデ	
-32	7 9	須恵器 高 环	A	(14.0)	(4.6)		三角形の透し	回転ナデ	
-33	8 0	土師器 环	E	15.5	4.4			ミガキ	
-34	8 0	同上	B	13.4	(3.7)		口縁大きく聞く	ミガキ	赤色塗彩
-35	7 9	同上	B	11.4	4.8		口縁端わずかに屈 曲	ナデ ハケ目	
-36	7 9	同上	A	14.5	7.4		深身	胴～底部ミガキ	赤色塗彩
-37		同上	B	13.0	4.25	7.5		ミガキ ナデ	赤色塗彩
-38	8 0	同上	A	13.5	5.1		口縁外面に段	胴～底部ケズリ	赤色塗彩
-39	8 0	同上	C	14.9	6.7			胴～底部ケズリ	
-40	8 0	土師器 高 环		15.5	10.1	8.9	胸部は筒状ではなく 窓	ミガキ	赤色塗彩
-41	8 0	須恵器 甕			17.0	(12.5)	口縁端肥厚	外面平行叩+カキ 目 内面同心円当 具痕+回転ナデ	
-42								平行叩+一部カキ 目 同心円当具痕	
第44図 -43	8 0	土師器 甕	A	18.2	(7.5)		口縁短い	胴部ハケ目+ナデ	
-44	8 1	同上	A:	14.0	15.6		口縁短い	胴部上半ハケ目 下半ナデ	
-45	8 0	同上	A:	(20.0)	(17.7)		全体に扁平な感じ	胴部ハケ目+ナデ	
-46	8 0	同上	A	17.9	(6.0)		口縁短い	胴部ナデ	
-47	8 2	同上	A:	24.9	(4.9)		口縁外反度弱い	胴部ハケ目	
-48	8 1	同上	A:	21.5	(8.0)			胴部ハケ目細かい	
-49	8 1	同上	A:	18.0	(9.2)		口縁短い	胴部ハケ目	
-50	8 2	同上	A:	20.1	(11.0)			胴部ハケ目	
-51	8 1	同上	A:	19.4	(7.1)			胴部ハケ目	
-52	8 2	同上		16.0	2.0		口縁直立気味に外 傾 うすい	ヨコナデ	

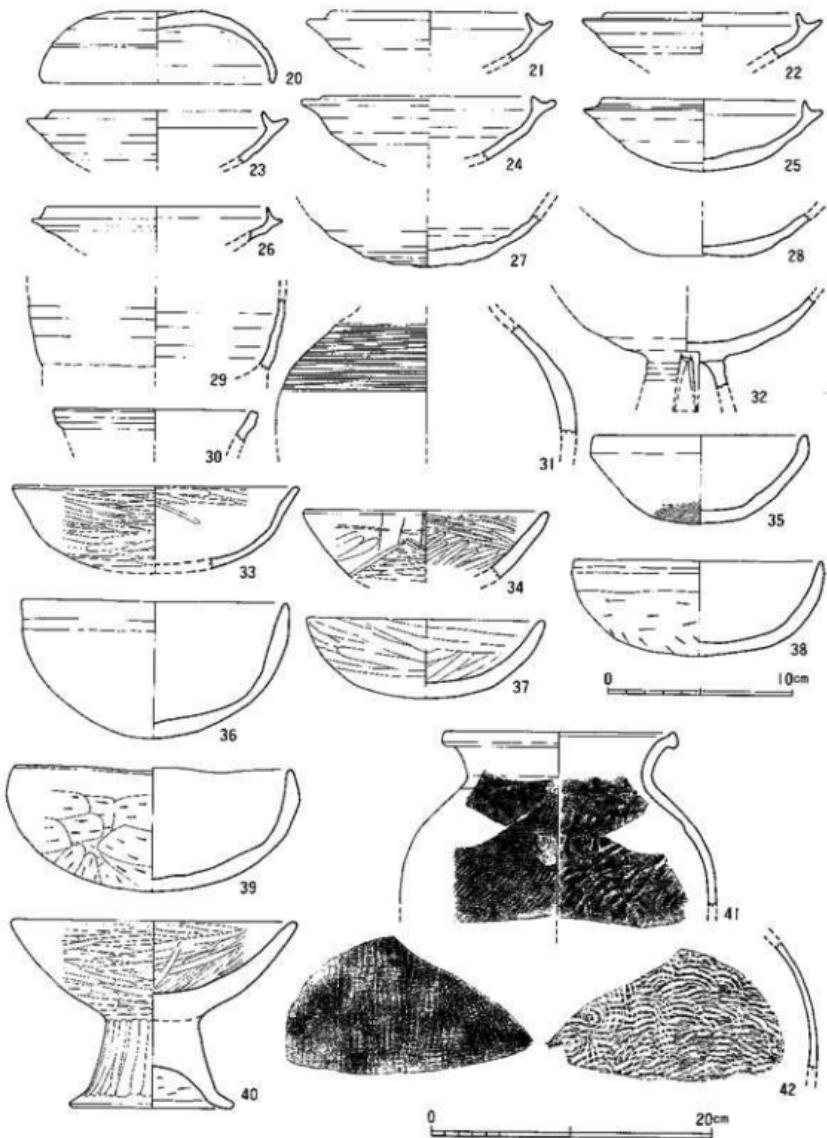
捕获番号	図版番号	器種	分類	法星(cm)			形態	文様・手法	備考
				口径	器高	底径			
-53	82	土師器 甌	A:	22.6	(15.8)			胴部ナデ	
第45回 -54	82	同上	A:	24.8	(7.4)			胴部粗いハケ目	
-55		同上	A:	21.5	(10.0)		口縁外反度弱い	胴部ハケ目	
-56	82	同上	A:	20.8	(8.7)			胴部ハケ目	
-57	82	同上	A:	17.3	(4.2)			胴部ハケ目	
-58	83	同上	A:	19.9	(7.5)			胴部ハケ目	
-59	83	同上	A:	18.2	(5.2)			胴部ハケ目	
-60	83	同上	A:	19.6	(6.7)			胴部細かいハケ目	
-61	83	同上	A:	20.3	(5.7)		口縁直立気味	ナデ ヨコナデ	
-62	82	同上	B	22.3	11.1		口縁わずかに屈曲	胴部粗いミガキ	
-63	83	同上	A:	24.7	(8.7)			胴部ハケ目 + ナデ	
-64	83	同上	A:	18.1	(7.4)			胴部ハケ目	
-65	83	同上	A:	23.3	(6.7)			胴部ナデ	
-66	83	同上	A:	24.5	(5.2)			胴部ハケ目	
-67	83	同上	A:	20.0	(4.0)			ヨコナデ	
-68	83	同上	A:	25.9	(9.5)			胴部ハケ目	
第46回 -69	83	同上	A:	23.7	(5.0)			ヨコナデ 内面斜行するキズ多い	
-70	83	同上	A:	32.4	(5.4)			ヨコナデ	
-71	84	同上	A:	23.9	(12.2)			外面粗いハケ目	
-72	84	土師器 把手付 甌	A:	20.7	(10.0)			胴部ハケ目 + ナデ	
-73	84	同上	A:	(22.6)	(17.5)			胴部上半ハケ目 下半ナデ	
-74	84	土師器 甌	A:	11.3	(6.4)			胴部ハケ目	
-75	84	土師器 把手付 甌		(28.0)	(13.1)			胴部ハケ目 + ナデ	
-76	84	土師器 甌			(8.0)	10.8	端部面取	外面ミガキ 内面 ナデ	
-77	85	同上		27.1	(9.0)			外面ミガキ 内面 ナデ	
第47回 -78	85	同上		32.4	(19.0)			外面ナデ 内面ミ ガキ ナデ	
-79	85	砥石		長 6.2	幅 4.2	厚 0.6	表裏面とも凹面状	砥痕不明瞭	四面使用
-80	85	同上		長 8.2	幅 7.6	厚 3.1			三面使用
-81		鉄器 小刀?		長 (9.6)	幅 3.1	厚 0.5	薄か?		



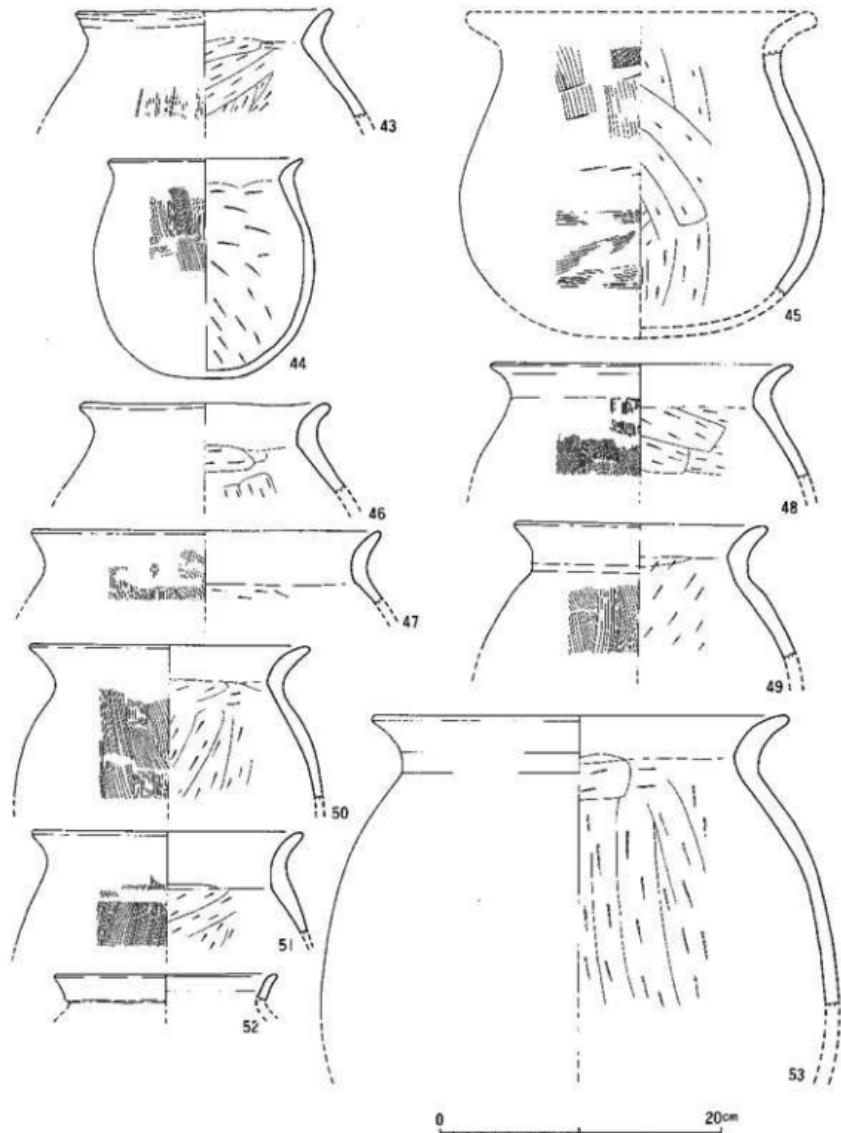
第41図 森遺跡 SI 10床面直上出土の土器 (1) (1:3)



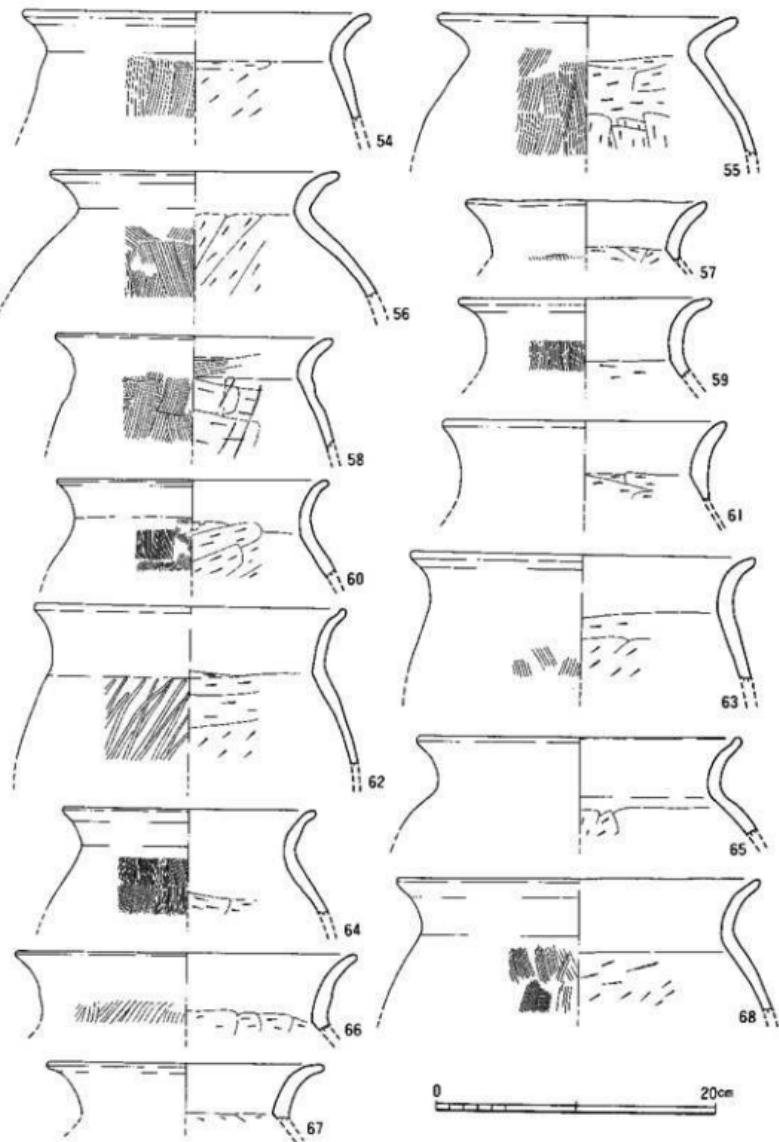
第42図 森遺跡 SI 10床面直上出土の土器（2） 14～16、18、19（1:4） 17（1:3）



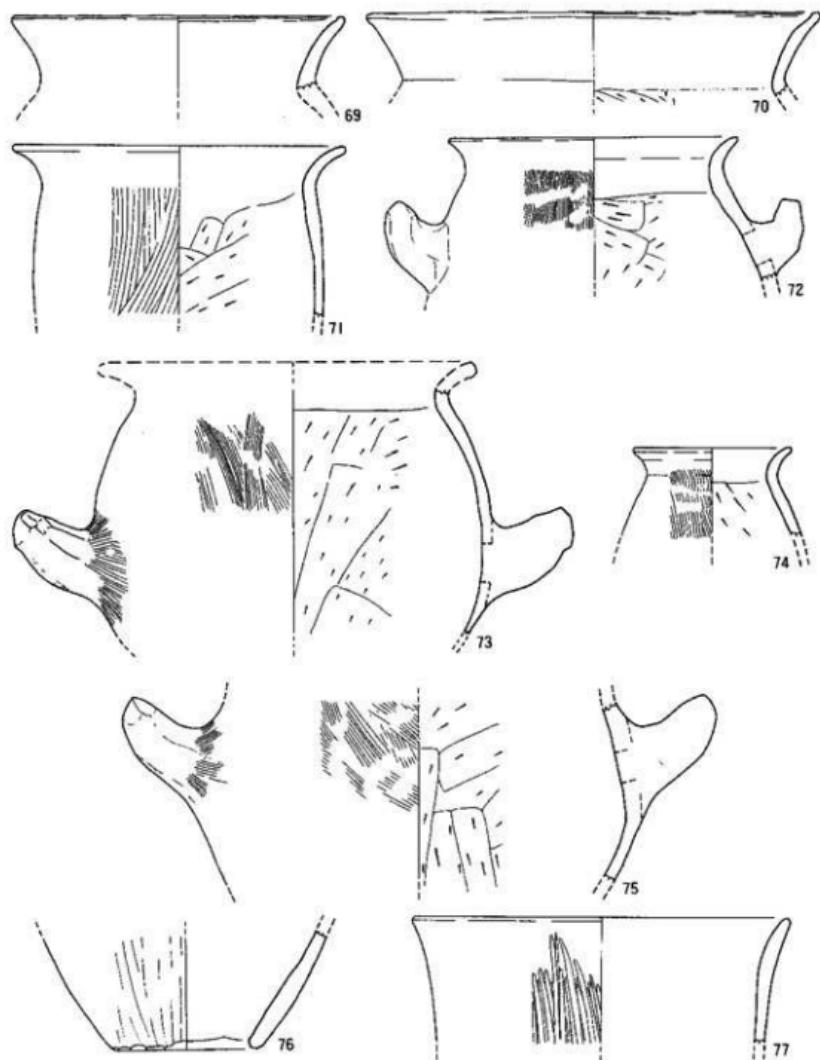
第43図 森遺跡 S110出土土器 (3) 20~40 (1:3) 41、42 (1:4)



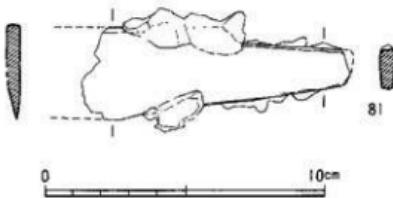
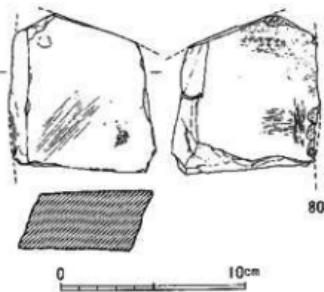
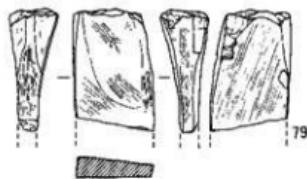
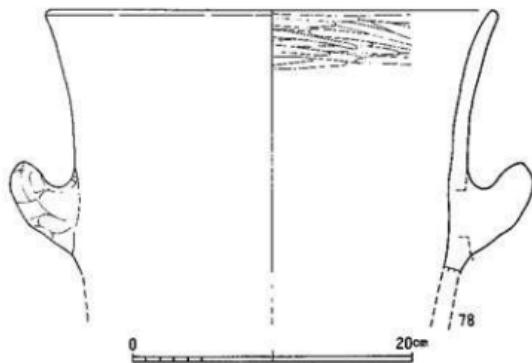
第44図 森遺跡 SI 10出土土器 (4) (1 : 4)



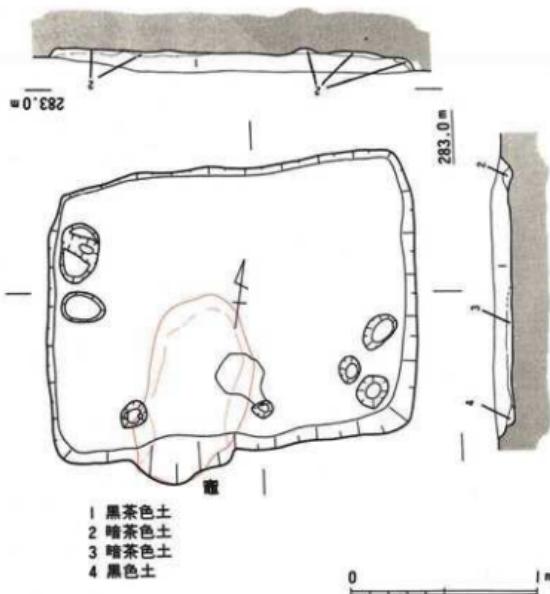
第45図 森遺跡 SI 10出土器 (5) (1:4)



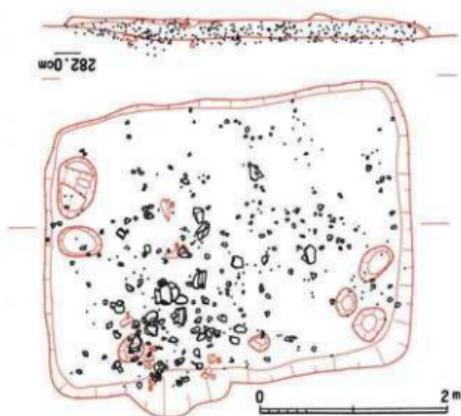
第46図 森遺跡 SI 10出土土器 (6) (1:4)



第47図 森遺跡 SI 10出土土器 (7) 78 (1:4) 研石 79・80 (1:3) 鉄器 81 (1:2)



第48図 森遺跡 SI11実測図 (1:60)



第49図 森遺跡 SI11遺物出土状態 (1:60)

この竪部分では住居跡
の壁が一部削り込まれている。周溝
は地山面では確認されなかった。床
面には小ピットが7個検出されたが、
いずれのピットも形状、配置とも竪
穴住居の主柱穴になりうるものでは
ない。

遺物は住居跡内全面から出土した
が(第49図 図版23)、その量は比
較的少ない。また、細片が多く図示
できたのは第51図に示しただけであ
る。

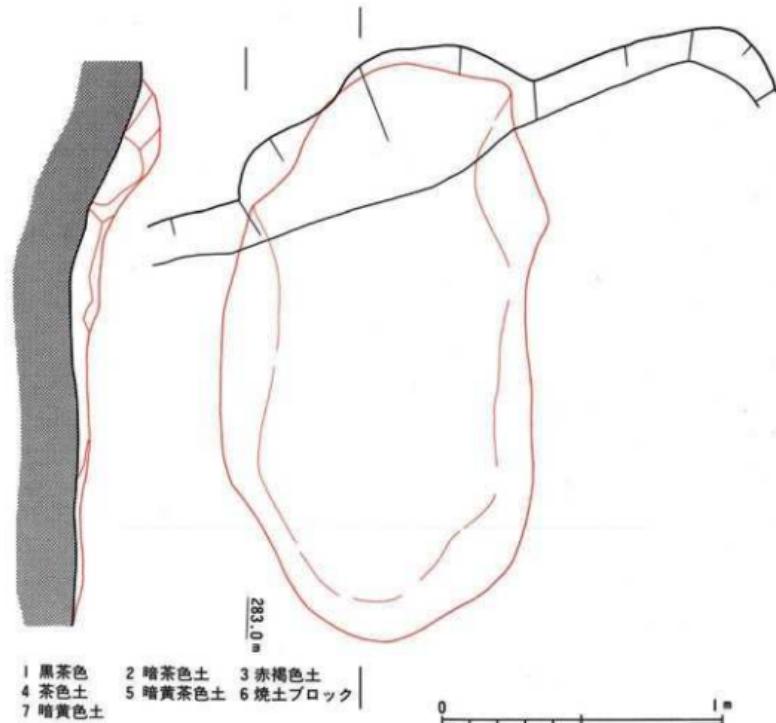
出土遺物は須恵器蓋A、須恵器坏
A、土師器甕A₁、A₂である(第51

図 図版85、86)。

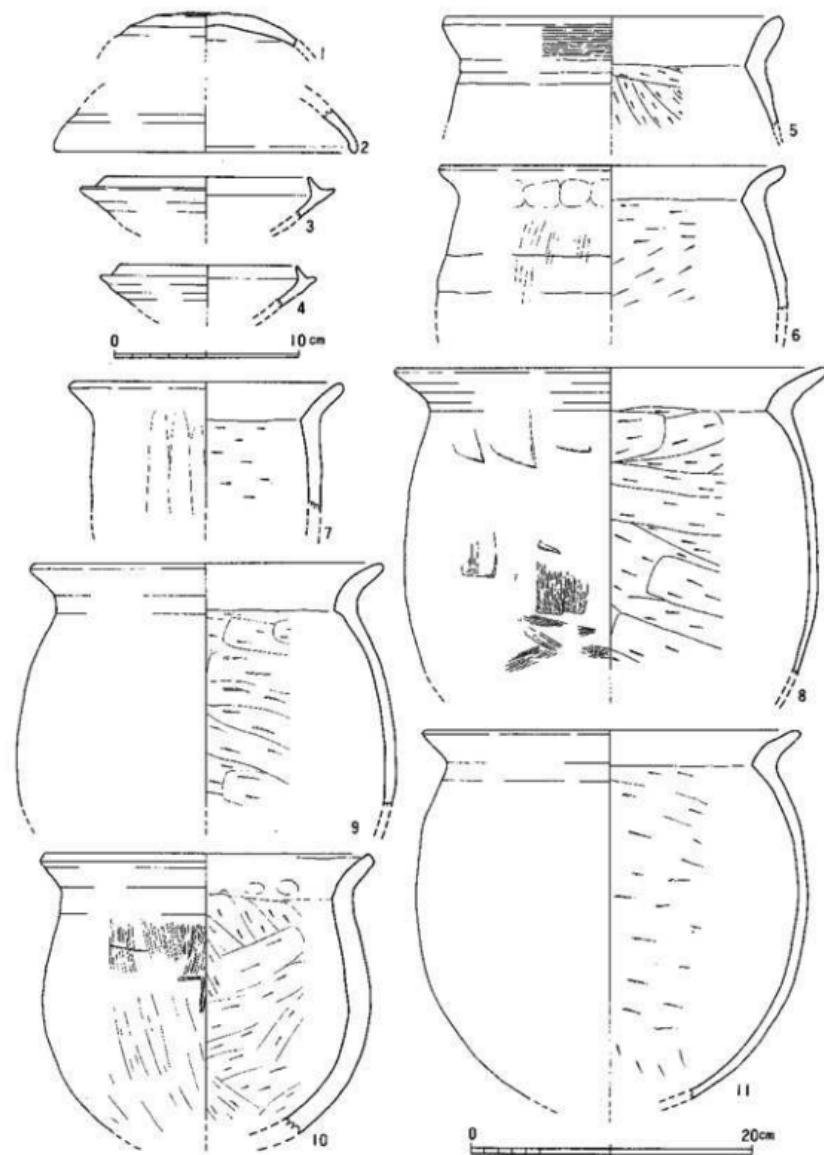
出土遺物のうち第51図1～4の須恵器から、SI 11は7世紀初頭頃と思われる。

SI 11計測表

規 模	長 方 形		
	上 面	下 面	床 面 積
	4.0 × 3.0 m	3.8 × 2.8 m	約 10.6 m ²
主 軸	N—9°—W		
壁 高	3 ~ 20 cm		
竪 の 位 置	南 壁 西 寄 り		



第50図 森遺跡 SI 11竪実測図 (1:20) 赤は粘土



第51図 森遺跡 SI 11出土土器 1~4 (1:3) 5~11 (1:4)

SI 11出土遺物一覧表 ()は現存値

捕区 番号	図版 番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口徑	器高	底径			
第51図 -1	8 6	須恵器 蓋	A		(1.4)			ヘラ切り後ナデ	
-2	8 6	同上	A:	16.5	(2.4)			回転ナデ	
-3	8 6	須恵器 坏	A	13.8	(2.3)			回転ナデ	
-4	8 6	同上	A	9.6	(2.3)			回転ナデ	
-5	8 6	土師器 甌	A:	24.5	(7.6)		口縁短く外傾	口縁ハケ目 脚部ナデ	
-6	8 6	同上	A:	24.7	(10.2)			脚部ハケ目+ナデ 頸部指押圧痕	
-7	8 6	同上	A:	19.7	(9.3)			脚部ナデ	
-8	8 5	同上	A:	31.0	(21.7)			脚部ハケ目+ナデ	
-9	8 6	同上	A:	25.3	(17.3)			脚部ナデ	
-10	8 6	同上	A:	23.9	(19.9)		器壁厚い	脚部ハケ目+ナデ 脚部にヘラ記号	
-11	8 6	同上	A:	27.0	(26.2)			脚部ナデ	

SI 12(第52~53図 図版24、25) 3×3.5mの小型の長方形の竪穴住居跡である。壁の一部は水田の排水溝によって壊れている。残存状態は非常に悪く、全体にいびつな平面形である。底面は凹凸が非常に著しく、とくに中央部は大きく凹むようになっている。調査時には確認できなかつたが、おそらく貼り床をして床面を整えたと思われる。

この住居跡では甌は検出できなかつたが、北側隅で焼け石やわずかながら焼土が検出できたことから本来は甌が造り付けられていた可能性がある。地山面では周溝や柱穴は検出できなかつた。

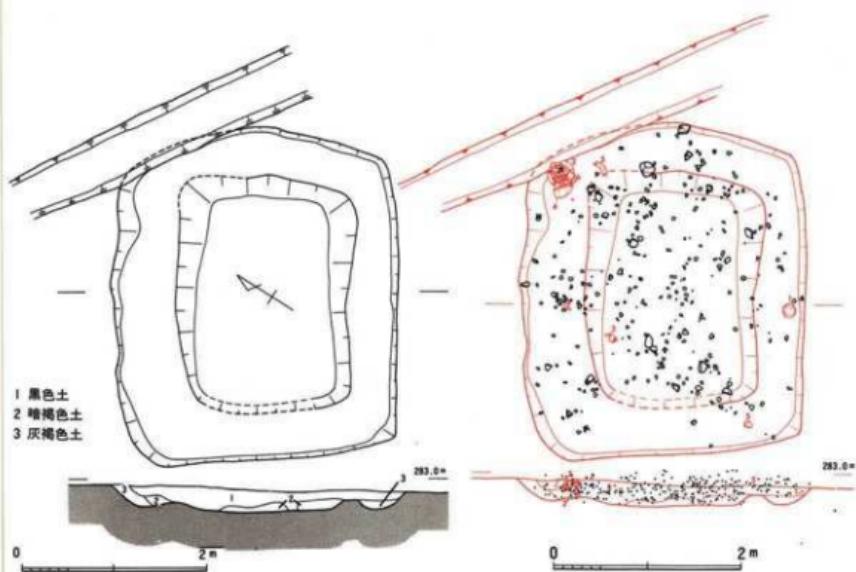
遺物は住居跡内全面から出土したが(第53図 図版25)、その量は比較的少ない。また、細片が多く図示できたのは第54図に示しただけである(図版87、88)。

出土遺物は、須恵器坏C、土師器甌A₁、A₂である。第54図1の高台内面には漆が塗られていた(図版87)。このうち第54図1から、SI 12は8世紀代と思われる。

本遺構から出土した土器のうち製塙土器小片が一片出土した。これはSI 13出土の製塙土器片と接合できため(第58図5)、SI 13の項に
入れることにする。同一個体の破片がSI 12、
13で出土したことから、この2つの住居跡は
ほぼ同時に廃棄されたものと思われる。

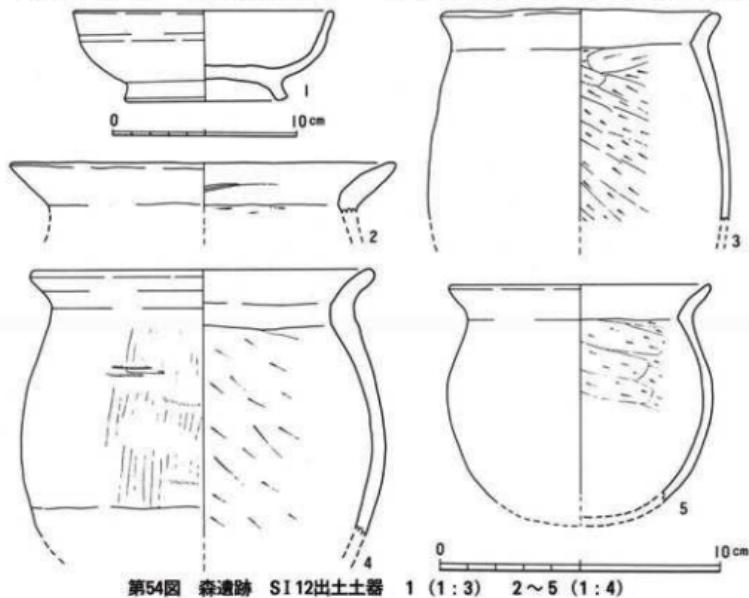
SI 12計測表

規模	平面形			方 形
	上 面	下 面	床面積	
	3.5×3.0 m	3.4×2.9 m	約 9.9 m ²	
主軸	N-62°-E			
壁高	2 ~ 12 cm			
甌の位置	東壁北寄り?			



第52図 森遺跡 SI 12実測図 (1 : 60)

第53図 森遺跡 SI 12遺物出土状態 (1 : 60)



第54図 森遺跡 SI 12出土土器 1 (1 : 3) 2~5 (1 : 4)

SI 12出土遺物一覧表 ()は現存値

擇図 番号	図版 番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口径	器高	底径			
第54図 -1	87	須恵器 壺	D	14.2	5.0	8.9		糸切後回転ナデ	底部に漆
-2	87	土師器 甕	A _s	27.7	(3.6)		口縁短い	口縁内面ハケ目 +ヨコナデ	
-3	87	同上	A _s	20.0	(15.0)		口縁非常に短い	肩部ナデ	スス付着
-4	87	同上	A _t	24.8	(19.0)			肩部ハケ目? 不明瞭	スス付着
-5	88	同上	A _t	18.8	(15.6)		器高低い	肩部ナデ	

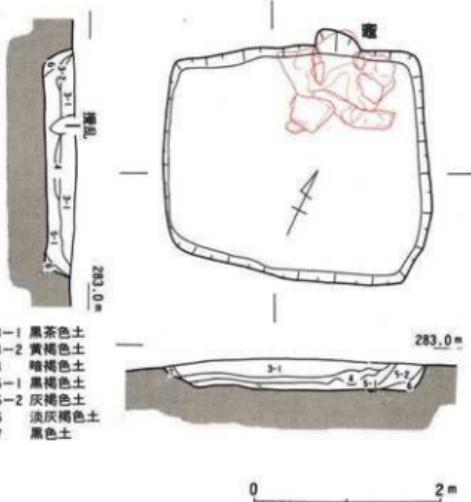
SI 13(第55~57図 図版25~28) 2.4×2.9mの長方形の竪穴住居跡である。比較的残存状態はよく、深さは約30cmである。底面はほぼ水平で、貼り床は確認できなかった。

竪は北壁のやや東寄りに造り付けられていた。竪の構造は柱状の石を立てて側壁とし、粘土を覆ったものと思われる(第57図 図版26、27)。焚き口の幅は30cmである。この周辺には大きな柱状または板状の石が多くあり、これらも竪を構築していた部材と考えられる。なお、竪部分の住居跡壁はわずかに削り込まれている。

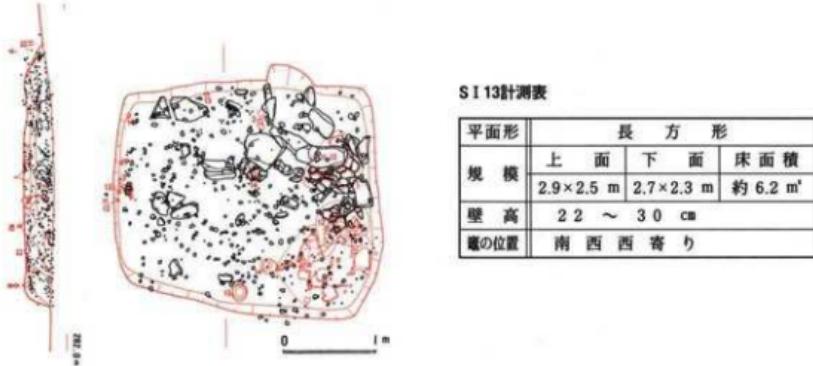
周溝、柱穴は検出されなかった。

遺物は住居跡内全面から大量に出土した(第56図 図版28)。出土遺物は土師器壺A、土師器甕A_s、製塩土器、土師器甕である(第58、59図 図版88~90)。

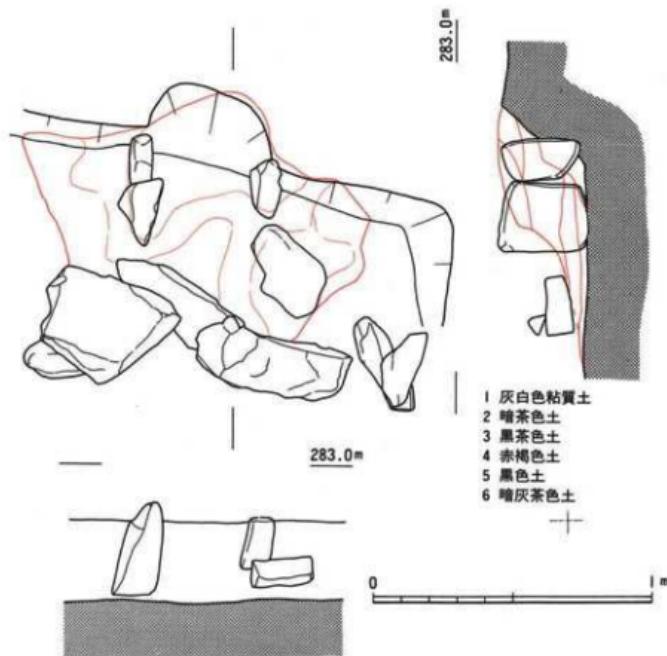
なお、第58図5はSI 12出土の土器片と接合した土器片である。



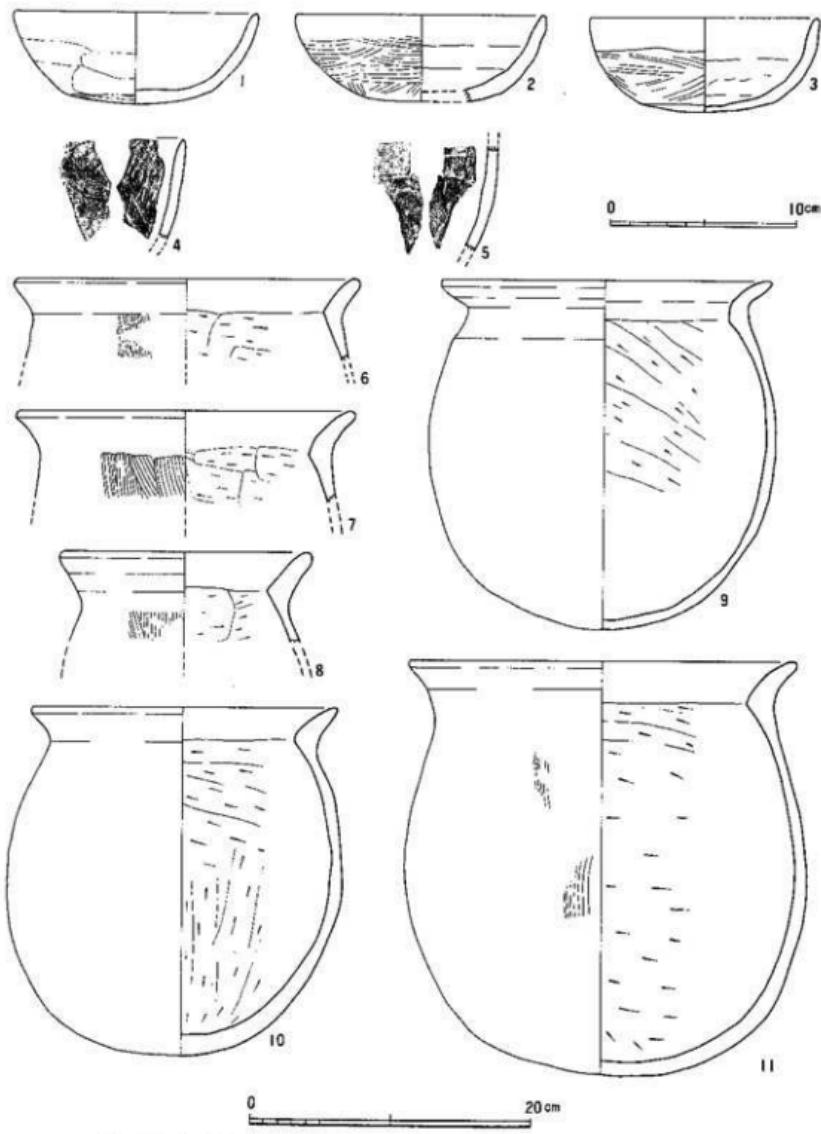
第55図 森遺跡 SI 13実測図(1:60) 赤は粘土



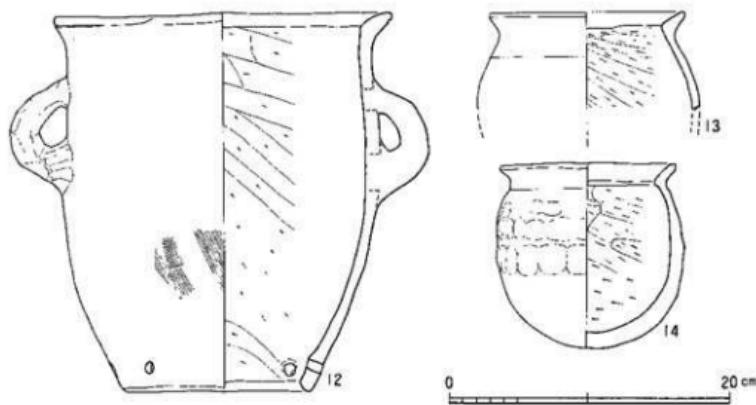
第56図 森遺跡 SI 13遺物出土状態 (1 : 60)



第57図 森遺跡 SI 13竈実測図 (1 : 20) 赤は粘土



第58図 森遺跡 SI 13出土土器 (1) 1~5 (1:3) 6~11 (1:4)



第59図 森遺跡 SI 13出土土器 (2) (1:4)

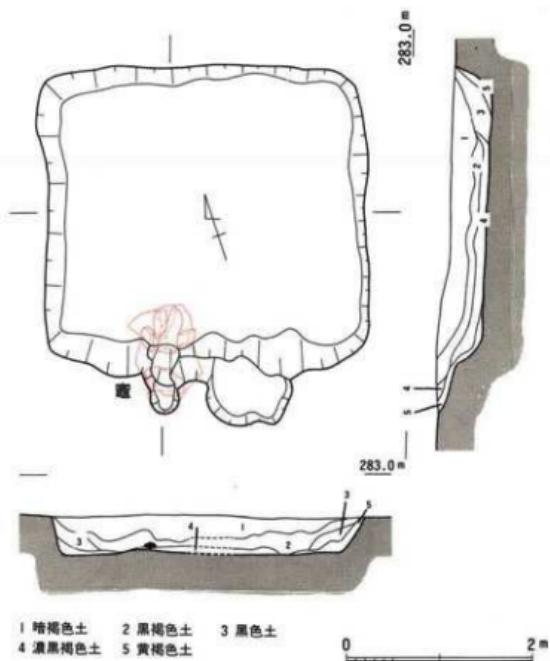
SI 13出土遺物一覧表 ()は現存値

捕図 番号	岡版 番号	器種	分類	法量(cm)			形 態	文様・手 法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第58図 -1	8 8	土師器 壺	A	13.4	5.0		浅身	幅広のミガキ ナデ	
-2	8 8	同上	A	13.6	4.7		浅身	ハケ目 ナデ	
-3	8 9	同上	A	12.4	5.1		やや深身	ハケ目 指押圧痕	
-4	8 9	製塙土 器					直口	内面網目 ナデ	
-5	8 9	同上						内面網目	SI 12出土土器と 接合
-6	8 9	土師器 甕	A ₁	24.8	(5.7)		口縁短く外傾	肩部ハケ目+ヨコ ナデ	
-7	8 9	同上	A ₁	24.4	(6.2)			肩部粗いハケ目	
-8	8 9	同上	A ₂	18.5	(6.4)		口縁直線的に伸び る	肩部粗いハケ目	
-9	8 8	同上	A ₁	23.6	24.9		口縁短い	肩部ナデ	
-10	8 8	同上	A ₁	21.9	24.8		口縁短い	肩部ナデ	
-11	8 9	同上	A ₁	27.75	29.4			肩部ハケ目+ナデ	
第59図 -12	8 9	土師器 甕		24.2	27.0		環状把手	外面ハケ目+ナデ	底部に2個一対の 円孔
-13	8 9	土師器 甕	A ₁	14.2	(7.0)		口縁短い	肩部ナデ	
-14	9 0	同上	A ₁	12.8	13.4		口縁短い	肩部圧痕多い ナデ	底部内面にスス

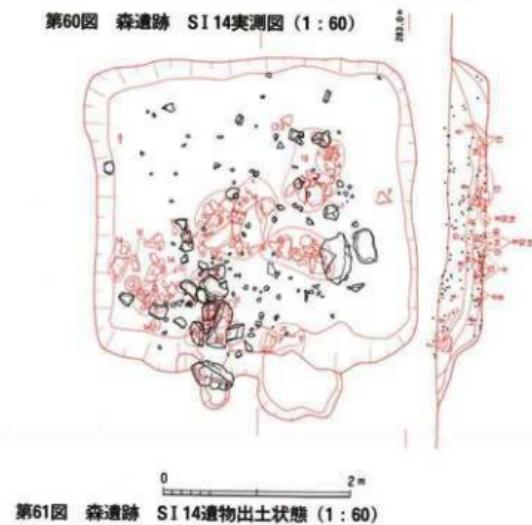
SI 14 (第60~62図 図版28~32) 2.4×2.4mのほぼ正方形の竪穴住居である。この住居跡は、緩やかに傾斜が変換する緩斜面に作られている。残りは非常によく、検出面からの深さは約50cmである。底面はやや凹凸があるもののほぼ水平で、貼り床は確認できなかった。

竈は南側壁の中央に造り付けられていた。竈の構造は柱状の石を立てて側壁とし、粘土を覆ったものと思われる(第62図 図版29、30)。炊き口の幅は35cmである。両側の立石の間には細長い大きな石が落ち込んでおり、竈天井に架けられていた石と思われた。煙道に当たる位置にも長さ約50cmの石が煙道に直交するよう置かれていた。また、この他にもこの周辺には大きな柱状または板状の石が多くあり、これらも竈を構築していた部材と考えられる。なお、竈部分の住居跡壁は煙道構築のために削り込まれていた。周溝、柱穴は検出できなかつた。

遺物は、出土量はあまり多



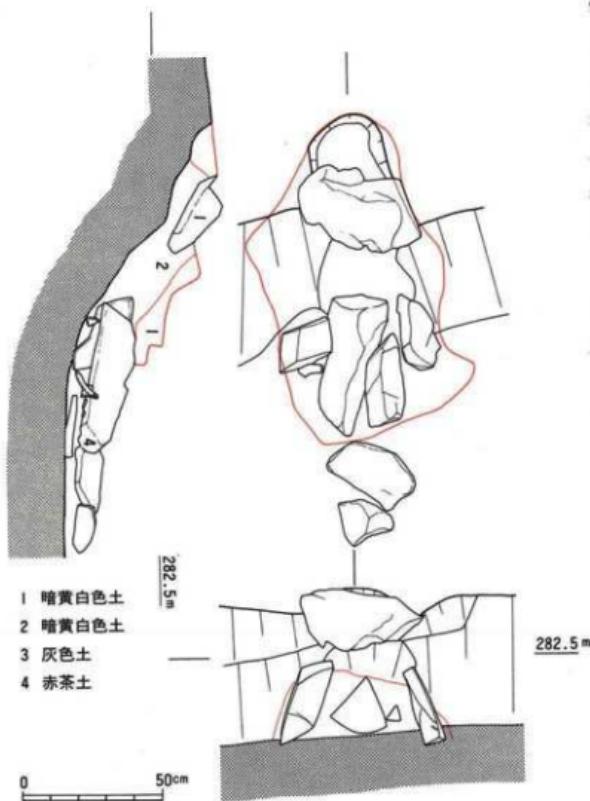
第60図 森遺跡 SI 14実測図 (1:60)



第61図 森遺跡 SI 14遺物出土状態 (1:60)

SI 14計測表

平面形	方 形		
	上 面	下 面	床面積
規 模	3.4×3.3 m	3.1×2.8 m	約 8.5 m ²
主 軸	N-23°-E		
壁 高	32 ~ 55 cm		
窓の位置	南 壁 中央		

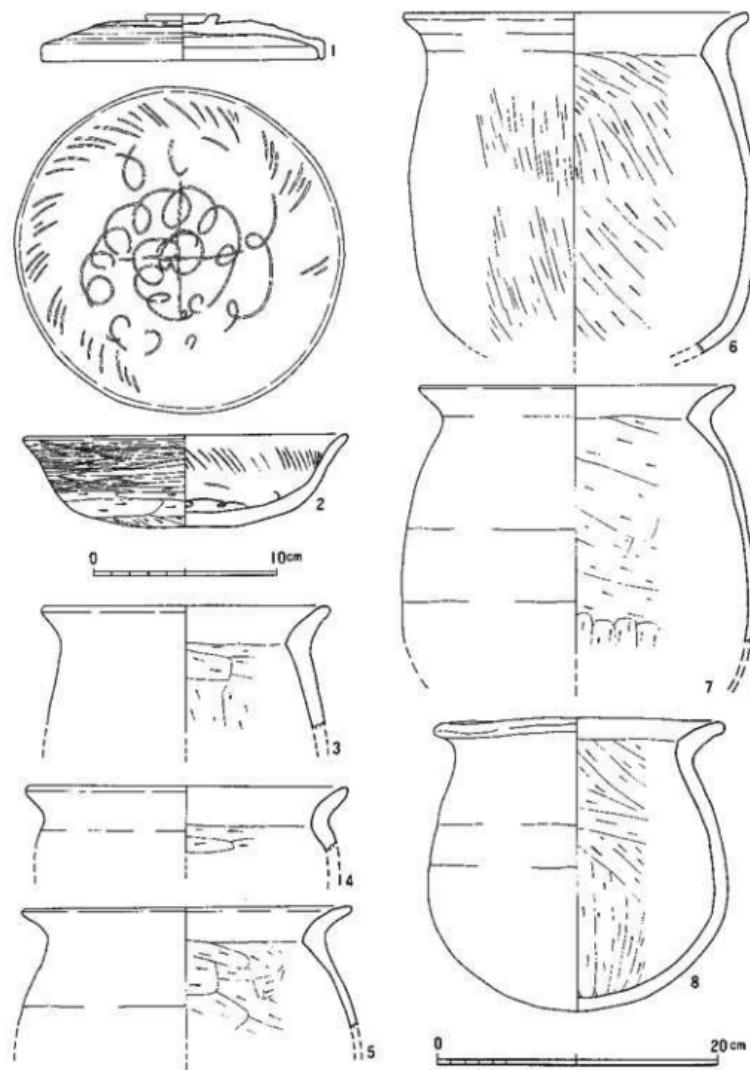


第62図 森遺跡 SI 14実測図 (1:20) 赤は粘土

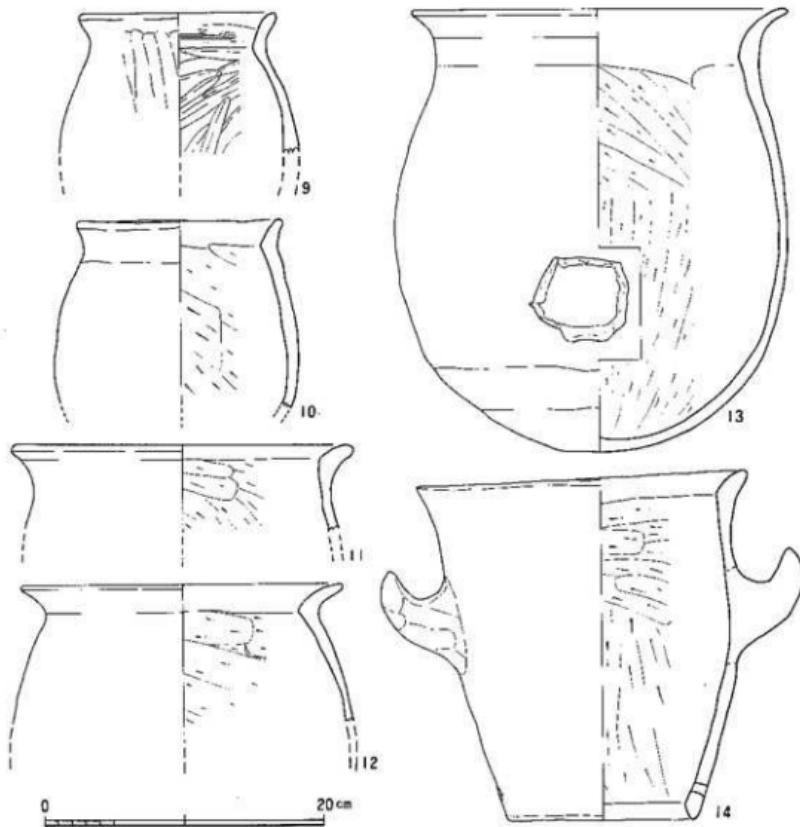
くはないが床面近くから良好な状態で出土した(第61図 図版31、32)。これらは竪付近と住居跡中央部に主に集中していた。

出土遺物は須恵器蓋B、土師器坏E、土師器甕A₁、土師器瓶である(第63、64図 図版90、91)。このうち、第63図2は内面に螺旋状、「十」字形、放射状の暗文がほどこされ、器面には赤色塗彩が施されている(図版90)。暗文や器形から見て、平城宮2式の坏を模倣した土器と思われる。また、第64図13の腹部中央には、焼成後に穿孔された円孔がある。

第63図1、2から、SI 14は8世紀代の住居跡と思われる。



第63図 森遺跡 SI 14出土土器 (1) 1、2 (1:3) 3~8 (1:4)



第64図 森遺跡 SI 14出土土器（2）（1:4）

SI 14出土遺物一覧表 ()は現存値

掲図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)			形 態	文様・手 法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第63図 -1	9 0	須恵器 蓋	B	15.3	2.5	4.0	輪状つまみ	切離し不明(ヘラ 切か)	
-2	9 0	土師器 环	E	17.7	5.0	12.3	口縁外反	ミガキ 削り 暗文(ラセン 放 射「+」字形)	赤色塗彩
-3	9 1	土師器 甕	A ₁	20.7	(8.4)			胴部ナデ	

捕获番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口径	器高	底径			
-4	91	土師器 甕	A	23.1	(4.0)		肩少し張る	ヨコナデ	
-5	91	同上	A:	23.8	(8.4)		胴やや張る	胴部ナデ	
-6	90	同上	A:	24.6	24.3			ヘラ状工具による 縱方向のナデ	
-7	90	同上	A:	22.7	(18.4)			胴部ナデ	
-8	90	同上	A:	20.8	20.9			胴部ナデ	胴部凹凸顯著
第64図	91	土師器 甕	A	14.0	(9.9)			胴部指印え? 内面抉ったような 削り 口縁ハケ日	
-9									
-10	91	同上	A:	14.8	(13.5)			胴部ナデ	
-11	91	同上	A:	24.5	(6.0)			胴部ナデ	
-12	91	同上	A:	23.1	(9.8)			胴部ナデ	スス付着
-13	91	同上	A:	26.8	31.5			胴～底部ナデ	胴部焼成後に円孔
-14	91	土師器 甕		23.7	24.9	13.7		難なナデ	底部に2個一対の 円孔(焼成前)

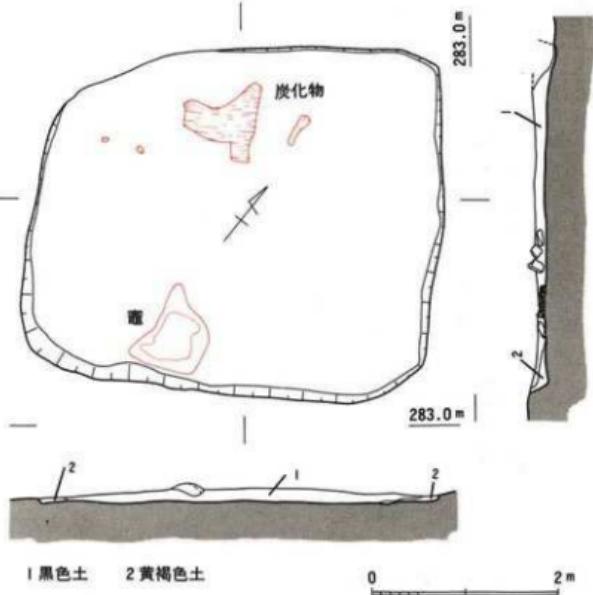
SI 15 (第65～67図)

図版32～35) 4.5×3.7

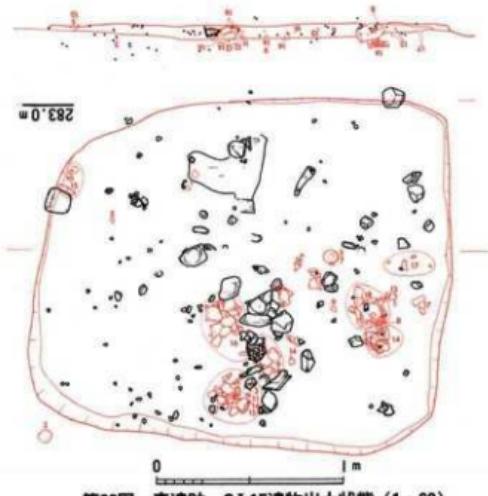
mの長方形の竪穴住跡である。北に向かって次第に傾斜する緩斜面にあり、北側の壁は非常に残りが悪い。底面はほぼ水平で、貼り床は確認できなかった。また、中央には大きな炭化物が残っていた。

甕は東南壁のやや南寄りに造り付けられていた。

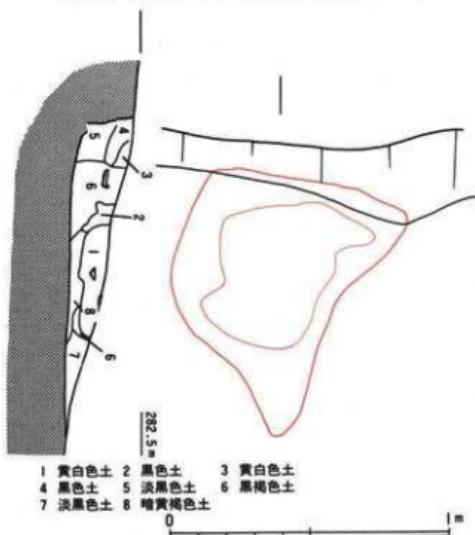
SI 15の甕は石組などではなく、たんに粘土が90×60cm、厚さ20cmの範囲で確認されただけである



第65図 森遺跡 SI 15実測図 (1:4)



第66図 森遺跡 SI 15遺物出土状態 (1 : 60)



第67図 森遺跡 SI 15竈実測図 (1 : 20) 赤は粘土

(第67図 図版34)。

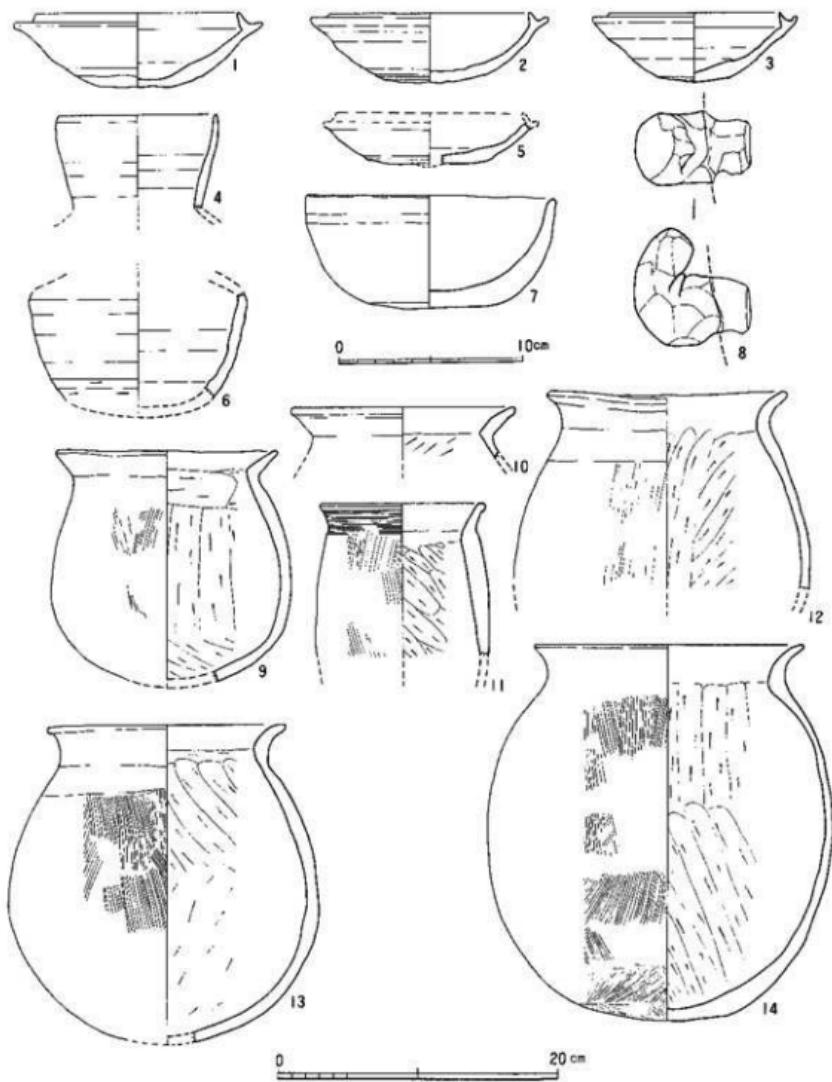
周溝、柱穴は確認されなかった。

遺物は住居跡内全面から出土した(第66図 図版33、35)があまり多くはなく、とくに北および東側からまとまった状態で出土した。出土遺物は、須恵器壺A、須恵器直口壺、土師器壺C、土師器壺A₁、A₂、把手付き壺、瓶がある(第68、69図 図版92、93)。第69図16の把手付き壺は焼成後に胴部中央に大きな穴が空けられている。

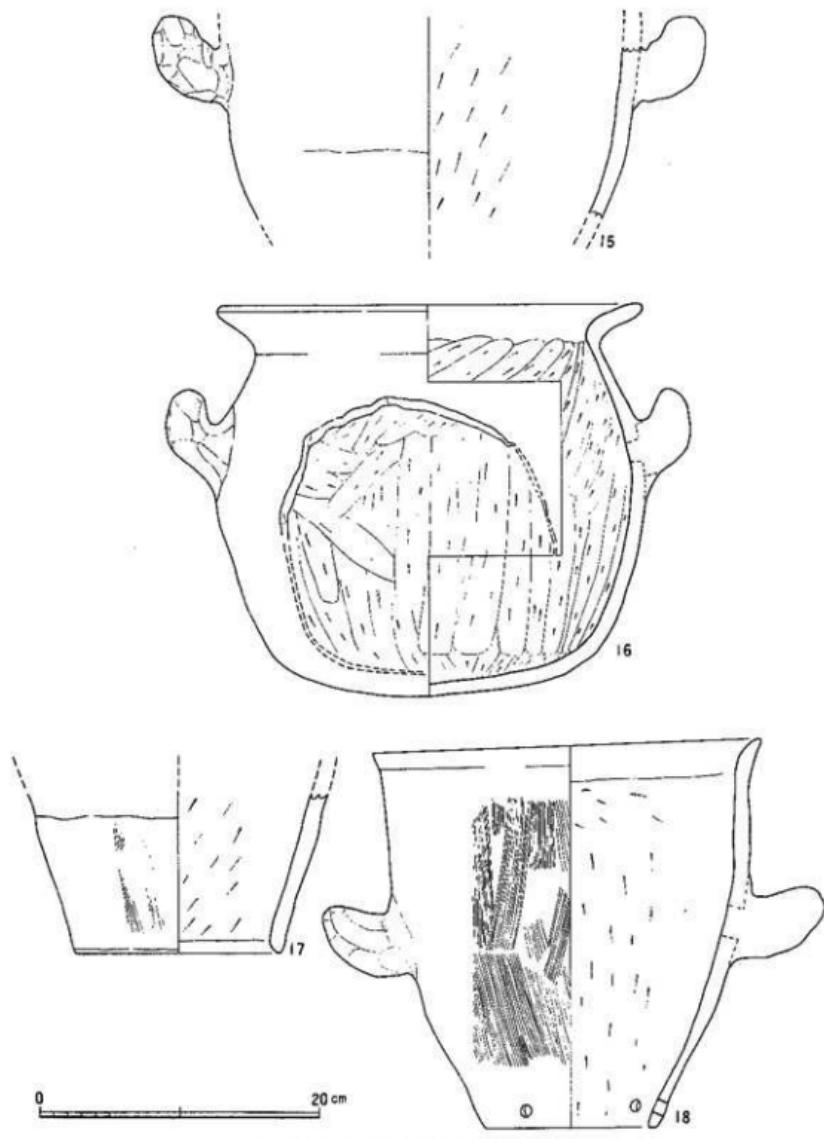
第68図1～5の須恵器からSI 15は6世紀末～7世紀前半の頃と思われる。

S 110計測表

規 模	長 方 形		
	上 面	下 面	床面積
	4.4 × 3.75m	3.55 × 4.25m	約15.1m ²
主 軸	N—39°—W		
壁 高	2 ～ 32 cm		
竈の位置	東南壁 中央		



第68図 森遺跡 SI15出土土器 (1) 1~8 (1:3) 9~14 (1:4)



第69図 森遺跡 SI 15出土土器 (2) (1:4)

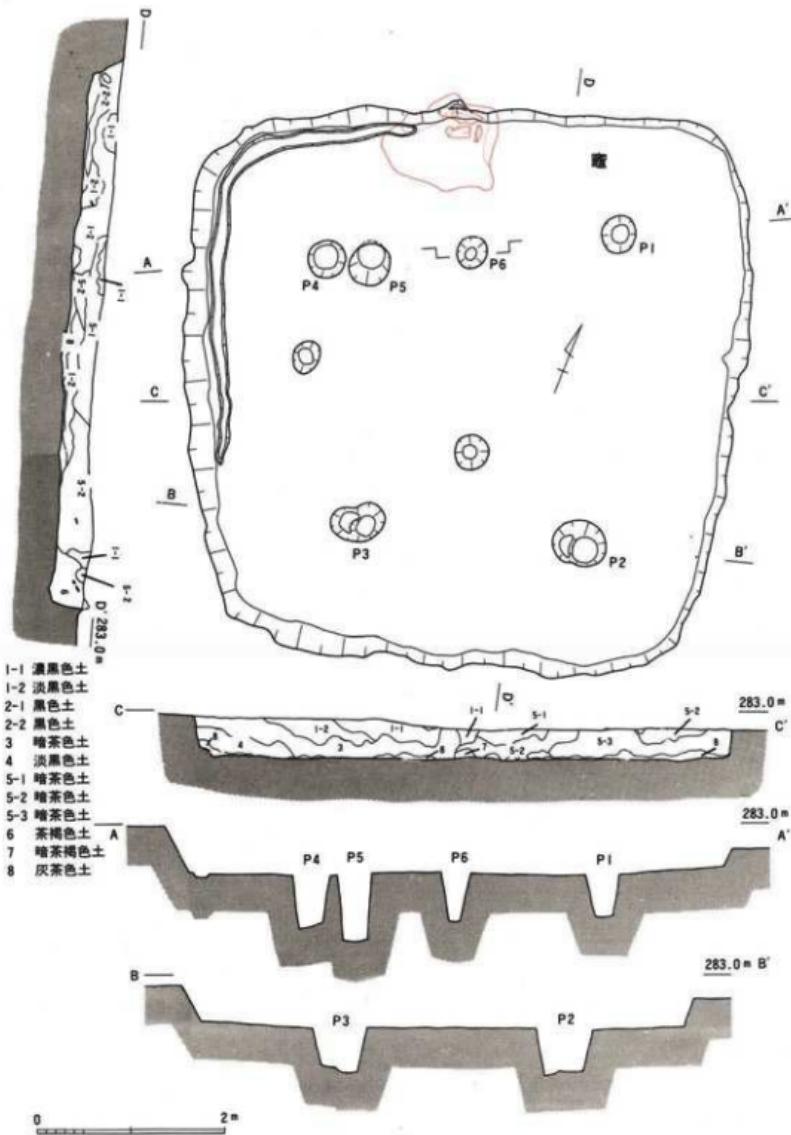
SI 15出土遺物一覧表 ()は現存値

擲出番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口徑	縦	高底			
第68回 -1		須恵器 壺	A	11.0	4.0			ヘラ切り後ナデ	一部にうすく自然釉
-2	92	同上	A	10.8	3.7	6.0		ヘラ切り	「×」のヘラ記号 一部に自然釉
-3	92	同上	A	9.2	3.2			ヘラ切り	自然釉
-4	92	須恵器 直口壺		8.8	(5.1)				うすく自然釉 平瓶の可能性あり
-5		須恵器 壺			(2.0)	6.8		ヘラ切り後ナデ	焼成不良
-6	92	須恵器 壺			(6.0)		肩部張る	底部回転ヘラ削り	うすく自然釉
-7	92	土師器 壺	A	13.6	6.1	6.4		ヨコナデ ナデ	
-8	92	土師器 把手		長 6.2	幅 3.8	厚 3.8		接合部埋込み状況 明瞭	
-9	92	土師器 甕	A ₁	16.0	(16.5)		口縁短く外傾	胸部ハケ目+ナデ	
-10	92	同上	A	16.1	(3.3)		口縁直線的に外傾	胸部ハケ目?	
-11	92	同上	A ₂	11.9	(11.0)		長胴	口縁ハケ目 胸部 ハケ目+ナデ	全体にいびつ
-12	92	同上	A ₁	17.2	(14.2)			胸部ハケ目+ナデ	
-13	93	同上	A ₁	17.1	(22.7)			胸部ハケ目 下半 ハケ目+ナデ	
-14	93	同上	A ₁	19.3	26.7	11.1	底部平底気味の丸 底	胸部ハケ目+ナデ	
第69回 -15	92	土師器 甕		最大径 30.2	(14.5)			外面ナデ	
-16	93	土師器 把手付 甕	A ₂	30.4	28.0		底部平底気味の丸 底	外面ハケ目+ナデ	胸部に焼成後の円孔
-17	92	土師器 甕			(11.3)	15.0		外面ハケ目後ナデ	
-18	93	同上		27.9	27.7	12.2		外面ハケ目	底部に一对の円孔 (焼成前)

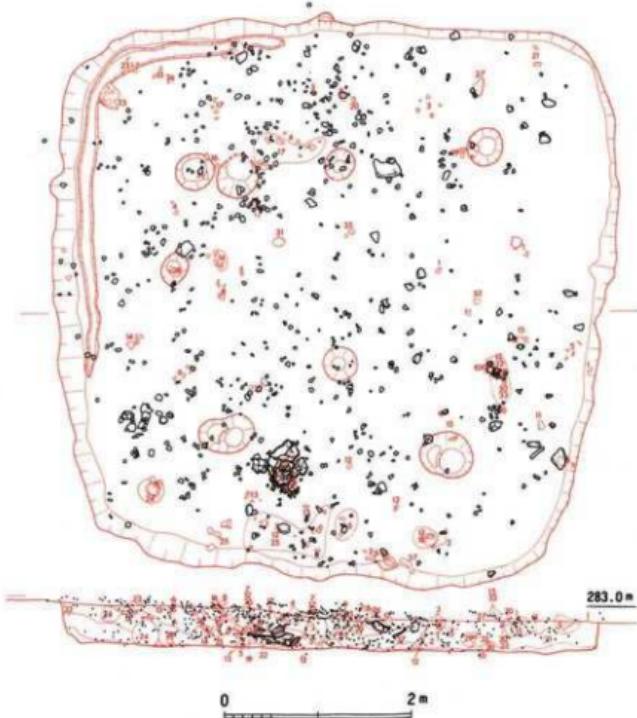
SI 16(第70~72図 図版36~39) 一片6mのほぼ正方形の竪穴住居跡である。非常に残りがよく、壁高は30~40cmである。底面はやや凹凸があるもののはほぼ水平で、貼り床は確認できなかつた。

竪は北壁のほぼ中央に造り付けられている。焚き口には板状の石を両側に立て、その上に細長い石が架けられ、さらに粘土で覆われていた(第72図 図版38)。また偏平な石が焚き口をふさぐようであった。焚き口の幅は約30cmである。

周溝は検出できなかったが、北壁中ほどから西壁にかけて幅10cm程度の細い溝が検出された。



第70図 森遺跡 SI 16実測図 (1:60)



第71図 森遺跡 SI 16遺物出土状態 (1 : 60)

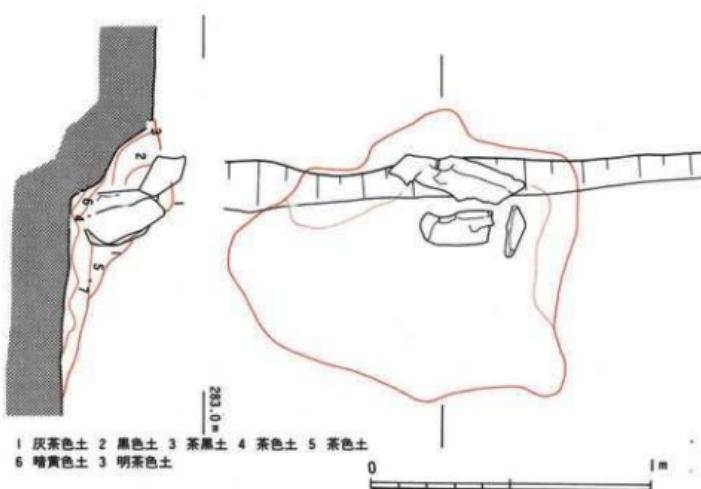
ピットは計8個検出されたが、柱穴となり得るのはP1～P6である。このうちSI 16に伴うものはP1～P4と思われ、それぞれの柱間は間隔がふぞろいである。P2とP3は平面形が不整形であるが、これは建て替えによるもの

のか、柱穴の抜き取り痕の可能性がある。建て替えとすれば、P2～P5が対応すると思われるが、土層の観察ではそのどちらであるかは確認できなかった。

遺物は住居跡内全面から多くは破片の状態で出土したが、原位置を保

SI 16計測表

規 模	隅 丸 方 形					
	上 面	下 面	床 面 横			
主 軸	6.0×5.9 m	5.6×5.6 m	約11.2+α m ²			
壁 高	N-69°-E					
電 の 位 置	20 ~ 39 cm					
東 壁 中 央						
番 号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
柱 穴 (cm)	40×35	60×50	40×60	50×45	50×45	35×30
深 さ	47	47	48	58	70	58
柱 痕 跡	13	10	25	18		10
柱 間 距 離 (m)	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-1
	3.4	2.3	2.9	0.5	1.1	1.6



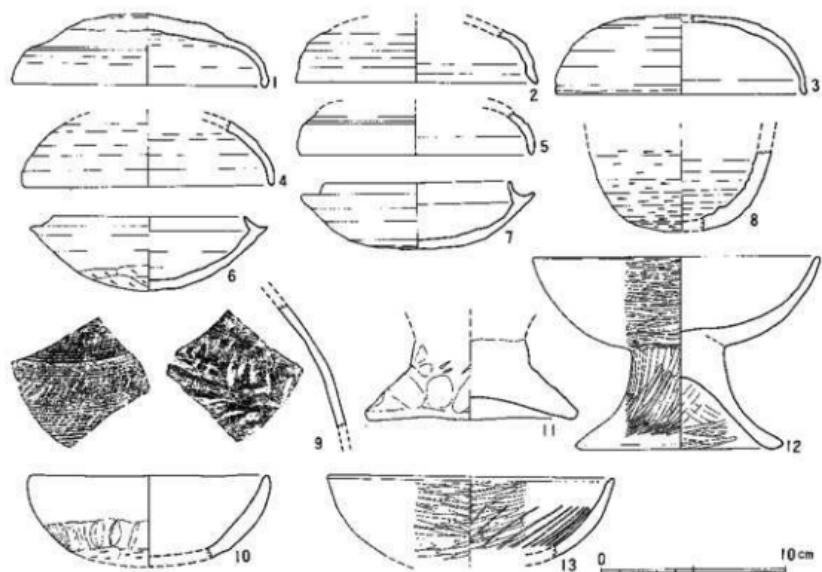
第72図 森遺跡 SII 16実測図 (1:20) 赤は粘土

つものはなかった(第71図 図版39)。出土遺物は須恵器蓋A₂、須恵器坏A、須恵器小壺(?)、須恵器壺、土師器坏A、土師器高坏、土師器壺A₁～A₂、B、土師器瓶、土製支脚、鉄製鎌、不明鉄器片(茎?)が出土している(第73～75図 図版93～96)。また、鉄滓が1点出土した(図版96上の右下)。第73図1～7の須恵器からSII 16は6世紀末～7世紀前半の頃と思われる。

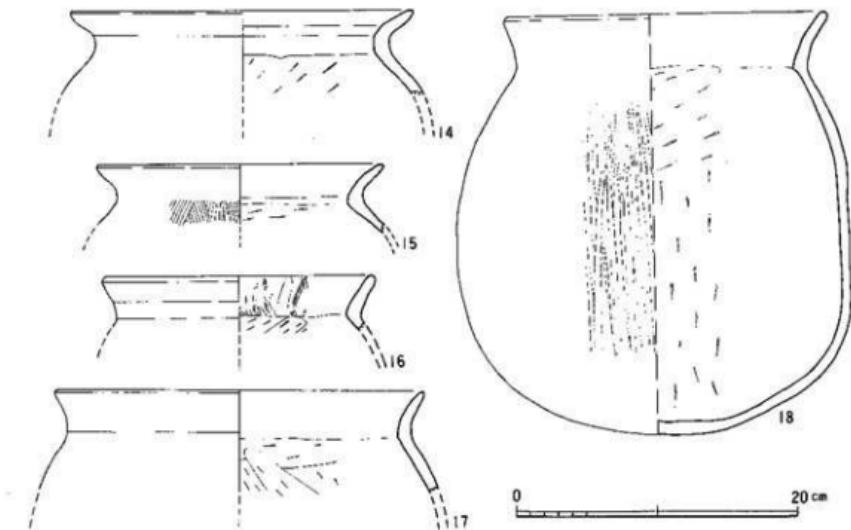
SII 16出土遺物一覧表 ()は現存値

掲図番号	図版番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口径	器高	底径			
第73図 -1	9 3	須恵器 蓋	A ₂	13.9	3.9			ヘラ切り後ナデ	
-2	9 4	同上	A ₂ ?	13.1	(2.9)		口唇部ノミ刀状		蓋の蓋か
-3	9 4	同上	A ₂	13.6	4.3			ヘラ切り後ナデ	
-4	9 4	同上	A ₂	13.7	(3.5)				
-5	9 4	同上	A ₁	12.6	(2.4)		縁は沈線による		
-6	9 3	須恵器 坏	A	10.4	4.0			静止ヘラ削り	
-7	9 4	同上		10.2	3.6			ヘラ切り後ナデ	
-8	9 4	須恵器 壺			(4.4)	丸底	外面全面回転ヘラ 削り		
-9	9 4	同上					カキ目 平行叩同 心円当具痕	うすい器壁	
-10	9 4	土師器 坏	A	13.1	(4.5)			指による押圧 削り	

擇区 番号	図版 番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口徑	器高	底径			
-11	9 4	上師器 脚			(4.3)	11.5		指による押圧 裏面は削り?	不整形
-12	9 3	上師器 高壺		15.6	10.4	(脚端径) 11.3		ミガキ ハケ目	
-13		同上		15.6	(4.4)			ミガキ 放射状暗文	
-14	9 4	土師器 甕	A:	24.5	(6.1)		頸部稍曲強く肩部 の張り強い	肩部ナデ	
-15	9 4	同上	A:	20.6	(4.9)			肩部ハケ目	
-16	9 4	同上	A:	19.5	(4.0)		口縁直線的に伸び る	口縁内縦方向に細 かいキズ	
-17	9 4	同上	A:	26.4	(7.2)		口縁外反度弱い	肩部ヨコナデ	
-18	9 5	同上	A:	23.2	29.9			肩部ミガキ+ナデ 一部ハケ目	左右非対称
第74図									
-19	9 4	同上	A:?	28.1	(5.1)		口縁うすい		
-20	9 4	同上	A:	16.5	(3.8)		口縁直線的に伸び る	肩部ハケ目+ナデ	
-21	9 4	同上	A:	12.1	(1.65)		同上		小型
-22	9 4	同上	A:	29.3	(9.6)		口縁先細	肩部ナデ	
-23	9 5	同上	A:	17.5	22.4		肩にわずかに稜	肩部~底部ナデ	
-24	9 5	同上	A:	18.4	26.2		胴部ほぼ球形	肩部ハケ目	
-25	9 4	同上	A:	16.1	(14.0)		口縁うすい	肩部ハケ目	
-26	9 5	同上	A:	(16.9)	(21.2)			肩部上半ハケ目 下半ハケ目+ナデ	器面凹凸顯著
-27	9 4	同上	A:	(25.7)	(12.2)			肩部ハケ目 下半 ナデ	
第75図									
-28	9 5	同上	A:	(33.4)	(13.0)			肩部ハケ目	
-29	9 5	同上	B	19.5	(13.0)		器壁全体にうすい	肩部ハケ目+ミガ キ	
-30	9 5	同上	A:	26.7	(3.6)				
-31	9 6	同上	A:	18.6	(9.6)			肩部ハケ目+ナデ	
-32	9 6	土師器 壺			(7.2)	12.8		外面ナデ	
-33	9 6	同上		21.2	(2.3)		口縁わずかに外反	外面に凹線状の凹 み2条(文様でな い)	
-34	9 5	土師器 支脚			(13.6)	13.6	中央に棒状工具刺 突による3×3.8cm の孔	指押圧による整形 全体にいびつ	
-35	9 6	上師器 把手	全長 (15)					指押圧による整形	
-36	9 6	鉄器 壺?	全長 (5.6)	幅 1.8	厚 1.1				
-37	9 6	鉄器 錠	全長 19.8	幅 4	厚 0.2		曲刀鎌 着装部折 曲 折曲方向に全 体に凸曲		着装部に木質残る

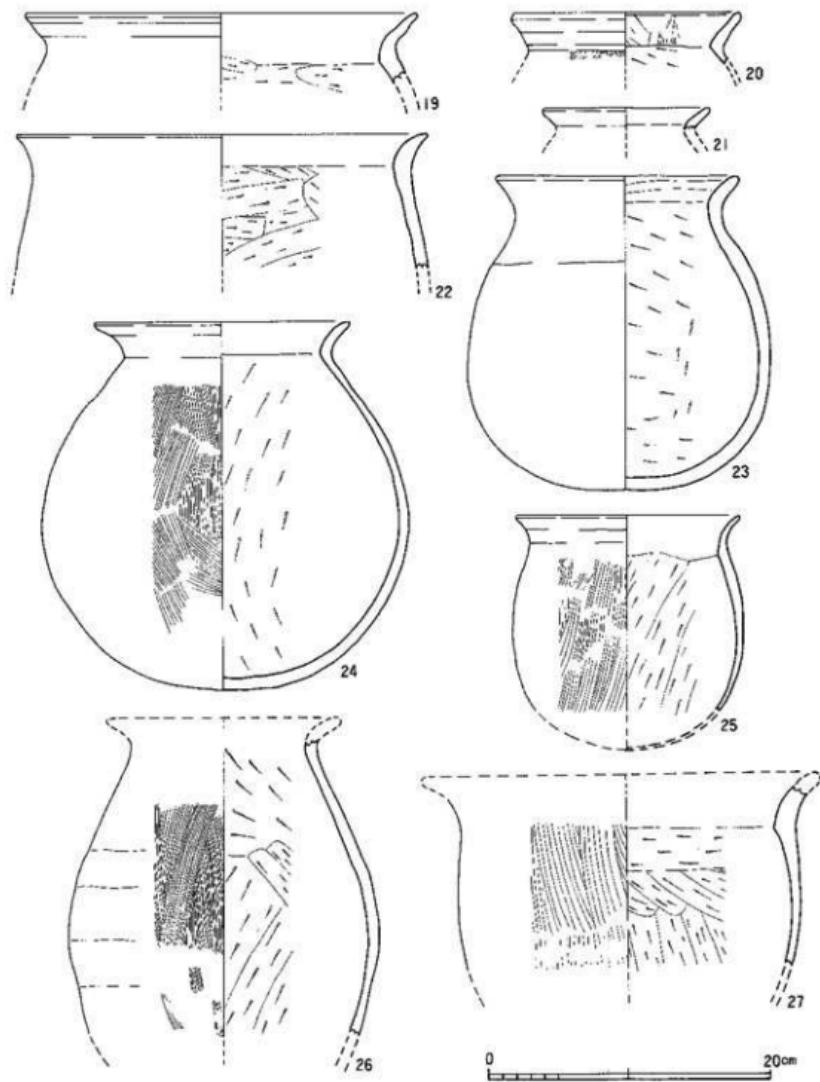


10 cm

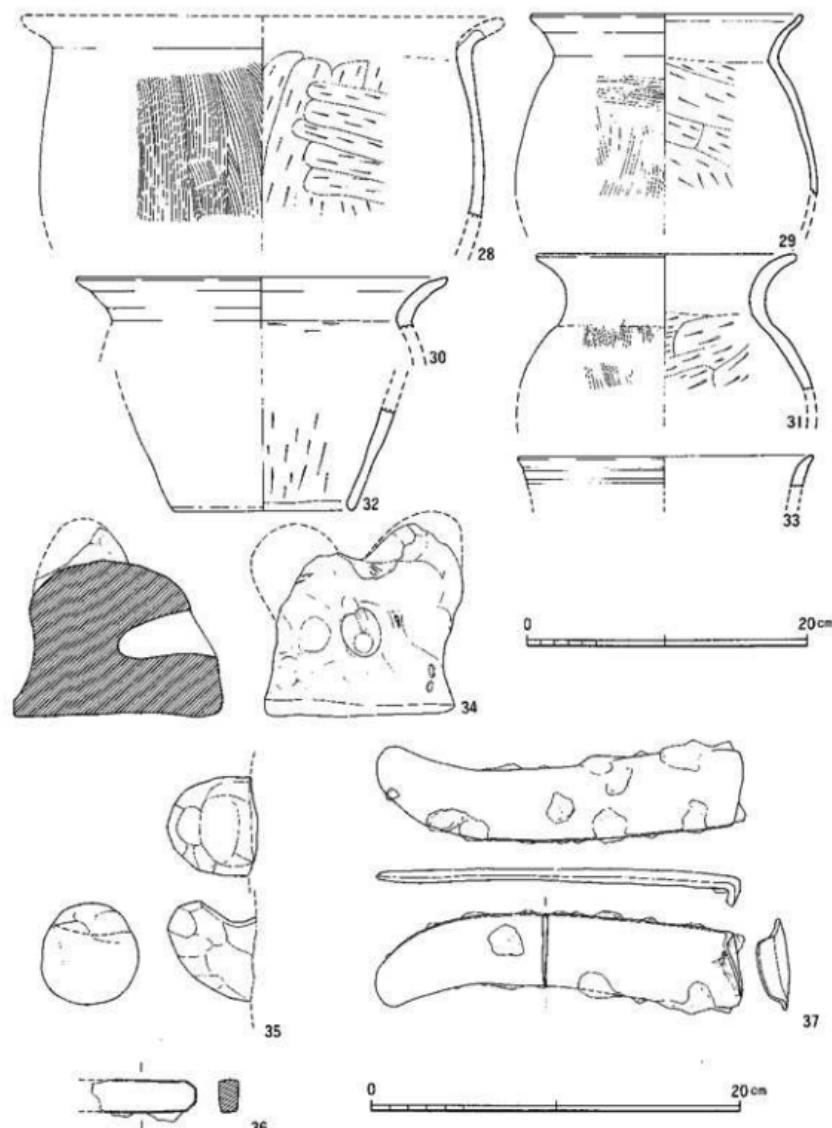


20 cm

第73図 森遺跡 SI16出土土器 (1) 1~13 (1:3) 14~18 (1:4)



第74図 森遺跡 SI16出土土器 (2) (1:4)



第75図 森遺跡 SI 16出土土器 (3) 28~34 (1:4) 35 (1:3) 鉄器36~37 (1:3)

SI 17 (第76~79図 図版39~42) 3×3.4mの長方形の竪穴住居跡である。非常に残りがよく、壁高は30~40cmである。底面はやや凹凸があるもののほぼ水平で、貼り床は確認できなかった。

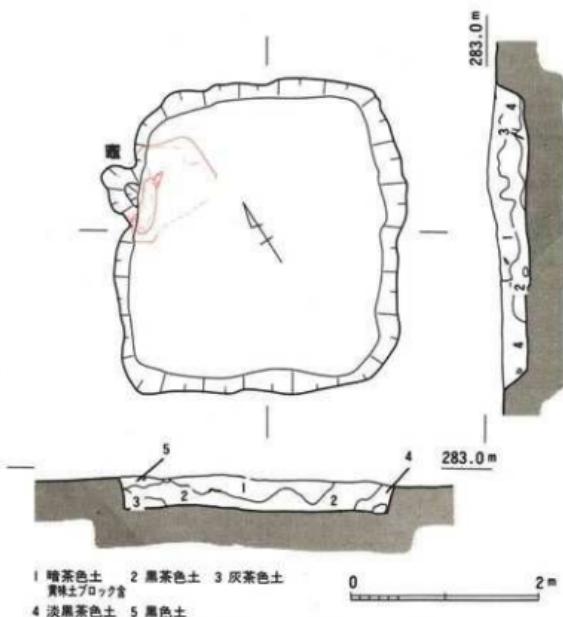
竪は北西壁のやや北寄りに造り付けられている。焚き口の幅は約30cmである。竪の構造は焚き口に板状の石を両側に立て、その上に細長い石が架けられているが、土圧で西南方向に傾いていた(第79図 図版40、41)。これらの石の周囲にはさらに粘土が覆われてい

た。煙道部分は住居跡の北西壁が掘り込まれていたがこの部分には石は置かれていなかった。

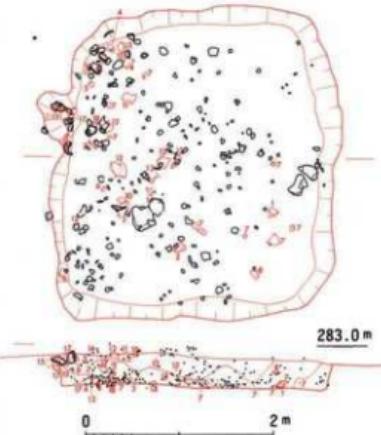
周溝および柱穴は検出できなかった。遺物は全面から出土したが、竪付近での出土が多く、竪とは反対側(東北側)の壁際では少なかった(第77図 図版41)。出土遺物は須恵器壺C、須恵器横瓶、

SI 17計測表

規 模	方 形		
	上 面	下 面	床 面 積
	3.4×3 m	2.9×2.65 m	約 7.7 m ²
主 軸	N-32°-E		
壁 高	24 ~ 31 cm		
竪の位置	西北壁 北寄り		



第76図 森遺跡 SI 17実測図 (1:60)



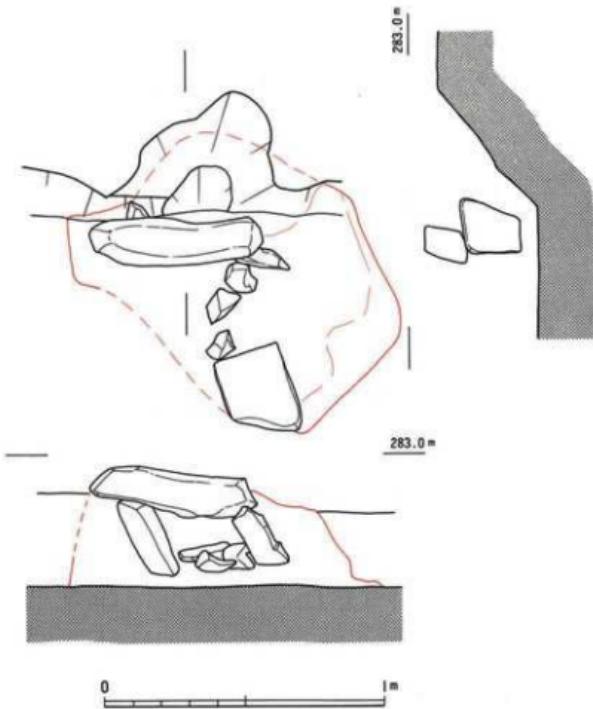
第77図 森遺跡 SI 17遺物出土状態 (1:60)



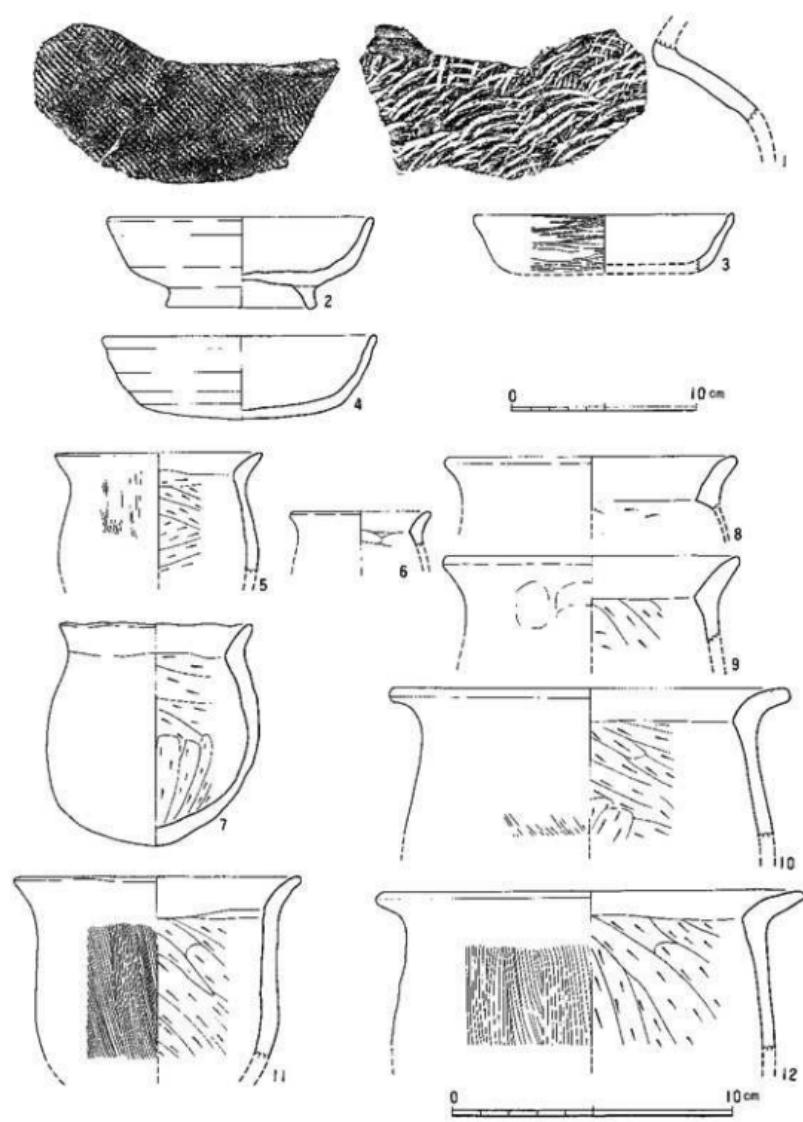
第78図 森遺跡 SI 17
出土鉄器 (1 : 2)

SI 17出土遺物一覧表 ()は現存値

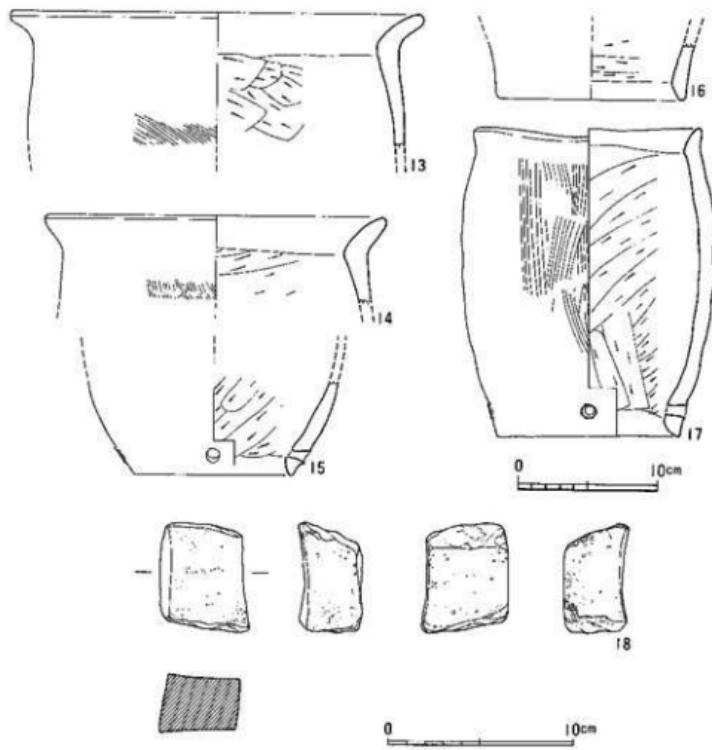
捕図 番号	図版 番号	器種	分類	法量 (cm)			形態	文様・手法	備考
				口徑	器高	底径			
第80図 -1	9 6	須恵器 横板						平行叩 同心円当 具痕	
-2	9 7	須恵器 环	C	14.4	5.0	8.2		回転糸切後ナデ	
-3	9 6	土師器 坏	E	14.1	3.1	10	口縁端部内側にわ ずかに屈曲	難なミガキ	赤色塗彩?
-4	9 7	同上	E	14.9	4.5			ヨコナデ	
-5	9 6	土師器 甕	A:	14.8	(8.7)		口縁短い	脚部ハケ目+ナデ	



第79図 森遺跡 SI 17竪実測図 (1 : 20) 赤は粘土



第80図 森遺跡 SI 17出土土器 (1) 1~4 (1:3) 5~12 (1:4)



第81図 森遺跡 SI 17出土土器 (2) 13~17 (1:4) 磚石18 (1:3)

SI 17出土遺物一覧表 ()は現存値

捕団 番号	図版 番号	器種	分類	往量(cm)			形 態	文様・手法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第80図 -6	9 6	土師壺 甌	A:	10.1	(2.5)				小型
-7	9 7	同上	A:	13.8	15.8		口縁短い	肩～底部不規方向 のナデ	
-8	9 6	同上	A:	20.9	(3.9)			頸部指頭による押 压痕	
-9	9 6	同上	A:	21.2	(6.3)			同 上	
-10	9 6	同上	A:	28.7	(10.5)			肩部ナデ 下半ハ ケ目+ナデ	
-11	9 6	同上	A:	20.6	(13.1)			肩部ハケ目	
-12	9 7	同上	A:	30.7	(11.4)			肩部ハケ目	
第81図 -13	9 7	同上	A:	29.8	(9.4)			肩部ハケ目+ヨコ ナデ	
-14	9 7	同上	A:	24.5	(6.2)			肩部ハケ目後ナデ	

掲図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)			形 態	文様・手法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第81図 -15	9 7	土師器 甌			(6.7)	11.4		ヨコナデ+ナデ	四方に円孔
-16	9 7	同上			(4.0)	13.3	端部平坦面	ヨコナデ	
-17	9 8	同上		16.3	22.0	13.2	口縁部屈曲 口縁 あまり広がらない	胴部粗いハケ目 下半ナデ	底部に小孔
-18	9 7	砥石		長 5.6	幅 4	厚 1.8	一面は使用により 凹面をなす	底痕細かい	
第78図 -19	鉄 器 茎 ?			長 (3)	幅 0.8	厚 0.4			

SI 18 (第82~84図 図版42~46) 2.8×3.2mの不整梢円形の竪穴住居跡である。底面はやや凹凸があるもののほぼ水平で、貼り床は確認できなかった。

竈は南西壁のやや西寄りに造り付けられている。焚き口の幅は約30cmである。竈は焚き口に板状の石が両側に立てられ、その間に長さ40cmの細長い石が落ち込んでいた(第84図 図版44、45)。この石は本来2つの板状の石の上に架けられていたと思われる。これらの石の周囲はさらに粘土で覆われ、住居跡の上外方まで粘土が検出された。煙道の部分では石は使われておらず、煙道上端部で底部を打ち欠いた土師器甌を倒立状態に置いて煙道に転用していた(図版45)。この転用された土師器(第85図7、第86図11、13)。

14) が遺構検出面である地山面より

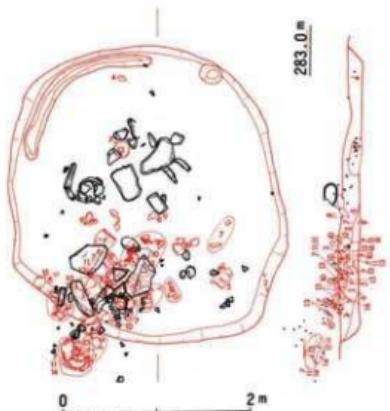
約30cm高い位置にあることから、調査時には確認できなかったが、この住居跡は本来地山面より高い位置から掘り込まれていたことがわかる。

床面からのほぼ中央からは、柱状の炭化物が出土し、この住居跡が焼失したことが想像される(図版43)。

遺物は竈付近からやや浮いた状態での出土が多く、竈とは反対側の東側および東北側壁近くからの出土は少ない(第83図 図版45)。原位置を保っていると考えられるのは煙道に転用されていた第85図7、第86図11、13、14である。



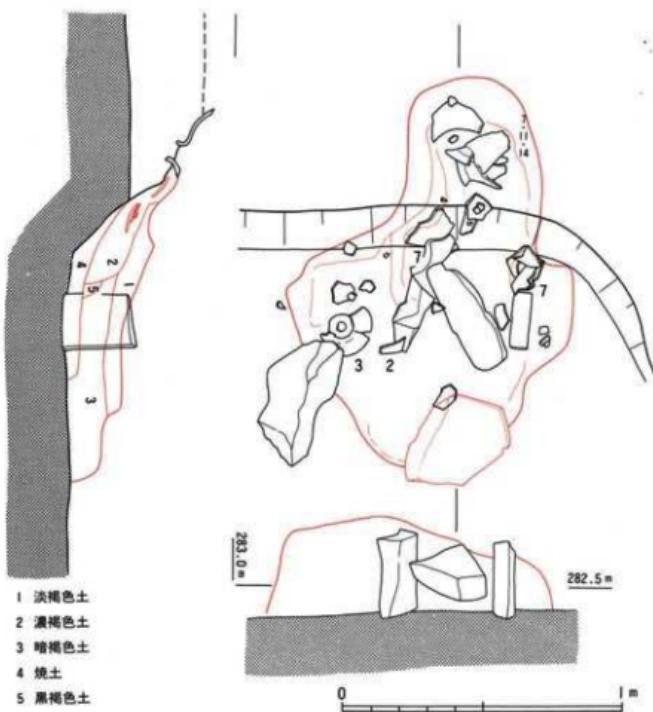
第82図 森遺跡 SI 18実測図 (1:60)



第83図 森遺跡 SI 18遺物出土状態 (1:60)

SI 18計測表

規 模	不 整 圓 形		
	上 面	下 面	床 面 積
	3.2×2.9m	3×2.75m	約 8.3 m ²
主 軸	N-42°-E		
壁 高	8 ~ 19 cm		
竪の位置	西南壁 北寄り		



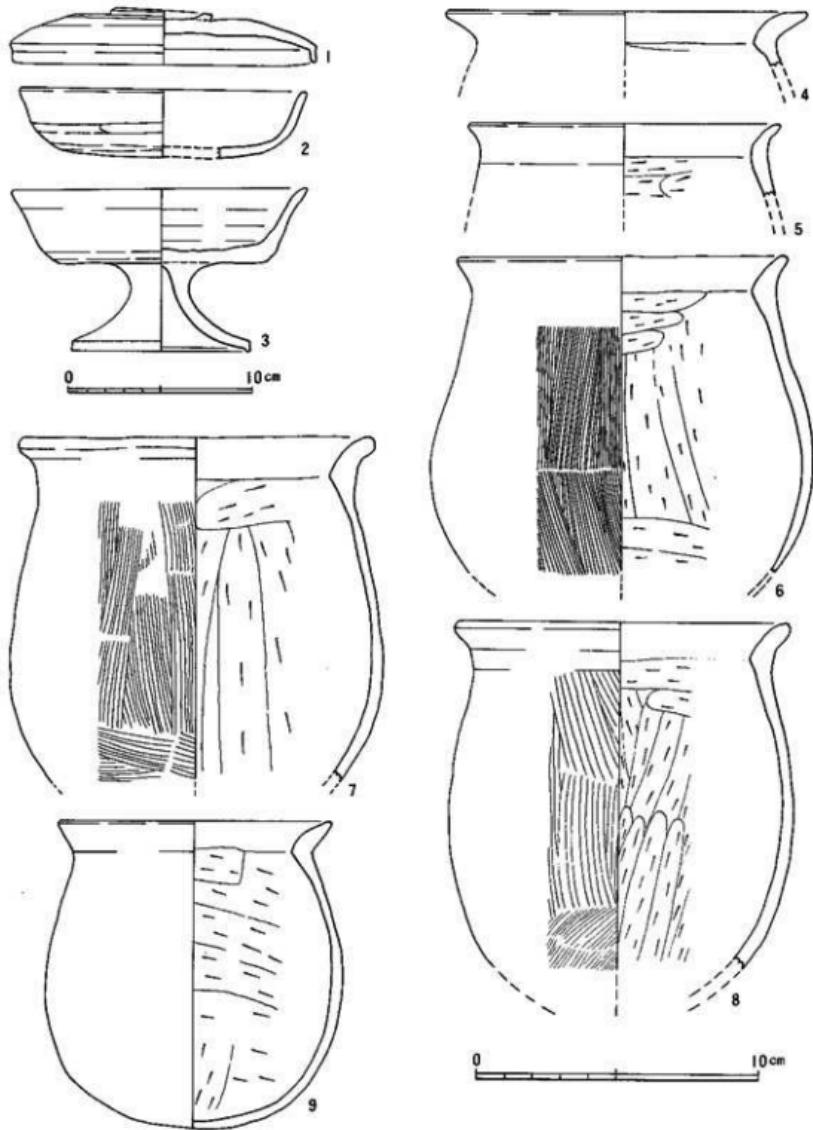
第84図 森遺跡 SI 18竪実測図 (1:20) 赤は粘土

出土遺物は須恵器蓋B、土師器坏E、須恵器高坏B、土師器甕A₁、A₂、B、土師器鉢、砥石である(第85~87図 図版98~100)。

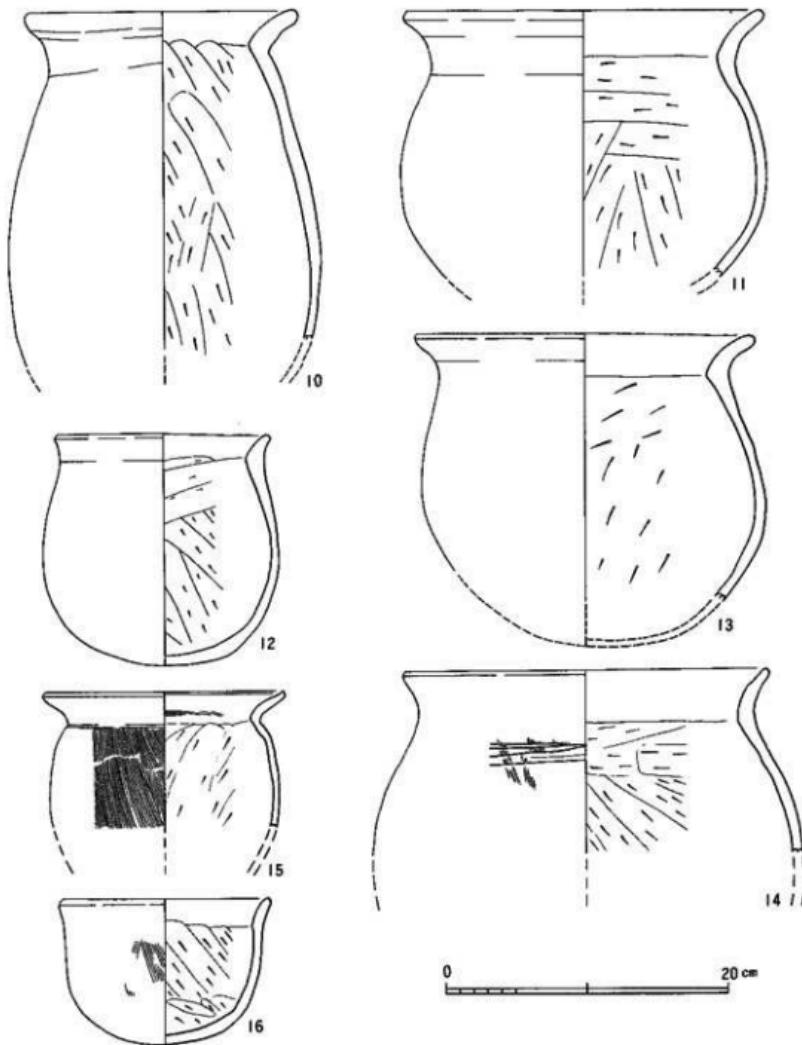
第85図1の須恵器からS I 18は8世紀代の住居跡と思われる。

S I 18出土遺物一覧表 ()は現存値

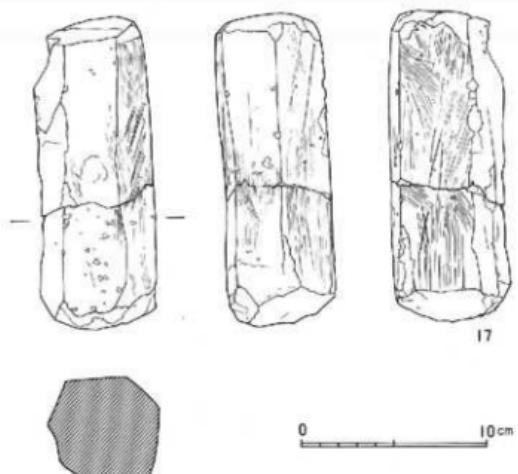
掲図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)			形 態	文様・手法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第85図 -1	9 8	須恵器 蓋	B	16.5	3.1		輪状つまみ	回転糸切後回転 ナデ	内面摩滅
-2	1 0 0	土師器 坏	E	15.6	3.7	11.4		暗文ミガキまた はケズリ	赤色繪彩
-3	9 8	須恵器 高坏	B	16.05	8.9	9.8		底部回転ケズリ	
-4	1 0 0	土師器 甕	A	25.8	(3.8)		口縁短い	腹部に指押圧痕	
-5	1 0 0	同上	A ₁	22.4	(5.0)		口縁短い	腹部ナデ	
-6	9 8	同上	A ₁	23.6	(22.5)		口縁短い	腹部ハケ目	
-7	9 8	同上	A ₁	25.4	(24.5)		口縁短い	腹部粗いハケ目	
-8	9 9	同上	A ₁	23.9	(24.6)		口縁短い	腹部粗いハケ目	
-9	9 8	同上		19.65	21.8		口縁短い	腹部ナデ	
第86図 -10	9 9	同上	A ₂	19.4	(23.3)			腹部ナデ	
-11	9 9	同上	A ₂	25.5	(19.0)		腹部脇平気味	腹部ナデ	
-12	9 8	同上	A ₂	15.3	16.4		口縁短い	腹部ヨコナデ ナデ	
-13	9 9	同上	A ₂	24.3	(19.0)			腹部ナデ	
-14	1 0 0	同上	A ₂	26.2	(13.0)		口縁直立気味	腹部ハケ目+細沈 線状の調整痕 ナデ	
-15	9 9	同上	B	17.2	(9.6)		口縁端わずかにつ まみ上げる	ハケ目	
-16	9 9	鉢		15.2	10.4		口縁わずかに外反	ハケ目+ナデ	
第87図 -17	1 0 0	砥石		長	幅	厚	断面六角形	砥痕明瞭	
				16.95	7.3	5.4			



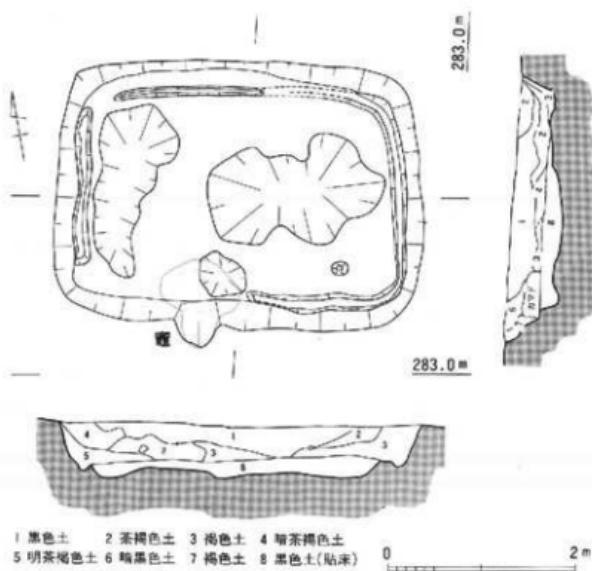
第85図 森遺跡 SI 18出土土器 (1) 1~3 (1:3) 4~9 (1:4)



第86図 森遺跡 SI 18出土土器（2）（1:4）



第87図 森遺跡 SI18出土砾石 (1:3)



1 黒色土 2 茶褐色土 3 棕色土 4 増茶褐色土
5 明茶褐色土 6 線黑色土 7 棕色土 8 黒色土(粘土)

第88図 森遺跡 SI19実測図 (1:60)

SI19 (第88~91図 図版46
~48) 3.8×2.9mの長方形の
竪穴住居跡である。非常に残り
がよく、壁高は40cmである。底
面は凹凸が著しく、10~20cmの
厚さで貼り床をして床面として
いる。

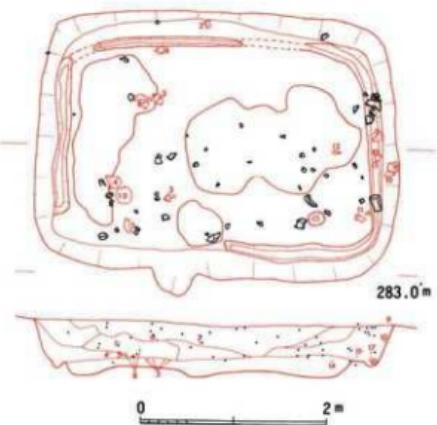
竪は南壁のやや西寄りに造り
付けられていたが、粘土だけが
検出され石組などはみられなか
った (第91図 図版48)。煙道
の部分は、わずかに住居跡の壁
を削り込んでいる。

周溝は10~20cmの幅で北、東、
西壁際で検出された
が、途切れ途切れで
連続していない。周
溝は底面よりやや高
く、貼り床面上と
ほぼ同じ高さに掘ら
れている。

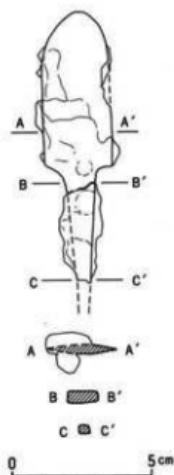
柱穴は検出されな
かった。

遺物の出土量は少
なく、すべて貼り床
より高い位置で出土
した (第89図 図版
48)。

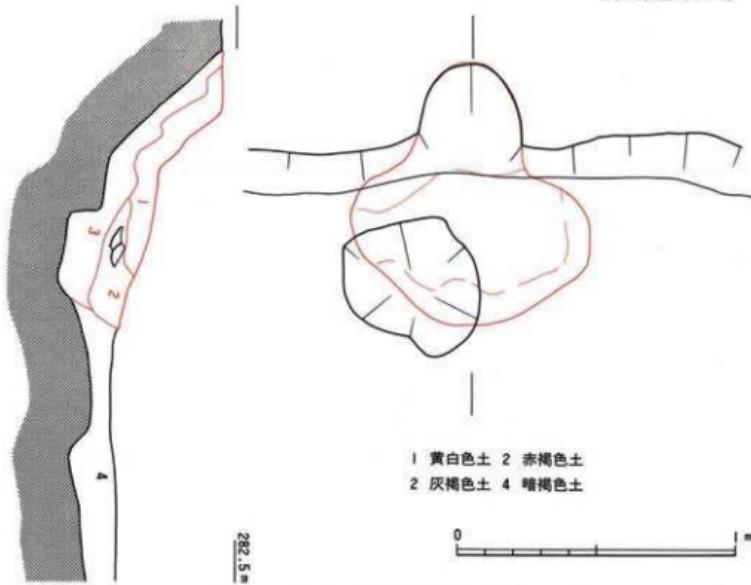
出土遺物は須恵器
蓋B、須恵器環C、
土師器環B、土師器



第89図 森遺跡 SI 19遺物出土状態 (1 : 60)



第90図 森遺跡 SI 19
出土鉄器 (1 : 2)



第91図 森遺跡 SI 19竪坑測図 (1 : 20)

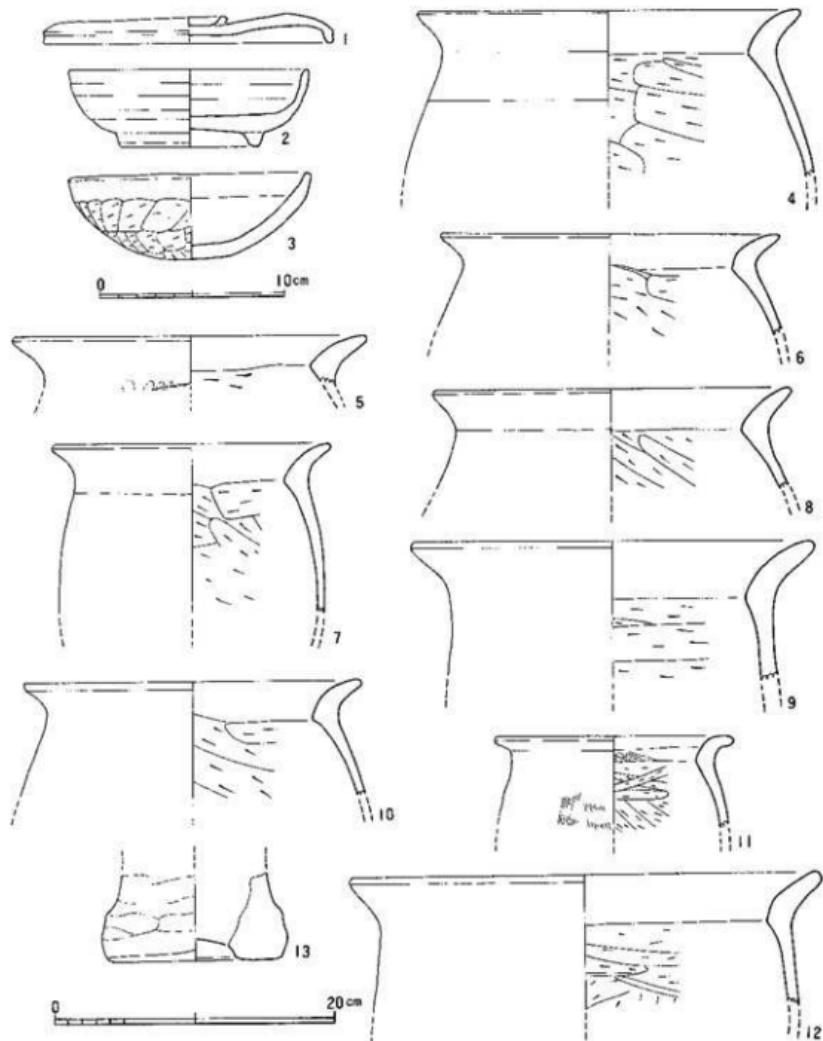
甕A₁～A₃、土製支脚(?)、鉄鎌が出土している(第90、92図 図版100～102)。第92図1、2の須恵器からS I 19は8世紀代の住居跡と思われる。

S I 19計測表

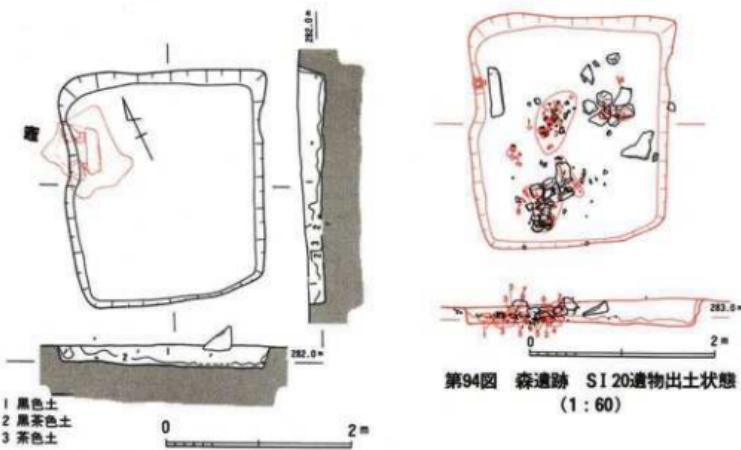
平面形	長 方 形		
	上 面	下 面	床 面 積
規 模	3.9 × 2.9 m	3.5 × 2.45 m	約 6.8 m ²
主 軸	N-12°-E		
壁 高	3.4 ~ 4.8 cm		
窓の位置	南壁中央		
周 溝	幅 7 ~ 20 cm		

S I 19出土遺物一覧表 ()は現存値

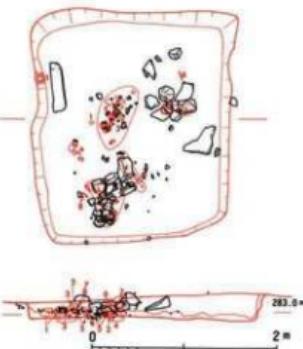
掲図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)			形 種	文様・手法	備 考
				口 徑	器 高	底 徑			
第92図 -1	100	須恵器 蓋	B	15.8	1.4		輪状つまみ 偏平	切離し不明	
-2	100	須恵器 环	C	13.05	4.2	7.5		回転糸切の後軽く ナデ	
-3	100	土師器 环	B	13.2	4.7			ケズリ	
-4	101	土師器 甕	A ₁	27.5	(11.7)			脚部ナデ	
-5	100	同上	A	25.4	(3.7)		口唇うすい	外面ケズリ状のナ デ	
-6	101	同上	A ₁	24.2	(6.8)			脚部ヨコナデ	
-7	101	同上	A ₁	20.0	(12.0)			脚部ナデ	
-8	101	同上	A ₁	25.6	(7.0)			脚部ナデ	
-9	101	同上	A ₁	29.0	(19.6)			脚部ナデ	
-10	101	同上	A ₁	24.0	(8.1)			脚部ナデ	
-11	101	同上	A ₁	17.2	(6.3)			脚部ハケ目+ナデ	
-12	101	同上	A ₁	33.8	(9.5)			脚部ナデ	
-13	101	土 製 支脚?			(6.2)	12.6	底部凹み底	雑なナデ	
第90図 -14	102	鉄 器 鎌		長	幅	厚			
				9.5	2.4	0.4			



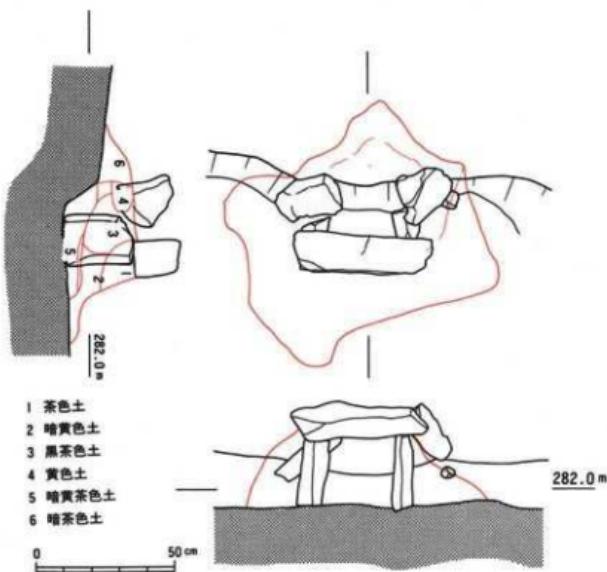
第92図 森遺跡 SI19出土土器 1～3 (1:3) 4～13 (1:4)



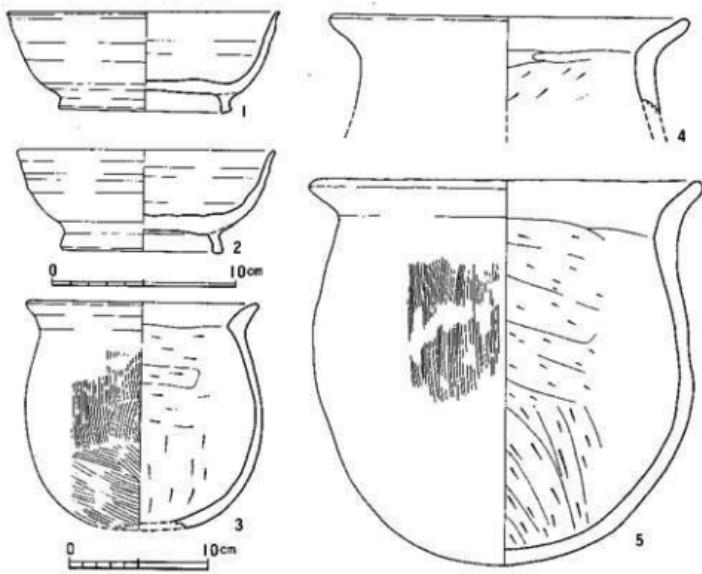
第93図 森遺跡 SI 20実測図 (1 : 60)



第94図 森遺跡 SI 20遺物出土状態
(1 : 60)



第95図 森遺跡 SI 20実測図 (1 : 20) 赤は粘土



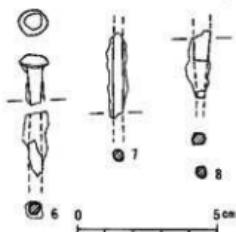
第96図 森遺跡 SI 20出土土器 1、2 (1:3) 3~5 (1:4)

SI 20 (第93~95図 図版49~51) 2.3×2.6mの長方形気味の竪穴住居跡である。底面はほぼ水平で、貼床は確認できなかった。

竈は西壁の北寄りに造り付けられている。焚き口の幅は約25cmである。竈は非常に残りがよく、焚き口に板状の石が両側に2個ずつ立てられ、その上に長さ50cmの細長い石が架けられていた(第95図 図版50, 51)。これらの石の周囲はさらに粘土で覆われ、住居跡の上外方でも粘土が検出された。

SI 20計測表

規 模	方 形		
	上 面	下 面	床 面 積
	2.5×2.3 m	2.4×2.15 m	約 5.2 m ²
主 軸	N-27°--E		
壁 高	15 ~ 30 cm		
竈の位置	北 壁 中 央		



第97図 森遺跡 SI 20
出土鉄器 (1:2)

周溝、柱穴は検出されなかった。

遺物の出土量は少なく、竈から中央付近での出土が多かった（第94図 図版51）。

出土遺物は、須恵器壺C、D、土師器壺A₁、針形、リベット形の鉄器である（第96、97図 図版102）。

S I 20出土遺物一覧表 ()は現存値

擇図 番号	図版 番号	器種	分類	法 量(cm)			形 態	文様・手法	備 考
				口 径	器 高	底 径			
第96図 -1	102	須恵器 壺	D	14.8	5.4	9.4		糸切？ 後ナデ	
-2	102	同上	C	14.0	5.5	8.8		回転糸切後回転ナ デ	口縁部にうすく自 然釉
-3	102	土師器 壺	A ₁	16.7	(16.3)		口縁短い	脚部ハケ目	
-4		同上	A ₁	25.7	(6.9)			脚部ナデ	
-5	102	同上	A ₁	28.2	27.4			脚～底部ハケ目+ ナデ	
第97図 -6	102	鉄器		長 (4.4)	幅 0.5	上端径 1			頭部は丸く リベ ット形
-7	102	鉄器			幅 0.4				針状鉄器
-8	102	鉄器							

S I 21（第98～102図 図版52～55） 一片3.2mのほぼ正方形の竪穴住居跡である。底面は凹凸が著しく10～20cmの厚さで貼り床が確認された。貼り床面はほぼ水平である。調査時の遺構確認面はこの貼り床の面で、実際には貼り床面より30～40cm高い面（黒色土上面）から掘り込まれていることが土層の観察で判明した（第98図左の土層図 図版53）。

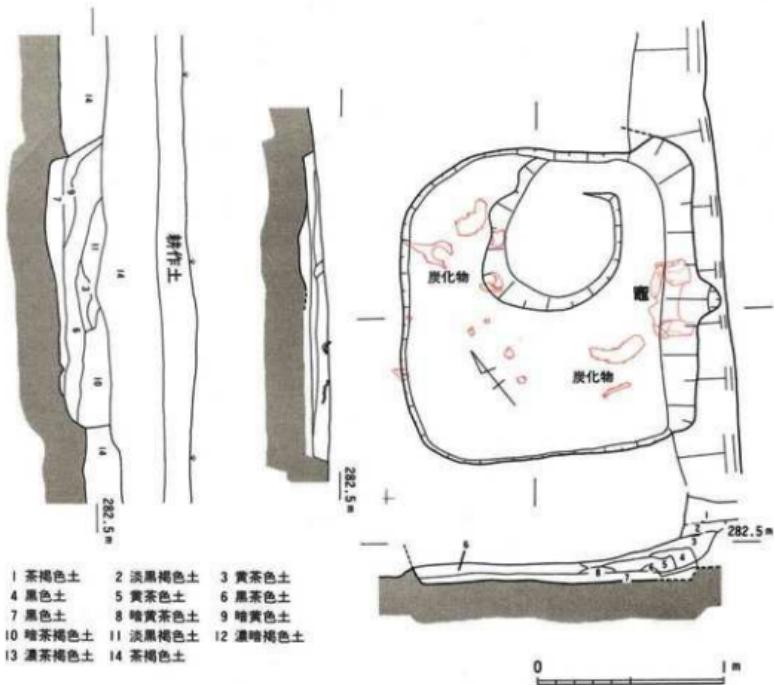
貼り床面には多くの炭化物塊があり（図版52）、S I 21は焼失したものと思われる。

竈は東壁のほぼ中央に造り付けられている。焚き口の幅は約40cmである。竈は焚き口に板状の石が両側に立てられ、その間に細長い石が落ち込んでいた（第100図 図版53、54）。この石は本来2つの板状の石の上に架けられていたと思われる。これらの石の周囲はさらに粘土で覆われていたが、焚き口付近に立てられた石はとくにいねいに粘土で包まれていた。煙道は住居跡の壁を削り込んで作られていた。

周溝、柱穴は確認できなかった。

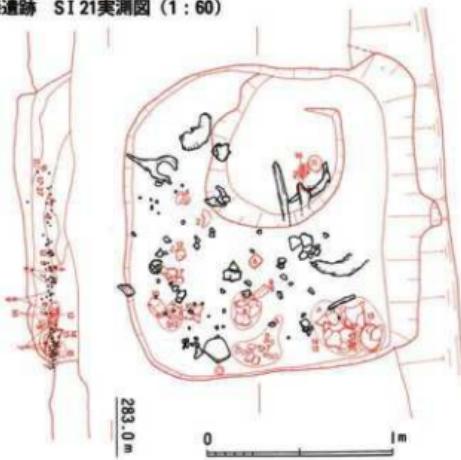
遺物は住居跡南側で多く、比較的床面上から出土が多い（第99図 図版54）。比較的原位置を保っていると思われるものは、第104図14、15である（第101図 図版55）。

この住居跡は焼失したために、木製品が完全に炭化して残っていた。これらは横樋、筒状木製品、手網と思われる木の皮で結わえられた木製品で、住居跡のほぼ中央で床面上からまとめて出土



第98図 森遺跡 SI 21実測図 (1:60)

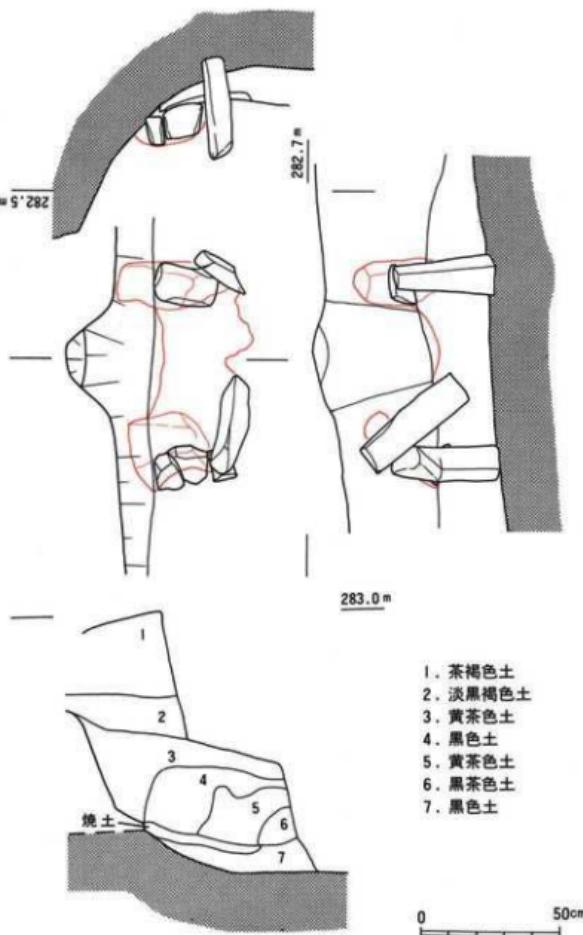
した（第102図 図版55）。横櫛（第105図16 図版103）は大きく湾曲しており、歯は非常に細く繊細に作られている。筒状の木製品（第105図17～26 図版106）は器種不明であるが、向きを同じくして出土したこと、一端に紐を縛り付けたと思われる凹みが残っているものがあることから、数個を組み合わせて使用したものと思われる。筒状木製品の1つ（第105図24）に



第99図 森遺跡 SI 21遺物出土状態 (1:60)

は網の一部が残っている。これは、手網の網か、またはこれらの木製品をいれていた網が付着したものと思われる。手網（第105図27 図版103）は結束部分の残欠である。

出土遺物はこのほか須恵器壺B、須恵器高壺A、須恵器横瓶、須恵器壺、土師器壺A₁～A₃がある（第103～104図 図版103～105）。高壺Aは4個体出土している。これらは透かしの有無、形などは違うものの、形態、法量はほぼ同じである。いずれも壺部内面には重ね焼き痕が明瞭に残って



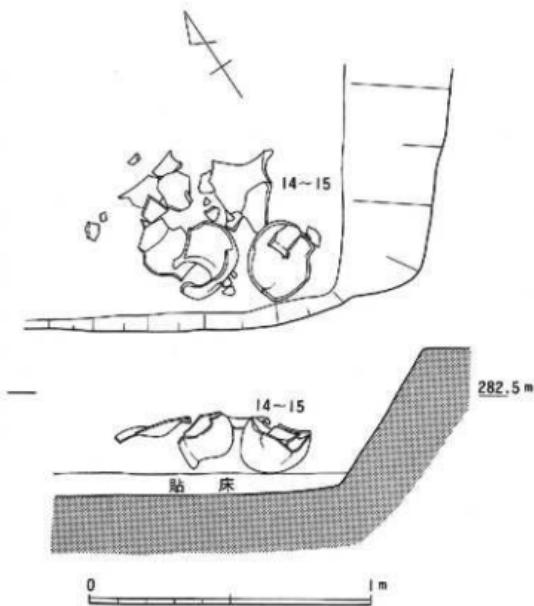
第100図 森遺跡 SI 21竪実測図 (1:20) 赤は粘土

おり、それぞれの胸部径とはほぼ同じ径である。

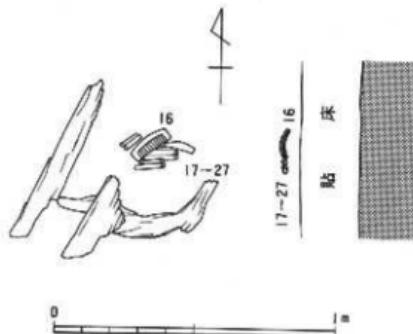
出土須恵器のうち第103図1～5からS I 21は7世紀前半の住居跡と思われる。

S I 21計測表

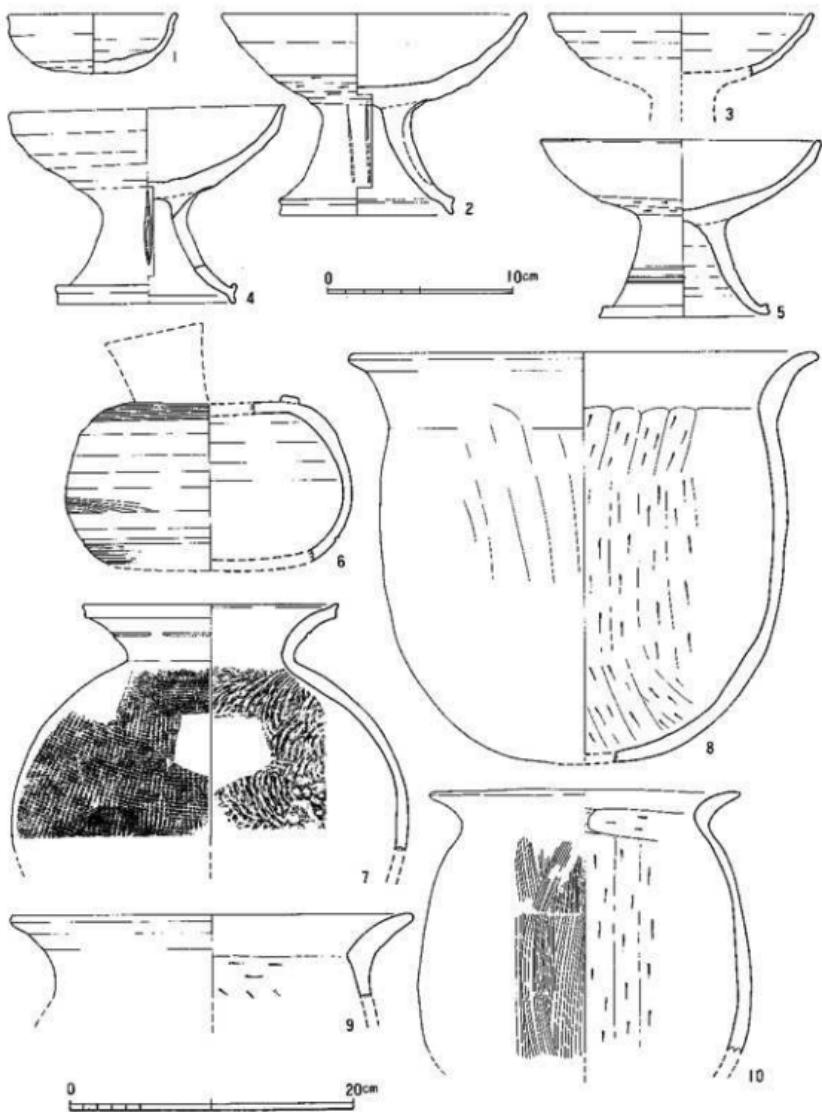
平面形	長 方 形		
規模	上 面	下 面	床面積
	3.75 × 3.2m	3.15 × 2.7m	約8.5m ²
主軸	N-53°-W		
壁高	7 ~ 64 cm		
竈の位置	東南壁中央		



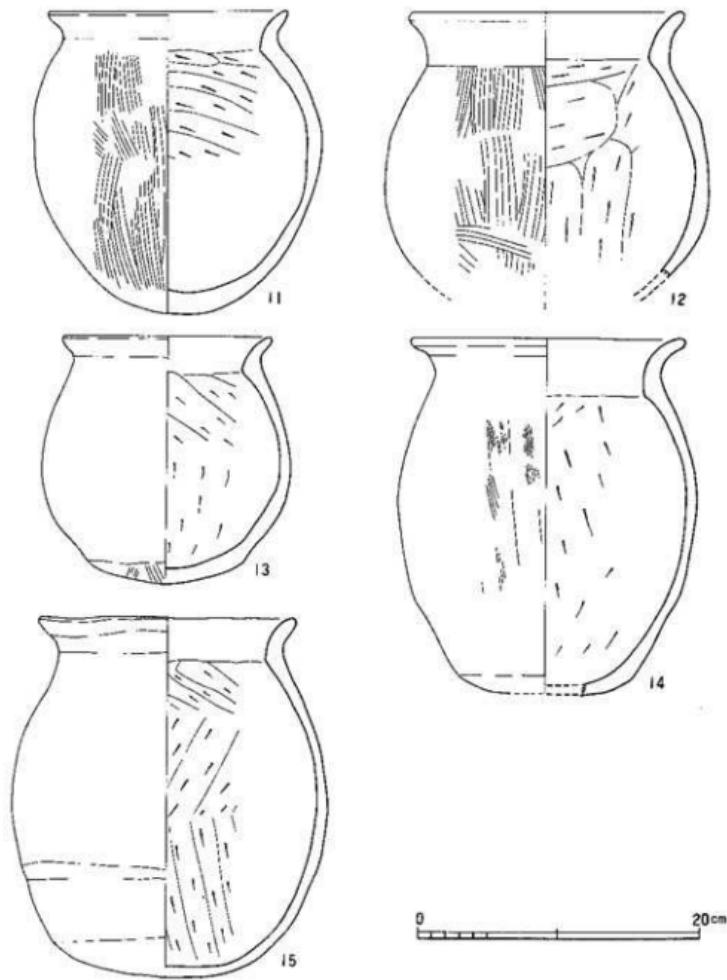
第101図 森遺跡 S I 21遺物出土状態 (1 : 20)



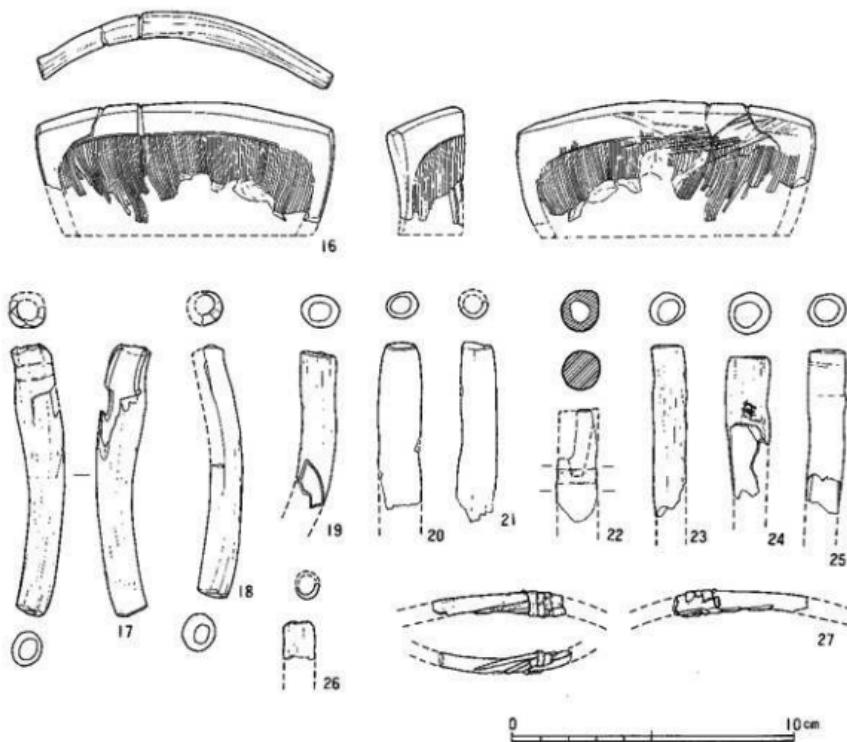
第102図 森遺跡 S I 21木製品出土状態 (1 : 20)



第103図 森遺跡 SI 21出土土器 (1) 1~5 (1:3) 6~10 (1:4)



第104図 森遺跡 S121出土土器（2）（1:4）



第105図 森遺跡 SI 21出土木製品 (1:2)

SI 21出土遺物一覧表

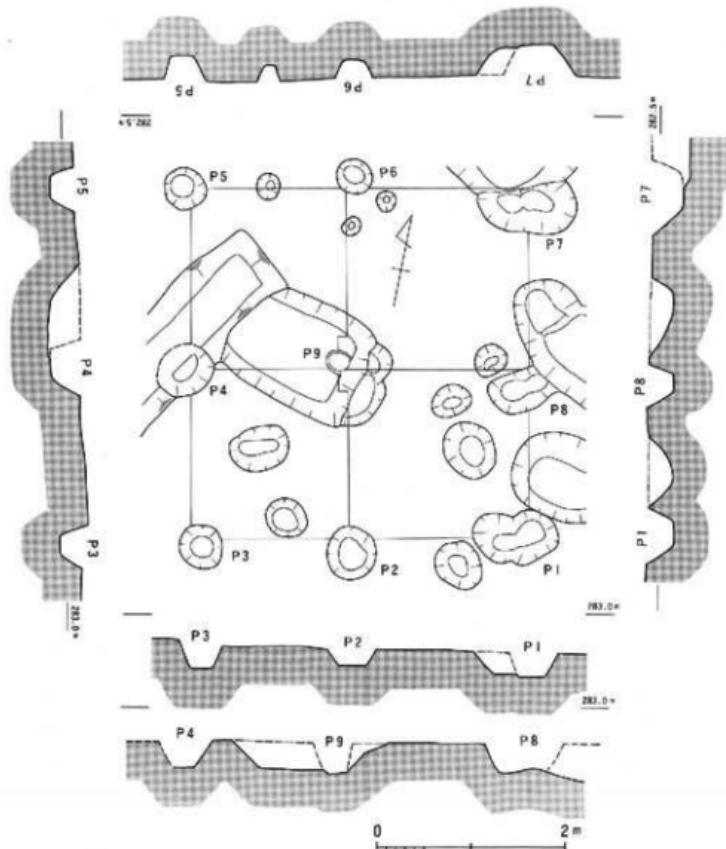
掲 番 号	国 内 番 号	器種	分類	法 量 (cm)				形 態	文 様・手 法	備 考
				口 径	器 高	底 径	存			
第103回 -1	103	須恵器 环	B	9.2	3.2				ヘラ切り後ナデ	内面一部黒く変色
-2	103	須恵器 高环	A	16.5	10.9	9.3		線状の透し	环部回転ケズリ	
-3		同上	A	14.4	(3.4)					
-4	103	同上	A	14.9	10.65	9.7		線状の透し	回転ナデ	环内面重ね焼痕
-5	103	同上	A	15.1	9.7	9.2			回転ケズリ 脚部 沈線2条	环内面重ね焼痕

種類 番号	図版 番号	器種	分類	法量(cm)			形態	文様・手法	備考
				口徑	器高	底径			
第103回 —6	103	須恵器 横瓶					ボタン状の浮文	カキ目 回転ケズ	全面に釉 り
—7	103	須恵器 甕		18.2	(17.6)			平行叩 カキ目 同心円叩度	口縁 肩部に自然 釉
—8	104	土師器 甕	A:	33.6	29.3		口縁やや長い	胴部ナデ	
—9	103	同上	A:	28.6	(5.9)			胴部ヨコナデ	
—10	104	同上	A:	22.0	(18.8)			胴部ハケ目	
第104回 —11	104	同上	A:	13.0	(16.3)		II縁短い	胴部ハケ目	
—12	104	同上	A:	15.0	(14.3)		胴部球形	胴部ハケ目	
—13	104	同上	A:	15.1	17.6		底部平底気味の丸 底	胴部ナデ 底部ハ ケ目 + ナデ	
—14	104	同上	A:	19.9	25.2		平底気味	胴部ハケ目 + ナデ	
—15	105	同上	A:	18.4	25.5		平底気味	胴部ナデ	底部外面リング状 にスス付着
第105回 —16	木製 櫛		長	幅	厚	湾曲(製作時か)	一面に製作時のキ ズ多い		炭化
—17	106	不明 木製品	長	徑		筒状 上部に凹み (結縛痕か)	上下端面取 全面 ミガキ	炭化 湾曲は炭化 時か	
—18	106	同上	長	徑		筒状	上下端面取 全面 ミガキ	炭化 湾曲は炭化 時か	
—19	106	同上	長	徑		筒状	上端面取 全面ミ ガキ	炭化 湾曲は炭化 時か	
—20	106	同上	長	徑		筒状	上端面取		炭化
—21	106	同上	長	徑		筒状	上端面取		炭化
—22	106	同上	長	徑		上部のみくり抜く 身部に凹み(結縛 痕か)	上端面取		炭化
—23	106	同上	長	徑		筒状 上部に凹み (結縛痕か)	上端面取 ミガキ	炭化	
—24	106	同上	長	徑		筒状	上端面取 ミガキ	炭化 表面に網状 の組織痕	
—25	106	同上	長	徑		筒状 上部に凹み (結縛痕か)	上端面取		炭化
—26	106	同上	長	徑		筒状	上端面取 ミガキ		
—27	103	木製 手網?	長		厚		樹皮で結ぶ		
				(4.6)	0.6				

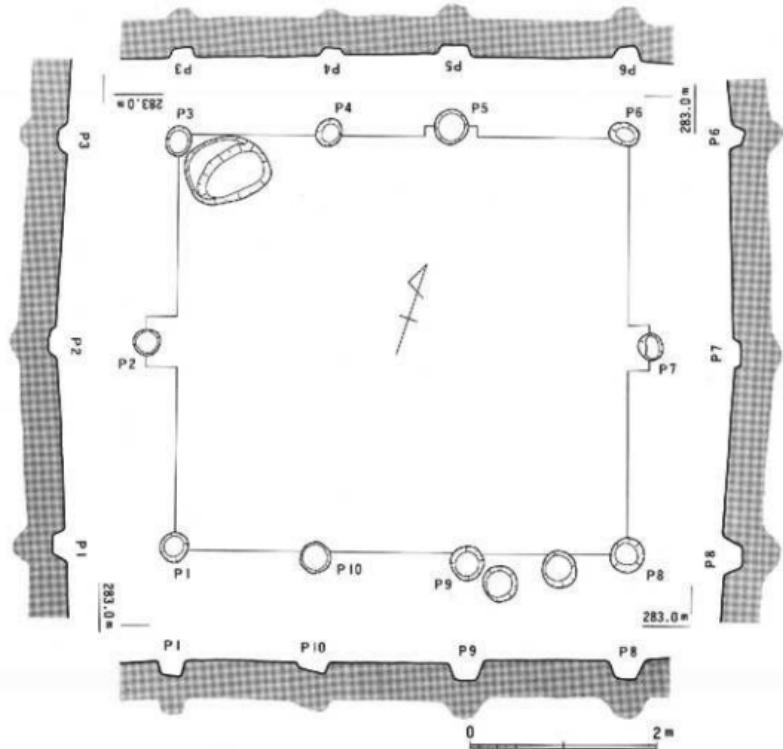
(2) 挖立柱建物

S B01 (第106図 図版56) 2間×2間の縦柱の建物で、S I13とS I02の間にある。一边約3.6mのはば正方形の平面形である。周囲に多くのピットがあるが、比較的深くしっかりしたピットを選ぶとの配置になり、建物があったことがわかる。

S B02 (第107図 図版56) 2間×3間の建物で、S I10の南に接している。梁行4.5m、桁行5mである。



第106図 森遺跡 S B01実測図 (1 : 60)

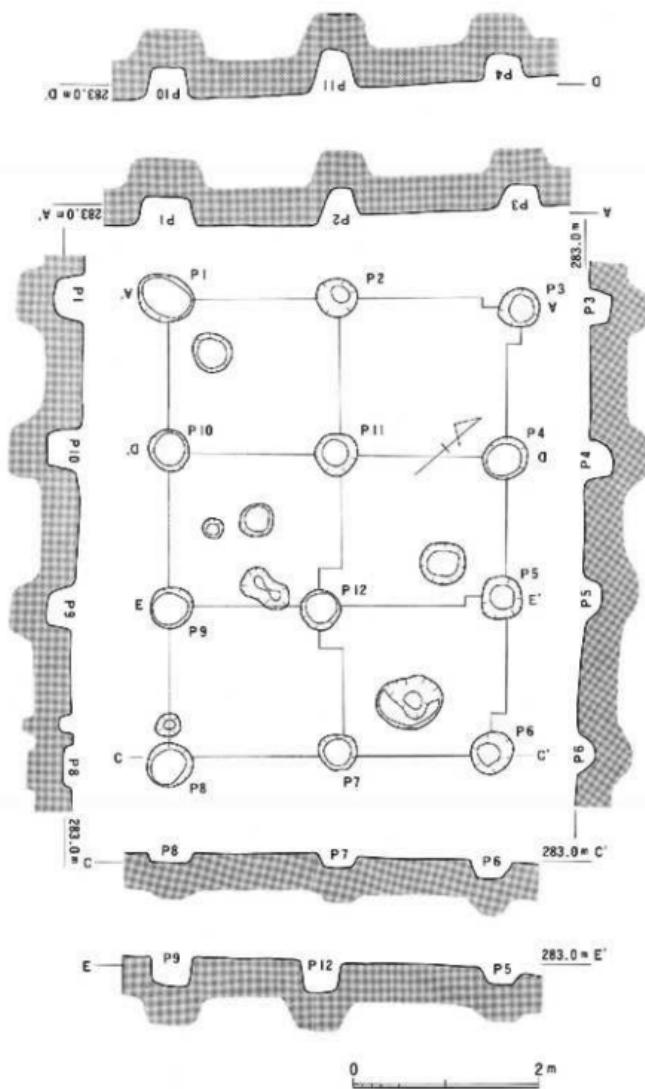


第107図 森遺跡 S B 02実測図 (1 : 60)

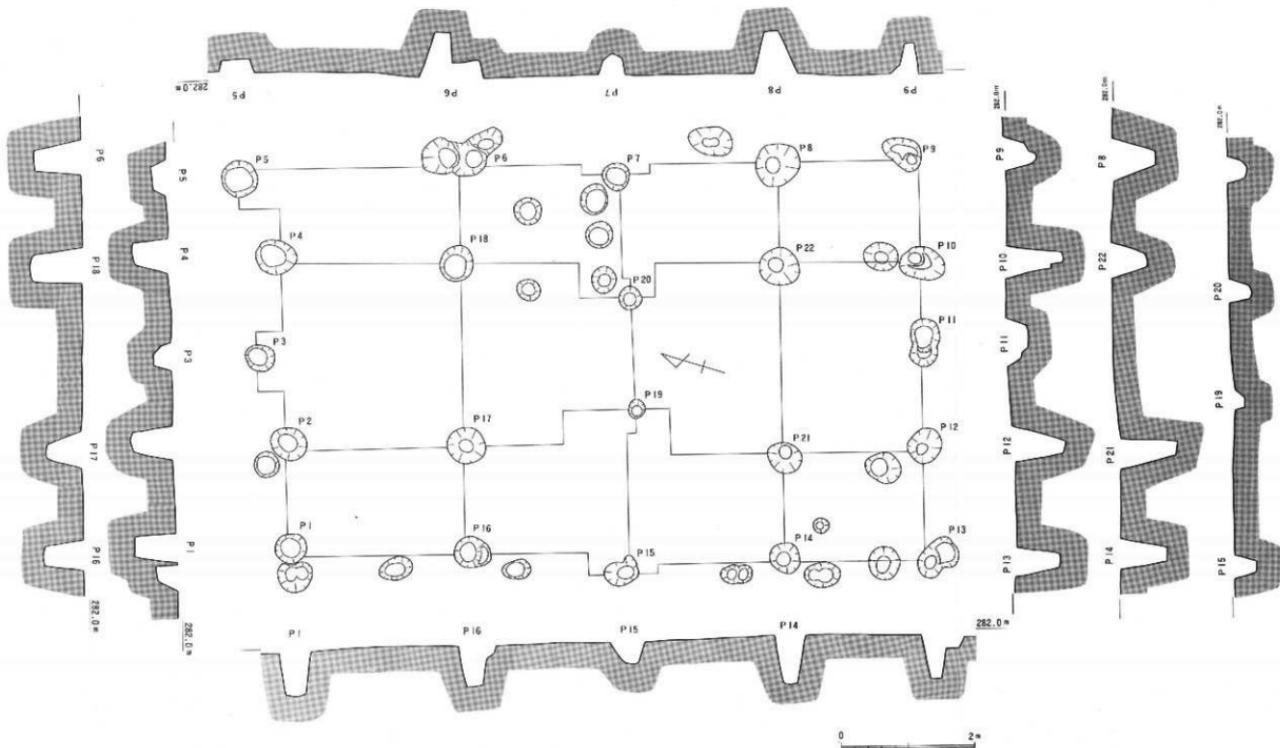
S B 03 (第106図 図版57) 2間×3間の総柱の建物である。S I 20の北に隣接している。梁行3.6m、桁行5mである。

S B 04 (第109図 図版57) 4間×4間で、梁行6m、桁行9.6mの大型の総柱建物である。調査区の東端で検出された。ここは今回の調査では最も低い位置で、S D 01のさらに東にあり、配置的にみても他の遺構と性格が違うような印象を受ける。ピットは深く大型なものが多く、他の掘立柱建物とかなり様相が違う。P 3、11、19、20は他のピットより浅く、補助的なピットかもしれない。

この周囲にも深くしっかりしたピットがあり、またP 1、6などのように重複しているピットも多いことから、S B 01は何回か建て替えがあったかもしれない。



第108図 森遺跡 S B 03実測図 (1 : 60)



第109図 森遺跡 S B 04 実測図 (1:60)

SB01計測表

規 模		梁 行 き			桁 行 き		
主 軸	番 号	2 間 (3.5 m)			2 間 (3.85 m)		
		N-9°-W					
柱穴	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	
(cm)	上面径 深さ	90×60 2.5	55×60 1.8	45×45 2.3	60×55 3.2	45×45 2.6	40×40 1.7
	番 号	P 7	P 8	P 9			
柱 間 距 離 (m)	上面径 深さ	105×50 3.2	75×45 2.5	20×20 2			
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	
	1.8	1.6	1.9	1.95	1.85	2.0	
	P7-8	P2-9	P6-9	P8-9	P4-9		
	2	2.05	2	2	1.6		

SB02計測表

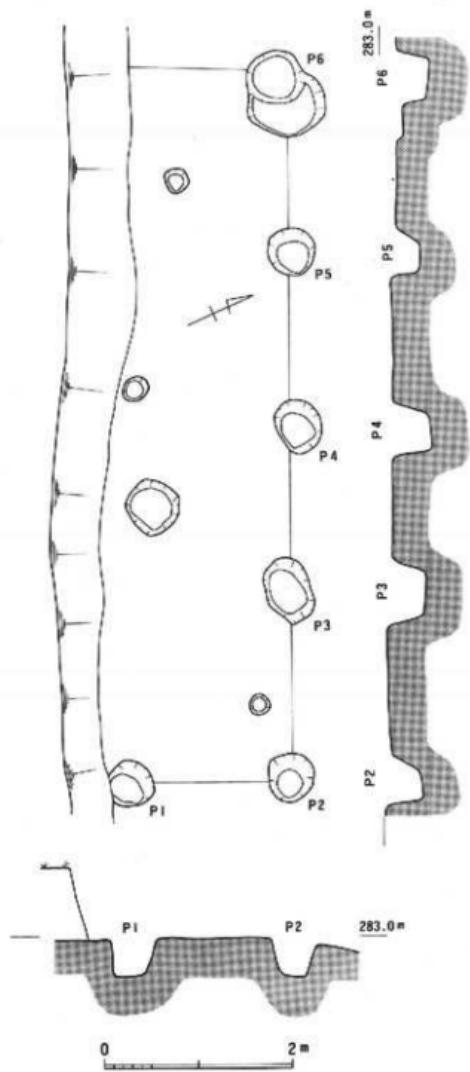
規 模		梁 行 き			桁 行 き		
主 軸	番 号	2 間 (4.35 m)			3 間 (4.8 m)		
		N-72°-E					
柱穴	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	
(cm)	上面径 深さ	30×30 1.6	30×30 1.0	35×25 1.3	30×30 1.1	35×35 1.2	30×25 1.9
	番 号	P 7	P 8	P 9	10P		
柱 間 距 離 (m)	上面径 深さ	30×25 1.4	35×40 2.2	35×40 2.2	30×35 1.5		
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	
	2.2	2.15	1.65	1.3	1.85	2.3	
	P7-8	P8-9	P9-10	P10-1			
	2.1	1.7	1.6	1.5			

SB03計測表

規 模		梁 行 き			桁 行 き		
主 軸	番 号	2 間 (3.6 m)			3 間 (4.8 m)		
		N-50°-W					
柱穴	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	
(cm)	上面径 深さ	60×50 3.3	45×40 4.0	45×40 3.0	50×45 2.9	45×45 2.3	45×45 2.0
	番 号	P 7	P 8	P 9	P10	P11	P12
柱 間 距 離 (m)	上面径 深さ	40×40 1.5	50×50 1.5	45×45 3.1	45×45 3.7	45×45 4.7	40×45 3.4
	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	P6-7	
	1.85	1.8	1.6	1.5	1.7	1.65	
	P7-8	P8-9	P9-10	P10-1	P10-11	P11-4	
	1.8	1.7	1.7	1.65	1.8	1.8	
	P7-8	P2-9	P6-9	P8-9	P4-9		
	1.6	2.0	1.7	1.65	1.55		

SB03計測表

規 模		梁 行 き			桁 行 き		
主 軸	番 号	1 間 (1.8 m)			4 間 (7.55 m)		
		N-25°-W					
柱穴	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	
(cm)	上面径 深さ	45×50 3.9	50×55 3.7	70×50 3.8	60×50 4.0	50×50 2.8	95×85 3.7
	柱 痕 径	P1-2	P2-3	P3-4	P4-5	P5-6	
	(m)	1.8	2.0	1.8	1.8	1.9	



第110図 森遺跡 SB 05実測図 (1 : 60)

SB 05 (第110図 図版58) 2間以上×4間の建物である。梁の一部は調査区外のため調査を行わなかった。桁行き7.6m、梁1間1.8mを測る比較的大型の建物である。

(3) 土 坑

平面での観察では土坑状の落ち込みは80以上確認されたが、図示したのは明らかに土坑と考えられる49個に限った。土坑は、平面形が長方形の土坑墓と考えられるものと、平面形が不整円形または橢円形で底部がすり鉢状の性格不明の土坑がある。

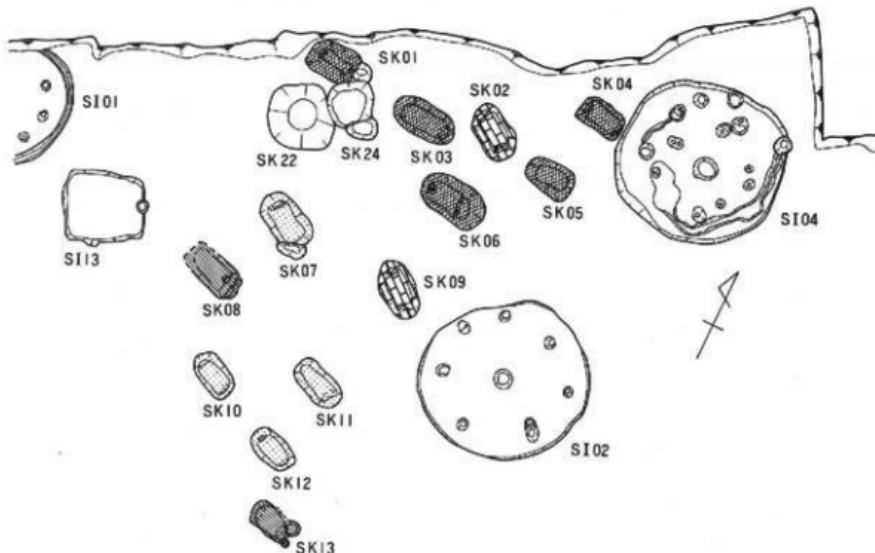
ほぼ土坑墓に間違いないと思われるものはSK01~13 (第112、113、116図 図版58~63) で、調査区の北東側に集中していた。大きなもので長軸が2.5m、短軸が1.3m、小さいもので長軸が1.65m、短軸が0.95mを測る。底面両端には小口板の痕跡と思われる小穴があるものが多い。いずれも西向きに作られているが、主軸方向をみるとSK02、09がN-43°-Wともっとも北向きで、SK01がN-86°-Wともっとも西を向いている。主軸方位別に分類すると、(1) SK02、09(N-43°~57°-W)、(2) SK07、10、11、12(N-61~66°-W)、(3) SK08、13(N-74~76°-W)、(4) SK01、03~06(N-82~86°-W)に分けら

S B04計測表

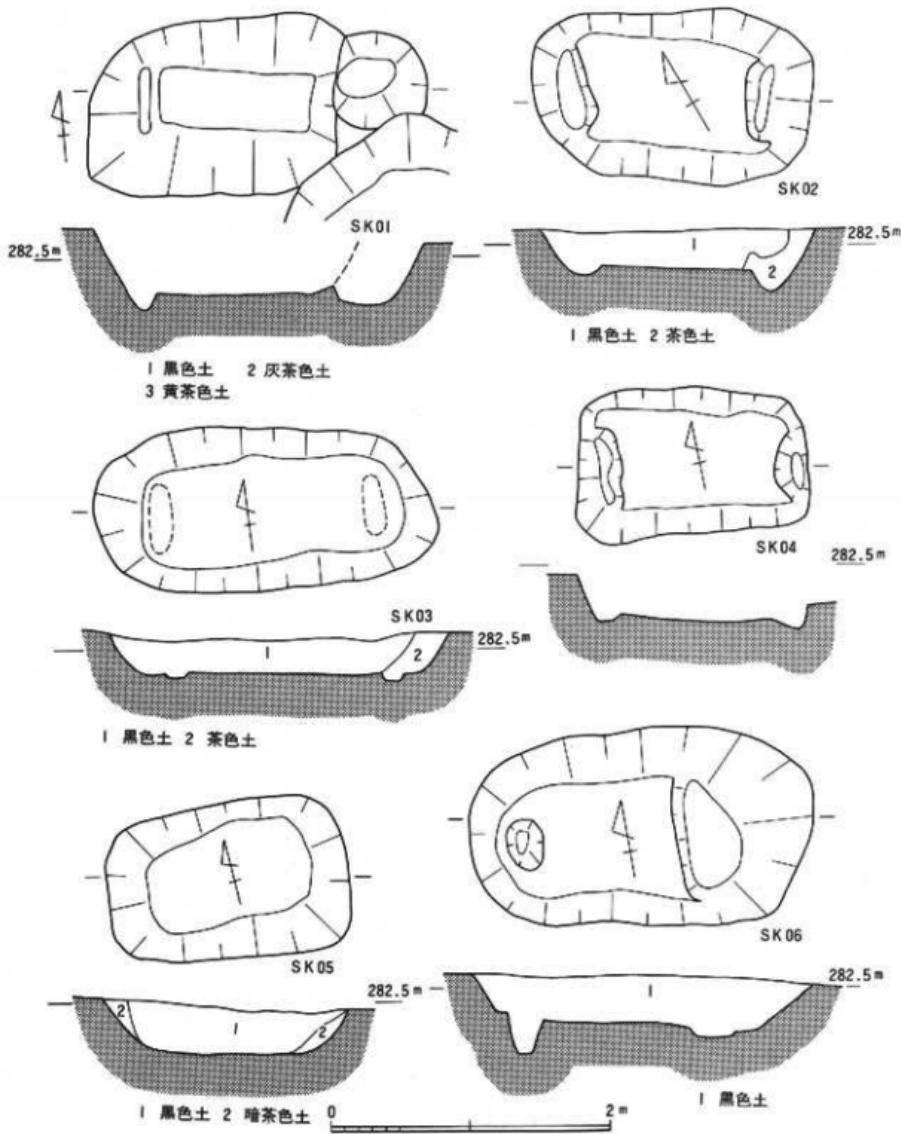
規 模	東 行 き 間 (6.0 m)			西 行 き 間 (9.5 m)		
	N—W	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
柱 穴	上 面 深 度	45×45	50×55	40×45	50×60	55×55
	深 さ	6 8	6 7	2 7	5 8	1 9
	番 号	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11
	上 面 深 度	40×40	65×65	50×60	50×70	70×40
	深 さ	3 1	6 5	5 0	8 8	3 5
	番 号	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17
	上 面 深 度	70×40	50×45	40×50	45×55	60×55
	深 さ	6 8	7 5	3 5	6 3	5 3
	番 号	P 18	P 19	P 20	P 21	P 22
	上 面 深 度	55×50	30×25	35×35	45×50	55×60
柱 間 距 離	深 さ	7 9	1 7	3 7	8 8	5 5
	P 1—2	P 2—3	P 3—4	P 4—5	P 5—6	P 6—7
	1 5 5	1 4	1 6	1 3	3 2	2 6
	P 7—8	P 8—9	P 9—10	P 10—11	P 11—12	P 12—13
	2 4	2 0	1 5	1 2	1 7	1 7 5
	P 13—14	P 14—15	P 15—16	P 16—17	P 17—18	P 18—6
	2 2	2 3 5	2 4	1 6 7	2 7	1 6 6
	P 15—19	P 19—20	P 20—7	P 14—21	P 21—22	P 22—8
	2 4	1 6 5	1 9	1 6 5	2 8 5	1 5
	P 2—17	P 17—19	P 19—21	P 21—12	P 4—18	P 18—20
(m)	P 20—22	P 22—10				
	2 1 5	2 1				

れる（第111図 図版1）。これらは主軸方向にややばらつきはあるものの総じて西向きであることなどから、それぞれが無関係とは考えられずいずれも連続して作られたものと想像される。

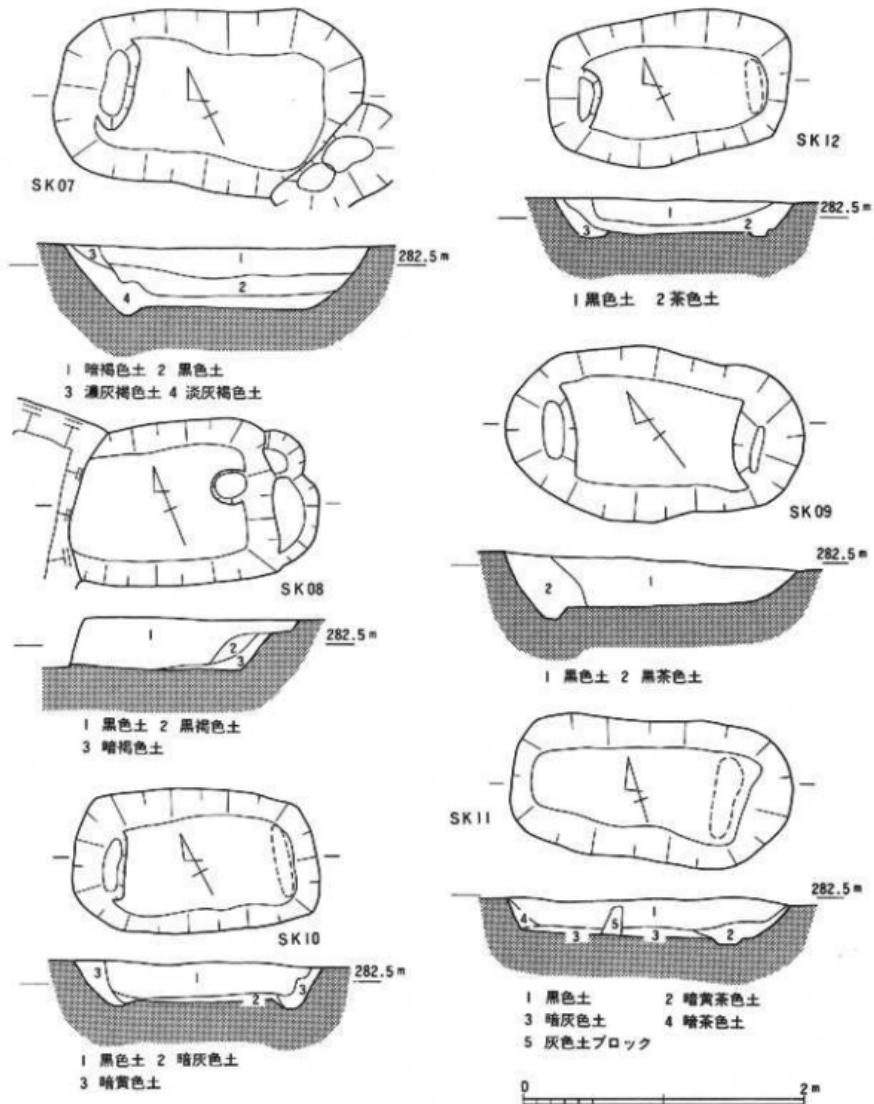
土坑墓内からは縄文土器、弥生土器、石器が多く出土した。これらの土器片は、いずれも細片で供獻された状態ではなかった。時期的には縄文後・晩期の土器が多いものの、弥生後期土器なども



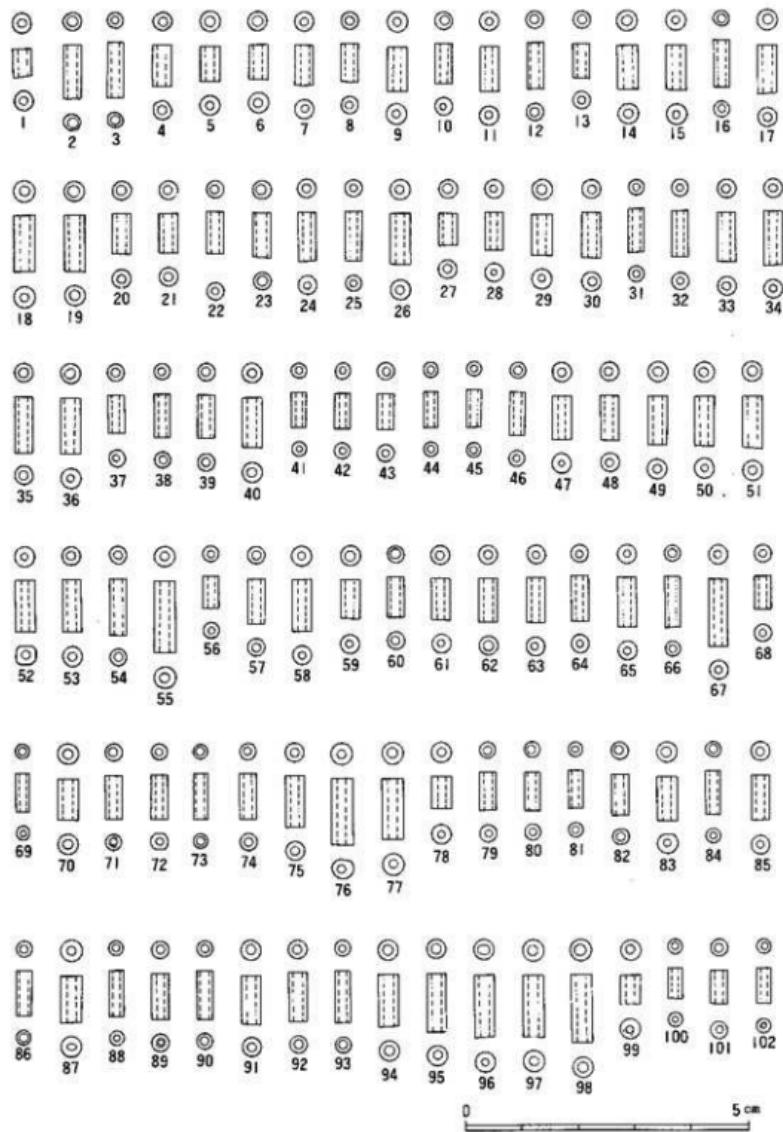
第111図 森遺跡 土坑墓主軸方位別の配置



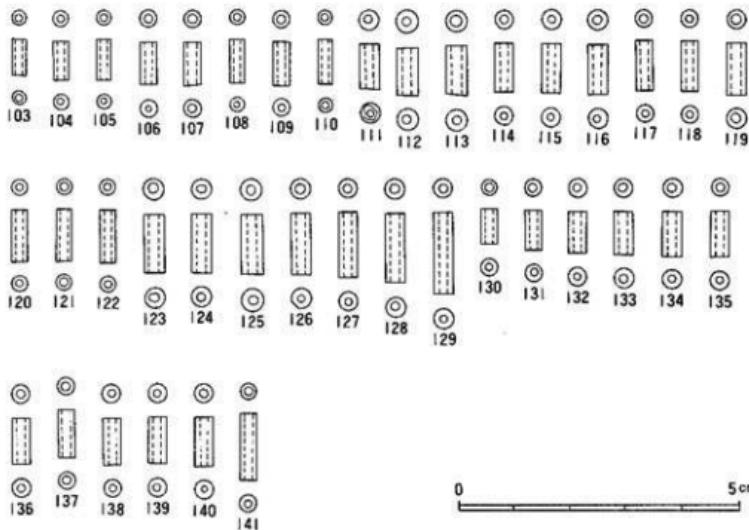
第112図 森遺跡 SK01~06実測図 (1 : 40)



第113図 森遺跡 SK07~11実測図 (1 : 40)



第114図 森遺跡 S K07出土管玉実測図(1) (1:1)



第115図 森遺跡 SK07出土管玉実測図(2) (1:1)

入り混じっていることから、土坑墓の時期を決定できるものではないといえる。もっとも新しい土器は、弥生後期の甕A、B₄、B₅である(第120図1、5、7)。これにより、これらの土坑墓は少なくとも弥生時代後期以降のものと考えられる。

土坑墓内から出土した遺物で、副葬されたと考えられるのはSK07から出土した管玉141個である(第114、115図 図版106~108)。これらの管玉はSK07の西寄りでまとまって出土した(図版61)。いずれも壁玉製の濃緑色を呈し、長さ4.9~12.65mm、直径2.4~4.1mmの管玉である。

性格不明の土坑は36個図示した(第116~119図)。平面形は不整円形や不整橢円形が多く、大きさも小さいもので径1m、大きいもので径2mとさまざま、定型的なものではない。底面はすり鉢状になるものが多い。SK23の底面には30cm大の石が敷かれていた(図版58)が、他の土坑にはこのような施設はみられなかった。

土坑内からは、縄文土器をはじめ弥生土器、石器などの細片が多く出土した。縄文土器だけが出土した土坑もあるが、SK21、37~39のように縄文土器に混じって弥生時代後期の土器が出土している土坑もある。これらは縄文土器も弥生土器もすべて細片で、土坑内からまんべんなく出土するという状況で出土しており、周辺の包含層での出土状況と変わりがない。そのため、単純に縄文土器だけが出土した土坑が縄文時代の土坑、弥生土器が混入している土坑が弥生時代とはいきれない

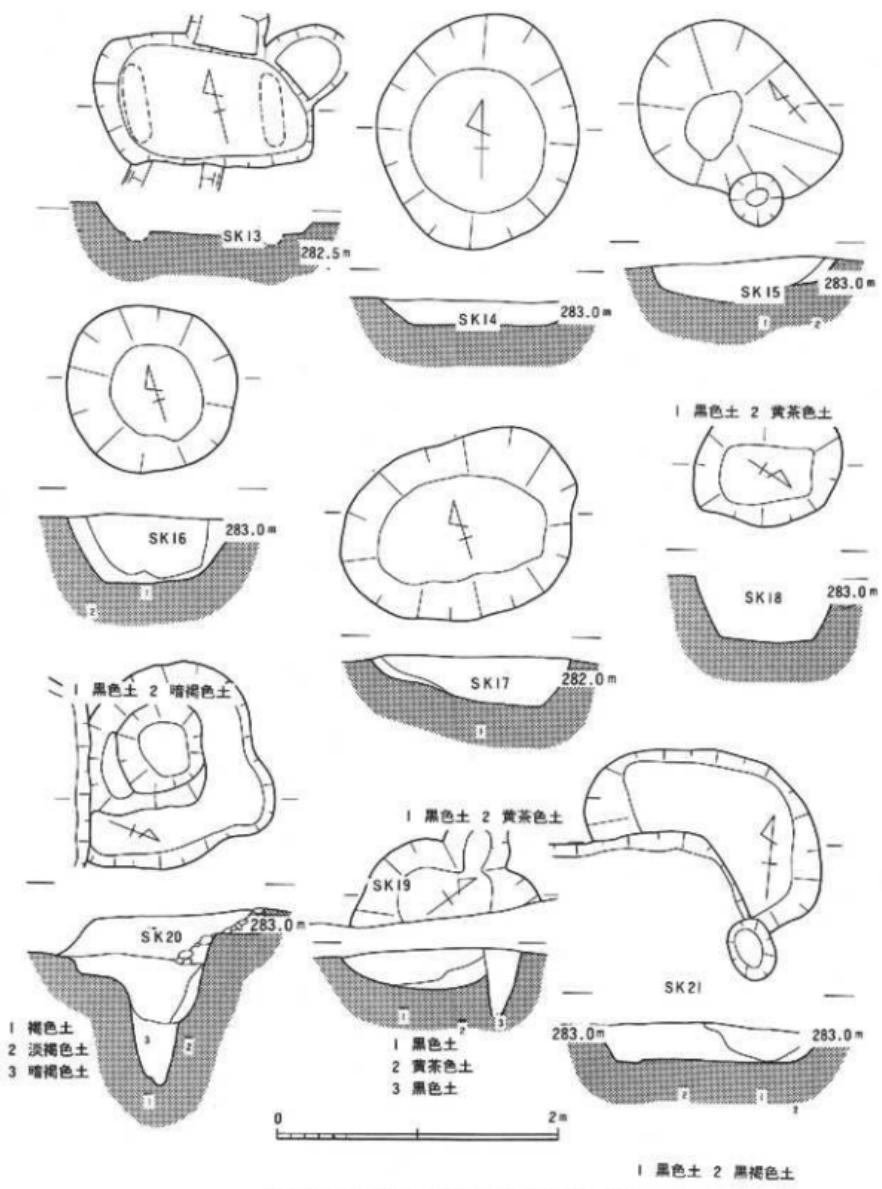
い。中には縄文時代の土坑あるいは弥生時代の土坑もあるかもしれないが、それを抽出することは困難である。一応一覧表では時期のわから得る土器については明記し、第120図(図版108)では縄文土器と弥生土器が一緒に出土した土坑について両者を図示した。それ以外の土器については次項縄文土器、弥生土器の項で掲載した。

S K07出土管玉計測表

(mm)

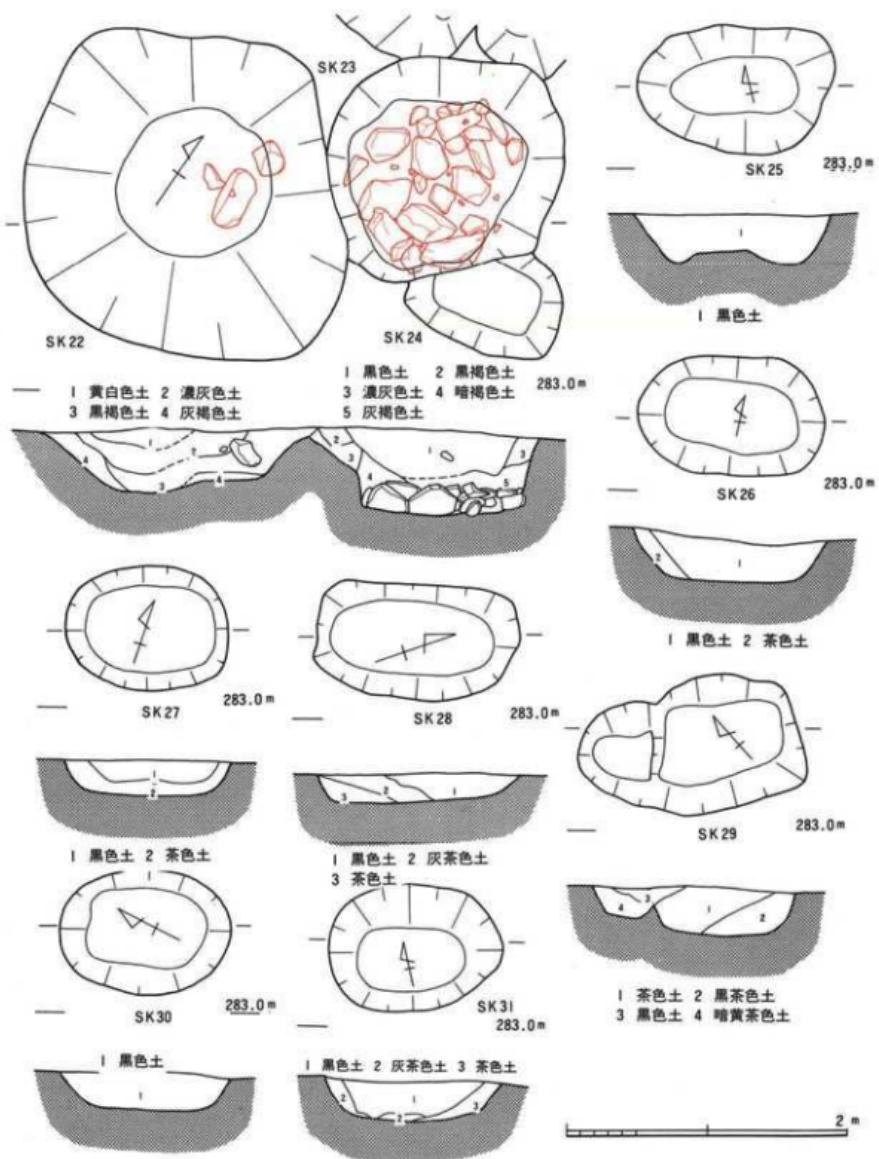
番号	側辺長		上面径	下面径	孔径		重量(g)
	左側辺	右側辺			上面孔	下面孔	
1	5.1	4.9	3.45×3.4	3.4×3.4	1.45×1.7	1.4×1.45	0.10
2	9.65	9.9	3.2×3.12	3.05×2.85	1.75×1.7	1.65×1.5	0.15
3	9.9	9.8	2.9×2.85	2.6×2.85	1.45×1.5	1.45×1.4	0.15
4	7.3	7.4	3.4×3.35	3.2×3.3	1.5×1.5	1.4×1.5	0.14
5	6.3	6.3	3.3×3.3	3.3×3.3	1.65×1.55	1.35×1.35	0.11
6	6.15	6.25	3.4×3.4	3.4×3.4	1.7×1.7	1.25×1.2	0.12
7	7.05	7.1	3.3×3.2	3.3×3.2	1.55×1.6	1.4×1.35	0.14
8	6.6	6.95	3.0×3.0	2.9×3.0	1.7×1.65	1.2×1.2	0.11
9	7.9	7.9	3.5×3.55	3.5×3.4	1.45×1.5	1.15×1.2	0.16
10	7.35	7.3	3.05×3.05	3.0×3.1	1.6×1.65	1.25×1.15	0.12
11	8.1	8.0	3.4×3.4	3.4×3.5	1.5×1.55	1.45×1.45	0.17
12	8.3	8.4	3.0×3.05	3.0×3.0	1.65×1.7	1.4×1.4	0.13
13	6.15	6.2	3.05×3.1	3.05×3.05	1.65×1.5	1.15×1.2	0.10
14	7.9	7.9	3.8×3.5	3.8×3.65	1.75×1.75	1.3×1.35	0.20
15	7.9	8.1	3.5×3.5	3.6×3.6	1.4×1.4	1.4×1.35	0.19
16	8.5	8.5	2.8×2.8	2.7×2.76	1.45×1.45	1.45×1.35	0.12
17	8.7	8.5	3.45×3.45	3.35×3.35	1.75×1.8	1.5×1.5	0.18
18	10.6	10.5	3.8×3.8	3.8×3.7	2.05×1.95	1.45×1.45	0.26
19	10.5	10.7	3.65×3.45	3.6×3.5	2.0×2.05	1.65×1.65	0.22
20	7.05	7.1	3.3×3.2	3.3×3.2	1.75×1.7	1.55×1.5	0.14
21	7.1	7.05	3.2×3.3	3.25×3.15	1.65×1.75	1.7×1.65	0.14
22	7.4	7.6	3.05×3.05	3.05×3.1	1.65×1.6	1.3×1.25	0.12
23	7.8	8.0	3.2×3.2	3.2×3.2	1.9×2.0	1.8×1.8	0.13
24	8.7	8.5	3.1×3.2	3.2×3.2	1.6×1.6	1.3×1.3	0.14
25	8.8	8.8	3.0×3.0	2.9×2.9	1.25×1.3	1.25×1.25	0.13
26	9.1	9.2	3.7×3.6	3.7×3.6	1.6×1.65	1.6×1.55	0.22
27	5.8	5.7	3.35×3.4	3.25×3.3	1.65×1.7	1.45×1.45	0.11
28	6.8	6.7	3.3×3.2	3.2×3.2	1.25×1.25	1.1×1.05	0.13
29	7.3	7.35	3.7×3.7	3.6×3.7	1.8×1.8	1.25×1.25	0.16
30	8.0	8.1	3.35×3.5	3.4×3.4	1.55×1.65	1.4×1.45	0.17
31	8.0	7.8	2.7×2.6	2.7×2.6	1.3×1.4	1.25×1.25	0.09
32	8.2	8.2	2.9×2.95	2.9×2.95	1.3×1.35	1.2×1.2	0.13
33	8.6	8.9	3.2×3.25	3.3×3.3	1.4×1.6	1.4×1.45	0.17
34	9.7	9.5	3.2×3.2	3.2×3.1	1.35×1.45	1.2×1.2	0.17
35	10.1	10.1	3.2×3.2	3.25×3.3	1.75×1.7	1.45×1.45	0.19
36	10.0	10.0	3.5×3.6	3.6×3.5	1.8×1.85	1.45×1.4	0.21
37	6.65	6.8	3.05×3.0	3.0×3.0	1.65×1.6	1.15×1.2	0.12
38	7.8	7.7	2.9×2.9	2.6×2.8	1.3×1.3	1.2×1.2	0.19
39	7.7	7.7	3.1×3.0	3.0×3.1	1.6×1.6	1.65×1.6	0.10
40	8.7	8.9	3.45×3.5	3.5×3.7	1.65×1.7	1.6×1.65	0.12
41	6.2	6.2	2.7×2.7	2.6×2.6	1.2×1.2	1.1×1.1	0.06
42	6.3	6.3	2.8×2.9	2.9×2.9	1.45×1.25	1.2×1.3	0.10
43	6.4	6.45	3.0×3.0	2.9×3.0	1.45×1.5	1.25×1.2	0.09
44	6.4	6.35	2.6×2.7	2.6×2.6	1.35×1.35	1.3×1.3	0.08
45	6.8	6.7	2.7×2.7	2.65×2.65	1.25×1.2	1.2×1.15	0.09
46	7.8	7.8	2.8×2.7	2.7×2.7	1.45×1.45	1.2×1.15	0.09
47	7.85	7.8	3.5×3.6	3.5×3.55	1.45×1.45	1.1×1.1	0.18
48	7.9	8.0	3.25×3.2	3.2×3.2	1.6×1.6	1.2×1.2	0.14
49	8.7	8.6	3.4×3.5	3.3×3.4	1.7×1.7	1.6×1.65	0.17
50	8.8	8.9	3.55×3.35	3.5×3.5	1.8×1.7	1.4×1.45	0.19
51	9.0	9.2	3.45×3.5	3.5×3.4	1.7×1.8	1.5×1.55	0.20
52	9.2	9.15	3.6×3.6	3.6×3.3	1.4×1.35	1.45×1.45	0.23
53	9.4	9.45	3.2×3.2	3.4×3.4	1.75×1.8	1.4×1.4	0.18
54	10.1	10.15	3.0×3.2	3.0×2.95	1.6×1.7	1.45×1.5	0.15
55	12.6	12.65	3.7×3.7	4.0×4.0	1.8×1.8	1.85×1.9	0.32
56	5.8	5.8	2.8×2.85	2.9×2.9	1.2×1.2	1.15×1.2	0.09
57	8.1	8.1	3.1×3.0	3.0×3.1	1.8×1.8	1.65×1.5	0.12
58	9.3	9.3	3.45×3.3	3.2×3.3	1.45×1.4	1.3×1.35	0.18
59	6.7	7.0	3.5×3.5	3.45×3.2	1.8×1.8	1.3×1.25	0.14
60	7.3	7.3	3.0×3.0	3.1×3.0	1.75×1.7	1.55×1.6	0.10
61	7.3	7.5	3.35×3.35	3.3×3.3	1.45×1.4	1.25×1.25	0.16
62	7.7	7.7	3.3×3.25	3.2×3.5	1.6×1.7	1.75×1.6	0.14
63	7.8	7.9	3.2×3.2	3.3×3.25	1.35×1.45	1.35×1.4	0.16
64	8.0	8.1	3.1×3.1	3.0×3.1	1.35×1.35	1.25×1.3	0.14
65	8.9	8.9	3.45×3.45	3.4×3.3	1.35×1.35	1.3×1.4	0.19
66	9.2	9.1	2.75×2.8	2.8×2.8	1.45×1.55	1.45×1.45	0.11

番号	側辺長		上面径	下面径	孔 径		重量(g)
	左側辺	右側辺			上面孔	下面孔	
67	12.0	12.1	3.4×3.3	3.35×3.2	1.5×1.5	1.3×1.35	0.24
68	5.95	5.9	3.0×3.1	3.0×3.0	1.4×1.4	1.4×1.35	0.10
69	7.0	7.0	2.4×2.5	2.4×2.55	1.35×1.45	1.25×1.25	0.08
70	7.2	7.4	3.7×3.6	3.65×3.7	1.8×1.8	1.6×1.7	0.18
71	7.8	7.8	3.1×3.1	3.0×2.8	1.7×1.7	1.15×1.1	0.11
72	8.0	8.0	3.0×2.9	3.0×2.8	1.4×1.4	1.2×1.2	0.13
73	8.2	8.2	2.6×2.5	2.5×2.5	1.7×1.65	1.6×1.6	0.08
74	8.2	8.2	2.95×3.0	3.0×3.0	1.45×1.45	1.45×1.45	0.13
75	9.3	9.2	3.2×3.3	3.25×3.3	1.55×1.45	1.35×1.4	0.19
76	9.3	9.5	3.8×3.7	3.9×3.4	1.65×1.65	1.5×1.55	0.25
77	10.8	10.8	3.9×3.9	3.9×3.95	1.8×1.8	1.75×1.7	0.29
78	5.7	5.7	3.7×3.6	3.6×3.6	1.5×1.45	1.25×1.3	0.12
79	6.7	6.65	2.95×2.9	3.0×3.0	1.5×1.5	1.35×1.35	0.10
80	6.7	6.8	2.7×2.75	2.7×2.7	1.5×1.45	1.35×1.35	0.09
81	6.8	6.7	2.6×2.6	2.6×2.6	1.25×1.45	1.25×1.2	0.08
82	7.3	7.3	3.0×3.0	3.0×2.8	1.65×1.6	1.45×1.55	0.11
83	7.8	7.8	3.65×3.5	3.6×3.4	1.85×1.8	1.4×1.35	0.18
84	7.8	7.7	2.7×2.75	2.7×2.6	1.5×1.45	1.2×1.15	0.10
85	8.1	8.0	3.21×3.25	3.2×3.25	1.45×1.45	1.45×1.45	0.15
86	8.0	8.1	2.8×2.8	2.75×2.8	1.6×1.7	1.5×1.7	0.10
87	8.2	8.2	3.75×3.8	3.7×3.7	1.55×1.5	1.35×1.5	0.23
88	8.25	8.2	2.5×2.45	2.4×2.5	1.4×1.45	1.2×1.2	0.08
89	8.2	8.25	3.0×3.0	3.0×3.1	1.45×1.4	1.15×1.15	0.14
90	8.5	8.6	2.9×2.8	2.9×2.8	1.7×1.7	1.4×1.5	0.12
91	8.6	8.7	3.35×3.4	3.3×3.4	1.8×1.7	1.6×1.65	0.17
92	8.7	8.8	3.2×3.05	3.0×3.0	1.7×1.7	1.7×1.7	0.15
93	9.2	9.3	2.8×2.85	2.7×2.7	1.45×1.55	1.45×1.45	0.12
94	9.3	9.25	3.6×3.7	3.7×3.6	1.95×1.85	1.8×1.9	0.21
95	10.5	10.5	3.3×3.4	3.4×3.4	1.86×1.8	1.6×1.55	0.20
96	11.2	11.0	3.6×3.5	3.5×3.45	1.9×2.1	1.4×1.45	0.23
97	11.0	11.0	3.7×3.8	3.8×3.7	1.95×1.9	1.7×1.75	0.28
98	11.7	11.8	3.7×3.7	3.7×3.65	2.0×2.1	1.95×1.9	0.26
99	5.2	5.2	3.5×3.5	3.5×3.5	1.65×1.6	1.2×1.2	0.13
100	5.4	5.5	2.6×2.7	2.6×2.55	1.2×1.2	1.0×1.0	0.07
101	5.9	6.0	3.0×3.05	3.0×3.1	1.65×1.65	1.45×1.5	0.10
102	6.4	6.4	2.6×2.5	2.45×2.45	1.3×1.25	0.9×0.95	0.07
103	6.4	6.5	2.6×2.6	2.5×2.65	1.35×1.3	1.25×1.25	0.08
104	7.0	7.05	2.9×2.9	2.8×2.8	1.35×1.35	1.25×1.25	0.11
105	7.3	7.3	2.65×2.6	2.55×2.65	1.4×1.35	1.15×1.15	0.08
106	7.6	7.6	3.0×3.0	3.0×3.1	1.45×1.45	1.15×1.1	0.12
107	7.8	7.5	3.2×3.05	3.1×3.15	1.7×1.75	1.5×1.6	0.12
108	7.8	7.8	2.7×2.6	2.6×2.7	1.45×1.35	1.05×1.1	0.10
109	7.8	7.8	3.0×3.0	2.9×3.0	1.5×1.5	1.25×1.2	0.12
110	8.1	8.1	2.5×2.5	2.5×2.5	1.4×1.4	1.3×1.35	0.09
111	8.0	8.1	3.55×3.6	3.5×3.5	1.6×1.6	1.45×1.35	0.17
112	8.3	8.45	3.9×4.1	3.8×3.9	1.65×1.65	1.6×1.65	0.23
113	8.6	8.45	3.9×3.9	3.75×3.8	2.05×2.1	1.5×1.6	0.21
114	8.7	8.7	3.4×3.3	3.3×3.3	1.65×1.65	1.3×1.35	0.16
115	8.7	8.8	3.5×3.6	3.5×3.5	1.4×1.45	1.3×1.3	0.21
116	9.0	8.9	3.6×3.5	3.5×3.45	1.7×1.7	1.4×1.45	0.20
117	9.0	9.0	3.0×3.0	3.0×3.1	1.5×1.5	1.45×1.45	0.15
118	9.0	9.0	3.1×3.1	3.0×3.1	1.5×1.45	1.25×1.3	0.15
119	9.2	9.3	3.45×3.4	3.6×3.6	1.75×1.75	1.7×1.75	0.20
120	9.4	9.3	2.8×2.8	2.9×2.8	1.3×1.35	1.25×1.2	0.13
121	9.4	9.35	2.8×2.8	2.8×2.85	1.55×1.5	1.5×1.5	0.12
122	9.5	9.5	2.8×2.8	2.8×2.8	1.55×1.4	1.5×1.45	0.13
123	10.4	10.4	3.7×3.7	3.8×3.6	1.85×1.95	1.7×1.8	0.26
124	10.55	10.5	3.55×3.6	3.55×3.55	1.65×1.7	1.55×1.6	0.25
125	10.6	10.7	4.0×3.9	4.0×4.1	1.9×1.8	1.6×1.7	0.29
126	10.9	11.0	3.55×3.5	3.5×3.4	1.8×1.8	1.45×1.45	0.23
127	11.7	11.65	3.3×3.35	3.3×3.3	1.5×1.5	1.45×1.4	0.23
128	12.3	12.3	3.5×3.4	3.45×3.5	1.75×1.7	1.5×1.6	0.25
129	14.5	14.5	3.45×3.6	3.5×3.5	1.5×1.45	1.45×1.5	0.31
130	6.3	6.35	2.95×3.0	3.0×3.0	1.45×1.45	1.25×1.25	0.10
131	7.0	7.1	3.0×3.2	3.1×3.0	1.5×1.6	1.6×1.4	0.12
132	7.4	7.5	3.2×3.2	3.2×3.2	1.5×1.5	1.35×1.4	0.14
133	7.8	7.85	3.35×3.5	3.5×3.5	1.65×1.6	1.5×1.55	0.17
134	8.0	8.0	3.3×3.3	3.3×3.2	1.4×1.5	1.45×1.45	0.16
135	8.3	8.2	3.2×3.25	3.2×3.2	1.7×1.7	1.4×1.4	0.15
136	8.2	8.2	3.1×3.2	3.2×3.2	1.5×1.55	1.45×1.45	0.15
137	8.55	8.5	2.9×3.1	2.95×3.1	1.75×1.65	1.6×1.65	0.13
138	8.4	8.3	3.2×3.25	3.2×3.2	1.65×1.5	1.45×1.5	0.15
139	8.3	8.4	3.25×3.4	3.2×3.3	1.5×1.5	1.45×1.4	0.16
140	8.9	8.8	3.25×3.3	3.3×3.3	1.55×1.65	1.25×1.2	0.17
141	11.9	11.9	2.9×2.9	3.0×3.0	1.7×1.7	1.55×1.55	0.16

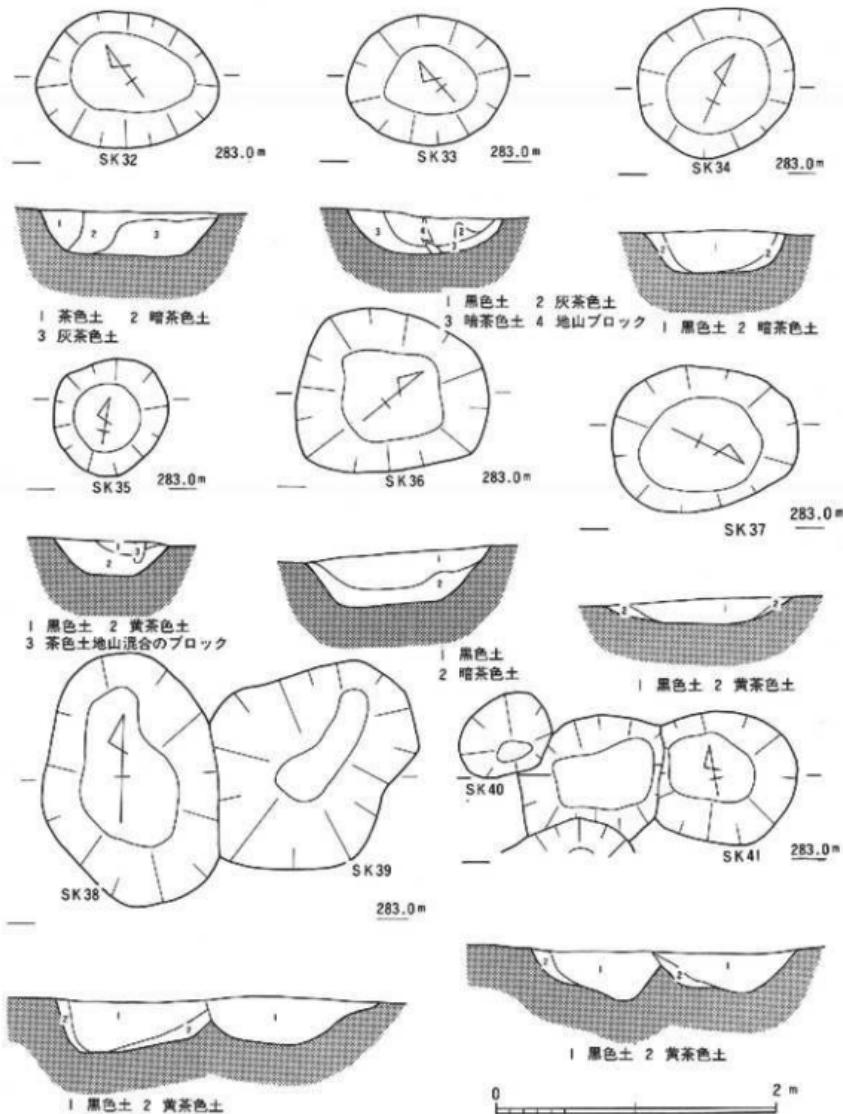


第116図 森遺跡 SK13~21実測図 (1:40)

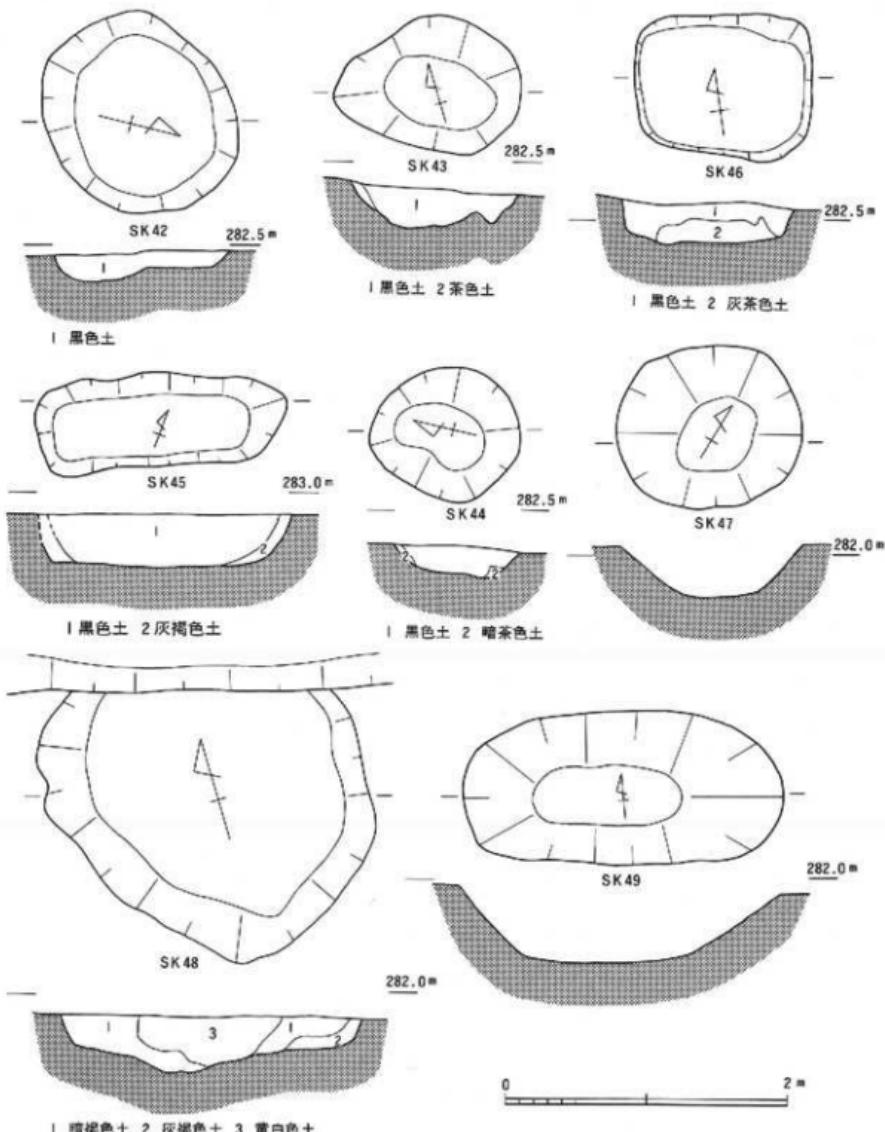




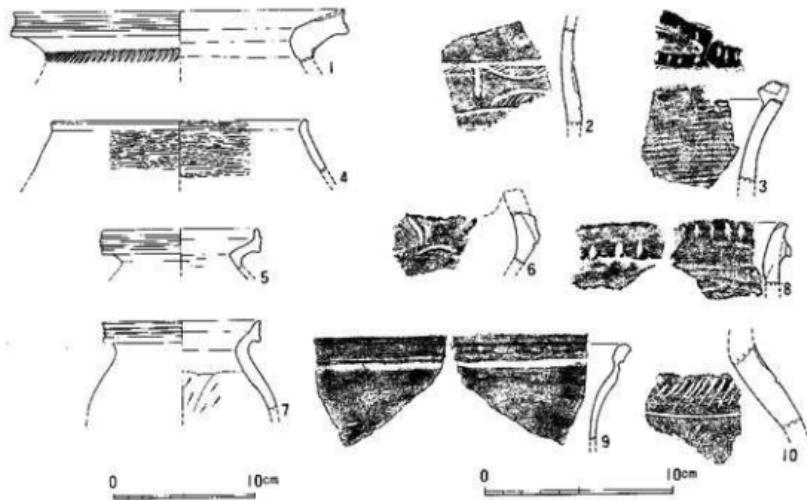
第117図 森遺跡 SK22~31実測図 (1:40)



第118図 森遺跡 SK32~41実測図 (1 : 40)



第119図 森遺跡 SK42~49実測図 (1:40)



第120図 森遺跡 土坑出土土器 1.4.5.7 (1:4) 2.3.6.8.9.10 (1:3)

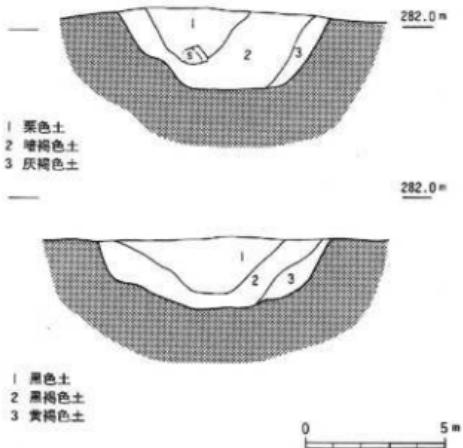
土坑計測表（出土遺物のうち「繩」は縄文、「弥」は弥生、単位 m）（）は現存値

番号	平面形	平面規模	深さ	主軸	出土 遺物	備 考
0 1	長方形	1.75×1.3	0.4	N-86°-W		土坑墓
0 2	長方形	2.1×1.2	0.25	N-57°-W	縄後・晩	土坑墓
0 3	長方形	2.5×1.2	0.25	N-83°-W	縄後・晩	土坑墓
0 4	長方形	1.65×1.05	0.3	N-82°-W		土坑墓
0 5	長方形	1.7×1.1	0.35	N-83°-W	縄晩	土坑墓
0 6	長方形	2.45×1.4	0.35	N-85°-W	縄後・晩 弥後	土坑墓
0 7	長方形	2.2×1.3	0.45	N-61°-W	管玉 縄後・晩 弥後	土坑墓
0 8	長方形	(1.4)×1.2	0.4	N-74°-W	縄後・晩 弥後	土坑墓
0 9	長方形	2.15×1.25	0.35	N-43°-W	縄後・晩	土坑墓
1 0	長方形	1.75×1	0.3	N-65°-W	縄後・晩	土坑墓
1 1	長方形	2×1	0.3	N-66°-W	縄後・晩	土坑墓
1 2	長方形	1.7×1.1	0.25	N-65°-W	縄後・晩	土坑墓
1 3	長方形	1.5×0.95	0.2	N-76°-W	縄晩	土坑墓
1 4	不整円形	1.65×1.45	0.15			
1 5	不整円形	1.5×1.15	0.3		縄 弥前	
1 6	不整円形	1.2×1.2	0.5		縄後・晩	
1 7	不整円形	1.75×1.3	0.35		縄 弥後	
1 8	不整円形	1.05×0.8	0.4			
1 9	不整円形	1.35×?	0.3		縄後・晩	
2 0	不整円形	1.5×1.5	1.2		縄後	2穴重複か
2 1	不整円形	1.5×1.5	0.25		縄後・晩 弥後	
2 2	不整円形	2.4×2.3	0.45		縄後・晩 弥前	

番号	平面形	平面規模	深さ	主軸	出土遺物	備考
2 3	不整円形	1.7×1.5	0.6		縄後・晩	底面に石敷
2 4	不整椭円形	1.15×0.8	0.3		縄晩	
2 5	不整椭円形	1.4×0.9	0.25		縄後・晩	
2 6	不整椭円形	1.75×0.85	0.3		縄後・晩	
2 7	不整椭円形	1.2×0.9	0.25		縄後・晩	
2 8	不整椭円形	1.5×0.8	0.2		縄後	
2 9	不整椭円形	1.1×1	0.35		縄後・晩	
3 0	不整椭円形	1.2×0.9	0.25		縄後	
3 1	不整椭円形	1.25×0.9	0.3		縄後・晩	
3 2	不整椭円形	1.3×1	0.3		縄晩	
3 3	不整椭円形	1.1×0.9	0.3			
3 4	不整椭円形	1.1×1	0.3		縄後・晩	
3 5	円形	0.8×0.8	0.25			
3 6	不整椭円形	1.4×1.2	0.4		縄後・晩	
3 7	不整椭円形	1.3×1.05	0.2		縄晩弥後	
3 8	不整椭円形	1.8×1.3	0.35		縄後・晩 弥前・後	
3 9	不整椭円形	1.4×1.5	0.35		縄後・晩 弥前・後	
4 0	不整椭円形	1×0.95	0.35		縄後・晩	
4 1	不整椭円形	1×0.95	0.3		縄晩 弥前	
4 2	円形	1.5×1.3	0.2		縄後・晩	
4 3	不整椭円形	1.35×0.95	0.3		縄晩	
4 4	方形	1.25×1	0.3		縄晩	
4 5	長方形	1.8×0.65	0.4		縄後・晩	
4 6	円形	1.1×1	0.2			
4 7	円形	1.15×1.35	0.4		弥後	
4 8	円形	2.15×2.4	0.4			
4 9	橢円形	2.3×1.1	0.5			

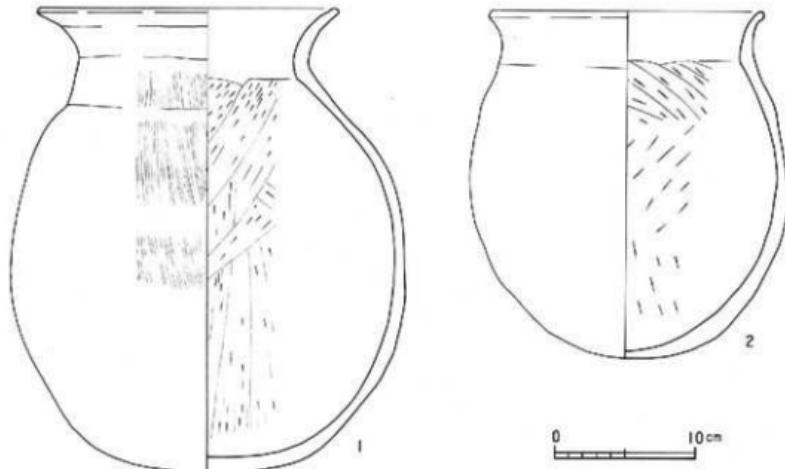
土坑出土土器一覽表

排区 番号	図版 番号	器種	上坑 番号	法 量(cm)	形 態	文様・手法	備 考
第12号 -1	1 0 8	彌生 甕	0 6	23.4	口縁肥厚	擬凹線3条 クシ 刺突	後期
-2	1 0 8	彌文 深鉢	0 6			沈線 連弧文 刻目	彦崎K 2
-3	1 0 8	同上	0 6		突起	口唇突起上に刻目 2枚貝 条痕	晚期前半
-4	1 0 8	彌文 浅鉢	0 7	18.1	口縁内傾	ミガキ	晚期後半
-5	1 0 8	彌生 甕	0 7	10.8	口縁端内傾	擬凹線3条	後期
-6	1 0 8	彌文 深鉢	0 7		口縁屈曲	沈線端刺突 刻目	彦崎K 2
-7	1 0 8	彌生 甕	4 7	11.1	口縁肥厚	擬凹線3条	後期
-8	1 0 8	彌文 深鉢	0 7		口唇平坦	突帯文(V字刻目) 口唇内面V字刻目	晚期後半
-9	1 0 8	同上	1 7		口縁純く屈曲 内面段	卷貝条痕 ミガキ	晚期前半
-10	1 0 8	彌生 甕	1 7		肩部	刺突 沈線 ケズリ	後期



第121図 森遺跡 SD01土層堆積状況 (1: 20)
ほぼ水平といえる。なお、東端と西端の高低差は15cmである。

出土遺物は中央東寄りの位置で、土師器が出土しており（第122図 図版105）、この遺構が古墳時代末～奈良時代住居跡に關係する遺構である可能性は高い。1は土師器壺A₁、2は壺A₁で、口径は1が21.3cm、2が19.6cm、器高は1が33cm、2が24.7cmを測る。



第122図 森遺跡 SD01出土土器 (1: 4)

(4) 溝 状 遺 構

調査区の北寄りで検出された。この河岸段丘をほぼ東西に走るように作られ、さらに今回の調査区の東に延びているようである（第2図 図版64）。この溝状遺構は調査区でも低い位置に作られている。検出できた範囲では、全長約80mおよび、深さは30～40cmである（第121図）。溝底は東端がやや高く中央部でもっとも低く西端で再度高くなるようであるが、高低差は最大で25cmとわずかで、長さから考えると

3. 遺構に伴わない遺物

(1) 繩文土器

縩文土器は小片ながら大量に出土した。これらは調査区の西北部の高い位置に集中しており、東および南側ではほとんど出土しなかった。調査では地山面で遺構が確認されず、地山面までの層を包含層として一括で遺物を取り上げた。しかしこの部分に集中することを考えると、これらの遺物が遺構の存在をある程度反映していたかもしれない。

縩文土器は有文土器を中心に以下のように分類できる。

第1類（第123図1～14 図版109） 第2類より古い様相の土器を一括した。いずれも縪帶文土器と思われる。第123図1は浮線を枠状に貼り付けている。同6～14は縩文が施される土器である。今回の調査では、縩文が施される上器はほとんどなく、胸部文様に縩文が使用されているのはこれがすべてである。これらは彦崎K 1～2式に相当すると思われる。

第2類（第123図15～第124図59 図版109～110） 磨消縩文だが、擬縩文が施されるものを集めた。16、17は屈曲した口縁部の屈曲部に縩文が施されるが、他の第2類土器と同時期と考えたためこの類に入れた。

磨消縩文を縦取る沈線は、21や25のように幅3～4mmと広いものがあるが、ほとんどは幅1～2mmの細沈線である。また18、31、38などのように沈線末端を刺突するものが多く、19や44のように沈線内を刺突するものもある。胸部屈曲部には沈線と刻み目が施されるものが多く、その上に連弧文が施されることが多い。連弧文は弧文一単位の幅が比較的狭い。51は弧文一単位の幅がかなり広く、また沈線幅が広いことなど、他の土器とやや趣を異にしている。この土器は関東地方の加曾利B式の可能性があるとの指摘もある¹⁾。

擬縩文は貝によるものとへら状工具による刺突状の擬縩文がある（49～50）。へら刺突による擬縩文をもつものは沈線端部に刺突が加えられない。貝による擬縩文はほとんどが巻き貝によるが、わずかに52は二枚貝の刺突による。

この類は注口土器が非常に目立つ。彦崎K 2式に並行すると思われる。

第3類（第124図60～第125図82 図版110～111） 縩文、擬縩文は施されず沈線間または沈線内に刻みか刺突が施される。多くは平行沈線の間に刻みが施されるが、まれに連弧文内に施されるものがある（70、77）。沈線文は2類に比べ2mm～3mm前後と大きく、直線的なモチーフが多い。沈線端部に刺突を加えるものは71のみである。沈線内に刺突を施すものもなく、62が押し引き状に沈

線が引かれるだけである。

器形は口縁部が「く」の字形に屈曲するものが多い。深鉢、浅鉢以外の器種としては高环(81)、注口土器(82)があるが各一点出土したに過ぎない。注口土器には沈線だけが引かれ、刻みは施されていない。

彦崎K2式に並行すると思われる。

第4a類(第125図83～第126図106、108 図版111～112) 口縁部内面に沈線が引かれ、刻み目が施されるもの。刻み目の代わりに刺突が施されるものもある(91)。また沈線、刻み目に加え、さらに刺突を入れるものもある(92、93)。沈線は基本的には1本だが、91は2本である。97は沈線が途切れ、その端部を刺突する。96、98は沈線内に刺突が1点または2点加えられている。

器形は単純口縁のものばかりで、頸部が「く」の字形に屈曲して口縁部が外反する深鉢と、皿形の口縁部が大きく開く浅鉢がある。小片が多いため頸部や胴部の文様は不明なものが多いが、83、84の頸部には連弧文(端部に刺突はない)と直線文が施される。また87の頸部には直線文とそれに直交する短沈線がある。

口縁端部は平坦に面取りされるが、92、93は端部がうすく作られている。口唇部分は基本的には無文だが、95には繩文が施されている。

馬取式に並行すると思われる。

第4b類(第126図107、109～116 図版112～113) 口縁部内面に沈線が引かれ刻み目が施されるが、外面にも沈線または凹線が引かれるもの。外面は沈線だけのもの、沈線に刻みが加えられるものの両者がある。器形、口縁端部の特徴などは4a類と同じだが、113は端部が丸く、他の土器とはやや違う趣である。

馬取式に並行すると思われる。

第4c類(第126図117～124 図版113) 口縁部内面に沈線だけが引かれ、刻みは施されないもの。外面は基本的に無文だが、119、120には細い爪形の刻み目が施される。

第5a類(第126図128～第127図135、137～138、140～151 図版113～114) 凹線文が施される土器で、凹線内をていねいに磨いたりなでたりするもの。凹線内を再調製するため凹線の間隔が狭く、凹線肩部は丸くなる。150、151のように密着するものもある。

文様は凹線間に刻み目を施すものがよくみられ、注口土器には注口部分で巻き貝尾部による刺突が施される。また、140、150には粘土粒を貼りつけ刺突する押点文がある。143は凹線間にへら描きによるX字形の文様がある。

器形は深鉢、浅鉢の多くは口縁部が逆「く」の字形に屈曲するものであるが、148は頸部がやや屈曲し口縁部が大きく外反する特異な形態である。注口土器は2類同様肩部で屈曲し段がつくもの

がある（139～142）ほか、たまねぎ形の肩部のもの（150、151）がある。

第5 b類（第127図136、139、154～155、157～158 第128図160、162～163、165、168～174、176～179、181、191、第129図202～203 図版113～116） 凹線文土器のうち、凹線内面を雜に再調製するもの。そのため凹線の間隔は広く、凹線内に巻き貝条線が残るものもある。また凹線肩部には稜がつく。文様は凹線以外には、巻き貝による刺突（158）、扇状圧痕（167、181）、押点文（179）がある。ほとんどは外面のみに施文されるが、166は口縁部内面にも凹線がある。

器形は深鉢、浅鉢の多くは口縁部が逆「く」の字形に屈曲するものである。5 a類に比べやや器壁が厚い。

191、202、203は注口土器でいずれも肩部に凹線が施される。203にはさらに注口部付近に巻き貝による刺突が加えられる。

福田KⅢ式に並行すると思われる。

第5 c類（第127図152～153、156 第128図159、161、164、166～167、175、180 図版114～115）

凹線文土器のうち、凹線内面を調製しないかごくわずかにするもの。そのため凹線の間隔は広く、凹線内に巻き貝条線が残り、凹線肩部には稜がつく。文様は凹線以外には、扇状圧痕（153、180）がある。

器形は5 b類と同じである。178は肩に段がつく注口土器である。

福田KⅢ式に並行すると思われる。

第5 d類（第128図182～190 図版115） 口縁部が大きく外反するもので、口縁部内面に1～2条の凹線が施されるもの。凹線内は再調製されるものが多い。183は外面にも凹線が施されるが、その他は内面だけの施文である。

第6類（第128図192～199 図版115） 九州地方の西平式系と思われる土器を集めたが、間違いなく西平式系であるという確証はない。口縁部が逆「く」の字形に短く屈曲するもので口縁端部に1条か2条沈線が入る。194と196はさらに屈曲部に刻み目が施される。199は肩部片で羽状に刺突文が入っている。

第7類（第129図204～215 図版116～117） 後期の粗製無文土器を集めた。口縁端部は面取りし平坦である。206、207は口縁端部にシゲザゲに刻みを入れている。調整は巻き貝条痕のものが多く、まれに215内面のように2枚貝条痕が施されるものがある。

第8類（第129図216～第130図228 図版117） 5類に比べ口縁部の屈曲が弱いものや（216～222）、わずかに肥厚して屈曲の名残があるもの（223）。口縁端部外面には沈線が施されるものがある。第130図225～228は強く張る肩部で、口縁部の形態は不明だが、土器の様相が8類に似ることからこの類に入れておく。

晩期前半と思われる。

第9a類（第130図229～247 図版117～118） 頭部がくびれ、口縁部が外反する単純口縁の土器である。229～231、247のように口縁部が短いものと、233～242のように口縁部が長いものがあるようである。第7類に比べ全体に器壁はうすい。胴部はやや張るが、245のように強く張るものもある。

晩期前半と思われるが、8類より新しいかも知れない。

第9b類（第131図248～260、262 図版118～119） 頭部がくびれ口縁部が外反する単純口縁の土器で、口唇部に刻み目があるもの。刻み目は249～255、258～259のように棒状または巻き貝による刺突状の刻み目と248、256、257、260のように線状の刻み目がある。259は巻き貝による押し引き状の刻み目が施される。260の外面には巻き貝による斜線文様が見られるが、文様か調整かは不明である。

晩期前半と思われる。

第10a類（第131図261、263～第132図279、283、285～291 図版119～120） 器形は9類と同じだが、口縁内面に刺突が施されるもの。棒状工具によるD字の刺突（263、265～266など）と半截竹管状工具によるC字の刺突（261、271、273など）がある。刺突の位置はやや低い位置にあるもの（263～274）、口唇部に接しているもの（275～279、283）がある。さらに口唇部に刻み目を入れるものもある（265～267）。外面にはほとんど文様はないが、263はヘラによる、264には巻き貝による山形文が施されている。

285～291は胴部外面に刺突がある土器である。10b類の胴部とも考えられるが、この類に入れておく。

谷尻式に併行すると思われる。

第10b類（第132図280～282、284 図版119） 器形は9類、10a類と同じだが、口縁部外面に刺突が施されるもの。280の外面には巻き貝による斜線文（山形文か）がある。

谷尻式に併行すると思われる。

第11類（第132図292、294、296、298、306 図版120） 深鉢頭部で頭部と胴部の境に沈線が入るもの。滋賀里3式の影響と思われる。292は頭部に格子文、298は胴部に刺突が施される。296は頭部と胴部の境が突帯状になっており、この時期より新しいものかもしれないが、突帯文土器とは様相がかなり違うことからこの類に含めた。

第10類と併行すると思われる。

第12類（第132図297、302、304～305 図版120） 晩期前半の浅鉢で以下の類に入らないものを一括した。297、304はポール形、305は皿形、302は口縁端部が短く外反する浅鉢である。304は頭

部が短く屈曲し突起部に押点文がある。297は非常に器壁がうすい。

第13類（第132図299～301、303 図版120） 浅鉢で、口縁部は短く外傾し頸部は屈曲するもの。晚期前半と思われる。

第14a類（第133図307～309、311～312、325 図版120～121） 脊部が屈曲し鋭い稜ができる浅鉢で、口縁部は短めに内傾または直立するもの。口縁内面に沈線があるもの（307、308）、脇部に沈線があるものなど（325）がある。磨きまたはなでで非常にていねいに器面調整が施される。

晚期前半と思われる。

第14b類（第133図310、313～318、320～324、326～330、332～333 図版120～121） 脊部が畠曲し鋭い稜ができるもので、口縁部は外反する。13a類に比べ口縁部はやや長いが、長頸浅鉢ほど長くないもの。口縁内面に沈線が入るものがある。

晚期前半と思われる。

第15a類（第134図334～340 図版121～122） いわゆる長頸浅鉢で、口縁部は大きく長く外反する。内面に太い凹線気味の沈線が入るものもあり、14類との区別はあいまいだが、器壁がうすく調整が比較的難なものが当地の長頸浅鉢に多いことから、同様な要素をもつ土器をこの類に入れられた。

晚期前半と思われる。

第15b類（第134図341～346 図版122） いわゆる長頸浅鉢で、口縁部は大きく長く外反する。口縁端部が玉縁状に肥厚するか、または縁り上がるものである。

第16a類（第134図351、352 図版122） 突帯文上器で、口縁内面に刺突文があるもの。口唇部は厚くしっかりしている。突帯は、口縁の下に付けられやや低いものの断面方形で、突帯上の刻み目も刺突状の大きな刻み目である。

前池式に併行すると思われる。

第16b類（第134図349～350、353～第135図363、365～383 図版122～123） 突帯文上器のうち口唇部と突帯上に刻みをもち、突帯が口縁の下に位置するもの。（1）口唇部が厚く平坦面をもつもの（347～350、354～359など）と、（2）口唇部がうすいもの（361～367など）がある。前者は突帯が大く断面台形を呈し、後者は突帯が細く断面三角形を呈すものが多いようである。刻み目は大きな刺突状のものは（1）が多くやや幅の狭い「V」字に近い「D」字刻み目のものは（2）が多いようである。口唇部の刻みの位置は内側から施文するもの（349、368）、真上から施文するもの（354～363など）、前面から施文するもの（376～383）などである。

器形は354のように口縁部が内溝するものと、349、368のように外反するものとがある。

（1）は前池式に併行するかもしない。

第16c類 (第135図384～392、394、396～406、408～409 図版123～124) 突帯文土器のうち口唇部に刻み目をもたず、突帯上のみに刻み目が入るもの。口唇部は385以外は面取りされず、先細りになるものも多い。刻み目は385、386が大きな刺突状の刻み目である以外は比較的小さなD字またはV字である。398～399、404、409は非常に小さな刻み目である。突帯の位置は384～394が口縁部の下に付けられるほかは口縁端部と密着している。突帯の高さは16b類に比べると、408のように非常に低いものも多い。

沢田式に併行するかもしれない。

第16d類 (第135図393、395～397、407、410 図版123～124) 口唇部、突帯上とも刻み目が施されないもの。393、395は口縁部のやや下に突帯がつくが、他は口縁部と密着している。410は口縁部に突帯が2条つく特異な土器である。

沢田式に併行するかもしれない。

第17類 (第135図411～417 図版124) 2条突帯文土器の胴部突帯である。いずれも刻み目が施される。刻み目は413が刺突状であるほかは「V」字または「D」字である。

第18類 (第136図418、433 図版124) 浅鉢で、肩部が強く張り、口縁部が短く屈曲するもの。いわゆる黒川式土器。

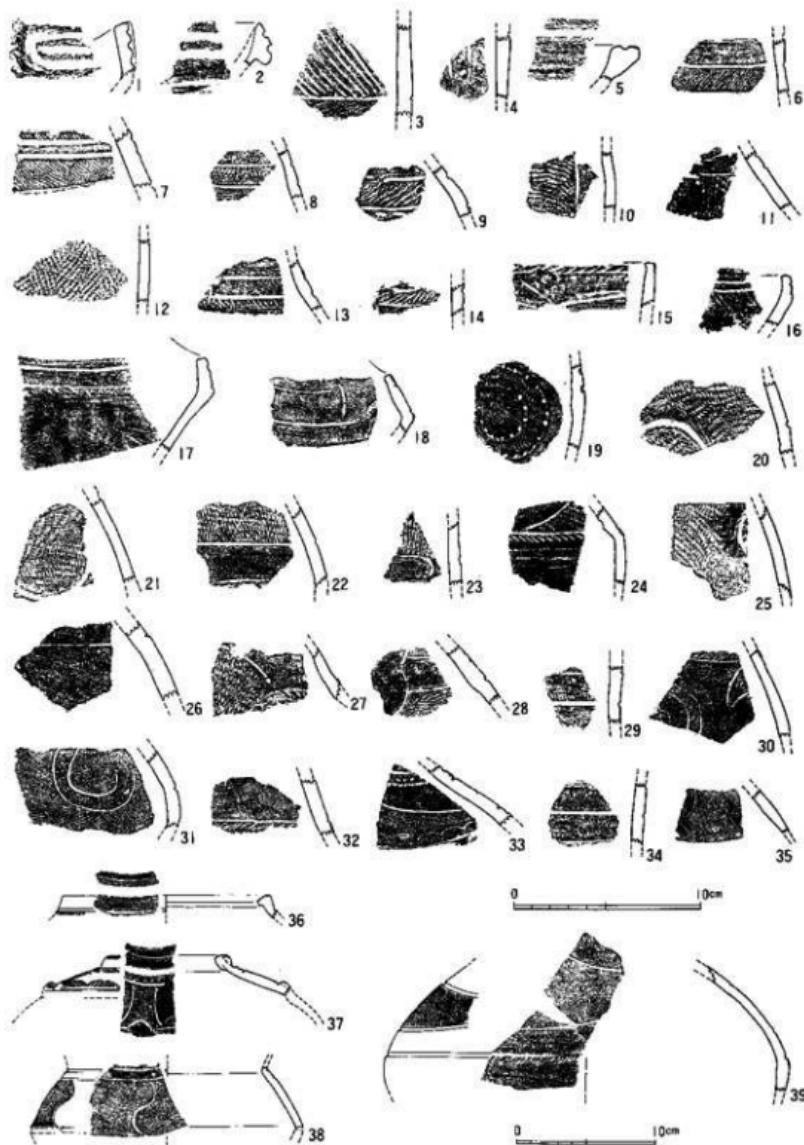
第19a類 (第136図422、435 図版124) 浅鉢で肩部が強く張り、稜ができるもののうち頸部外面に段がつかないもの。

第19b類 (第136図423～425、429～430、436～437 図版124) 浅鉢で肩部が強く張り、稜ができるもので頸部外面に段がつくもの。肩部が強く張り稜がつき、口縁部内面が肥厚して玉縁状になる。

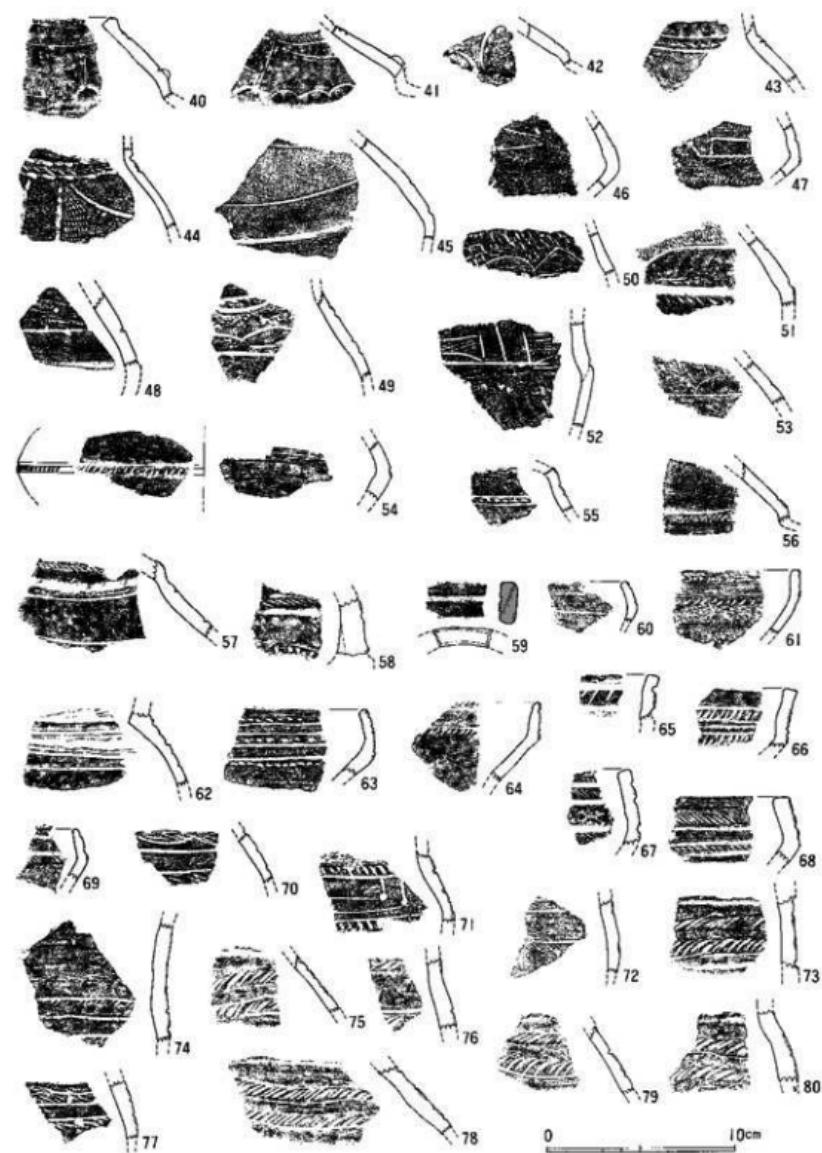
第20類 (第136図434、438 図版124) 口縁部が短く外反するもの。頸部は緩く屈曲する。器壁は非常にうすくてていねいに磨かれている。

底部 (第136図439～452 図版124～125) 平底の底部を一括した。高台状のもの (440～441)、断面三角形の高台状のもの (445～446)、中央がくぼむもの (442～443)、全面がくぼむもの (447～452)、丸底のもの (439) などがある。

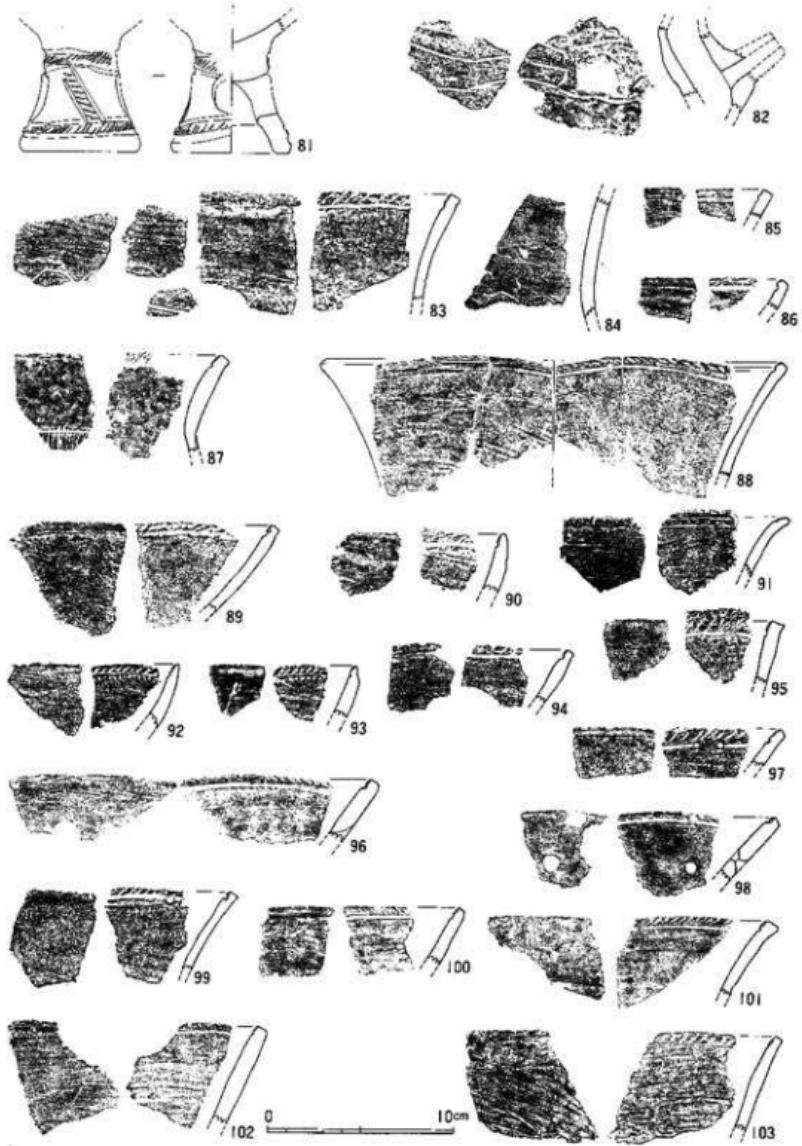
注 1) 大冢達朗氏の教示による。



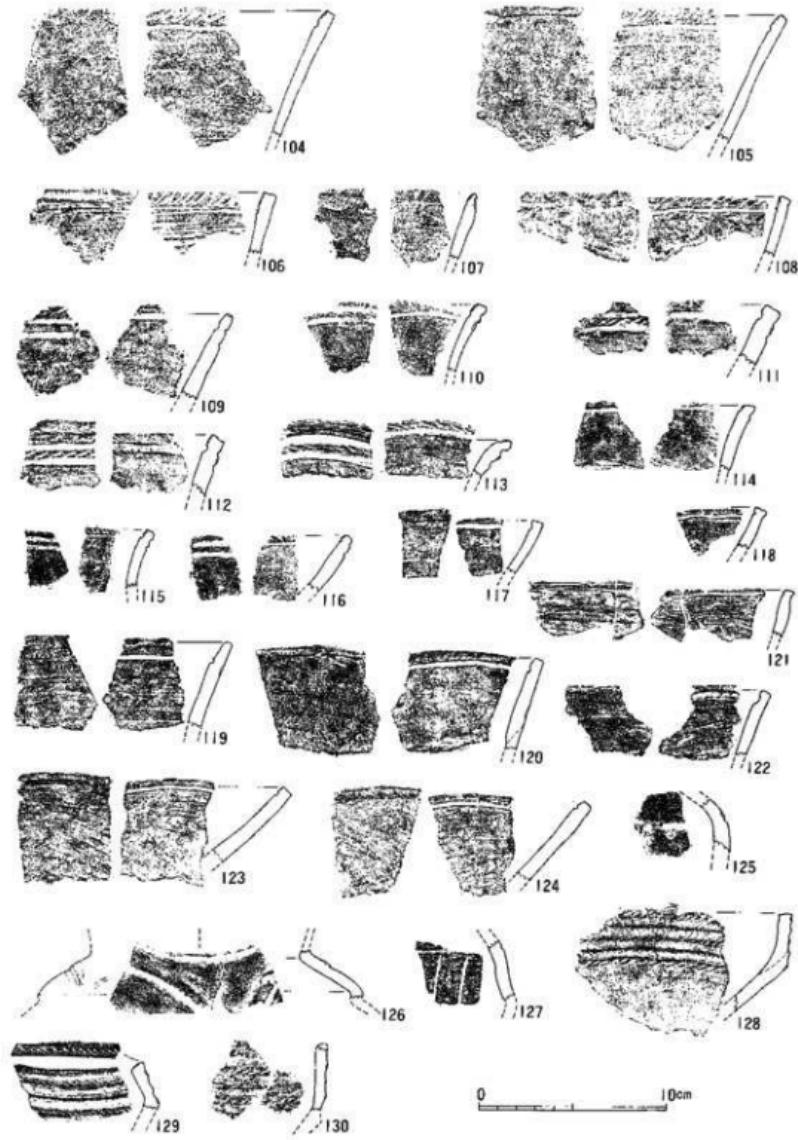
第123図 森遺跡出土縄文土器 (1) 1~35 (1:3) 36~39 (1:4)



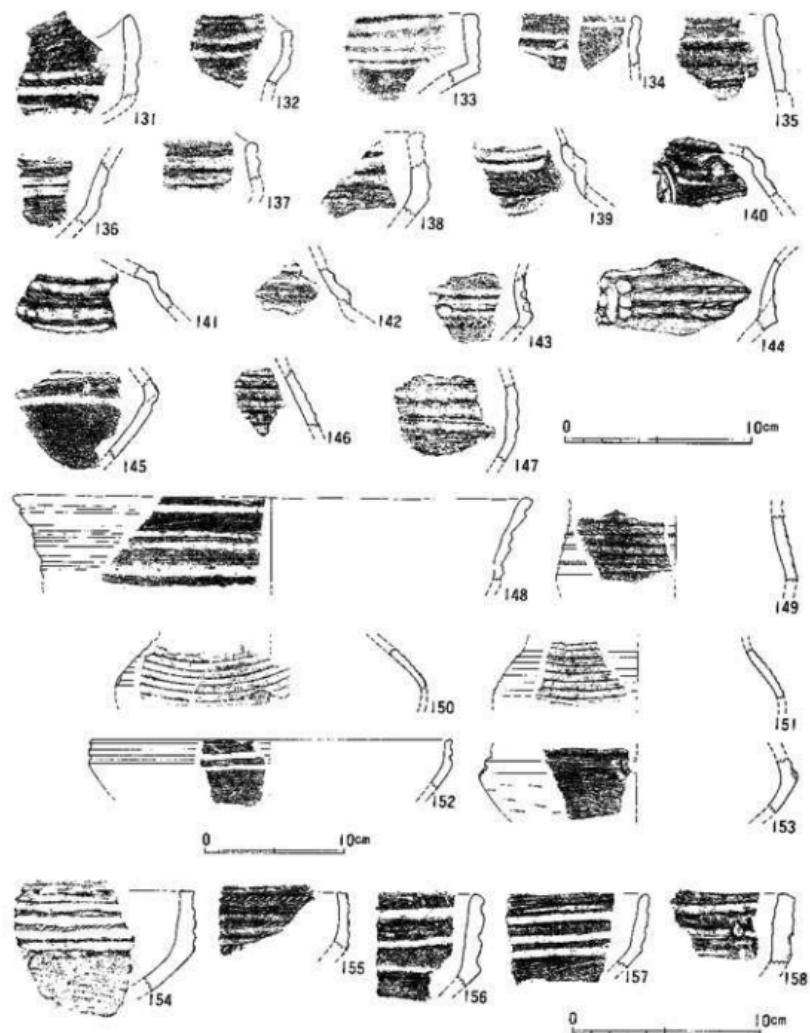
第124図 森遺跡出土縄文土器（2）（1:3）



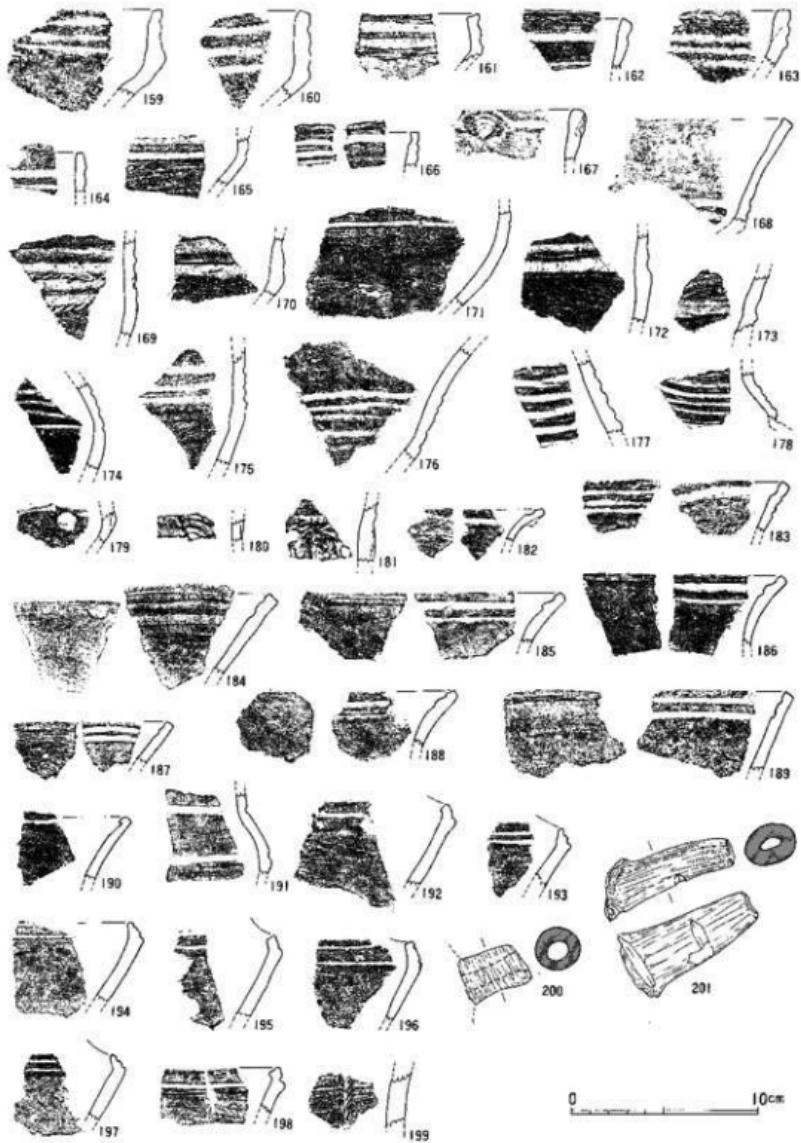
第125図 森遺跡出土縄文土器 (3) (1 : 3)



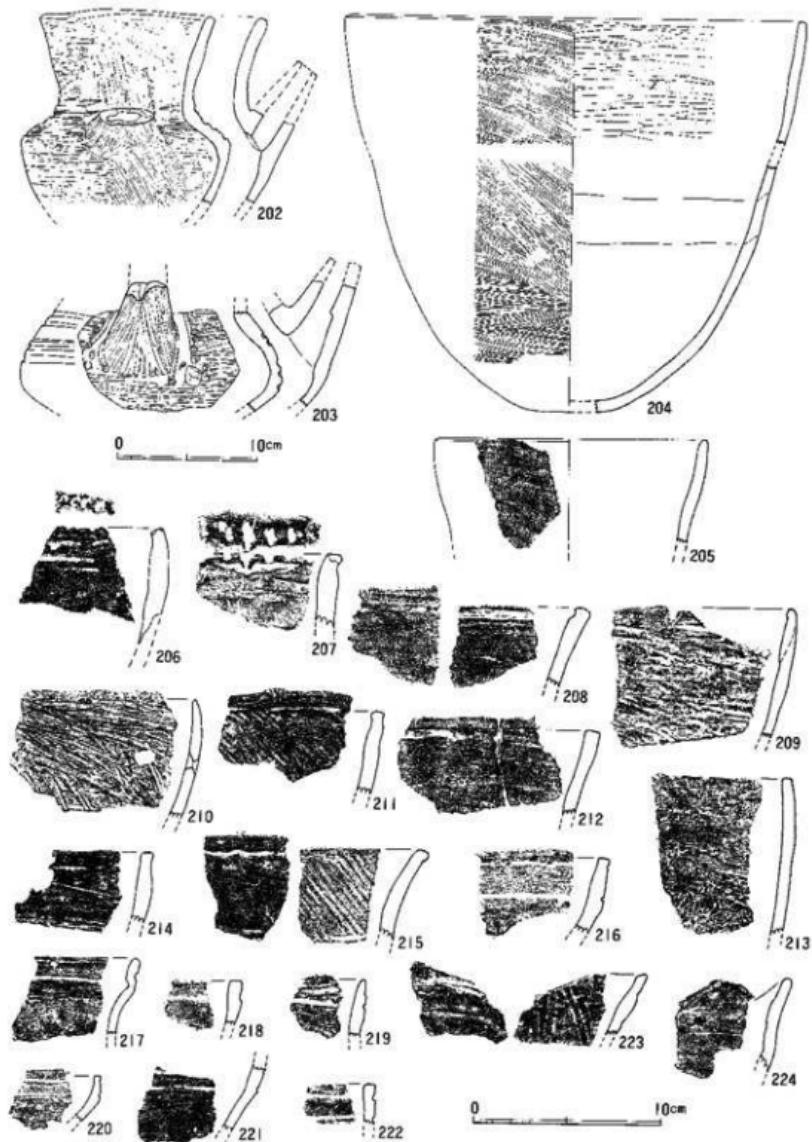
第126図 森遺跡出土縄文土器(4) (1:3)



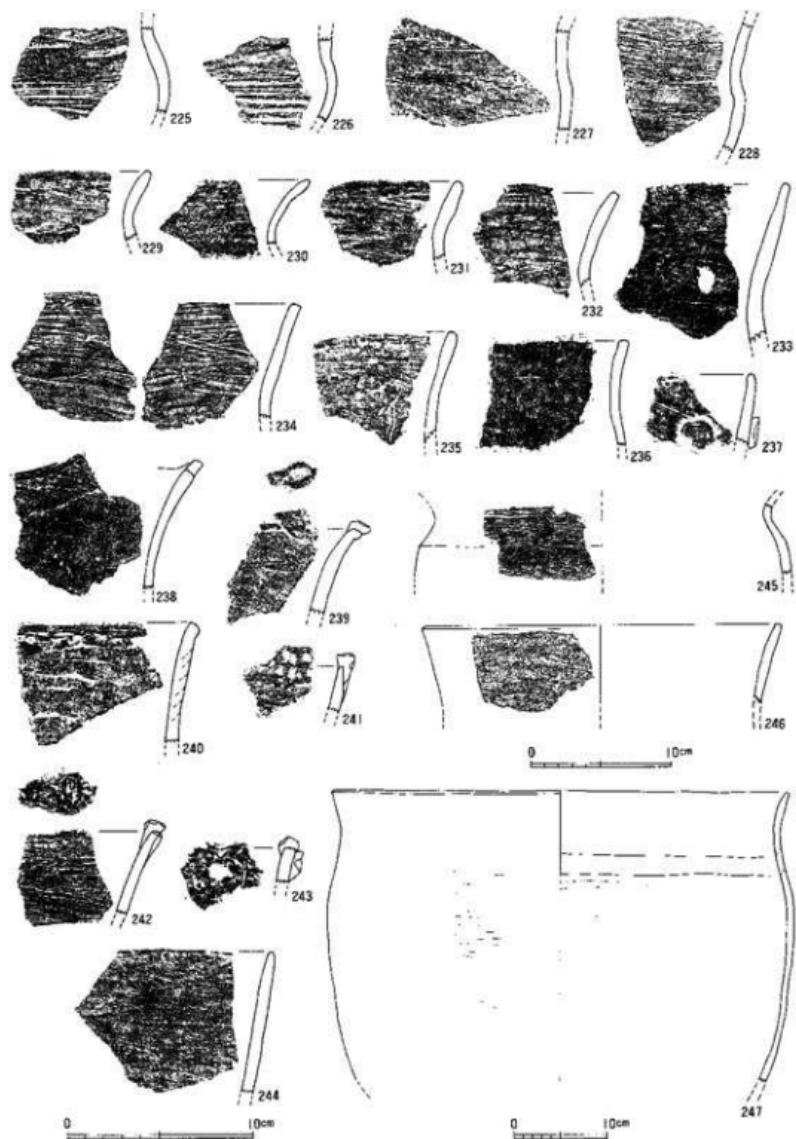
第127図 森遺跡出土縄文土器（5） 131～147、154～158（1:3） 148～153（1:4）



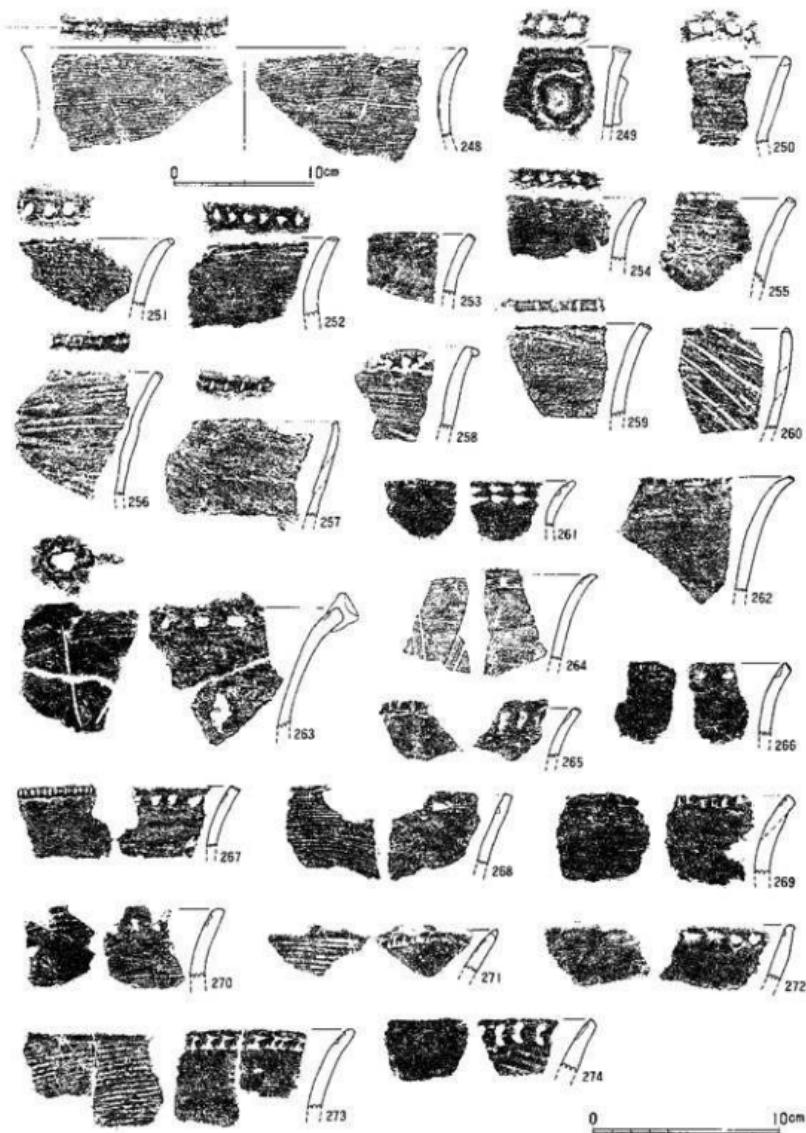
第128図 森遺跡出土縄文土器（6）（1:3）



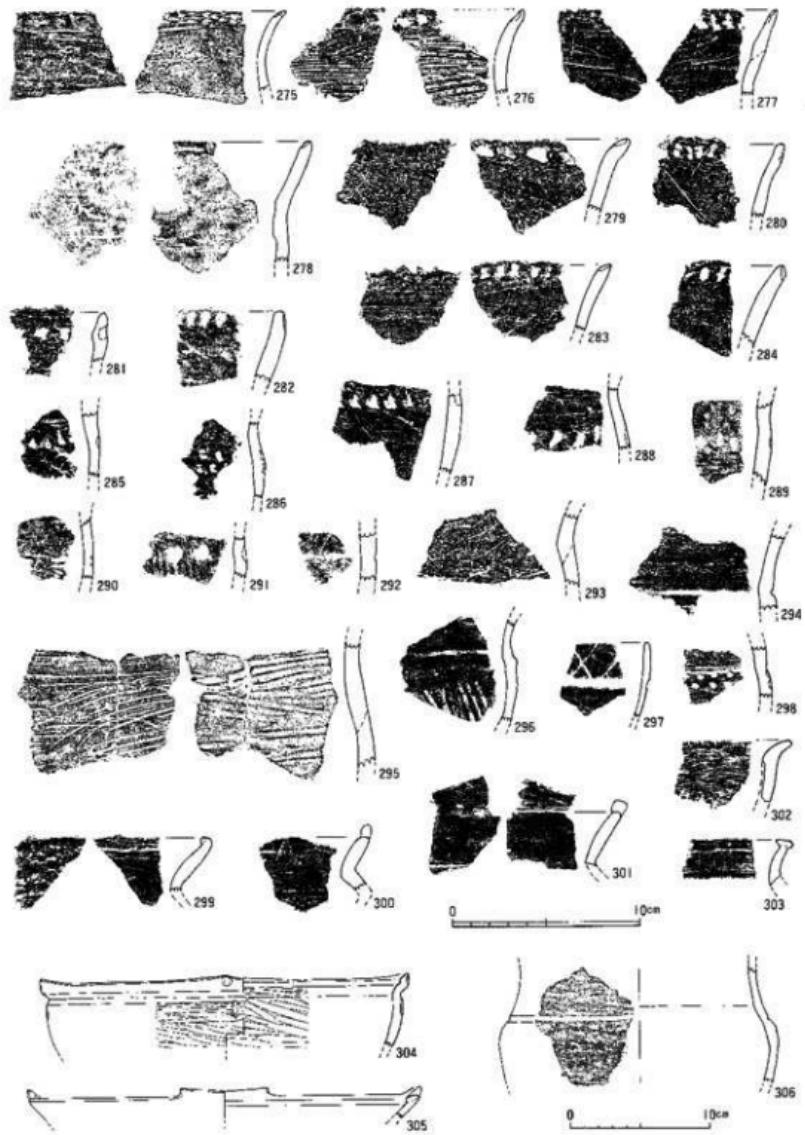
第129図 森遺跡出土縄文土器(7) 202~205 (1:4) 206~224 (1:3)



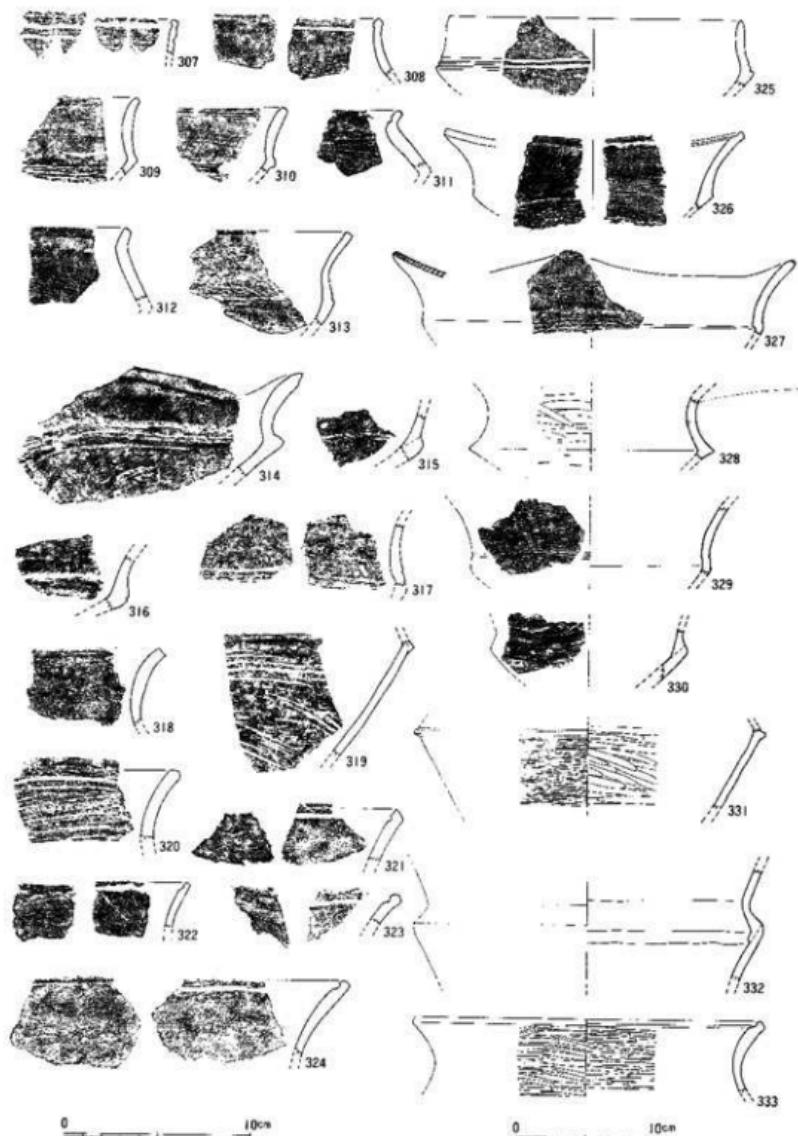
第130図 森遺跡出土縄文土器 (8) 225~244 (1:3) 245、246 (1:4) 247 (1:6)



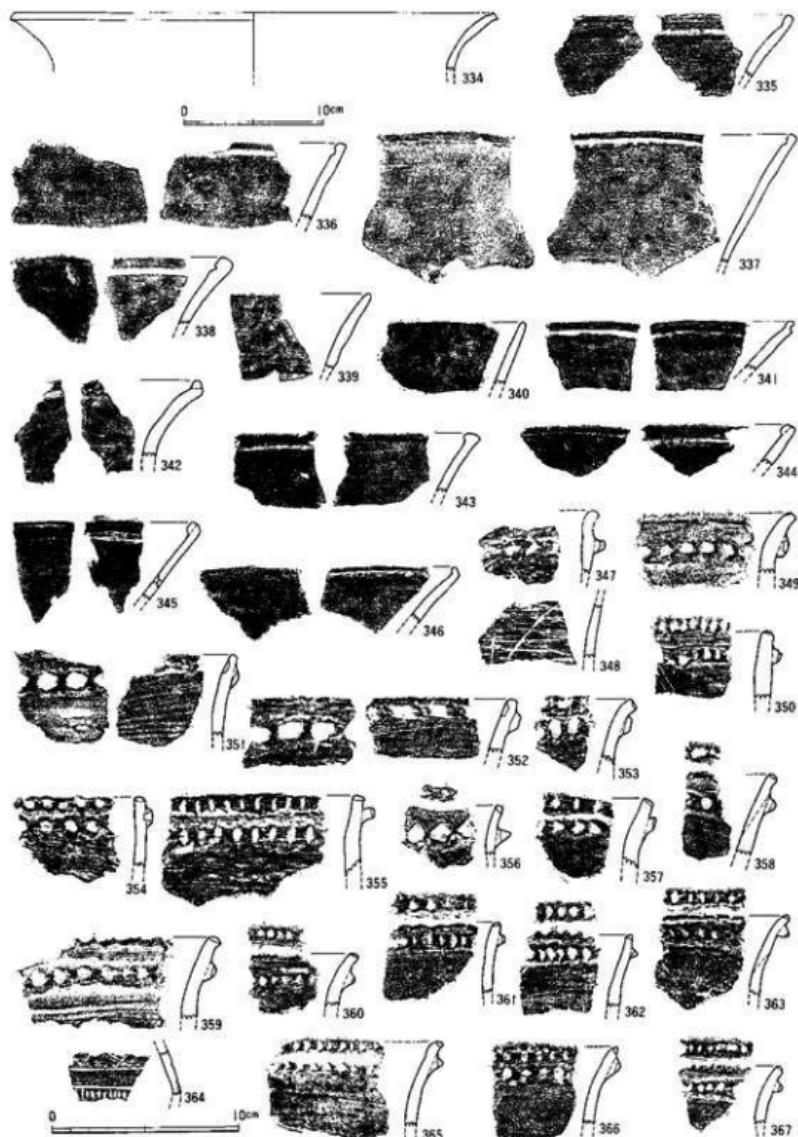
第131図 森遺跡出土縄文土器（9） 248（1:4） 249～274（1:3）



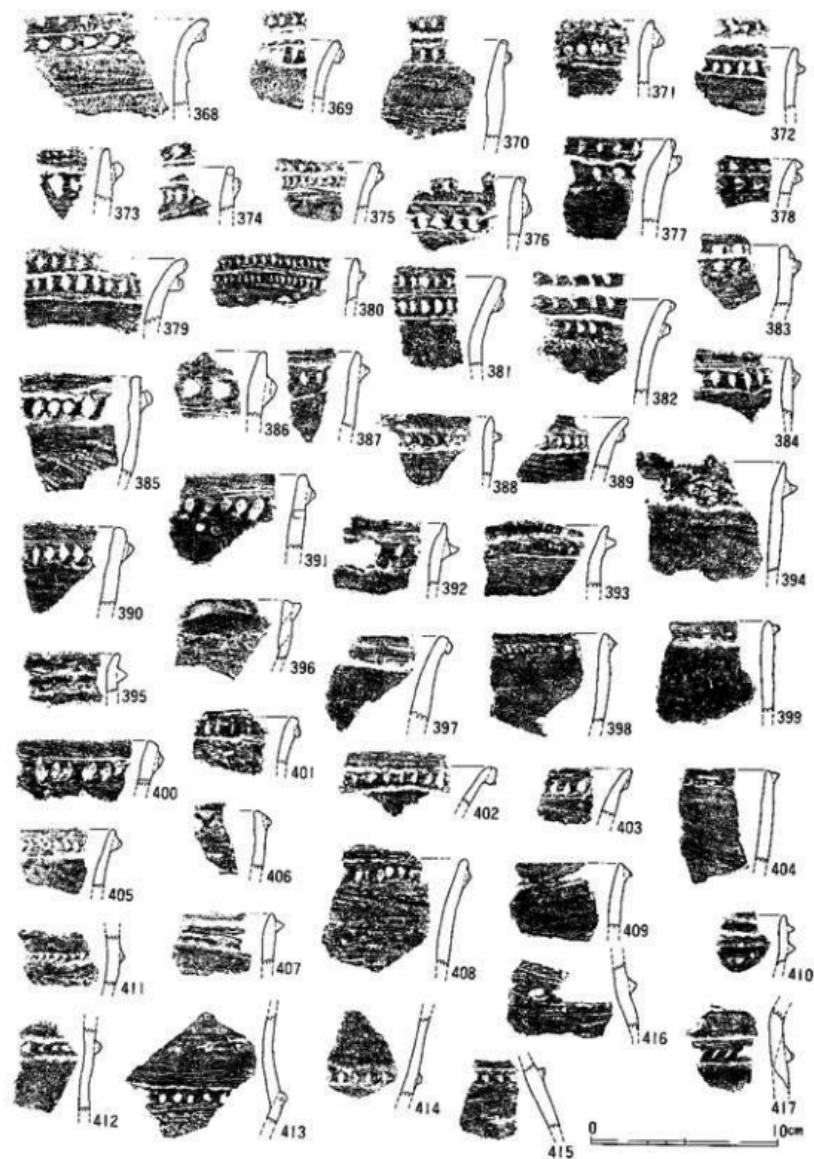
第132図 森遺跡出土縄文土器 (10) 275~303 (1:3) 304~306 (1:4)



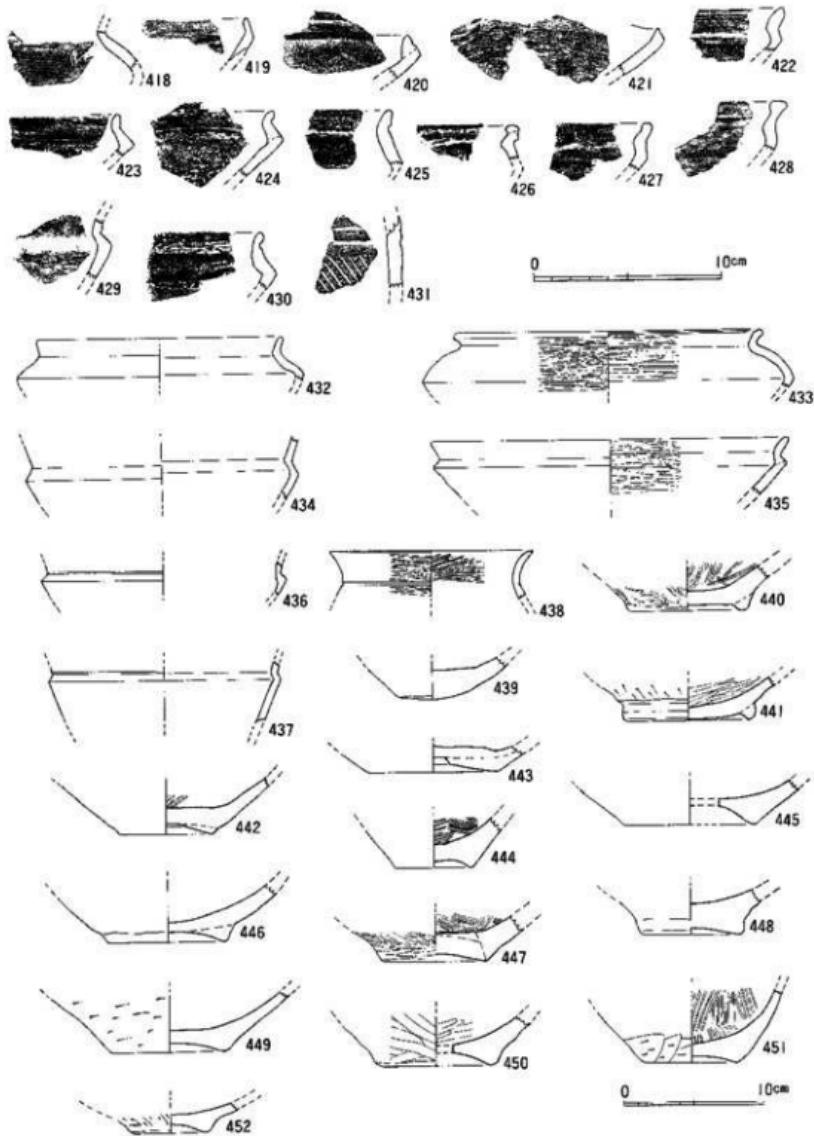
第133図 森遺跡出土縄文土器 (11) 307~324 (1:3) 325~333 (1:4)



第134図 森遺跡出土縄文土器 (12) 334 (1 : 4) 335~367 (1 : 3)



第135図 森遺跡出土縄文土器 (13) (1 : 3)



第136図 森遺跡出土縄文土器 (14) 418~431 (1 : 3) 432~452 (1 : 4)

縄文土器一覧表

分類	插図番号	図版番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
1	第123図 -1	109	N12-20 E 8-20		波状口縁	微陰帶上に繩文	ナデ?	
1	-2	109			口縁肥厚	深い沈線 沈線間に繩文または刻目		
1	-3	109	N15-25 E10-20			斜線文 振繩文		
1	-4	109	N 8-14 E 8-20			垂下沈線間に刺突 上端に沈線		
1	-5	109	N 9-10		口縁肥厚	大い沈線 刻目(上面施文) 卷貝条痕		
1	-6	109	N20-25 E20-25			沈線+繩文(LR)		
1	-7	109	N30-35 E30-35			沈線+繩文(RL)		
1	-8	109				沈線+(振?)繩文		赤色顔料塗彩
1	-9	109	N10-25 E10-15			沈線+繩文(LR)		
1	-10	109	N12-20 E 8-20			だ円形の刺突 沈線+繩文(LR)		
1	-11	109	S 1-10			沈線内刺突 繩文(RL)		
1	-12	109	N25-30 E20-30			繩文(RL)		
1	-13	109	N20-30 E15-20			沈線+刻目+繩文 (RL) 沈線端刺突		
1	-14	109				沈線+繩文(LR)		
2	-15	109	N 8-9 E 8-9	直口		刻目+沈線+振繩文 円形浮文上に押点文		
2	-16	109	N 5-10 E 25-30		口縁屈曲	沈繩文 繩文(RL?)		
2	-17	109	N20-30 E15-20		口縁屈曲	沈繩文 繩文(R L) ミガキ		
2	-18	109	N14-20 E 7-20		口縁屈曲	刻目 振繩文 沈 線端刺突 右端沈 線内刺突		
2	-19	109	N 8-9 E 12-13			沈線内刺突 振繩 文		
2	-20	109	N 8-14 E 8-20			沈線 振繩文		
2	-21	109				太い沈線 振繩文		
2	-22	109	N 8-14 E 8-20			沈繩文 振繩文	ミガキ 卷貝条痕	
2	-23	109	N20-30 E10-20			沈線 振繩文	ナデ	
2	-24	109	N13-23 E30-40			振繩文 沈線 刻目	卷貝条痕 +ミガキ	
2	-25	109	N10-25 E10-15			振繩文 沈線文	ミガキ ケズリ?	
2	-26	109	N10-20 E10-20			沈線内刺突 振繩 文	ケズリ 一部ミガ キ	

分類	種別番号	西暦番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
2	-27	109	N20-25 E20-25			沈線端刺突 右下 端浮文+刻目	ミガキ ナデ	
2	-28	109	N12-20 E 8-20			沈線端刺突 擬輪文		
2	-29	109				沈線 擬輪文	ナデ	
2	-30	109	N15-25 E 0-10			沈線 擬輪文 沈 線端刺突 刻目	ミガキ ナデ	
2	-31	109	N15-20 E20-25			擬輪文 沈線端刺 突	ミガキ ナデ	
2	-32	109				擬輪文 沈線 刻 目		
2	-33	109	N15-20 E20-25			擬輪文 刺突 沈 線内刺突 連弧文 (沈線端刺突)	ミガキ	
2	-34	109	N13-23 E30-40			沈線 擬輪文	ナデ	
2	-35	109	N20ライン E10-20			沈線 擬輪文	ミガキ ナデ	
2	-36	110	N15-25 E10-15	注口 口唇肥厚		刻目 沈線 擬輪 文	ミガキ ナデ	口径15cm
2	-37	110	N25-30 E20-30	注口 口唇肥厚 肩に段		沈線端刺突 沈 線内刺突 擬輪 文 円形厚文	ミガキ	
2	-38	110	N10-20 E10-20	注口 玉葱状の肩部		沈線端刺突 擬輪 文	ミガキ ナデ	肩部径19.4cm
2	-39	110	N10-25 E10-15	注口 玉葱状の肩部		沈線 擬輪文 刻 目	ミガキ 卷貝条痕 +ナデ	肩部径29.8cm
2	第124図 -40	110	N13-20 E20-30	注口 口唇肥厚 肩部段		沈線端刺突 沈 線内刺突 擬輪 文 円形厚文	ミガキ	
2	-41	110	N12-20 E 8-20	注口 肩部段		沈線端刺突 沈 線内刺突 擬輪 文 連弧文 上端に沈線	ミガキ	
2	-42	110		注口 肩部段 注口部		擬輪文 沈線	ミガキ ナデ	
2	-43	110	N20ライン E10-20	注口		沈線間に刺突 擬 輪文	ナデ	
2	-44	110	N20-30 E15-20	注口 ?		沈線間に刺突 擬 輪文 沈線内刺突	ミガキ 2枚貝条 痕	
2	-45	110	N10-25 E10-15	注口 玉葱状の肩部		沈線 擬輪文	ナデ	
2	-46	110	N30-40 E20-30	注口 玉葱状の肩部		沈線端刺突 擬輪 文	ミガキ 卷貝条痕 +ナデ	
2	-47	110	N13-20 E20-30	注口 玉葱状の肩部		沈線端刺突 刻目 擬輪文	ミガキ 卷貝条痕 +ナデ	
2	-48	110	N20-30 E10-20			擬輪文 沈線内1 点刺突	ミガキ	
2	-49	110	N13-23 E30-40			刺突による擬輪文 沈線 刺突 連弧文	ミガキ	
2	-50	110	N12-20 E 8-20			刺突による擬輪文 連弧文 下端に沈 線	ミガキ 卷貝条痕 +ミガキ	
2	-51	110	N12-20 E 8-20			擬輪文 沈線 刻 目 連弧文?	ミガキ	加曾利B?

分類	捕獲番号	図版番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
2	-52	110	S I-04			沈線 刺突による 擬繩文 連弧文?	ミガキ ナデ	
2	-53	110	N20-30 E10-20			沈線 刺突による 擬繩文 連弧文	ミガキ	
2	-54	109	N 8-14 E 8-20	注口 玉葱状の肩部	刻目	ミガキ 巻貝条痕	最大径19.9cm	
2	-55	110	S I-18	注口 肩部段	沈線 刻目 刺突	ミガキ? ナデ		
2	-56	110	N 8-14 E 8-20	注口 肩部段	沈線 刻目	ミガキ ナデ		
2	-57	110	N20-25 E25-30	注口 肩部段	刻目 沈線 繩文 ?	ミガキ		
2	-58	110	N12-20 E 8-20	把手	沈線 刻目 下端 沈線内刺突	ナデ		
2	-59	110	N 8-14 E 8-20	把手	沈線 擬繩文?	ナデ		
3	-60	110	S I-15 付近	口縁屈曲	沈線 刻目	ナデか ミガキ		
3	-61	110	N15-20 E10-15	口縁屈曲	沈線 刻目	ミガキ		
3	-62	110	N 8-14 E 8-20	注口	沈線 中央に押引 状の沈線	ミガキ		
3	-63	110	N10-20 E 5-10	口縁屈曲	沈線 刺突	ミガキ		
3	-64	110	N12-20 E 8-20	口縁屈曲	沈線 刻目	ミガキ		
3	-65	110	N 8-14 E 8-20		沈線 刻目			
3	-66	110	N12-20 E 8-20	口縁屈曲	沈線 刻目	ミガキ		
3	-67	110	N10-20 E 0-10	口縁長く肩曲	沈線 刻目	ミガキ		
3	-68	110	SK10-34	口縁屈曲	沈線 刻目	ナデ		
3	-69	110		口縁屈曲	沈線 刻目	ナデ		
3	-70	110	N27-28 E14-15		擬繩文(2枚貝刺 突) 沈線 連弧文	ミガキ ナデ		
3	-71	110	N10-20 E10-20		沈線 刻目 沈線端刺突	ナデ		
3	-72	110	N15-20 E10-15		沈線 2枚貝によ る刺突	ミガキ		
3	-73	111	N15-20 E10-15		沈線 刻目	巻貝条痕		
3	-74	111	N15-25 E 0-10		沈線 刻目	ナデ 巻貝条痕		
3	-75	111	N20-30 E10-20		沈線 刻目	ナデ		
3	-76	111	N20-30 E10-20		沈線 刻目	ミガキ		
3	-77	111	N30-40 E20-30		沈線 刻目 連弧 文	ミガキ		
3	-78	111	N12-20 E 8-20		沈線 刻目	ナデ 巻貝条痕		
3	-79	111	N12-20 E 8-20		沈線 刻目	ナデ		
3	-80	111	N12-20 E 8-20		沈線 刻目	ミガキ 巻貝条痕		

分類	図版番号	開拓番号	山土地点	型種	形態	文様	手法	備考
3	第125図 -81	111		高坏		沈線 刻目	ミガキか ナデ	円形透し
3	-82	111	N12-20 E 8-20 N15-20 E10-15	注口		沈線のみ	ナデ	
4 a	-83	111	N10-25 E10-15	口唇平坦		沈線 刻目 連弧文	卷貝条痕 +ナデ	
4 a	-84	111	N10-20 E10-20			連弧文	ミガキ ナデ	
4 a	-85	111	N15-25 E10-20	口唇平坦		刺突状刻目2段 沈線	ミガキ	
4 a	-86	111		口唇平坦		刺突状刻目2段 沈線	ミガキ	
4 a	-87	111	N 8-9 E 8-9	口唇平坦		内面沈線 刻目 外面短沈線	ナデ	
4 a	-88	111	N10-25 E10-15	口唇平坦		沈線 刻目	卷貝条痕 +ナデ	
4 a	-89	111	N20-30 E 9-10	浅鉢	口唇平坦	沈線 刺突	条痕? + ナデ	
4 a	-90	111	N12-20 E 8-20	浅鉢	口唇丸い	沈線 刻目 (2枚 以上?)	卷貝条痕 +ナデ	
4 a	-91	111	N15-20 E10-15		口唇外反	沈線間に刺突	卷貝条痕	
4 a	-92	111	N10-20 E 0-10	浅鉢	口唇丸い	沈線 刻目 刺突	ミガキ	
4 a	-93	111	N12-20 E 8-20		口唇平坦	沈線 刻目 刺突	ミガキ	
4 a	-94	111	N20-30 E15-20			沈線 刻目	ミガキ	
4 a	-95	111	N15-20 E13-15	口唇平坦		沈線 刻目 口唇 に繩文	ナデ	
4 a	-96	111	N20-30 E10-20	浅鉢	口唇平坦	沈線内に刺突2 刻目	ミガキ	
4 a	-97	112	N15-25 E10-20		口唇平坦	沈線端刺突 刻目	ナデ	
4 a	-98	112	N12-20 E 8-20	II唇平坦		沈線内刺突1 刻目	ミガキ	補修孔
4 a	-99	112	N10-25 E10-15	口唇平坦		沈線内刺突2 刻目	ナデ	
4 a	-100	112	N 9-11 E12-18	II唇平坦		沈線 刻目		
4 a	-101	112	N20-30 E15-20	口唇平坦		沈線 刻目 外面 頸部に凹線 (内ミ ガキ)	ミガキ	
4 a	-102	112	N20-30 E10-20	口唇平坦		沈線 刻目	卷貝条痕 +ナデ	
4 a	-103	112	N25-30 E20-25	口唇平坦		沈線 刻目	ミガキ	
4 a	第126図 -104	112	N17-20 E15-20	II唇平坦		沈線 刻目	ナデ	
4 a	-105	112	N15-25 E10-20	口唇平坦		沈線 刻目	ナデ	
4 a	-106	112	N10-20 E10-20	口唇平坦		沈線 刻目	ナデ	
4 b	-107	112	N20-30 E10-20	II唇丸い		内外とも沈線 +刻目 内面に押点	ナデ	

分類	掲録番号	図版番号	出土地点	器種	形 態	文 様	手 法	備 考
4 a	-108	1 1 2	N15-20 E10-15		口唇平坦	沈線 刻目	ナデ	
4 b	-109	1 1 2	N25-30 E20-30		口唇平坦	口唇刻目 内1条 外2条の太い沈線	ナデ 卷 貝条痕 + ナデ	
4 b	-110	1 1 2	N19-20 E45-50		口唇平坦	内外刻目 内1条 外2条沈線 外沈 線内刺突1	ナデ	
4 b	-111	1 1 3	S I - 18 No. 44		口唇平坦 器壁厚 い	内巻貝凹線1 外巻貝凹線間に刻 目	ナデ	
4 b	-112	1 1 3	N20-25 E25-30		口唇平坦	内刻目 + 卷貝? 四 線1 外巻貝四線 間に刻目	ミガキ	
4 b	-113	1 1 3	N15-25 E10-20		口唇外反 丸い	内刻目 + 四線 外 四線間に刻目 四 線内ミガキ	ミガキ	
4 b	-114	1 1 3	N10-20 E10		口唇平坦	内刻目 + 沈線 外 刻目 + 四線 頸部 にも四線	ミガキ	
4 b	-115	1 1 3	N15-20 E13-15		口唇平坦	内刻目 + 沈線 外 四線	ナデ	
4 b	-116	1 1 3	N 8-9 E 8-9		口唇平坦 内湾	内刻目 + 沈線 外 沈線2	ナデ	
4 c	-117	1 1 3	N15-25 E10-15		口唇平坦	内面沈線(巻貝?)	巻貝条痕 ?	
4 c	-118	1 1 3	N20-30 E15-20		口唇平坦	内面沈線	ナデ	
4 c	-119	1 1 3	N15-20 E10-15		口唇平坦	内面沈線 外面爪 形文	ミガキ	
4 c	-120	1 1 3			口唇平坦	内面沈線 外面爪 形文	巻貝条痕 +ナデ ミガキ	
4 c	-121	1 1 3	N20-25 E20-25		口唇平坦 わずか に外反	内面沈線	ミガキ	
4 c	-122	1 1 3	N12-20 E 8-20			内面巻貝凹線	ミガキ	
4 c	-123	1 1 3	N20-30 E 0-10	浅鉢	口唇平坦	内面巻貝沈線	ミガキ	
4 c	-124	1 1 3			口唇平坦	内面沈線	ナデ ミ ガキ	
	-125	1 1 3	N 8-14 E 8-20 ?	注口	胴部張る	巻貝による刺突	ミガキ ナデ	
	-126	1 1 3	N 8-20 E 12-20 N 8-14 E 8-20	注口	肩に段	連弧状の隆起線	ミガキ	
	-127	1 1 3	S I - 11 No. 98			沈線文	ナデ	後期?
5 a	-128	1 1 3	N20-30 E10-20		口縁屈曲	凹線内ミガキ 刻 目	ミガキ	
5 a	-129	1 1 3	N15-25 E10-15		口縁屈曲	凹線内ナデ 口縁 にも刻目	ミガキ	
5 a	-130	1 1 3	N20-25 E20-25		口縁屈曲	凹線内ナデ 刻目	巻貝条痕	
5 a	第127図 -131	1 1 3	N25-30 E20-30		波頭部	凹線内ミガキ 口 縁にも刻目	ミガキ	

分類	標印番号	販賣番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
5 a	-132	113	N15-20 E13-15	口縁粗曲	凹線内ナデ	ナデ		
5 a	-133	113	N12-20 E 8-20	口縁粗曲	凹線内ナデ	ナデ		
5 a	-134	113	N12-20 E 8-20		凹線内ナデ 内面 にも巻貝凹線	ミガキ ナデ		
5 a	-135	113	N13-23 E30-40		凹線内ナデ	ナデ		
5 b	-136	113	N 9-10 E 9		凹線内軽くナデ 条線残る	ミガキ		
5 a	-137	113	N 9-18 E20-30		凹線内ナデ	ナデ		
5 a	-138	113	N10-25 E10-15		凹線内ナデ	ミガキ ナデ		
5 b	-139	114	S I-10 No. 2	注口 肩に段	凹線内軽くナデ	ナデ ミガキ		
5 a	-140	114	N15-20 E13-15	注口 肩に段	凹線内ミガキ 刻 目 押点文	ミガキ		
5 a	-141	114	N12-20 E 8-20	注口 肩に段	凹線内ミガキ	ミガキ ナデ		
5 a	-142	114	N12-20 E 8-20	注口 肩に段	凹線内ミガキ 刻 目	ミガキ ナデ		
5 a	-143	114	N12-20 E 8-26	注口 剣脚粗曲	凹線内ナデ ×「」字 の刻目 巻貝刺突	ミガキ		
5 a	-144	114	N12-20 E 8-20	注口 腹部粗曲 ?	凹線内ミガキ 刺 突	ミガキ		
5 a	-145	114	N25-30 E20-30	腹部粗曲	凹線内ナデ 刻目	ミガキ ナデ		
5 a	-146	114	N15-25 E10-15		凹線内ナデ	ナデ		
5 a	-147	114	N12-20 E 8-?		凹線内ナデ	条痕 ? + ナデ		
5 a	-148	114	N15-20 E13-15	口縁わずかに粗曲	凹線内ナデ	ナデ	口径37.1cm	
5 a	-149	114	N15-20 E10-15		凹線内ミガキ 刻 目	ミガキ	脇部径17.1cm	
5 a	-150	114	N20-25 E10-15	注口 玉懸状の脇部 ?	凹線内ナデ 下部 に浮文+刻目	ナデ	脇部径22.2cm	
5 a	-151	114	N20-25 E10-15	注口 玉懸状の脇部 ?	凹線内ミガキ	ナデ	脇部径20.8cm	
5 c	-152	114	N 7-12 E 6-20	口縁粗曲	沈線2条	巻貝条痕	口径26cm	
5 c	-153	114	N 6-7 E20-23	脇部粗曲	巻貝凹線未調整 皿状压痕	ケズリ ナデ	脇部径22.7cm	
5 b	-154	115	N12-20 E 8-20	口縁粗曲	凹線内雜にミガキ 刻目	ミガキ ナデ		
5 b	-155	114	N 9-14 E10-20	口縁粗曲	凹線内雜にミガキ 刻目	ミガキ		
5 c	-156	114	N20-30 E15-20	口縁粗曲	巻貝凹線未調整	ナデ		
5 b	-157	114	N20-30 E10-20	口縁粗曲	凹線内雜にミガキ	ナデ 2 枚貝条痕 +ミガキ		
5 b	-158	114	N10-20 E10	口縁粗曲	凹線内雜なナデ 巻貝刺突	ナデ		
5 c?	第128回 -159	114	N 8-14 E 8-20	口縁粗曲	凹線内未調整		全面風化	

分類	標図番号	調査番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
5 b?	-160	114	N 8-14 E 8-20	口縁屈曲	凹線内ナデ?			全面風化
5 c	-161	114	N 20-30 E 25-30	口縁屈曲	卷貝凹線内未調整	ナデ		
5 b	-162	114	N 12-20 E 8-20		凹線内雑なナデ	ナデ		
5 b	-163	114		口縁短く屈曲	凹線内若干ナデ?	ナデ		
5 C	-164	114	N 8-9 E 8-9		卷貝凹線未調整	ナデ		
5 b	-165	114	N 10-20 E 5-10		凹線内若干ナデ	2枚貝条痕+ナデ		
5 C	-166	114	N 15-20 E 13-15		卷貝凹線未調整 内面にも凹線	ナデ		
5 C	-167	114	N 8-9 E 8-9		凹線内未調整? 屬状圧痕	ナデ?		
5 b	-168	114	N 15-20 E 13-15	口縁外反	凹線内ナデ?	ナデ		
5 b	-169	114	N 10-20 E 10-20		凹線内若干ナデ 刻目 卷貝刺突	ナデ		
5 b	-170	114	S 1-09 No. 57		凹線内ナデ	ナデ		
5 b	-171	114	N 8-9 E 8-9		凹線内ミガキ	ミガキ ナデ		
5 b	-172	114	S 1-04 2のNo.39		凹線内ミガキ	ミガキ		
5 b	-173	114	N 12-20 E 8-20		凹線内ナデ	ナデ		
5 b	-174	115	N 8-9 E 8-9		凹線内雑なミガキ	ミガキ ナデ		
5 C	-175	115	N 12-20 E 8-20		凹線内未調整	ミガキ		
5 b	-176	115	N 8-9 E 8-9	口縁大きく外反	凹線内軽くナデ	条痕? + ナデ		
5 b	-177	115	N 10-25 E 10-15		凹線内雑にナデ	卷貝条痕 +ナデ		
5 b	-178	115	N 15-25 E 10-15	注1) 肩に段	凹線内ナデ	ミガキ		
5 b	-179	115	N 5-15 E 30-35		凹線 押点文	ミガキ		
5 C	-180	115	N 8-10 E 22-25		卷貝凹線未調整 屬状圧痕	ナデ		
5 b	-181	115	S K-10 No. 11		凹線内若干ナデ? 浮文上に屬状圧痕 卷貝刺突	卷貝条痕		
5 d	-182	115		口唇平坦	内面凹線再調整	ナデ		
5 d	-183	115	N 12-20 E 8-20	口唇平坦	内外凹線	ナデ ケ ズリ		
5 d	-184	115	N 12-20 E 8-20	口唇平坦	内面凹線内ミガキ	ミガキ		
5 d	-185	115	N 5-15 E 30-35	口唇平坦	内面凹線内ミガキ	ミガキ		
5 d	-186	115	S I-15 付近	口唇平坦	内面凹線内ミガキ	ミガキ		
5 d	-187	115	N 13-20 E 20-30	口唇平坦	内面凹線 再調整 ?	ミガキ		

分類	標図番号	尾版番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
5 d	-188	115		S I-05 No.439	口唇平坦	内面四線	ナデ	
5 d	-189	115			口唇平坦	内面四線	ミガキ ナデ	
5 d	-190	115	N 8-14 E 8-20		口唇平坦	内面段	ナデ	
5 b	-191	115	N 20-30 E 0-10 ?	注口	胴張る	四線内ミガキ	ミガキ	
6	-192	115	N 20-25 E 25-30		口縁短く屈曲	沈線1条	ミガキ ナデ	
6	-193	115	N 6-10 E 14-18		口縁短く屈曲	沈線2条	ミガキ	
6	-194	115	N 20-30 E 0-10		口縁短く屈曲	沈線2条 模文RL	ミガキ	
6	-195	115	N 8-14 E 9-20		口縁短く屈曲	沈線1条	ミガキ	
6	-196	115	N 15-20 E 20-25		口縁短く屈曲	沈線2条 刻目		元住吉Ⅱの可 能性もあり 全面風化
6	-197	115	N 8-10 E 10-13		口縁短く屈曲	沈線2条		全面風化
6	-198	115			口縁短く屈曲	沈線1条	ミガキ	
6	-199	115	N 13-15 E 8-13			垂下沈線 羽状刺 突文	2枚貝条痕	
	-200	115	N 15-20 E 4-10	注口	注口短い		ミガキ	長3.9cm 径2.5cm
5	-201	115	N 10-13 E 27-28	注口	注口	四線	ミガキ	長7.6cm 径2.7cm
5 b	第129図 -202	116	N 10-20 E 0-10 P-11	注口	口縁外傾	四線内難なミガキ	ミガキ	口径12.5cm 器高(11)cm
5 b	-203	116	N 10-20 E 5-10			凹線内ミガキ 卷貝刺突 大きな刺突	ミガキ	
7	-204	116	N 12-20 E 8-20		丸底		卷貝条痕 ミガキ ナデ	
7	-205	116	N 20-30 E 15-20		内面気味に外傾		ミガキ	口径19.5cm
7	-206	116	N 20-25 E 9-10		口縁内湾	口唇2列に刻目	卷貝条痕 +ナデ	
7	-207	116	N 30-32 E 20-22		口唇わずかに外反	口唇2列に刺突	ナデ	
7	-208	116	N 20-30 E 15-20			内面に卷貝凹線	ナデ? 卷貝条痕	
7	-209	116	N 30-40 E 20-30		内湾		強いナデ? 2枚 貝条痕	
7	-210	116	N 20-30 E 15-20		口唇細い		ミガキ 2枚貝条痕	
7	-211	116	N 15-25 E 10-20		口唇平坦		卷貝条痕 ナデ	
7	-212	116	N 15-20 E 10-15		口唇平坦		卷貝条痕 ナデ	

分類	標因番号	回数番号	出土地点	測定	形態	文様	手法	備考
7	-213	116	N20-30 E10-20		口唇平坦		巻貝条痕 +ナデ	
7	-214	117	N15-20 E20-25		口唇平坦		巻貝条痕 ナデ	
7	-215	117	N 2-10 E25-30		口唇平坦 外反		2枚貝条 痕+ナデ	
8	-216	117	N20-30 E10-20		口縁屈曲	沈線2条	2枚貝条 痕? ナデ	
8	-217	117	S I-10 No. 10		口縁屈曲 内面段	外面四線状の段	ミガキ	
8	-218	117	N12-20 E 8-20		口縁に段		ナデ	
8	-219	117	S K-66 No. 2		外面意図的な後?	沈線2条	巻貝条痕 +ナデ	
8	-220	117	N15-25 E10-20		口縁屈曲	沈線2条	ミガキ	
8	-221	117	S I-04 No. 35			凹線2条	ミガキ	
8	-222	117	N13-15 E 8-13			沈線2条	ナデ	
8	-223	117	N30-35 E25-30			削出突帯状に肥厚	巻貝条痕 2枚貝条 痕 ナデ	
8	-224	117	S I-10 No. 23		波頂部		巻貝条痕 +ナデ	
8	第130回 -225	117	N 8-14 E 8-20		脛部強く張る		巻貝条痕 ナデ	
8	-226	117	N29 E20		脣部強く張る		2枚貝条 痕 ナデ	
8	-227	117	N12-20 E 8-20		脣部に接		巻貝条痕 ナデ	
8	-228	117	N12-20 E 8-20		脣部やや張る		ミガキ	
9 a	-229	117	N 5-15 E10-35		口縁短く外反		ナデ	
9 a	-230	117	N20-30 E10-20		口縁短く外反		ナデ	
9 a	-231	117	N15-20 E10-15		口縁短く外反		ナデ	
9 a	-232	117	N15-20 E 4-10		口縁短く外反		ミガキ 巻貝条痕 +ナデ	
9 a	-233	117	N 8-14 E 8-20		口縁長く外反		ミガキ	
9 a	-234	117	N17-21 E19-23		口唇平坦		巻貝条痕	
9 a	-235	117	N 8-9 E 8-9		口唇厚い		ナデ	
9 a	-236	117	N13-20 E20-30		口唇平坦		ナデ	
9 a	-237	117	N12-20 E 8-20		口縁内溝	円形厚文	2枚貝条 痕?	
9 a	-238	117	S I-09 No. 74		突起		ナデ	
9 a	-239	117	S K-08		突起		ナデ	
9 a	-240	117	N20-30 E15-20		口唇平坦		ナデ	

分類	捲貝番号	圓版番号	出土地点	器種	形 態	文 標	手 法	備 考
9 a	-241	117	N13-20 E20-36	突起	突起外面に刺突	ナデ		
9 a	-242	117	N12-20 E 8-20	突起	突起上面に刻目	卷貝条痕		
9 a	-243	117	N12-20 E 8-20	突起	円形浮文 「×」字文 刻目	卷貝条痕		
9 a	-244	117	N12-20 E 8-20				卷貝条痕	
9 a	-245	118	N 8-14 E 8-20	肩部に後 痛強く 張る			ミガキ	肩部厚26.3cm
9 a	-246	118	N 8-14 E 8-20				卷貝条痕 +ナデ	口径25.7cm
9 a	-247	118	SK 08 No. 45	口縁短い			卷貝条痕 ナデ	口径48.3cm
9 b	-248	118	N K-08		V字刻目		2枚貝条痕	口径31.9cm
					O字刻目 (指押出 ?) 円形浮文			
9 b	-249	118	S I-09 No. 14			O字刻目	ナデ	
9 b	-250	118	N 8-14 E 8-20	口縁短い		O字刻目	ナデ	
9 b	-251	118	N20-30 E10-20			O字刻目	ナデ	
9 b	-252	118	N12-20 E 8-20		O字刻目 (2枚貝 ?)	2枚貝条痕 +ナデ		
9 b	-253	118	N12-20 E 8-20		浅いD字刻目	ミガキ		
9 b	-254	118	S I-11 No. 213		O字刻目	ナデ		
9 b	-255	118	N12-20 E 8-20		O字刻目	卷貝条痕	?	
9 b	-256	118	N12-20 E 8-20		V字刻目	卷貝条痕 +ナデ		
9 b	-257	118	N10-25 E10-15	口唇平坦・内湾	V刻目	ナデ		
9 b	-258	118	N20-30 E15-20	口唇平坦	外方からD刻目	卷貝条痕		
9 b	-259	118	N12-30 E 8-20		卷貝による押引状 のD字刻目	卷貝条痕 +ナデ		
9 b	-260	118	N20-25 E20-25	口縁内湾	V刻目 卷貝によ る斜行沈線 (調整 か)	卷貝条痕 +ナデ?		
10 a	-261	119	N20-25 E20-30	口縁外反	卷貝による刺突? 口唇刻目か?	ナデ		
9 b	-262	119	SK-08		小さなD字刻目	ナデ		
10 a	-263	119	N 8-14 E 8-20	突起	卷貝による刺突 外面山形文	2枚貝条 痕+ナデ		
10 a	-264	119	SK 75 No. 13		卷貝による押引状 の刺突 山形文 (卷貝)	ナデ		
10 a	-265	119	N10-20 E 5-10		D字の刺突 V字 刻目	ナデ		
10 a	-266	119	S I-11 No. 251		卷貝による刺突 浅いV字刻目	卷貝条痕		
10 a	-267	119	SK-12 No. 25		卷貝による刺突 小さなD字刻目	ナデ		
10 a	-268	119	S I-04 No. 33		卷貝による刺突?	2枚貝条 痕 ナデ		

分類	標印番号	既版番号	山土地点	蘭種	形態	文様	手法	備考
10 a	-269	1 1 9	N 8-14 E 8-20			C字の刺突	2枚貝条痕+ナデ	
10 a	-270	1 1 9	N30-35 E60-65			貝による刺突	2枚貝条痕+ナデ	
10 a	-271	1 1 9	N 8-9 E 8-9	突起		C字の刺突	2枚貝条痕+ナデ	
10 a	-272	1 1 9	N30-35 E25-30	内湾		D字の刺突	巻貝条痕+ナデ	
10 a	-273	1 1 9	N15-20 E 8-11			C字刺突	2枚貝条痕+ナデ	
10 a	-274	1 1 9	N20-30 E15-20			D字刺突	2枚貝条痕+ナデ	
10 a	第132回 -275	1 1 9	S K-08 Nº 46			C字刺突	巻貝条痕+ナデ	
10 a	-276	1 1 9	N22 E19			D字刺突	2枚貝条痕	
10 a	-277	1 1 9	N19-20 E44-50			三角形を3つ合わせたような刺突	巻貝条痕+ナデ	
10 a	-278	1 1 9	N20-25 E20-25			内面凹線？ 押圧文外面繩沈線？	ナデ	
10 a	-279	1 1 9	S I-10 Nº 52			D字刺突	巻貝条痕+ナデ	
10 b	-280	1 1 9	N 5-15 E30-35	口縁わずかに内湾	C字刺突 巷貝による斜行文(山形?)			
10 b	-281	1 1 9	S I-15 付 近	内湾	巷貝による刺突	巻貝条痕		
10 b	-282	1 1 9	N20-25 E20-25	内湾	2枚貝による刺突	2枚貝条痕+ナデ		
10 a	-283	1 2 0	N15-20 E20-25			巷貝による刺突	巻貝条痕	
10 b	-284	1 1 9	S I-15 付 近		巷貝による刺突	ナデ 巷貝条痕		
10 a	-285	1 2 0	N25-30 E20-30			巷貝による刺突	ナデ 脊部	
10 a	-286	1 2 0	S I-10 付 近		C字刺突 2列	ナデ 脊部		
10 a	-287	1 2 0	N29 E20			巷貝による刺突	巻貝条痕+ナデ	
10 a	-288	1 2 0	N10-20 E 5-10			D字刺突	巻貝条痕?	
10 a	-289	1 2 0	N 8-14 E 8-20			巷貝?による刺突	2枚貝条痕+ナデ	
10 a	-290	1 2 0	N20-30 E15-20			C字刺突(半截竹管)	ナデ 脊部	
10 a	-291	1 2 0	N12-20 E 8-20			巷貝による刺突	ナデ? 脊部	
11	-292	1 2 0	N12-20 E 8-20			X字文 沈線	ナデ ケズリ	
	-293	1 2 0	N12-20 E 8-20			細沈線(巷貝)	ナデ	
11	-294	1 2 0	N12-20 E 8-20			沈線	ナデ	
	-295	1 2 0	N12-20 E 8-20				2枚貝条痕+ナデ	
11	-296	1 2 0	S I-09			突帯状に肩部隆起 沈線?	ナデミガキ	

分類	捕獲番号	回収番号	山土地点	型種	形態	文様	手法	備考
12	-297	120	N 8-9 E 8-9	浅鉢	外縁に段	X字文	ミガキ	
11	-298	120	N12-20 E 8-20		卷貝による段	卷貝刺突2列	ミガキ ナデ	
13	-299	120	N 8-14 E 8-20	浅鉢	内縁に段		ケズリ ミガキ	
13	-300	120	N22-36 E50-60	浅鉢	突起		ミガキ	
13	-301	120	N15-25 E10-20	浅鉢	突起		ミガキ	
12	-302	120	N25-30 E30-35	浅鉢	口縁短い		2枚貝条痕	
13	-303	120	N12-20 E 8-20	浅鉢	突起		ミガキ	
12	-304	120	N25-30 E35-40	浅鉢	頭部短く屈曲	押点文 短線文	ミガキ	
12	-305	120	N10-20 E 8-10	浅鉢	突起 内縁に段		ミガキ	
11	-306	120	N 8-10 E10-13	深鉢	胴部張る	沈線文	卷貝条痕	
14a	第133図 -307	120	S I -04 2のNo82	浅鉢		内縁1条 外縁2 条の沈線	ナデ	
14a	-308	120	N20-25 E26-25	浅鉢	口縁内傾	内面沈線	ミガキ	
14a	-309	120	S I -05 No. 403	浅鉢	口縁外反気味に直立		ミガキ 2枚貝条痕	
14b	-310	120	N 8-14 E 8-20	浅鉢			ミガキ 2枚貝条痕	
14a	-311	120	N40E30 SD-01 No. 7	浅鉢	I型外反	内面沈線1条	ミガキ	
14a	-312	121	N12-20 E 8-20	浅鉢	I型外反		ミガキ	
14b	-313	121	第8G 黒色土	浅鉢	口回わざかにくり上る		ミガキ	
14b	-314	121	N20-30 E15-20	浅鉢	口縁外面に段 波状口縁		ミガキ ケズリ	
14b	-315	121	接上巾	浅鉢	緩丸い		ナデ	
14b	-316	121	N12-20 E10-20	浅鉢	緩丸い	沈線	ミガキ ナデ	
14b	-317	121	N 8-14 E 8-20	浅鉢		沈線	ナデ ケズリ	
14b	-318	121	N12-20 E10-20	浅鉢	口唇平坦		ナデ	
14	-319	121	N12-20 E 8-20	浅鉢	深身		2枚貝条痕 ミガキ	
14b	-320	121	N20-30 E15-20	浅鉢	I型平坦		卷貝条痕 ナデ	
14b	-321	121	N12-20 E 8-20	浅鉢	口唇平坦	内面に沈線	ナデ	
14b	-322	121	N 8-14 E 8-20		口唇平坦	内面に沈線	ナデ?	

分類	種別番号	西販番号	出土地点	型種	形態	文様	手法	備考
14 b	-323	1 2 1	N 8-14 E 8-20			内面に凹線	ナデ?	
14 b	-324	1 2 1	N 8-14 E 8-20			内面に凹線	ミガキ	
14 a	-325	1 2 1	S I-06	口縁内傾	沈線2条	ミガキ ナデ	口徑21.3cm	
14 b	-326	1 2 1	S I-10 No. 4	波状口縁 口唇内 面に段		ミガキ ケズリ	口徑21.4cm	
14 b	-327	1 2 1	N30ライン E10-20	波状口縁	口唇刻目	ナデ	口徑28.7cm	
14 b	-328	1 2 1	N14-20 E 7-20			ミガキ ケズリ	脇部径17.6cm	
14 b	-329	1 2 1	N 8-14 E 8-20	稜丸い	沈線	ミガキ	脇部径17cm	
14 b	-330	1 2 1	N30 E30-35	稜丸い		ミガキ	脇部径14.2cm	
14	-331	1 2 1	N27-28 E50-60	浅鉢		ミガキ	最大径25.2cm	
14 b	-332	1 2 1	N 8-14 E 6-20	浅鉢	稜丸い	ナデ	脇部径25.2cm	
14 b	-333	1 2 1	N10-25 E10-15	浅鉢	内面に段	ミガキ	口徑25.2cm	
15 a 第134回 -334		1 2 1	N12-20 E 8-20	浅鉢		不明	口徑35.6cm	
15 a	-335	1 2 2	N12-20 E 8-20	浅鉢	内面凹線	ミガキ		
15 a	-336	1 2 2	N12-20 E 8-20	浅鉢	内面に凹線	ナデ		
15 a	-337	1 2 2	N12-20 E 8-20	浅鉢	内面に沈線	ミガキ		
15 a	-338	1 2 2	N13-23 E30-40	浅鉢 口唇肥厚	内面に沈線	ミガキ		
15 a	-339	1 2 2	N20-30 E15-20	浅鉢		ミガキ		
15 a	-340	1 2 2	N15-20 E13-15	浅鉢		ミガキ		
15 b	-341	1 2 2	N10-25 E10-15	口縁くり上がる	凹線	ミガキ		
15 b	-342	1 2 2	N 8-14 E 8-20	口縁くり上がる		ミガキ		
15 b	-343	1 2 2	N15-20 E20-25	口縁くり上がる		ナデ		
15 b	-344	1 2 2	N12-20 E 8-20	口縁玉縁状		ナデ		
15 b	-345	1 2 2	残土中	口縁玉縁状		ミガキ		
15 b	-346	1 2 2	N12-20 E 8-20	口縁くり上がる		ナデ ミガキ		
16	-347	1 2 2	SK-63 No. 12	深鉢	大きなD字刻目 山形文	ナデ		
16	-348	1 2 2	SK-20 No. 23		山形文(巻貝)		347と同一個 体か	
16 b	-349	1 2 2	N 8-14 E 8-20	口唇平坦	口唇内側に刻目 巻貝による刺突状 刻目 ×字文	ナデ		
16 b	-350	1 2 2	N12-20 E 8-20	口唇平坦	口唇上面から刻目 D字刻目 斜線文	ナデ		

分類	標図番号	図版番号	出土地点	器種	形 態	文 様	手 法	備 考
16 a	-351	1 2 2	N12-20 E 8-20	口唇平坦	内面刺突 突状刻目	突帶刺 ナデ 2 枚貝条痕 +ナデ		
16 a	-352	1 2 2	N30-40 E20-30	口唇平坦	内面刺突 突状刻目	突帶刺 ナデ		
16 b	-353	1 2 2	S I -11 No. 30	口唇平坦	口唇上面から刻目 口唇 突帶刺突状 刻目	ナデ		
16 b	-354	1 2 2	N15-25 E10-15	口唇平坦	口唇上面から刻目 口唇 突帶刺突状 刻目	ナデ		
16 b	-355	1 2 2	S K -67 No. 6	口唇平坦	口唇上面から刻目 D字刻目	ナデ		
16 b	-356	1 2 3	S I -15 No. 62	口唇平坦	口唇上面から刻目 口唇 突帶刺突状 刻目	ナデ		
16 b	-357	1 2 3	N12-20 E 8-20	口唇平坦	口唇上面から刻目 D字刻目	ナデ		
16 b	-358	1 2 3	S I -15 No. 42	口唇平坦	口唇上面から刻目 D字刻目	ナデ		
16 b	-359	1 2 3	N20-30 E10-20	口唇平坦	口唇上面から刻目 刺突状の刻目	ナデ		
16 b	-360	1 2 3	N20-25 E10-15	口唇平坦	口唇上面から刻目 D字刻目	ナデ		
16 b	-361	1 2 3	S I -15 付 近		口唇上面から刻目 口唇 D字 突帶V 字刻目(幅広)	ナデ		
16 b	-362	1 2 3	N20-25 E10-15		口唇上面から刻目 D字刻目	ナデ		
16 b	-363	1 2 3	N20-25 E30-35		口唇上面から刻目 広いV字刻目	ナデ 卷貝条痕		
	-364	1 2 3	N15-25 E10-20		X字文 刺突 刻 目	ミガキ		
16 b	-365	1 2 3	N20-30 E10-20		口唇上面から刻目 D字刻目	ナデ		
16 b	-366	1 2 3	N15-25 E10-15		口唇前面から刻目 刺突状の刻目	ナデ		
16 b	-367	1 2 3	N20-30 E15-20		口唇内側から刻目 刺突状の刻目	ナデ		
16 b	第135図 -368	1 2 3	N30-35 E30-35	口縁端外反	口唇内側から刻目 刺突状刻目	卷貝条痕		
16 b	-369	1 2 3	N15-20 E13-15	口唇平坦	口唇上面から刺突	ナデ		
16 b	-370	1 2 3	N12-20 E 8-20	口唇平坦	口唇上面から刻目 V字刻目	ナデ ケズリ		
16 b	-371	1 2 3	S I -10 No. 70	突帶口唇に接する	O字刻目	ナデ		
16 b	-372	1 2 3	N22-36 E50-60		O字刻目	ナデ		
16 b	-373	1 2 3	N12-20 E 8-20	突帶上向き	口唇小さなO刻目 突帶刺突状刻目	ナデ		
16 b	-374	1 2 3	S I -11 No. 154	突帶上向き	D字刻目文	ナデ		
16 b	-375	1 2 3	N 8-14 E 8-20	突帶上向き	D字刻目	ナデ		
16 b	-376	1 2 3	S I -12 No. 33	突帶下向き	口唇前面から刺突 刺突状の刻目	ナデ		

分類	排岡番号	固版番号	山土地点	巻種	形態	文様	手法	備考
16 b	—377	1 2 3	N15—25 E10—20		突帯上向き	II唇前面から刺目 刺突状の刺目	ナデ	
16 b	—378	1 2 3	S I—11 No. 145		口唇平坦	口唇前面から刺目 D字刺目		
16 b	—379	1 2 3	N20—30 E10—20			口唇前面から刺目 V字刺目	ナデ	
16 b	—380	1 2 3	6 G			口唇前面から刺目 V字刺目	ナデ	
16 b	—381	1 2 3	N25—30 E20—30		口唇平坦	口唇前面から刺目 D字刺目	ナデ	
16 b	—382	1 2 3	S K—63 No. 1		口唇平坦 突帯上 向き	II唇前面から刺目 刺突状刺目	ナデ	
16 b	—383	1 2 3	S K—63 No. 7		内窓	II線下に刺突 刺突状の刺目	ナデ	
16 c	—384	1 2 3	S I—09 No. 42		突帯低い	下方からV刺目	ナデ	
16 c	—385	1 2 3	N15—25 E10—15		口唇平坦 突帯上向き	D字刺目	ケズリ? 巻貝条痕?	
16 c	—386	1 2 3	N12—20 E8—20		突帯低い	刺突状の刺目	ナデ	
16 c	—387	1 2 3	N25—30 E30—35		口唇平坦 やや外 反	D字刺目	ナデ	
16 c	—388	1 2 3	N15—25		II線やや外反	V字刺目	ナデ	
16 c	—389	1 2 3	N10—20 E9—10		口線外反	2枚貝による刺突 状刺目	2枚貝条 痕	
16 c	—390	1 2 3	N 9—11 E12—18		口唇厚い	V字刺目	ナデ	
16 c	—391	1 2 3			突帯は上部に位置	D字刺目	ナデ	
16 c	—392	1 2 3	S I—15		口唇うすい	V字刺目	ナデ	
16 d	—393	1 2 3	N25—30 E20—25		口唇うすい		ナデ	
16 c	—394	1 2 3	N25—30 E30—35		II唇うすい	V字刺目	ナデ	
16 d	—395	1 2 3	S I—15 付近		口唇わずかに外反		ナデ	
16 d	—396	1 2 3	N10—25 E10—15		突帯口唇に接する		ナデ	
16 d	—397	1 2 3	N15—20 E60—65		外反 突帯口唇に 接する		ナデ 2 枚貝条痕	玉縁状の突帯
16 c	—398	1 2 3	N25—30 E20—30		突帯口唇に接する	小さな刺目	ナデ	
16 c	—399	1 2 3	N12—20 E8—20		突帯口唇に接する	小さな刺目	ナデ	刺目は破面の 可能性あり
16 c	—400	1 2 3	S I—06		突帯II唇に接する	D字刺目	ナデ	
16 c	—401	1 2 3	N28—29 E14—15		突帯口唇に接する	V字刺目	巻貝条痕?	
16 c	—402	1 2 3	N20—25 E10—25		突帯II唇に接する	V字刺目	ナデ	
16 c	—403	1 2 3	N20—30 E10—20		突帯口唇に接する 低い突帯	浅いが大きな刺目	ナデ	
16 c	—404	1 2 3	N20—30 E10—20		突帯口唇に接する	小さな刺目	巻貝条痕 -ナデ	
16 c	—405	1 2 3	N12—20 E8—20		突帯II唇に接する	V字刺目	ナデ	
16 c	—406	1 2 4	S I—15 No. 1		突帯II唇に接する	竹管状工具による 刺突	ナデ	

分類	拓印番号	図版番号	出土地点	器種	形態	文様	手法	備考
16 d	—407	1 2 4	N12—20 E10—20		突帯は上部に付ける		ナデ	
16 c	—408	1 2 4	N15—25 E10—20		突帯は上部に付ける	V字刻目	ナデ ケズリ	
16 c	—409	1 2 4	N 8—14 E 8—20		突帯は口唇に接する	小さな網目	ナデ	
16 d	—410	1 2 4	N20—25 E20—25			口縁下に2条の突帯	ナデ	
17	—411	1 2 4	N 8—14 E 8—20			D字刻目	ナデ	脣溝突帯
17	—412	1 2 4	N12—20 E 8—20			浅いD字刻目	ナデ	同上
17	—413	1 2 4	N25—30 E20—30			D字刻目	2枚貝条痕+ナデ ケズリ	同上
17	—414	1 2 4	N12—20 E 8—20			D字刻目	ナデ	同上
17	—415	1 2 4	N 8—9 E 8—9			刺突状の刻目	ナデ 2枚貝条痕	同上
17	—416	1 2 4	S I—10 No. 135			V字刻目	ナデ	同上
17	—417	1 2 4	S I—11 No. 114			V字刻目	ナデ	同上
18	第136図 —418	1 2 4	N15—25 E10—15	浅鉢			ミガキ	
19	—419	1 2 4	S I—11 No. 99	浅鉢	口縁短く屈曲		ナデ 貝条痕	
19	—420	1 2 4	N25—35 E60—70	浅鉢	口縁短く屈曲		ミガキ	
19	—421	1 2 4	N10—25 E10—15	浅鉢	口縁短く屈曲 波状口縁			
19 a	—422	1 2 4	N13—23 E20—40	浅鉢	口縁短く外反		ミガキ 貝条痕+ナデ	
19 b	—423	1 2 4	N25—35 E60—70	浅鉢	口縁外面に段		ミガキ スリ+ミ ガキ	
19 b	—424	1 2 4	S I—15 付 近	浅鉢	口縁外面に段		ナデ ケズリ+ナ デ?	
19 b	—425	1 2 4	N15—25 E10—15	浅鉢	口縁外面に段 口縁わずかに外反		ミガキ ナデ	
19 c	—426	1 2 4	N20—25 E10—15	浅鉢	口縁内外面に段		ナデ ミ ガキ 貝条痕	
19 c	—427	1 2 4	S I—05 No. 501	浅鉢	口縁玉縁状		ナデ	
19 c	—428	1 2 4	N20—30 E10—20	浅鉢	口縁玉縁状		ミガキ	
19 b	—429	1 2 4	N12—20 E 8—20	浅鉢	口縁外面に段		ミガキ ナデ	
19 b	—430	1 2 4	N35—40 E30—35	浅鉢	口縁外面に段		ミガキ ナデ 貝条痕	
	—431	1 2 4				沈線 斜行文	ミガキ ナデ	

分類	撮影番号	出土地点	形態	文様	手法	備考
19	—432	N20-30 E10-20	浅鉢 口縁短く外傾		ミガキ	
18	—433	N10-25 E10-15	L1縁短く外反	内面沈線	ミガキ	
20	—434	N19-20 E45-50	脇部に縫		ミガキ	脇部径19.4cm
19 a	—435	S I-14 No. 9	口縁短く外反		ミガキ ケズリ + ナデ?	口径25.2cm
19 b	—436	N20-30 E15-20	口縁外面に段		ナデ	脇部径17.4cm
19 b	—437	N10-25 E10-15	口縁外面に段		ナデ	脇部径16.5cm
20	—438	N20-30 E 0-10	器壁うすい	沈線	ミガキ	口径14.5cm
	—439	N10-25 E10-15	底平底氣味の丸底		ナデ	底径17.5cm
	—440	N15-25 E10-15	高台状		卷貝条痕 ナデ	底径6.8cm
	—441	N25-35 E60-70	底部 高台状		ミガキ ケズリ ナデ	底径7cm
	—442	N15-25 E10-20	底部 外面中央凹む		ナデ 2 枚貝条痕 +ナデ	底径5.8cm
	—443	N10-20 E10-20	底部 外面中央凹む		ナデ ケズリ	底径7cm
	—444	排土中	底部 凹み底		2枚貝条痕 ナデ	底径4.2cm
	—445	N10-20 E10-20	底部 凹み底		卷貝条痕 +ナデ ミガキ	底径7cm
	—446	N15-25 E10-20	底部 凹み底		ミガキ ナデ	底径6.2cm
	—447	N10-20 E10-20	底部 凹み底		卷貝条痕 ミガキ	底径5.4cm
	—448	N12-20 E 8-20	底部 凹み底		ナデ	底径5.1cm
	—449	N17-21 E19-23	底部 凹み底		ミガキ ケズリ ナデ	底径6cm
	—450	N12-20 E 8-20	底部 凹み底		ミガキ	底径6.7cm
	—451	N20-30 E15-20	底部 凹み底		2枚貝条痕 ケズリ ナデ	底径4.9cm
	—452	N12-20 E 8-20	底部 凹み底		ケズリ ナデ	底径3.9cm

(2) 弥生土器(第4、5図)

弥生土器は前期、中期が少量、後期が多量に出土している。いずれも包含層出土として取り上げたが、後期の土器はほとんどがS I 15付近から出土した。

前期の土器 (第137図1~18、24~第138図34 図版126~127) 前期の上器は壺、甕が出土しているが、いずれも前期後半の土器である。1~7、28の2は壺で、2が多条の沈線文、3、4が沈線間に刺突をもつもの、5が山形文、6が重弧文、7が木の葉文である。28は口唇部に羽状の刻み目が施されている。甕は、多くは多条のもので沈線直下に三角形などの刺突があるものもある(10、12、17、24)。

中期の土器 (第137図19~23 第138図35、36、37 図版126~127) 19、20が前葉、21~23が中葉、35は後葉の上器である。20は櫛描きの沈線下に小さな爪形状の刺突文が施される。21~23は裏に削り調整がみられ、後期の可能性もある。

高坏 (第142図132 図版131) 口縁部が屈曲するもので、口唇部が平坦面をもちそこに凹線文を入れるものである。口縁部外面には櫛描きによる枕線が入っている。

後期の土器 全形がわかるものが少ないと、口縁部の形態によって分類した。甕、壺の分類は第2章(1) 穴穴住居跡での分類と同じである。

甕A (第138図38~42、47 図版127) 口縁端部が肥厚するもので、端部は内傾する。上方への縦り上がりはない。口縁端部には凹線または沈線が施されることが多い。

甕B₁ (第138図43、45、46 図版127) 口縁端部が上方に拡張し複合口縁となっているが、その幅が非常に狭いもの。口縁端部は内傾する。

甕B₂ (第138図48~50、52、第139図74 図版127~128) 口縁端部が肥厚して上下方に拡張するもの。口縁端部は内傾する。擬凹線を入れるものが多い。

甕B₃ (第138図53、54 図版127) 口縁端部は肥厚し、外傾するもの。擬凹線が入る。

甕B₄ (第139図56~63、第140図85 図版127~128) 頸部から口縁部にかけてやや長いもの。擬凹線を入れるものが多い。

甕B₅ (第138図44、51、55 第139図64~70、72~73、75、77 第140図80~81、83 図版127~129) 口縁端部が複合口縁で、内傾するもの。擬凹線を入れるものが多い。

甕C₁ (第139図71、78 第140図79、82 図版128~129) 口縁端部が複合口縁で、直立気味にやや長く伸びるもの。櫛描きの沈線が入るものが多い。

甕C₂ (第140図84、89~90、92~94 図版129) 複合口縁で口縁端部が長く伸び、外反気味になるもの。上端部は肥厚する。櫛描きの沈線が入るものが多い。

壺C：(第139図76、第140図86～88、91、第140図95～第141図103 図版128～129) 複合口縁だが口縁端部は短く外反または外傾する。無文。

壺D：(第141図105～109 図版129～130) 複合口縁で、口縁部の外反は壺Cより強い。器壁は比較的薄く、上端部の肥厚も弱い。櫛描きの沈線が入る。

壺D：(第141図110～116 図版130) 複合口縁で口縁部端部は長く伸び外傾する。全体に器壁が厚く、口縁屈曲部の稜は鈍い。口縁部は無文のものが多い。

壺D：(第141図104、第141図117～第142図122 図版130) 複合口縁で口縁端部が長く伸びて外反するもの。口縁上端部は肥厚するものは少ない。櫛描きの沈線が入る。

壺A：(第142図123～124 図版130) 単純口縁で、口縁部は短く直立またはやや内傾する。口縁端部は肥厚する。

壺B：(第142図125 図版130) 単純口縁で頸部が「く」の字形に屈曲する。

壺C：(第142図126～128、130 図版130～131) 口縁部が上下に拡張し内傾または直立するもの。擬凹線がが入るものが多い。

壺D：(第142図129、131 図版131) 口縁部が複合口縁で、端部は長く外反する。櫛描きの沈線が入るものが多い。

高环：(第142図132、136～137 図版131) 体部口縁部が内湾する、単純口縁の土器である。調整は雑で刷毛目がよくのこり、器壁はあつい。

器台：(第142図133～135 図版131) 受部、脚部とも複合口縁である。箇部は残らないが長いものと思われる。受部、脚部とも外面に櫛描きによる沈線文が入っている。

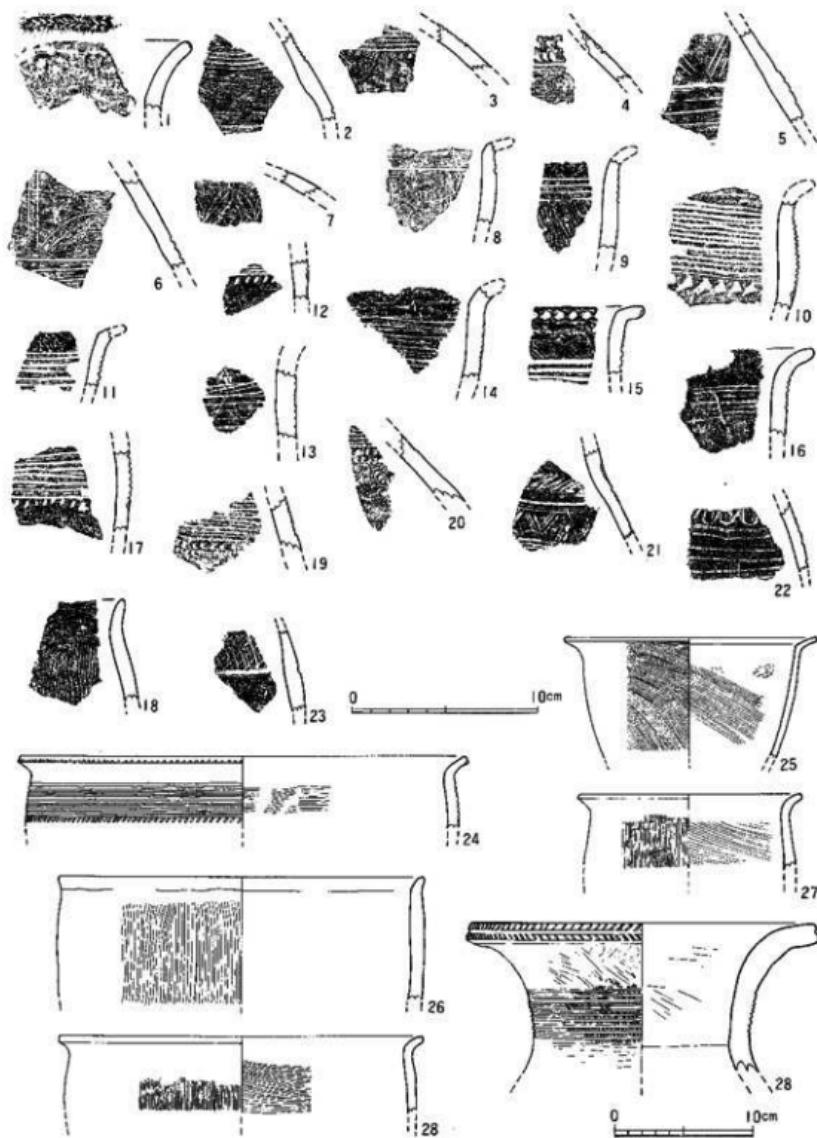
鉢：(第143図138 図版131) 口縁部は壺Cと同じ形態である。口縁部には櫛描きによる沈線、胴部には櫛による刺突がある。

碗：(第143図139～140 図版131) 139は手捏ねによる土器で器面には凹凸が多い。140は比較的ていねいな調整が施される。

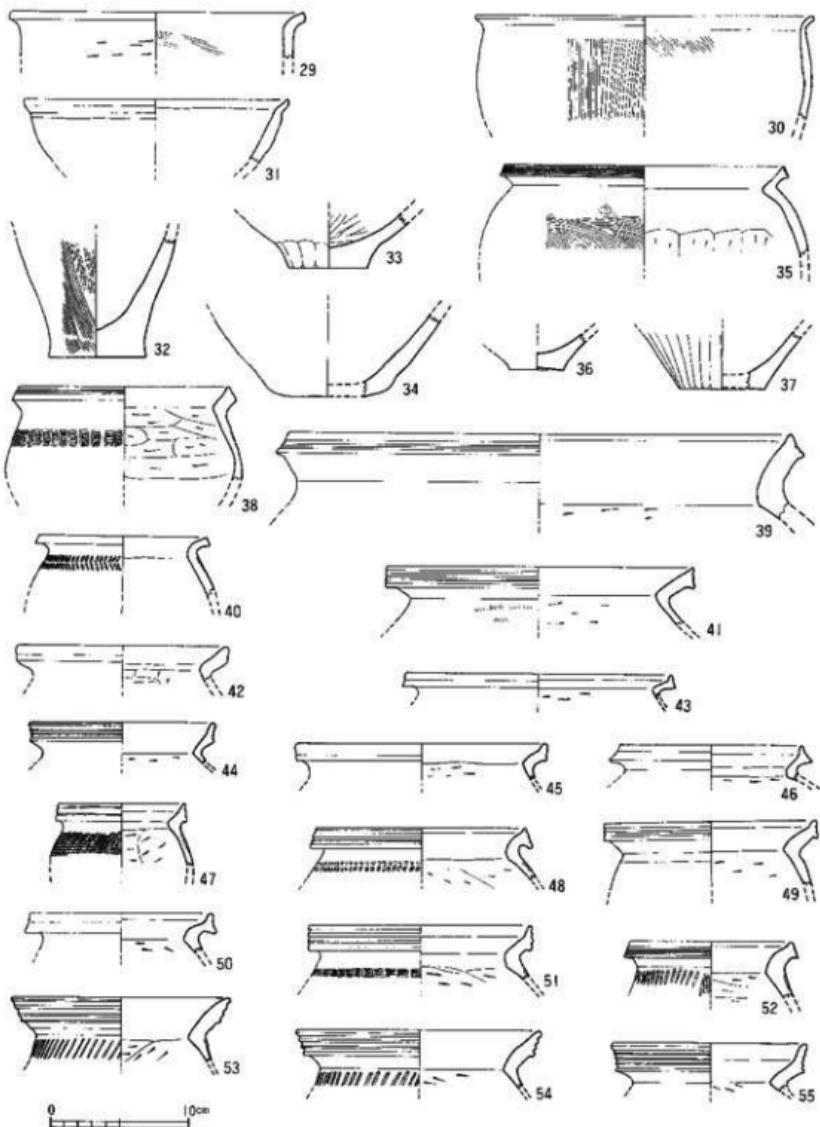
脚：(第143図141～142 図版131) 鉢形土器の脚と思われる。ともにやや低めの脚である。

以上の後期の土器は、後期全般にわたっているといえる。そのなかで壺についていえばA、B₁～B₂とC～D類との間に大きな違いがみられる。口縁部が内傾するか肥厚するA、B₁～B₂類では擬凹線が施され、外反するC₁～C₂、D₁～D₂類は櫛描きによる沈線が施されるからである。また、壺A、B₁、B₂、D₁は出雲地方でも平野部にはあまりみられない土器である。これらは仁多郡横田町追谷遺跡¹¹など山間部の遺跡で出土しているようで、ひとつの地域色を示しているのかもしれない。

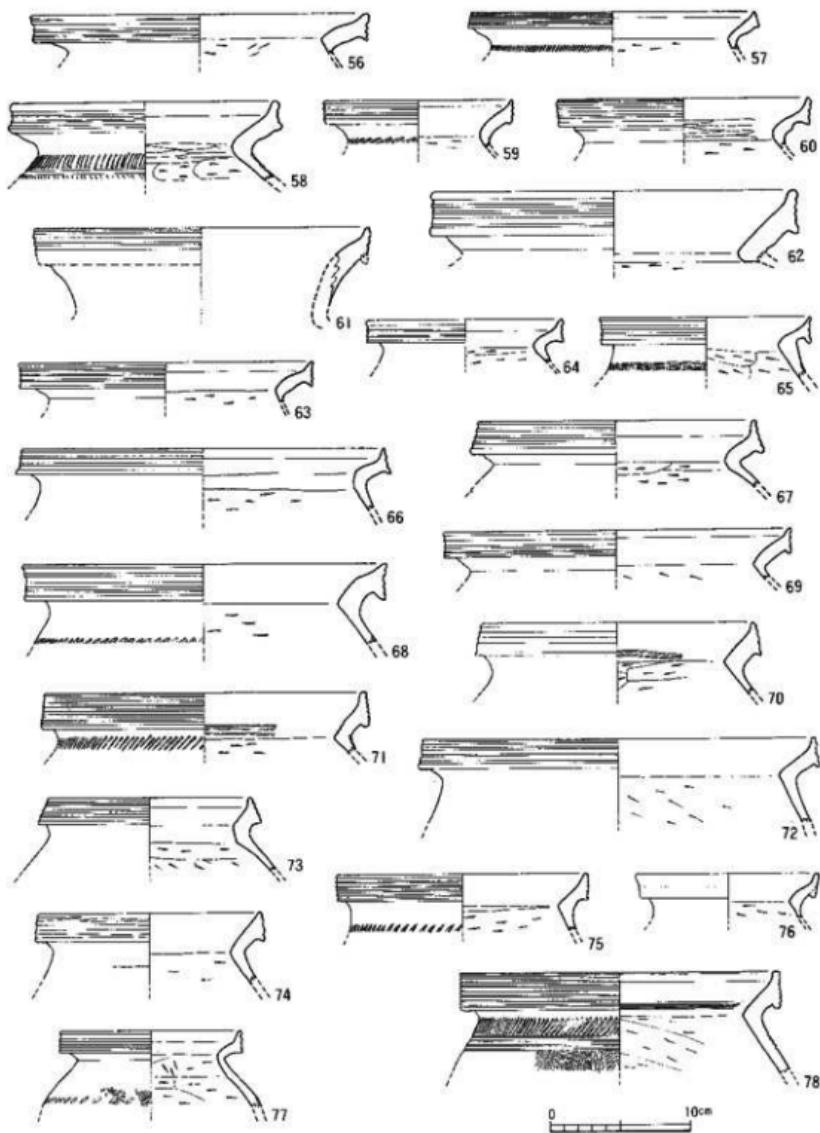
注 1) 仁多町教育委員会『沢田宅裏遺跡 鶴見大池遺跡 渋谷遺跡調査報告』1982



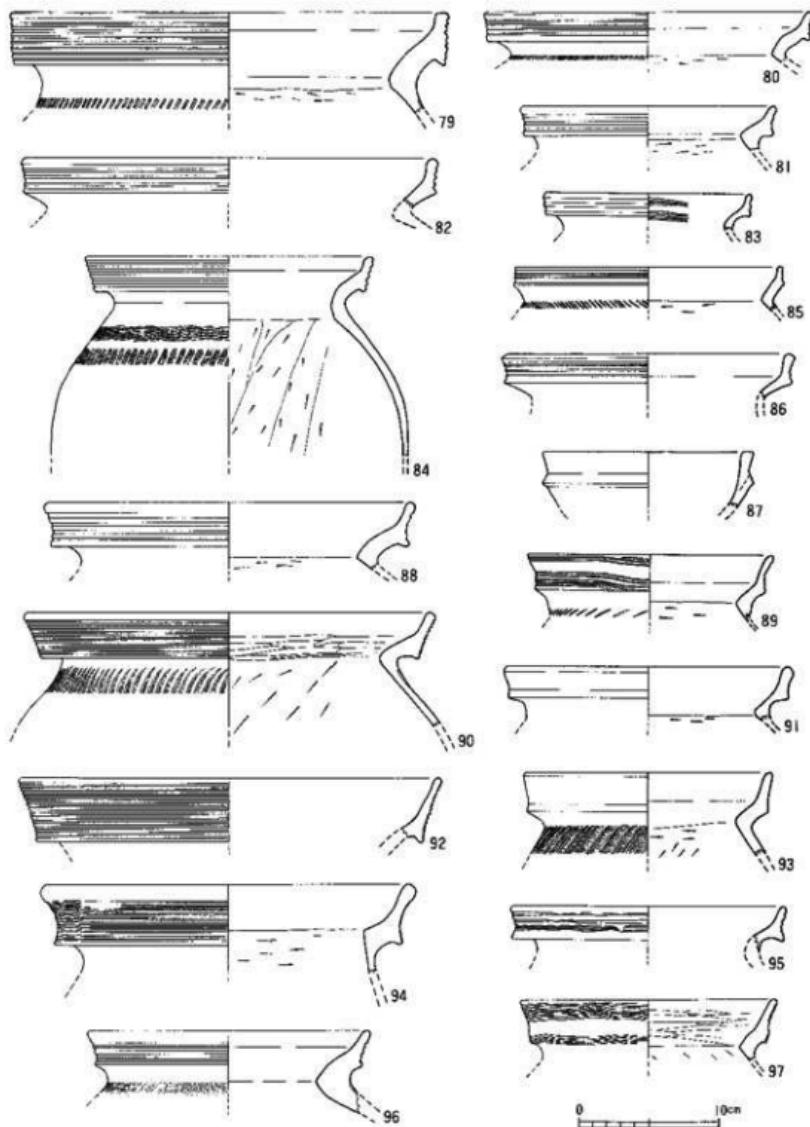
第137図 森遺跡出土弥生土器 (1) 1~23 (1:3) 24~28 (1:4)



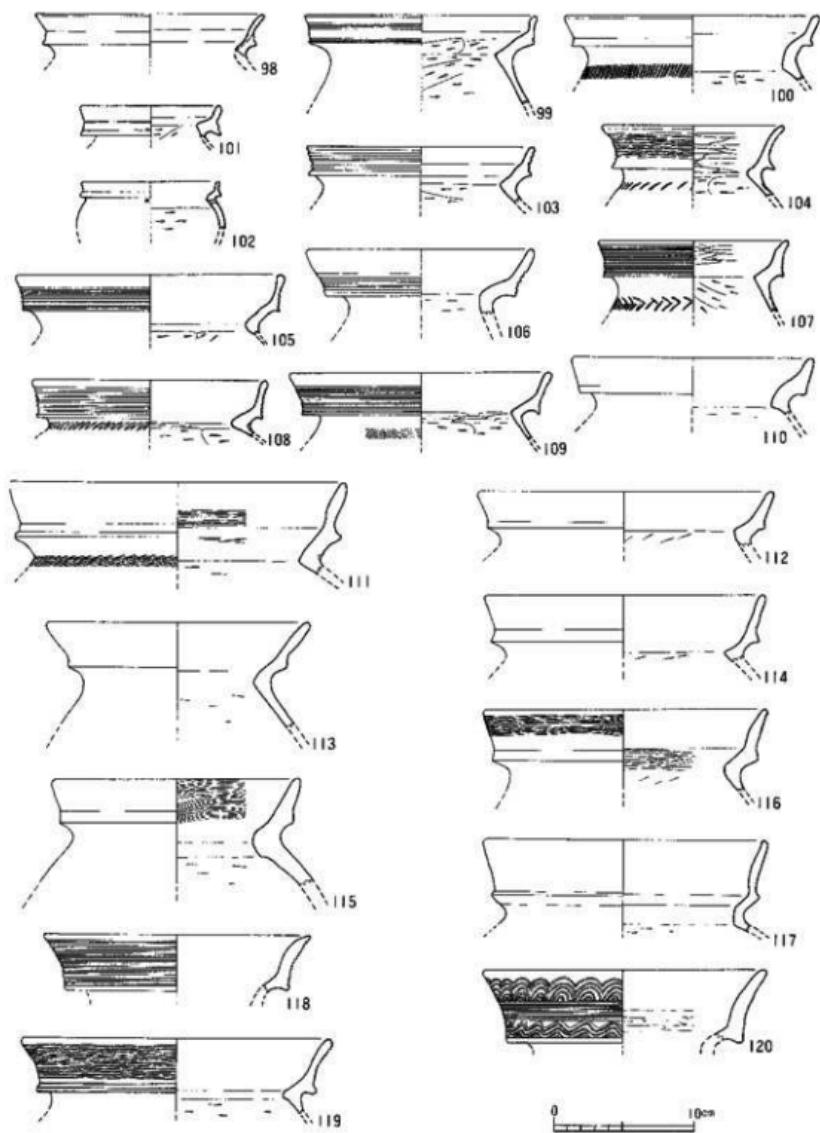
第138図 森遺跡出土弥生土器（2）（1:4）



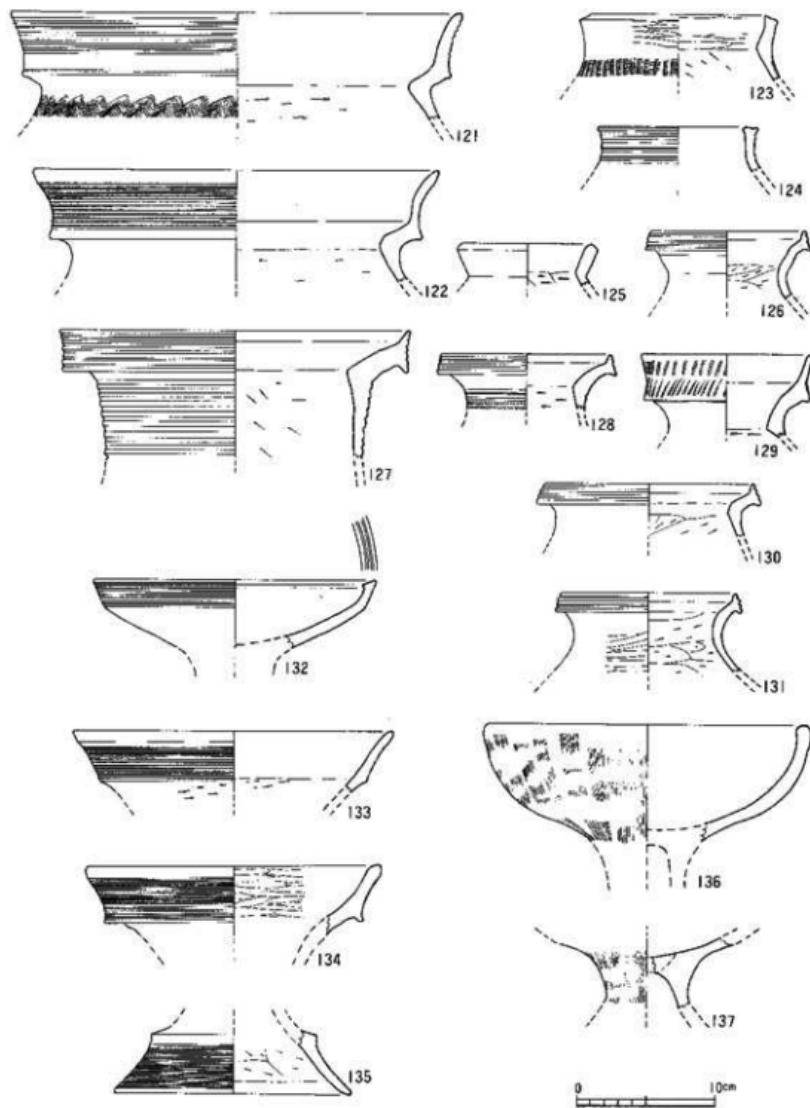
第139図 森遺跡出土弥生土器（3）（1:4）



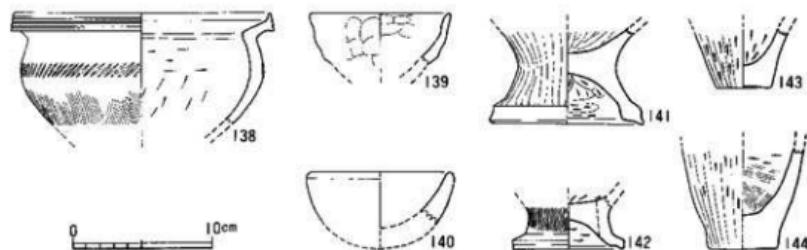
第140図 森遺跡出土弥生土器（4）（1:4）



第141図 森遺跡出土弥生土器（5）（1:4）



第142図 森遺跡出土弥生土器 (6) (1 : 4)



第143図 森遺跡出土弥生土器(7) (1:4)

弥生土器一覧表 (単位はcm) ()は現存値

分類	捕獲番号	開拓番号	出土地点	法 量 口徑 底径	器高	形態	文様	手法	備考
前期 壺	第137図 —1	1 2 6	N30-35 E30-35			口縁外反 突	口縁に羽状の刺	ハケ目 ナデ	
同上	—2	1 2 6	N20-30 E15-20				ヘラ描沈線5条	ミガキ ハケ目	
同上	—3	1 2 6	N20-30 E60-65				ヘラ描沈線下に 刺突	ミガキ ナデ	
同上	—4	1 2 6	N25-30 E20-25				ヘラ描沈線間に 刺突	ハケ目 ナデ	
同上	—5	1 2 6	N15-25 E10-20				削山突帶上にヘ ラ沈線鉛筆文	ミガキ ナデ	
同上	—6	1 2 6	N12-20 E8-20				ヘラ描重弧文	ミガキ ナデ	
同上	—7	1 2 6	N12-20 E8-20				木葉文	ミガキ ナデ	
前期 壺	—8	1 2 6	N30-35 E30-35				ヘラ描沈線	ハケ目+ナデ	
同上	—9	1 2 6	N20-30 E60-65				ヘラ描沈線4条	ハケ目 ヨコナデ ナデ	
同上	—10	1 2 6	N30-35 E60-65				ヘラ描沈線14条 直下に三角形刺 突文	ハケ目 ヨコナデ ナデ	
同上	—11	1 2 6	N20-25 E30-35				ヘラ描沈線6条	ハケ目 ヨコナデ	鉢の可 能性あ り
同上	—12	1 2 6	N13-20 E20-30				ヘラ描沈線下に 刺突	ナデ	
同上	—13	1 2 6	N30-35 E30-40				ヘラ描沈線11条 (細い)	ナデ	
同上	—14	1 2 6	N30-35 E30-40				同上	ヨコナデ	
同上	—15	1 2 6	N20-25 E30-35				口背刻目 ヘラ 描沈線	ハケ目 ヨコナデ	
同上	—16	1 2 6	N17-19 E30-32				ヘラ描沈線	ヨコナデ	
同上	—17	1 2 6	N25-30 E20-25				ヘラ描沈線7条 直下に刺突文	ハケ目 ナデ	
同上	—18	1 2 6	N25-30 E20-30					ハケ目 ヨコナデ	
中期 壺	—19	1 2 6	N30-35 E30-40				クシ描沈線12条 直下に爪形文	ナデ	19と同 一個体 か
同上	—20	1 2 6	N30-35 E30-40				同上	ナデ	

分類	標図番号	図版番号	出土地点 口底深	法 量 器高	形 態	文 様	手 法	備 考
中期 壺	-21	1 2 6	N22-36 E51-60			クシ彫沈線 織文 刺突 2条1単位の沈 線連弧文状の 文様	内面ケズリ	
同上	-22	1 2 6	N20-25 E10-15				内面ケズリ	後期の 可能性 あり
同上	-23	1 2 6	N25-30 E20-25			凹線上に斜格子 文	内面ケズリ	同上
前期 壺	-24	1 2 6	N13-20 E20-30	31.9 (5)		ヘラ彫沈線 7条 直下に刺突	ハケ目 ヨコナデ	
同上	-25	1 2 6	N20-25 E30-35	17.9 (8)			ハケ目 ヨコナデ	
同上	-26	1 2 6	N13-23 E30-40	26.0 (9.1)	口縁非常に 短い		ハケ目	
同上	-27	1 2 6	N21 E22-23	15.8 (5.6)			ハケ目 ヨコナデ	
同上	-28	1 2 6	N6-10 E14-18	25.9 (5.5)			ハケ目 ヨコナデ	
前期 壺	-28		N13-19 E30	19.1 (8.1)		口唇に羽状の刺 突 ヘラ沈線10 条	ハケ目 ミガキ	
前期 壺	-29	1 2 6	N25-30 E20-25	21.0 (3.5)	口縁面取り		外画ケズリ? ハケ目 ヨコ ナデ	
同上	-30	1 2 6	N25-30 E20-30	24.0 (7.4)			ハケ目 ヨコナデ	
前期 鉢	-31	1 2 6	N30-20 E20-22	19.0 (4.9)			ミガキ	
前期 底部	-32	1 2 7	N13-23 E30-40	底径 7.0 (8.6)			ハケ目 ナデ	
同上	-33	1 2 7	N25-30 E20-25	底深 5.6 (3.5)			ミガキ 指押压痕	
同上	-34	1 2 7	N17-19 E30-32	底深 (6) 7.2				全面風 化
中期 壺	-35	1 2 7	N20-30 E60-65	20.0 (7.1)	口縁肥厚	クシ彫沈線 4条	内面下平ケズ リ 上半ナデ ヨコナデ	
中期 底部	-36	1 2 7	N20-25 E20-25	底深 4.0 (2.2)			ミガキ ナデ	
同上	-37	1 2 7	N15-20 E60-65	底深 6.3 (3.8)			ミガキ ナデ	
後期 A	-38	1 2 7	N30-35 E30-40	15.0 (6.8)		擬凹線 2条 ク シ刺突	ヨコナデ ケズリ ナデ	
同上	-39	1 2 7	N25-30 E20-25	35.9 (6)		擬凹線 2条	ヨコナデ ケズリ	
同上	-40	1 2 7	N20-30 E10-20	12.0 (3.9)		羽状の刺突文	ヨコナデ ケズリ	
同上	-41	1 2 7	N25-30 E25-30	22.0 (4.4)		擬凹線 3条	ハケ目+ヨコ ナデ ケズリ	
同上	-42	1 2 7	N20-30 E15-20	15.0 (2.5)			ヨコナデ ケズリ	
同B ₁	-43	1 2 7	N13-23 E30-40	19.0 (1.8)			ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-44	1 2 7	N30-40 E20-30	13.0 (2.8)	内面の脣曲 部	擬凹線 3条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-45	1 2 7	N30-35 E25-30	17.7 (2.7)			ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-46	1 2 7	N20-30 E15-20	13.0 (2.5)			ヨコナデ ケズリ	
同 A	-47	1 2 7	N15-25 E10-15	9.0 (4.7)		擬凹線 2条 2 枚貝による連續 刺突	ナデ ケズリ	
同 B ₂	-48	1 2 7	N30-40 E20-30	15.0 (3.6)		擬凹線 3条 ク シ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同 B ₂	-49	1 2 7	N25-30 E20-30	15.0 (4.5)		擬凹線 2条	ヨコナデ ケズリ	

分類	標図番号	図版番号	出土地点	法 量 器高 口底距	形 態	文 様	手 法	備 考
同B ₂	-50	1 2 7	N20~30 E15~20	13.0 (3)			ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-51	1 2 7	N30~35 E25~30	16.0 (3.7)		擬凹線3条 グ シ連続刺突文	ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-52	1 2 7	N30~40 E20~30	11.4 (4.2)		擬凹線3条 ヘ ラ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-53	1 2 7	N30~40 E20~30	15.6 (4.5)		擬凹線3条 ヘ ラ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-54	1 2 7	N25~30 E20~25	17.3 (4.1)		擬凹線3条 ヘ ラ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₂	-55	1 2 7	N30~40 E20~30	13.7 (3.5)		太い沈線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₄ 第139図	56	1 2 7	N25~30 E20~30	24 (3)	口縁上下に 少し拡張	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
	-57	1 2 8	N25~30 E20~30	20.4 (3)	口縁わずかに 拡張	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₄	-58	1 2 8	N30~40 E20~40	18.9 (5.9)		擬凹線3条 羽 状の刺突(ヘラ)	ヨコナデ ケズリ	
同B ₄	-59	1 2 8	N30~35 E30~40	13.4 (3.5)		擬凹線4条 ヘ ラ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₄	-60	1 2 8	N25~30 E20~30	17.9 (3.4)	口縁大きく 拡張	擬凹線4条	ミガキ ヨコ ナデ ケズリ	
同B ₄	-61	1 2 8	N25~30 E20~25	24 (5.7)	頭部長い	擬凹線3条	ヨコナデ	瘤の凹 能性あり
同B ₄	-62	1 2 8	N30~35 E30~ B5	26 (5.2)	口縁大きく 拡張	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₄	-63	1 2 8	N25~30 E20~26	21 (3)		擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-64	1 2 8	N20~30 E0~10	14.0 (3.1)		擬凹線3条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-65	1 2 8	N30~35 E25~30	15.0 (4.3)		擬凹線3条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-66	1 2 8	N20~30 E10~20	26 (5.3)		擬凹線3条 クシ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-67	1 2 8	N30~40 E20~30	20.0 (4.4)	口縁内傾	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-68	1 2 8	持上巾	26 (5.5)	口縁肥厚	擬凹線4条 刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-69	1 2 8	N30~35 E30~40	24.9 (3.3)	頸部やや長 い	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-70	1 2 8	N25~30 E30~35	19.3 (4.8)	口縁内傾	擬凹線3条	ヨコナデ ケ ズリ ハケ目	
同C ₁	-71	1 2 8	N25~30 E20~30	22.4 (4.4)		クシ沈線7条 刺突	ヨコナデ ハ ケ目 ケズリ	
同B ₅	-72	1 2 8	S 1~15 No. 111	27.8 (6.2)	口縁の反り 強い	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-73	1 2 8	N25~30 E30~35	14.5 (5.0)	口縁内傾	擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-74	1 2 8	N25~30 E20~30	16.0 (5.0)	口縁肥厚	擬凹線3条	ヨコナデ ケ ズリ ハケ目	
同B ₅	-75	1 2 8	N25~30 E20~25	18.0 (4.0)		擬凹線5条 クシ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同C ₁	-76	1 2 8	N25~30 E20~30	13.0 (3.5)			ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-77	1 2 8	N30~40 E20~30	13.0 (5.5)		擬凹線3条 刺突	ヨコナデ ケ ズリ ハケ目	
同C ₁	-78		N31 E35	22.8 (7.0)	口唇平坦	クシ沈線7条 刺突	ヨコナデ ハ ケ目 ケズリ	
同C ₁ 第140図	79	1 2 8	N30~35 E30~35	31.2 (6.9)	口唇平坦	クシ沈線7条 刺突	ヨコナデ ケズリ	
	-80	1 2 8	N30~35 E25~30	23.4 (3.4)	頭部やや長 い	クシ沈線4 刺 突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₅	-81	1 2 9	N20~30 E15~20	18.0 (3.5)		擬凹線3条	ヨコナデ ケズリ	

分類	標図番号	岡版番号	出土地点	法 印底径	量 器高	形 態	文 様	手 法	備 考
同C ₁	-82	1 2 9	N20~30 E10~20 E20~25	29.0 (3.7)			擬凹線4条	ヨコナデ	
同B ₁	-83	1 2 9	N25~30 E15~20 E20~25	14.6 (2.8)			太い沈線2条	ヨコナデ ミガキ	
同C ₂	-84	1 2 9	N20~30 E15~20 E20~30	20.4 (14.1)			擬凹線5条 クシ刺突	ヨコナデ ケズリ	
同B ₄	-85	1 2 9	N30~35 E25~30	19.0 (3.0)			擬凹線3条 刺突	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-86	1 2 9	N25~30 E20~30	20.0 (3.5)			擬凹線4条	ヨコナデ	
同C ₃	-87	1 2 9	S D 01 N40 E30 N28	15.0 (4)				ヨコナデ ナデ	
同C ₃	-88	1 2 9	耕土中	25.95 (5.1)			擬凹線4条	ヨコナデ ケズリ	
同C ₂	-89	1 2 9	N20~30 E15~20	17.4 (3.7)			クシ沈線8条 刺突	ヨコナデ ケズリ	
同C ₂	-90	1 2 9	N29 E20	29.0 (8.4)			クシ沈線10条 2枚貝刺突	ヨコナデ ミ ガキ ケズリ	
同C ₃	-91	1 2 9	N30~40 E20~30	20.0 (3.9)		口縁やや短 い		ヨコナデ ナ デ ケズリ	
同C ₃	-92	1 2 9	N30~32 E20~22	29.95 (4.6)		口縁長い	クシ沈線14条	ヨコナデ	
同C ₃	-93	1 2 9	N30~32 E20~22	17.4 (6.3)			2枚貝の連続刺 突	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-94	1 2 9	N15~25 E10~20	25.9 (6.5)			クシ沈線14条	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-95	1 2 9	N25~30 E20~25	19.4 (3.4)			ヘラ沈線4条	ヨコナデ	
同C ₃	-96	1 2 9	N30~35 E25~30	20.0 (4.9)			クシ沈線4条 刺突	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-97	1 2 9	N30~32 E20~22	18.0 (4.4)			クシ沈線11条	ヨコナデ ミ ガキ ケズリ	
同C ₃	第141図 -98	1 2 9	N20~25 E20~25	16.3 (3.3)		器壁うすい		ヨコナデ	
同C ₃	-99	1 2 9	N20~30 E10~20	16.4 (6.2)			クシ沈線	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-100	1 2 9	N25~30 E20~25	17.95 (4.5)			刺突	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-101	1 2 9	N25~30 E20~25	10 (2.2)			ヘラ沈線2条(ヨ コナデでつぶれ る)	ヨコナデ ケズリ	
同C ₃	-102	1 2 9	N30~33 E20~30	9.75 (3.5)		小型		ヨコナデ ケズリ	頭部に 孔
同C ₃	-103	1 2 9	N25~30 E20~30	15.9 (5.1)			擬凹線3条	ヨコナデ ケズリ	
同D ₃	-104	1 2 9	N30~40 E20~30	12.6 (5.1)			クシ沈線8条 2枚貝刺突	ミガキ ヨコ ナデ ケズリ	
同D ₁	-105	1 2 9	N25~30 E20~25	19 (4.3)			クシ沈線6条	ヨコナデ ケズリ	
同D ₁	-106	1 2 9	N25~30 E20~30	16 (4.6)			クシ沈線3条	ヨコナデ ケズリ	
同D ₁	-107	1 3 0	N20~25 E10~15	13.3			クシ沈線9条 羽状刺突(2枚貝)	ヨコナデ ミ ガキ ケズリ	
同D ₁	-108	1 3 0	N25~30 E20~30	16.6 (4.1)			クシ沈線6条 刺突	ヨコナデ ケズリ	
同D ₁	-109	1 3 0	N25~30 E20~30	18.3 (4.7)			クシ沈線8条	ヨコナデ ミ ガキ ケズリ ハケ目	
同D ₁	-110	1 3 0	N30~32 E20~22	17 4	口縁の反り 弱い			ヨコナデ ケズリ	
同D ₁	-111	1 3 0	N30~35 E30~40	24 (6.9)			連続刺突(2枚 貝)	ヨコナデ ケズリ	
同D ₁	-112	1 3 0	N30~32 E20~22	20.9 4	口縁やや短 い			ヨコナデ ケズリ	

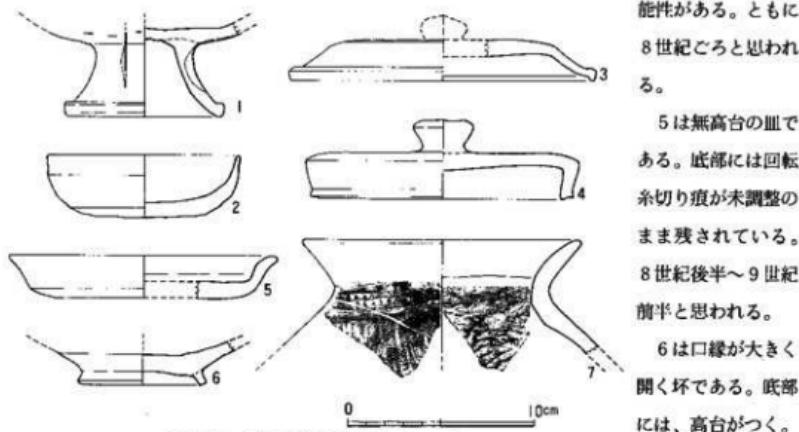
分類	種別番号	国際番号	出土地点	法 量		形 態	文 様	手 法	備 考
				口底径	器高				
同 D:	-113	1 3 0	N31 E35	18.6	(7.5)			ヨコナデ ケズリ	
同 D:	-114	1 3 0	N30-32 E20-22	19.8	(4.7)	器壁うすい		ヨコナデ ケズリ	
同 D:	-115	1 3 0	N31 E35	17.4	(7.3)			ヨコナデ ハ ケ目 ケズリ	
同 D:	-116	1 3 0	N30-32 E20-22	20	(5.7)		クシ沈線11条	ヨコナデ ミ ガキ ケズリ	
同 D:	-117	1 3 0	N20-30 E60-65	19.9	(6.5)	口唇平坦		ヨコナデ ケズリ	
同 D:	-118	1 3 0	N20-30 E20-30	19	(4.4)		クシ沈線15条		全面風 化
同 D:	-119	1 3 0	N20-30 E10-20	22	(5.4)		クシ沈線15条	ヨコナデ ケズリ	
同 D:	-120	1 3 0	N25-30 E20-25	20	(5.2)		クシ波状文 重 弧文	ヨコナデ ミガキ	
第142回 -121	1 3 0	N25-30 E20-30	32.3	7.5			クシ沈線9条 波状文	ヨコナデ ケズリ	
							クシ沈線14条	ヨコナデ ケズリ	
同 D:	-122	1 3 0	N30-40 E20-30	28.9	8.7				
後期 甲 A	-123	1 3 0	N15-25 E0-10	12.5	(4.8)	口唇平坦	2枚貝刺突	ミガキ ケズリ	
同 上	-124	1 3 0	N20-30 E15-20	10.9	(3.5)		口唇凹線 口縁 門縫5条	ヨコナデ	
同 B	-125	1 3 0	N30-32 E20-22	9.2	(3.0)			ヨコナデ ケズリ	
同 C	-126	1 3 0	N25-30 E30-35	11	(4.65)	口縁折彎	擬凹線3条	ヨコナデ ケズリ	
同 C	-127	1 3 0	N20-30 E15-20	25	(9.3)	口縁折彎	擬門縫17条 6条 額部9条	ヨコナデ ケズリ	
同 上	-128	1 3 0	N30-40 E20-30	11.9	(4.0)		擬凹線口縁3条 羽状の刺突	ヨコナデ ケズリ	
同 D	-129	1 3 1	N25-30 E20-25	12.0	(5.75)		口縁に羽状の刺 突	ヨコナデ ケズリ	
同 C	-130	1 3 1	N35-40 E30-35	14.95	(4.1)		擬凹線3条	ヨコナデ ケズリ	
同 D	-131	1 3 1	N35-40 E30-35	12.5	(5.8)		擬凹線3条	ヨコナデ ミ ガキ ケズリ	
高 坯	-132	1 3 1	N30-35 E30-40	20.3	(5.0)		口唇擬凹線2条 クシ沈線7条	ミガキ? ナ?	
器 台	-133	1 3 1	N15-25 E10-15	22.9	(4.4)		クシ沈線15条	ヨコナデ ケズリ	
器 台	-134	1 3 1	N25-30 E20-30	21.1	(5.0)		クシ沈線15条	ヨコナデ ミガキ	
器 台	-135	1 3 1	N15-25 E10-20	底縫	(4.8)		クシ沈線21条	ヨコナデ ケズリ	
高 坯	-136	1 3 1	N29 E20	22.9	(8.6)			ハケ目 ミガキ ナ?	
高 坯	-137	1 3 1	N25-30 E20-25					ハケ目 ミガキ	
鉢	第143回 -138	1 3 1	N30-35 E25-35	18.3	(8.0)		クシ沈線3条 刺突	ヨコナデ ハケ目 ケズリ	
坏								指押压痕明瞭	
坏	-139	1 3 1	N25-30 E25-30	10	(3.75)				
坏	-140	1 3 1	N25-30 E20-30	10	(4)			ヨコナデ	
脚	-141	1 3 1	N30-32 E20-22	底縫	(6.7) (10.75)	端部厚い		ミガキ ケズリ	
同 上	-142	1 3 1	N30-40 E20-30	(7.8)	(3.8)			ハケ目 ケズ リ	
底 部	-143	1 3 1	N12-20 E8-20	底縫	(4.2)			内外面ケズリ	
同 上	-144	1 3 1	N25-30 E20-30	底縫	(7.2)			内外面ケズリ	

(3) 須 恵 器 (第144図)

包含層からは須恵器の出土は少なく、1箱程度の出土だった。図示したのは壺、蓋、皿、甕、高壺である。

1は底脚の高壺で線状の透かしを入れる。2は口径10.2cmの小型の壺である。とともに7世紀前半と思われる。

3、4は蓋で、ともに天井部に擬宝珠状のつまみものである。3は壺、4は短頸壺に伴うと思われる。天井部に4は濃緑色、3は淡緑色の軸が厚くかかる。この軸は非常に厚く、自然軸にしては均等にかかっている。へら磨きなど器面の二次調整はないが、人為的に灰汁などかけられている可能性がある。とともに8世紀ごろと思われる。



第144図 森遺跡出土須恵器 (1:3)

須恵器一覧表 (単位はcm) ()は現存値

器種	採囲番号	出土地点	法量	形	形態	文様	手法	備考
			口径 底径	高さ 底径				
高壺	第144図 -1	N13-21 E 8-20		(5)	8.3	低脚 脚に線状の透し (貫通しない)	回転ケズリ 回転ナデ	
壺	-2	N10-20 E 0-10	10.2	3.3	6.7		へら切り未調整	
蓋 (壺)	-3	N15-20 E 60-70	16.1	2.2		口縁端粗曲	回転ナデ	天井部全面 に軸
蓋 (短頸壺)	-4	N13-21 E 8-20	12.9	4.1		口縁垂直 に粗曲	回転ナデ	天井部全面 に厚く軸
皿	-5	N20-25 E 25-30	14.3	2.3	8.7	口縁外反	回転糸切未調整	
壺	-6	N25-30 E 25-30		(2)	6.4	口縁大き く開く	回転糸切未調整	内面摩滅 (使用痕)
甕	-7	N20-30 E 50-60	14.8	(6.1)			粗い平行印 内面同心円当具痕	焼成不良

平安時代後期のものであろうか。

7は口縁部が短く外反する甕である。

(4) 石 器 (第145~150図 図版132~134)

石器も绳文土器などと同様、調査区の東側から主に出土している。绳文土器の出土量に比べ、出土量は少ない。

石鎚 (第145図2~18 図版132) 凹基式 (2~4、7~12)、平基式 (5、6、13~18)ともに出土している。2、3、5、6は長さがやや長いもの、11、12は基部の幅が広いものである。5、6、7は難に作られており、大きな剥離面が残っている。いずれも安山岩質である。

石匙 (第145図19 図版132) 一点のみ出土した。比較的大型で、背部つまみ部分をわずかに剥離しただけで、腹面には主要剥離面が残る難な作りである。刃部には刀くぼれ様の使用痕がみられる。安山岩質である。

スクレーパー (第145図20~22 図版132) いずれも刃部のみに二次加工があるので、一面には主要剥離面が残っている。すべて安山岩質である。

磨製石斧 (第145図1、第146図23~28 図版132) 1は全長4.2cmと非常に小型の石斧である。全面非常にていねいに研磨されている。これ以外は主に刃部を中心に研磨され基部付近は難な研磨である。23の身中央には着裝痕と思われるくぼみがみられる。

打製石斧 (第146図29~第147図35 図版132~133) 29、32は厚みがあり表裏とも全面に二次調整のある打製石斧だが、その他は偏平で周辺部分だけに二次加工が施される。自然面が残るものも多くあまりていねいな加工ではない。29刃部には加工痕がなく未製品にみえるが、使用痕が刃部に観察できる。34の刃部にも使用痕が明瞭に観察できる。35は強く反り、両面の身部中央部と一側縁に研磨痕が明瞭に残る。このような研磨痕は刃部などにはみられないことから、35は石皿を石斧に転用したものと思われる。

結晶片岩 (第147図37 図版133) 4.2cmの小片が一片出土している。一面が非常に平滑になっている。石棒の可能性がある。

石鎚 (第147図39 図版133) 一点だけ出土している。河原石の中央部を打ち欠いてくぼめるものである。

砥石 (第147図36、38、第148図40~42 図版133) いずれも表面が非常に平滑になっており、38、40の一面は凹面をなす。二面から四面が使用されているものが多い。

石棒 (第148図43 図版133) 一点だけ出土した。基部端は自然面のままで、基部から中央付近にかけては打ち欠きによりやや抉れ、そこから先端にかけてはわずかに研磨されている。

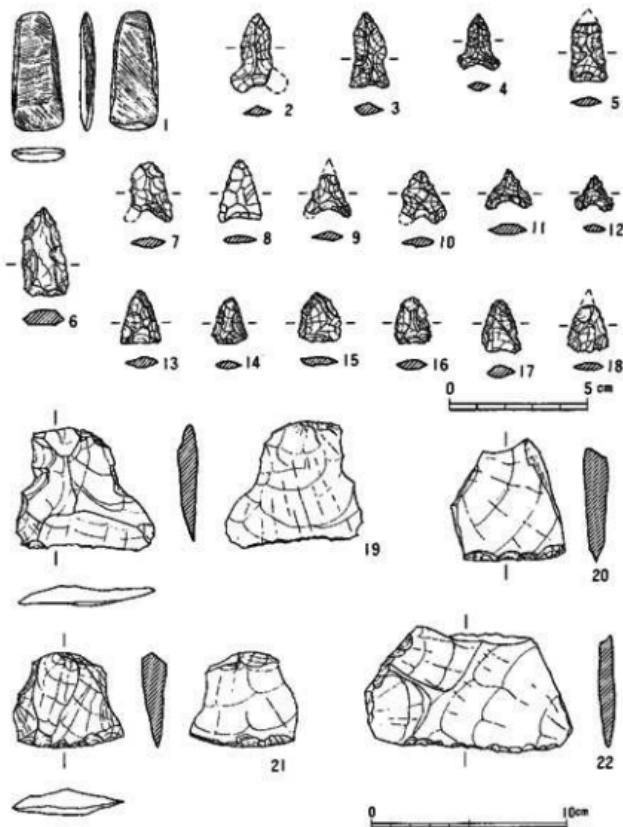
磨石・叩き石（第148図44～第149図54 図版133～134） いずれも河原石を使用したものである。平面形は円形、橢円形、柱状といろいろある。両端または側縁に打痕、表面に擦痕が残るものが多い。44、47にはとくによく打痕が残り、50、51、53、54の両面には擦痕がよく残る。50、51、53の表裏両面はとくによく使用されており、平滑になっている。

石皿（第150図55、57～60 図版134） 57～60は非常によく使用されており、表面が平滑になっている（60）か大きな凹面をなす（58、59）。60は非常に固い石材であるが、その他はやや柔らかい石材である。

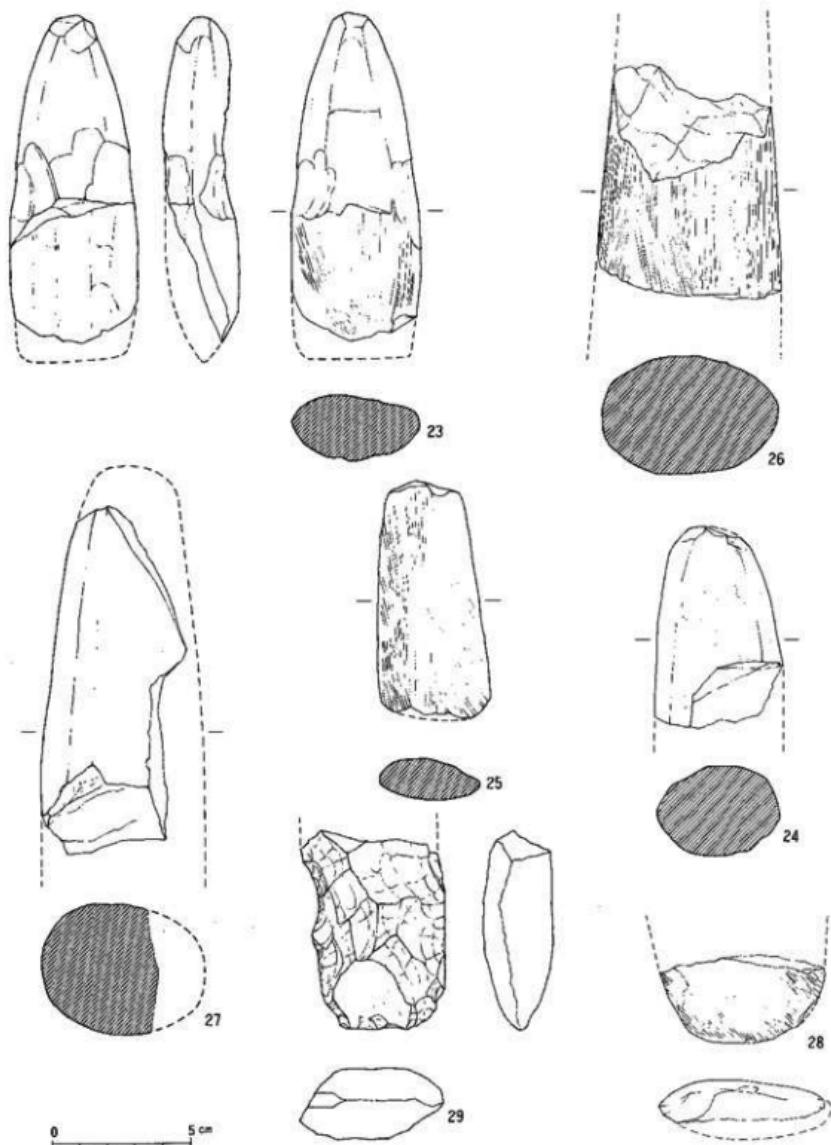
不明石製品（第149

図56 図版134）

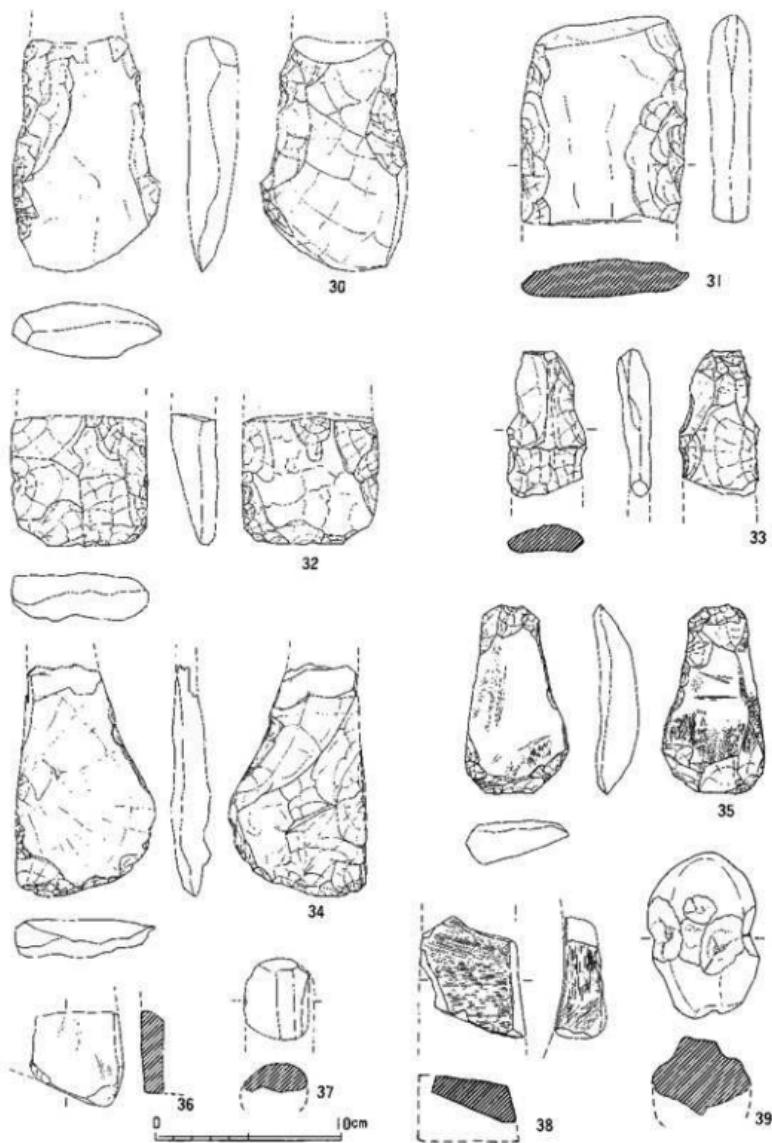
ほぼ球形を呈すもので、非常に固い石材である。全面に加工痕がみられるが、研磨痕ではなく、削痕のようである。



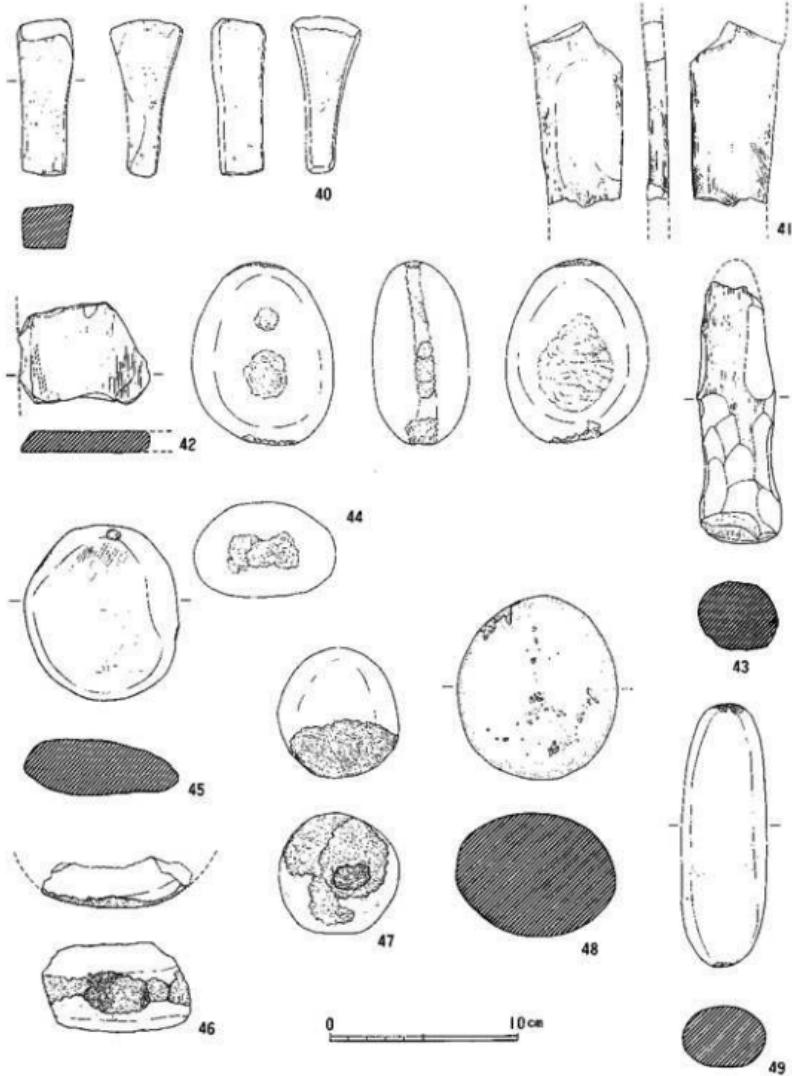
第145図 森遺跡出土石器（1） 1～18（7：10） 19～22（1：2）



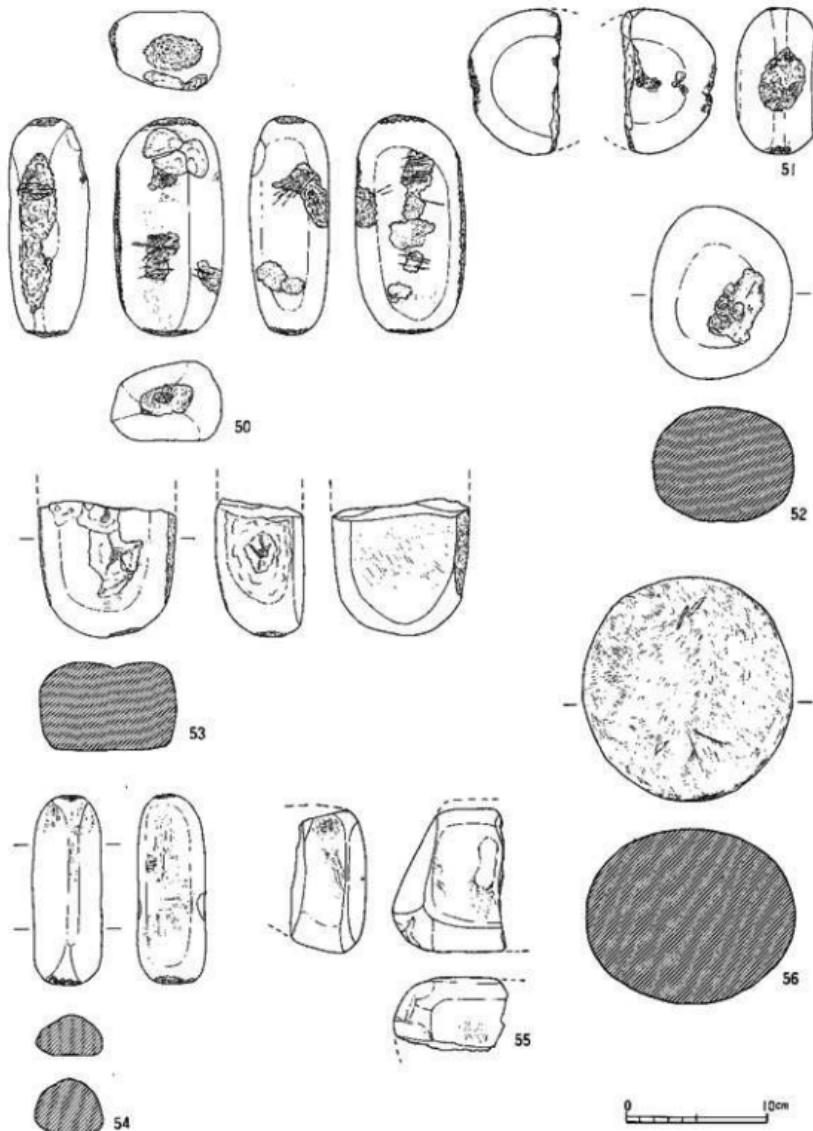
第146図 森遺跡出土石器（2）（1:2）：



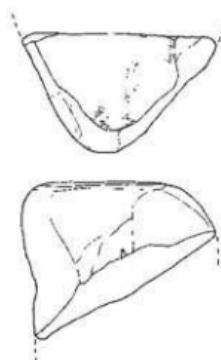
第147図 森遺跡出土石器（3）（1:3）



第148図 森遺跡出土石器（4）（1:3）



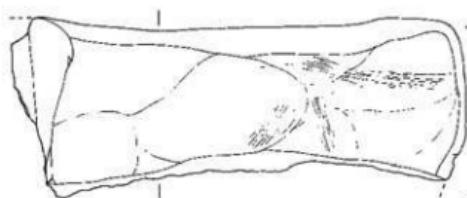
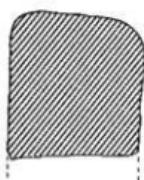
第149図 森遺跡出土石器（5）（1:4）



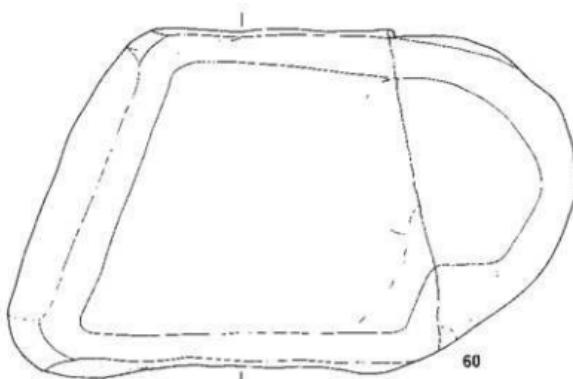
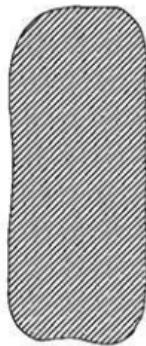
57



58



59



60

0 20cm

第150図 森遺跡出土石器 (6) (1:4)

石器一覧表 () は現存値

種別番号	器皿番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土地点	備考
第145図1	1 3 2	磨製石斧	4.2	1.8	0.5	6.15	S I - 70	№42
2	1 3 2	石 破	2.8	(2.3)	0.35	1.05	S K - 19	№16
3	1 3 2	石 破	2.6	1.4	0.4	1.29	N12-20	E 8-20
4	1 3 2	石 破	2.0	1.5	0.3	0.60	N20-30	E 0-10
5	1 3 2	石 破	(2.5)	1.3	0.3	0.95	N12-20	E 10-20
6	1 3 2	石 破	3.15	1.6	0.5	2.93	S K - 08	№95
7	1 3 2	石 破	2.1	(1.7)	0.4	0.93	N30-40	E 20-30
8	1 3 2	石 破	2.2	1.6	0.25	0.80	S I - 07	№4
9	1 3 2	石 破	(1.5)	(1.6)	0.3	0.57	N26-27	E 12-13
10	1 3 2	石 破	1.8	(1.7)	0.35	0.70	N20-26	E 15-20
11	1 3 2	石 破	1.4	1.7	0.4	0.44	N25-26	E 11-12
12	1 3 2	石 破	1.2	1.4	0.25	0.26		
13	1 3 2	石 破	1.8	1.4	0.4	0.67	N14-15	E 23-24
14	1 3 2	石 破	1.6	1.3	0.3	0.45	N24	E 19
15	1 3 2	石 破	1.7	1.5	0.3	0.77	N12-20	E 8-20
16	1 3 2	石 破	1.65	1.3	0.35	0.64	N 9-10	E 14-15
17	1 3 2	石 破	1.9	1.4	0.4	0.91	N20-30	E 30-40
18	1 3 2	石 破	(2.2)	1.5	0.25	0.63	N10-20	E -10
19	1 3 2	石 鋏	5.8	7.0	1.0	27.60	N 8-14	E 8-20
20	1 3 2	スクレーパー	6.1	5.8	1.2	51.76	N 8-14	E 8-20
21	1 3 2	スクレーパー	4.7	5.3	1.2	23.25	N 7-9	E 20-22
22	1 3 2	スクレーパー	5.9	10.1	0.8	61.63	N30-35	E 30-35
第146図23	1 3 2	磨製石斧	(12.3)	4.6	(2.5)	175.28	N25-30	E 20-30
24	1 3 2	磨製石斧	(7.2)	4.6	3.2	133.80	N 9-10	E 9-11
25	1 3 2	磨製石斧	(8.4)	4.0	1.5	81.25		
26	1 3 2	磨製石斧	(7.3)	6.6	4.3	314.84	N15-20	E 35-40
27	1 3 2	磨製石斧	(17.7)	(5.9)	4.5	396.97	SD-1 N40	E 40 №8
28	1 3 2	磨製石斧	(3.1)	(5.9)	(2.1)	30.33	N18-20	E 40-50
29	1 3 2	打製石斧	(7.0)	4.9	2.5	116.57	S I 01	№38
第147図30	1 3 2	打製石斧	(12.0)	(7.8)	2.8	330.93	N24	E 8
31	1 3 3	打製石斧	(10.8)	(9.0)	2.2	378.32	N20-30	E 10-20
32	1 3 3	打製石斧	(6.9)	(7.2)	2.4	156.33	S I - 05	№264
33	1 3 3	打製石斧	(7.7)	(4.1)	1.7	53.57	N 6-7	E 20-23
34	1 3 3	打製石斧	(12.0)	(7.35)	2.0	207.76	N 8-14	E 8-20
35	1 3 3	打製石斧	9.9	5.4	2.0	118.20	N20-30	E 60-65
36	1 3 3	砥 石	(4.9)	(5.0)	(1.15)	49.40	N 8-14	E 8-20
37	1 3 3	石 棒 (?)	(4.3)	(3.5)	(1.5)	30.95	S I - 04	№148
38	1 3 3	砥 石	(5.2)	(5.2)	(2.6)	74.98	N 8-14	E 8-20
39	1 3 3	石 鍤	8.6	3.9	5.7	252.93	S K40	№2
第148図40	1 3 3	砥 石	8.3	2.9	3.7	84.38	N18-28	E 40-50
41	1 3 3	砥 石	(9.8)	4.6	1.0	103.50	S K76	№23
42	1 3 3	砥 石	5.2	(7.0)	1.1	82.92	N12-20	E 8-20
43	1 3 3	石 棒	(15.1)	4.3	3.6	359.87	N 8-14	E 8-20

拂因番号	国番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土地点	備考
4 4	1 3 3	磨石・叩石	9.6	7.5	5.0	527.49	N19-24	E 45-50
4 5	1 3 3	磨石・叩石	9.3	8.2	3.0	363.56	N 8-14	E 8-20
4 6	1 3 3	磨石・叩石	(2.6)	(7.6)	4.6	96.87	N 9-14	E 10-20
4 7	1 3 3	磨石・叩石	6.9	6.4	6.4	383.95	N12-20	E 8-20
4 8	1 3 3	磨石・叩石	9.7	8.5	6.5	711.13	N13-23	E 30-40
4 9	1 3 3	磨石・叩石	13.9	4.5	3.2	349.15	N20-30	E 15-20
第149図50	1 3 4	磨石・叩石	15.4	7.8	5.6	1186.64	S I-05	No.397
5 1	1 3 4	磨石・叩石	10.4	(6.4)	5.75	586.89	S I-17	No.8
5 2	1 3 4	磨石・叩石	12.25	10.0	8.0	1599.73	S K53	No.23
5 3	1 3 4	磨石・叩石	(9.4)	(9.8)	(6.2)	1012.63	N 8-14	E 8-20
5 4	1 3 4	磨石・叩石	13.4	4.85	3.8	415.83	S I-11	No.16
5 5		石皿	(10.2)	(7.7)	(5.1)	691.99		
5 6	1 3 4	不明石製品	16.0	14.8	12.3	414.0	N18-28	E 40-50
第150図57		石皿	(8.5)	14.0	11.0	1160.0	N 7	E 20-23
5 8	1 3 4	石皿	15.7	(30.0)	8.0	6240.0	S I-05	上面四面をなす
5 9	1 3 4	石皿	(32.2)	12.6	9.6	7480.0	S I-05	上面四面をなす
6 0	1 3 4	石皿	37.7	24.1	9.8	17380.0	S I-02	No.290 No.291

(5) 装飾品 (第151図 図版135)

1は上製の耳栓である。長さ4.5cm、径2.4cmの大型のもので、側面には棒状工具による刺突が全面に施される。中心は小孔が貫通している。

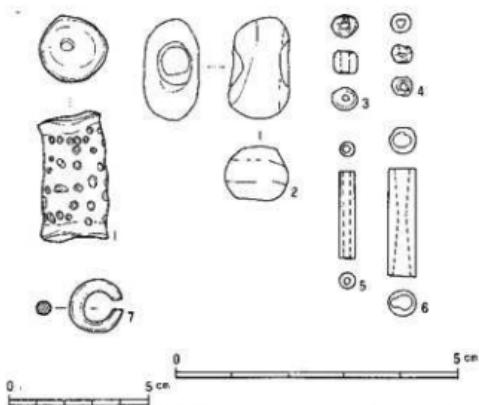
2は墨緑色の玉である。側面には7~9mmの大きな円孔が空けられている。

7は耳環であるが、金環か銀環かは表面の損傷が激しく不明である。

5は淡緑色の管玉である。長さ1.55cm、径0.27cmの細長い管玉である。

4はガラス製、3は土製の小玉である。

これらは、1、2が縄文時代、3~7が弥生時代~古墳時代と思われる。

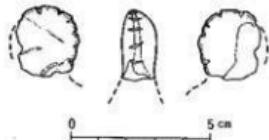


第151図 森遺跡出土装身具 1-7 (1:2) 他 (1:1)

装身具一覧表

插図番号	図版番号	器種	長さcm	幅cm	径cm	孔径cm	重量g	色調	備考
第151図 1	1 3 5	耳栓	4.5		2.4	0.4		茶褐色	網文
2	1 3 5	玉	1.8		1.1	0.7~0.9		同褐色	網文
3	1 3 5	上製小玉	0.8		0.9	0.2~0.3	0.61	黄色	
4	1 3 5	ガラス小玉	0.6		0.7	0.25~0.3	0.32	青色	
5	1 3 5	管玉	1.55		0.27	0.1~0.13	0.19	淡緑色	
6	1 3 5	管玉	1.93		1.0	0.3~0.4	0.82	濃緑色	
7		耳環	1.9	1.9	0.5		2.38	緑色	金環?

(6) 土 製 品 (第152図 図版135)



第152図 森遺跡出土土製品 (1:2)

土偶とも思われるが、小片のため詳細不明である。土器突起の可能性もある。平面形は半円形で周縁には小さな刻み目が施されている。一面は比較的平坦であるが、一面は厚く膨らむ。表面には何も表現されていらず、へら状工具による小さな傷が観察されるだけである。法量は最大長2.5cm、最大幅2.2cm、最大厚1.2cmである。

(7) 中近世陶磁器 (第153図 図版135~140)

陶磁器類は耕作上直下の固く締まった耕盤層からまとめて出土した。この層は古土と思われるところから、今回出土した陶磁器は原位置を保っているものはない。図示したのは第153図にとどめ、他は図版137~140に示した。

第153図1、2(図版135)、図版137(下)ー1、2、13は須恵器壺である。いずれも焼成は良好であるが、奈良時代の須恵器に比べ、胎土は空孔が多く縮まりが悪い感じである。調整もありていねいではなく、とくに、第153図2は器面の凹凸が著しい。同図1の胴部にはやや太い突線が巡っている。これらは詳細な時期は不明であるが、少なくとも10世紀以前のいわゆる律令時代の須恵器とは大きく異なることから、古代末~中世のものと考えたい。

第153図3~9(図版135)、図版137(上)ー1~12は中国製青磁である。口縁部は端部が外反するものが多い。3、4と図版137(上)ー1~4は蓮弁が描かれている。同図3、図版137(上)ー1は内厚の蓮弁で、同図4と図版137(上)ー2は線彫りで蓮弁が表現されている。図版137(上)ー3、4は蓮弁の幅が狭い。これらの青磁は14~15世紀の時期を当てることができる。

図版137(上)ー13~17は中国製白磁碗で、いずれも口縁部が外反する。同18~20は中国製褐釉で、19が小型の器種、18、20が大型の器種である。同21、22は中国製焼締陶である。器壁が非常に

うすい。

図版138は中国製青花である。いずれも碗、皿など小型の器種である。口縁部は1が端部が外反、4が内湾する。高台は2が低く、3が高い。二次焼成を受けたものがある。

図版137（上）-23、24は外面にうすく釉がかかった壺である。胎土は普通の須恵器に比べればきめ細かい。この釉は自然釉とみることもできるが、全面にまんべんなくかかっていることから、人為的に施釉された可能性もある。ただし、瀬戸、美濃地方の灰釉陶器より胎土は粗い。

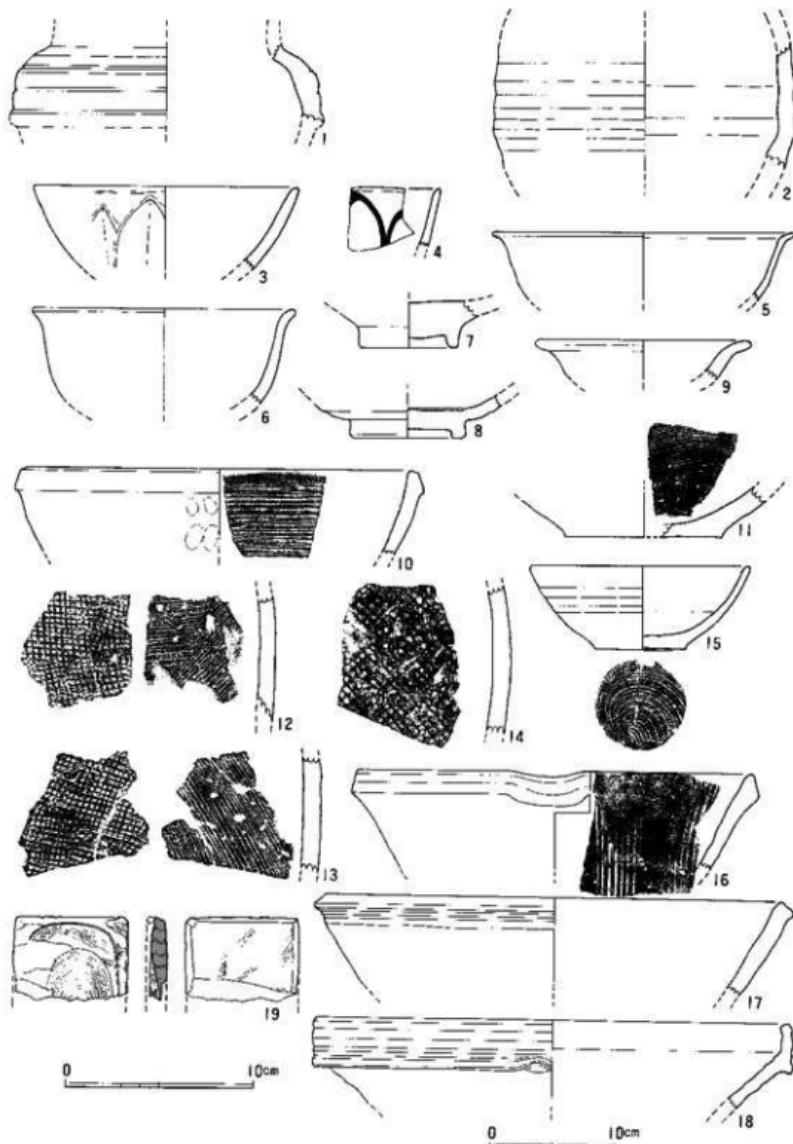
第153図10～14、17、図版139は龜山系須恵器である。第153図10、11、17が瓦質であるほかは焼成が悪く軟質である。同図10、11、17、図版139-4は鉢で、口縁部は肥厚し同図10、11、図版139-4の内面にはカキ目、同図17の内面にはなで調整が施されている。他は外面に格子叩き目、内面になで（同図14、図版139-5、6）またはカキ目（同図12、13、図版139-1～3、7）が施される。外面の叩き目は同図14が大きいほかは、比較的小さい。

第153図15は土師器壺である。比較的焼成は良好で、固く焼けている。胎土は非常にきめ細かい。底部は回転糸切り痕が明瞭に残る。

第153図16、18、図版137（下）-3～12、14は備前焼で、第153図16、18、図版137（下）-3、6、11、14、16は鉢である。第153図16は口縁部が肥厚するもの、同図18は口縁部が屈曲し浅い凹線が入っている。前者が14世紀、後者が16世紀頃である。また図版137（下）-3は口縁部が屈曲するが凹線は施されていないことから、15世紀頃のものと思われる。その他は器種不明の胴部片である。図版137（下）-8、9には描きによる文様が入っている。また同4の内面は叩き痕をていねいになでている。

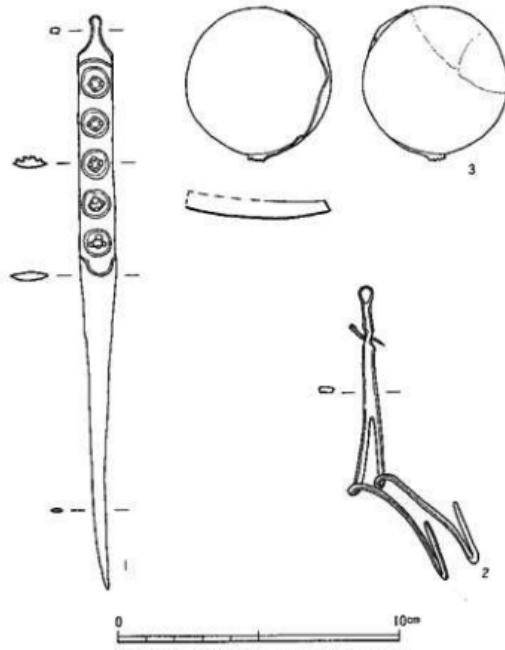
陶磁器一覧表（単位はcm）

器種	標本号	図版番号	出土地点	法量			形態	文様	手法	備考
				口径	器高	底径				
須恵器 壺	-1	1 3 5	N20-30 E60-65	(4.3)			肩張る	沈線 隆帶	回転ナデ	うすく自然釉
同 上	-2	1 3 5	N20-30 E60-65	(6.9)					回転ナデ	凹凸顯著
青 磁 碗	-3	1 3 5	N30-35 E30-35	14	(4.5)			蓮弁肉厚 端に棱線		
同 上	-4	1 3 5	N15-20 E50-55					蓮弁沈線で表現		
同 上	-5	1 3 5	N20-30 E60-65	16	(3.65)		口縁外反			
同 上	-6	1 3 5	N25-30 E50-55	14	(5)		口縁外反			
同 上	-7	1 3 5	N15-20 E50-60		(2.4)	5.2				
同 上	-8	1 3 5	N22-28 E50-60		(2.3)	6.2		内面底部に團線		
青 磁 皿	-9	1 3 5	E20-30	11.2	(2.15)		口縁外反			



第153図 森遺跡出土中世陶磁器・石硯 1~13、19 (1:3) 16~18 (1:4)

器種	採集番号	採取番号	出土地点	法 量			形 態	文 様	手 法	備 考
				口径	器高	底径				
瓦質土器 鉢	-10	1 3 6	N30-35 E30-40	20.45	4.55		口縁肥厚		ヨコナデ 内面ハケ目	
同 上	-11	1 3 6	N30-35 E30-40		2.4	8.3	平底		外面 ハケ目 後ナデ 内面 ハケ目	10と同一個体 か
龜山系 壺	-12	1 3 6	N18-22 E31-40						小さな格子印 内面ハケ目	焼成不良
同 上	-13	1 3 6	N15-20 E15-20						小さな格子印 内面ハケ目	焼成不良
同 上	-14	1 3 6							大きな格子印 内面同心円当 具痕をナデ	焼成不良
土師器 碗	-15	1 3 6	N7-9 E20-22	11.7	4.5	4.8	深身		回転糸切未調 整	
備前 罐	-16	1 3 6	N13-20 E20-30	28	(6.6)		口縁肥厚 片口		回転ナデ	おろし目 7条 1単位?
瓦質土器 鉢	-17	1 3 6	N25-30 E50-55	32.4	(6.7)		口縁肥厚		ナデ	
備前 鉢	-18	1 3 6	N13-20 E20-30	33.6	(6.1)		口縁くの字形に拡 張	凹線 3条 押点文	回転ナデ	
石 瓦	-19	1 3 6	N20-30 E60-65	(長) (幅) (厚)	(4.5)	6.2	0.9			中央非常に凹 む 2次焼成?



第154図 森遺跡出土金属器 (1:2)

図版137（下）—17、18は美濃産の天目茶碗である。17が口縁部、18が底部近くで、ともに内外面とも茶褐色の釉がかかっている。

図版140は肥前系で17世紀頃のものである。1、3、4は内面に段がつく皿、2、5、9は碗、6は摺鉢、11は鉢である。

（8）石 碗（第153図19 図版136）

石製の碗で二次焼成をうけているようでかなり欠損している。中央は非常によく使用されており、大きくくぼんでいる。赤褐色を呈している。

（9）金 属 器（第154図 図版140）

1は斧である。下部は折れ曲がっている。幅は1.2cm、長さは図上で20.5cmを測るが、復元すると約21.5cmである。表の鋸部には花をあしらったと思われる文様がある。

2は簪である。下部は屈曲し本来の法量は計測できない。上部には釘が残っている。

3は径5cmを測り、円盤状を呈す。側縁には3mmの高さで側板がついている。断面形はわずかに弧を描くが、これが本来の形なのかどうかは不明である。側板には0.5×1.5mmの小さな長方形の孔があいている。表面には鍍金がみられる。容器の底部または蓋の一部と考えられる。

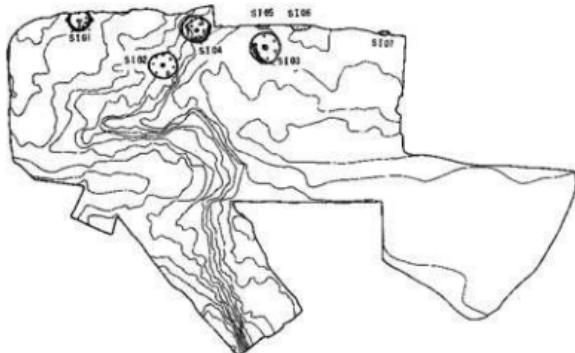
4. 小 結

調査の結果、森遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡であることが分かった。検出された遺構は竪穴住居跡21棟、掘立柱建物5棟、上坑墓13、上坑36などである。これらはこれまで資料が少なかったこの地域の古代を解明するうえで貴重な資料といえる。今回の調査では、集落の変遷を知り得るほど良好な集落遺構が検出された点がもっとも注目される成果である。また、遺構は確認できなかったが縄文土器が多数出土した。このうち、後期後半の彦崎K2式から福田K3式に並行する土器はこれまで県内ではあまり知られていない、今後の研究を進めるうえで重要な資料が得られた。

以下、竪穴住居跡を中心に、今回の調査結果についてまとめてみたい。

遺跡の時期について

森遺跡では前述のとおり、縄文時代後期から中世までの遺構、遺物が出土している。しかし、その間、この遺跡に間断なく人々が生活していたというわけではない。出土遺物、遺構からみると、ここに人々が居住していた期間は、縄文時代後期後葉～弥生時代前期後半、弥生時代後期中葉～後葉、古墳時代末～平安時代初頭ということになる。



第155図 整穴住居跡変遷図（1） 弥生時代

ところで、1990年頃原町教育委員会が行った五明田遺跡の調査結果をみると、縄文時代中期末（里木Ⅱ式）、後期初頭（福田KⅡ式）、晩期末、弥生時代前期、中期中葉、後期中葉、7世紀後葉（須恵器）の土器が出土している。このうち、縄文時代中期末、後期初頭、弥生時代前期前葉、中期

中葉、7世紀後半の土器は、森遺跡では出土していない。

両者を対比して気づくのは、森遺跡と五明田遺跡は直線距離にして200mしか離れていないにもかかわらず、時期的にまったく重ならない時期があることである。とくに、五明田遺跡では大量に出土した、縄文時代後期初頭の福田KⅡ式が森遺跡ではまったく出土していないことは注目すべきである。縄文時代後期を例にするなら、五明田遺跡の集団が別の地にすっかり移住し、彦崎KⅡ式の時期に再びここに戻って来たか、別の集団が森遺跡に移住して来たとも考えることもでき、その繰り返しの結果、五明田遺跡や森遺跡の在り方となった、との説明も可能であろう。しかし、縄文時代後期以降、集団の入れ替わりが何回も繰り返された、と想定することは無理であろう。

2つの遺跡に重ならない時期がある事実は、これらが立地する広い河岸段丘上を集落が少しづつ移動した結果と思われる。長い間には集団で他地に移住し、また他地から移住して来た集団もあったであろうが、そのような移動は少なかったのではないかろうか。むしろ、この河岸段丘を本拠地とした集団が、何らかの事情によってこの河岸段丘上で住居地を移動させた結果、森遺跡、五明田遺跡で欠落した時期が生じることになったのではないだろうか。森遺跡で時期的に連続しない遺物群、住居跡群の在り方は、この地での回帰の結果と想像される。

このほか、森遺跡からは平安時代後期から中世の陶磁器が多く出土した。これらはいずれも水田耕盤層（第2層）から出土しており、水田を作る際他地から客土された土の中に混入していたものと考えた。第2層がどこから運ばれ、この水田に客土されたかは知ることはできないが、水田の造成が最近ではないことから、遠隔地から運ばれてきたとは考えられない。

今回出土した中世の遺物は、中国製輸入陶磁器、石硯などがあり、有力層が所有したと思われる

遺物が多い。そのため、この周辺に中世館跡が存在した可能性が予想される。この近辺の地名をみると、森遺跡の南西方約200mに位置する小丘陵上に「土居ノ上」という地名が残っている。このことから、この付近に館跡がある可能性があり、森遺跡出土の陶磁器の出自はここであるのかもしれない。

弥生時代の竪穴住居跡について

弥生時代後期の竪穴住居跡（S I 01～07）は、いずれも平面形が円形で、壁のやや内側に柱穴を6～7個円形に配し、さらに中央にもピットが1個ある。これは県内で発掘された、同時代の竪穴住居跡の特徴と同一で、規模についても径が5～6mとほとんど変わりがない。広島県、鳥取県、山口県などでもこの時期の竪穴住居跡は同程度の形態、規模であることから、本遺跡で検出した弥生時代後期の竪穴住居跡は、ごく一般的な竪穴住居であるといえる。

この時期の竪穴住居跡は、河岸段丘北辺に集中し他の位置には築かれていません（第155図）。弥生時代後期の住居跡は、額原町教育委員会が行った本調査区東方の試掘でも検出され、これもやはり河岸段丘縁辺に立地している。ここは眺望がいいものの、段丘下面との比高差が約4mもあり、崖崩れの危険性がある場所で、実際にS I 01は北側の一部が崩壊している。なぜ、このような危険な場所を選んで居住地としたのか不明であるが、弥生時代後期という時代性が、その背景にあるのかもしれない。

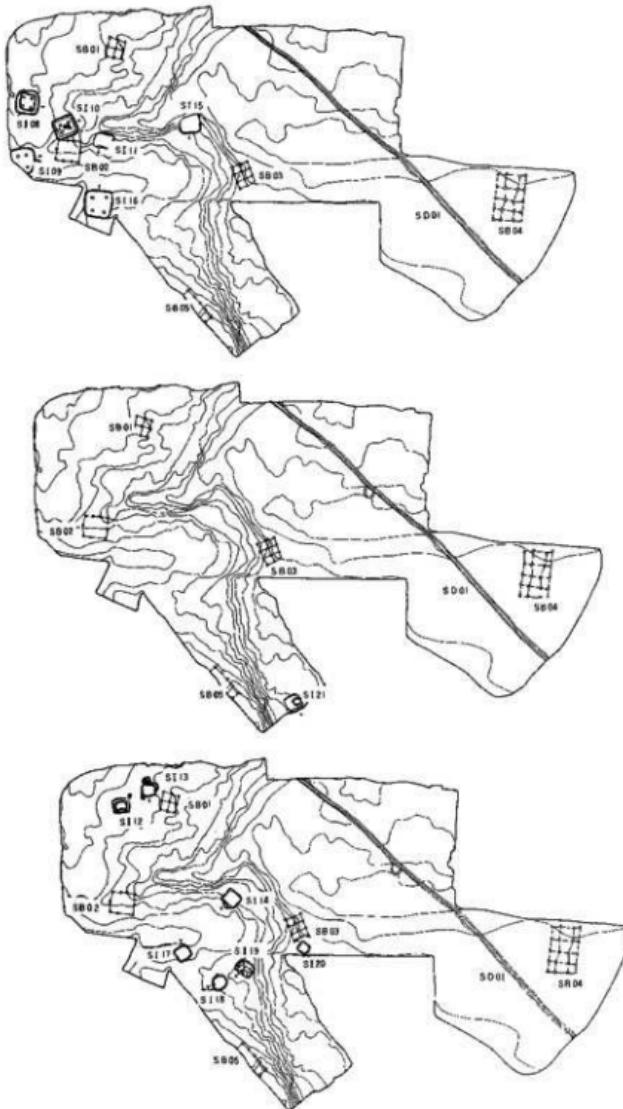
ところで、S I 01とその他の竪穴住居跡の間には土坑墓群があり、墓域を挟んでS I 01とS I 02～07の2つの集落が想定できる。これらの竪穴住居跡は数時期にわたっていた可能性があるが、その集落構成などは不明である。

古墳時代～奈良時代の竪穴住居の分布

古墳時代末から奈良時代にかけての竪穴住居跡は今回もっともいい状態で検出できた遺構である。このころの竪穴住居跡は今のところ島根県では発掘例が少なく、那賀郡旭町重富遺跡³¹⁾、邑智郡瑞穂町今佐山遺跡³²⁾、鹿足郡匹見町長グロ遺跡³³⁾、邑智郡川本町キバタケ遺跡³⁴⁾などで検出されているにすぎない。しかし、近年この時期の竪穴住居跡の発掘例が増加していることや、隣県の広島県や山口県では多くの発掘例があることを考えると³⁵⁾、奈良時代には竪穴住居は一般的だったのかもしれない。ただし、現段階では県内でのこの時代の竪穴住居跡は山間部での発見にとどまっている。海岸部に位置する松江市才ノ岬遺跡³⁶⁾、安来市高広遺跡³⁷⁾、隱岐郡西郷町尼寺原遺跡などでは奈良時代にはすべて柱建物である例もあるので、奈良時代まで竪穴住居が残るのは、山間部のみの現象である可能性がある。

古墳時代～奈良時代の竪穴住居の特徴

本遺跡で検出した古墳時代から奈良時代の竪穴住居の特徴は、まずすべて平面形が方形プランで



第156図 積穴住居跡変遷図（2） 古墳時代末～奈良時代

あることがあげられる。隅丸方形や長方形のものもあるが、基本的に円形の住居跡はこの時代には消失していると考えてよかろう。これはやや距離が離れるが、松江市勝負遺跡¹⁾で古墳時代中期の竪穴住居跡がすべて方形であったことなど、今までの調査例とも矛盾しない。

第2にいずれの住居跡にも壁の一辺に造り付けの竈とその延長上に煙道がつけられることである。竈は石組み構造を基本としているものと、石組みがみられないものがある(S I 08、13、17、19など)が、石組みがないものも本来は石組み構造であったと思われる。竈は焚き口両側に偏平な石立ててその上に細長い石を架け、周囲は粘土で覆われていたと推定される。このよう構造の造り付けの竈は西日本各地で多く検出されており、竈としては一般的であったよう

である。旭町重富遺跡では、石組みの周囲に粘土が少なかったことから粘土は補強程度のもの³⁰、としているが、本遺跡では石組みは骨格でかなりの部分は粘土で構築されたものと推定される。

煙道の構造がわかるものはS I 10で、細長い石を煙道側壁に沿って2列に並べて煙道としている。一方これとは別に、煙道の残りがよかつたS I 18では素掘りのままである。上部の残りが悪いため、それぞれの煙道がどちらの構造であったかを知ることは困難であるが、少なくとも石組み構造と素掘りの2種類あったことがわかる。S I 10のような石組み構造の煙道は、広島県松ヶ迫遺跡³¹、熊本県瀬田裏遺跡³²などに類例が求められるが、総じて少ないようである。

煙道の長さは全体に短く、長いものでも60cm程度（S I 10, 18）で多くは20~30cmである。これは重富遺跡の煙道の状況と大きく違う。他地域の例でも重富遺跡のように長い煙道が一般的のようではあるが、森遺跡例程度の長さのものも間々みられる。発掘時には住居跡上部を掘り過ぎねば検出できないことも多いことから、短い煙道が本来の長さではないかもしれない。しかし、もし煙道の長さに2種類あるとしたら、その差異について明らかにする必要があろう。

形態の変遷

今回検出した竪穴住居跡は遺物が多く残されていたため、それぞれ時期を知ることができる。出土遺物をもとに各住居跡をみると、7世紀初頭とそれ以後に大きな二期を認めることができる。以下、各時期の竪穴住居跡の特徴について説明する。

6世紀末から7世紀初頭の古墳時代末の竪穴住居跡は6棟検出された（S I 08~11, 15, 16）。いずれも平面形が方形または隅丸方形で、円形住居跡はすでにない。規模から一辺が5mに近い大型のもの（S I 08~10, 16）と、長辺が4m以上あり、前者より小型だが次の奈良時代のものよりはやや大きいもの（S I 11, 15）とに分けられる。前者はすべて主柱穴を4本もつて対し、後者は柱穴をもたない。

竪が調査区中央に向くもの（S I 08~10, 16）と、南側の丘陵に向くもの（S I 11, 15）があることから、これらの竪穴住居跡はさらに2時期に細分できるかもしれない。

7世紀前葉と考えられる住居跡はS I 21の1棟である。平面形はやはり方形で、柱穴もない。規模は長辺でも4m未満とS I 11, 15よりもさらに小型である。

奈良時代の住居跡（S I 12, 13, 14, 17~20）は、7棟検出できた。前代の住居跡S I 21と同様に一辺4m未満の小型である。床面にはやはり柱穴がない。竪の位置が、南または南西にあるもの（S I 12~14, 18, 19）と、北にあるもの（S I 17, 20）の2者があることから、これらもさらに2時期に細分できるかもしれない。

竪穴住居跡の形態の変化について一言でいうなら、小型化の傾向が指摘できる。6世紀末~7世紀初頭の竪穴住居跡は5m前後の大型と4m程の中型住居跡が併存するものの、これより新しい住

居跡はすべてが4m未満の小型の住居跡であることから、7世紀初頭から前葉にかけて竪穴住居に大きな変化があったことがうかがえる。そして、このころを境に床面の柱穴が完全に消失するのである。

6世紀末～7世紀初頭の竪穴住居跡のうち、大型のものについてはいずれも4本の主柱穴をともなう。これらの柱穴の位置はいずれも壁のかなり内側に穿たれている。さらに周溝が壁直下ではなく、やや内側につくられている(S I 08, 10)。このような特徴は上述の竪穴住居の小型化の傾向と密接な関係があると考えられる。

S I 08, 10は平面規模が一辺約5mと大型ではあるが、周溝は竪穴住居壁の内側に掘られている。これは、周溝内に板壁が立てられていたことを想定すると、床面積は見かけより小さくなり、S I 11, 15と変わらなくなる。繁雑になるが、S I 08～11, 15, 16の計測値を列挙すると次のようになる。(周溝のないものは柱穴外側で計測 単位m²)

住居跡番号(S I)	08	09	10	11	15	16
壁下面での面積	22.6	27.2	16.3	10.6	15.1	32.4
周溝内側の面積	9	11.3+α	12.4	10.6	15.1	11.2+α

このように、居住空間を周溝の内側とするなら、平面規模が大きいS I 08, 10は実際の居住面積がかなり小規模であったことになる。とすれば6世紀末から7世紀には、竪穴住居はすでに見かけ以上に小型化が進行していたと考えられる。

周溝から壁までの空間は、どのような機能があったかは不明である。小型の竪穴住居跡ではS I 19で周溝が確認された。S I 19では壁直下に周溝が掘られているので、S I 08, 10のような周溝外の空間は奈良時代にはなかったようである。S I 08, 10とほぼ同時期と思われるS I 11, 15がすでにこのような空間を持たず、これ以後の時期にもないことから、このような空間は短期間のうちに消失したのかもしれない。

なお、S I 09, 16は周溝が検出されていないが、貼床などのため確認でなかっただけで実際には周溝が存在した可能性はある。これらは柱穴を中央寄りに穿っていることなど、周溝以外の要素はS I 08, 10と同じであるので、構造的には同じものと考えられる。また、小型の竪穴住居跡もS I 19以外は周溝がなかったが、これも調査では確認でなかっただけで、実際には貼床内に作られていたと思われる。S I 19では、貼床面と同じ高さ(地山面より高い)で検出されたからである。

ところで、広島県の調査では竪穴住居の柱穴の位置は、古墳時代前期の古い時期では内側にあり、前期でもやや新しくなると壁際によっていく傾向があるといふ。これは本遺跡での在り方と矛盾しているようであるが、古墳時代前期では柱穴の移動に伴って周溝の移動がないことから、6世紀

末～7世紀初頭の変化とは質的な違いがあると思われる。6世紀末～7世紀初頭の柱穴の位置については豊穴住居の小型化の一環として捉えたい。

集落の変遷

今回の調査では古墳時代末から奈良時代にかけての豊穴住居跡がまとまって検出され、集落の変遷がある程度把握できた（第156図）。この時期の豊穴住居跡は弥生時代のそれとは違い、河岸段丘縁辺には作られていない。また標高の高い西半部に集中しており、東半部には作られていない。以下時期毎に概略を説明する。

6世紀末～7世紀初頭 調査区の西寄りに集中している。6棟が検出されたが、S I 08～10、16とS I 11、15とで竈の向きが違うことから、さらに2時期に細分できるかもしれない。

7世紀前半 調査区南端部でS I 21の1棟だけが検出された。調査区外にさらに存在するかもしれない。

7世紀後半 今回の調査では検出されていないが、五明田遺跡で1棟検出されている。森遺跡の南方約200mに位置し、この周囲にさらにこの時期の豊穴住居跡がある可能性は高い。

8世紀前半 7棟検出されており、調査区北西と中央に集中している。最も北に位置するS I 12、13と中央に位置するその他に分けられる。中央に位置するグループは竈の向きがS I 14、18、19が北向き、S I 14、17が南向きで、さらに2時期に分けられるかもしれない。

このように、7世紀前半から後半にかけてこの地点では集落の規模が縮小し、8世紀になって再び規模が拡大する。これは最初にも述べたとおり他地への移住ではなく、この河岸段丘上での回帰の結果と考えたい。

集落の構成

6世紀末～7世紀初頭と8世紀前半の時期にまとまった数の豊穴住居跡が検出された。两者とも各住居跡がきわめて近い位置にありながら竈の方向が2方向あることから、さらに2つの時期に分けられる可能性がある。

もしこれが時期差とするなら、6世紀末～7世紀初頭の豊穴住居跡は西端部に位置する4棟（S I 08～10、16）と、中央寄りの2棟（S I 11、15）に分解できる。

また、8世紀の豊穴住居跡は北西の2棟（S I 12、13）と中央の5棟（S I 14、17～20）に大きく分けられ、中央の5棟は竈の方向からさらに①北西向きのもの（S I 17、20）と②南西向きのもの（S I 14、18、19）とに分解できる。もし、竈が同じ方向のものが同時期とするなら北西のグループは②のグループと同時期、竈を向き合わせるものが同時期とするなら北西のグループは①のグループと同時期にあったことになる。どの組み合わせがより当時の実態に近いかはわからないが、いずれにしても8世紀前半の集落は調査区の北西と中央に2棟から3棟の単位で2つのグループが